

佐藤文明の長編ノンフィクションノベル

『アメリカに操られる日本』

—日本はなぜ、アメリカに追従するのか。その謎を解く。

「アメリカに操られる日本」

CIAの日本コントロールを許すな

失われた10年、アメリカに壊された日本経済。にもかかわらず、どこまでもアメリカに追従する日本。アメリカに日本を売っているのは誰なのか。この国の要所に巣食うCIAエージェントによる日本支配の舞台裏に迫る。

この物語は某出版社によって刊行される予定であった。いまもお、抜本的に修正を加えて出版する計画もある。しかし、アメリカによる9・11以降の国際人権に対する挑戦や、アフガン、イラク攻撃やこれに追従する日本の動きが急であり、このままでは取り返しがつかなくなる、という思いから、急遽、ネットでの発表に踏み切ることとした。

これはまた、佐藤のホームページへのアクセスがひじょうに高率であること、にもかかわらず更新が滞り、迷惑をかけていること、などへのお詫びでもある。

ネットで読むにはあまりにも長すぎ、つらい向きもあるうかとは思うが、少しでも目を通していただければ幸いである。

物語の経緯

物語の企画は1999年、某出版社から持ち込まれた。出版社のバックアップもあつて、政府高官を含む日本の要人数の取材協力をいただくことができたが、この内容から取材源の秘匿が絶対条件とされた。本書が物語スタイルを採っているのもそのためで、内容は極めてノンフィクションに近い。

本書の脱稿は2000年9月で、その後、手を入れ、最終稿は2001年1月に完成している。本稿はその過程でまとまりを見たもので、最終稿ではない。最終稿はペーパーでのみ行っている。

が、この間に出版社の方針が筆者とは相容れないものとなり、担当編集者の立場も悪くなった。そのため、交渉に及び

著作権を当方が取得するに至った。他社からの刊行が可能となったのである。

しかし、その準備の過程でアメリカの同時多発テロ(9・11)が勃発。現実が本書の想定する枠組みを越えてしまったため、全面改訂が必要になってしまった。もちろん、改訂も計画されていたのだが、すぐに手を入れる時間的余裕がないうちに、国際情勢が急変。日本の進路が危険な坂を駆け始めたため、ここで発表することとした。

物語の真相

本書のほとんどは公開された情報や、具体的な証言に基いた真実である。が、一部、実名を避けているのは無駄な訴訟で時間を奪われたくないため、および取材源の秘匿を維持したためのものである。政府高官を含め、秘匿が必要なのは、彼らが一樣に政府内に張り巡らされているCIAのスパイ網を恐れているからで

ある。彼らによって失脚されることを恐れているからである。

この事實は恐ろしいことである。取材を断ってきたある外務省の高官は「その件は口が避けても話せない。墓場まで持っていく」とまで語っている。これが物語りの真相である。

この物語をフィクション仕立てにするために、つなぎとして創作したのが島根県石見市に関係する人物である。この物語によって、現実の人物を想定することはできない。しかし、フィクションよりもノンフィクションに賭ける筆者としては、筆者なりの想像力を働かせたつもりである。

だが、いちおう、お断りしておこう。「本書の記述はフィクションであり、現存するいかなる個人、団体とも関係はありません」……、ということ、ぜひ、本編をお読みいただきたい。

現実への展開

9・11以降、日本でCIAが想定していなかった出来事が起こった。小泉内閣の成立である。予想外だったため、小泉にCIAの工作員は着いていなかった。

そのため、小泉はCIAの想定外の人事を行うことができた。田中真紀子の外相登用である。真紀子はアーミテージの面会要請を無視し、対中国外交に積極的になり出した。CIAとしては、小泉を巻き込み、親中派・真紀子を追い落とすしかない。その際、外務省の新しい動きである親口派の中心人物・鈴木宗男の排除も必要だったため、両者をかみ合わせた。結果は両者が潰れ、外務省はふたたびアメリカ派の天下となった。できすぎの展開だ。そして小泉によるアメリカ追従である。イラク問題特別顧問・岡本俊夫、元アメリカ大使、彼はCIAのために働いている。自衛隊の派遣は任命のときから決まっている。CIAにたずなを着けられることなく、アメリカ大使を勤め上げ

ることなど不可能だ。そのことを心しよ。アメリカはすべてを利用し尽くす。

CIAの謀略 初章「警戒」

磯崎英司が「エシュロン」の存在を始めて知ったのは、今から四年前、英司がまだ中学二年生だったときのことである。インターネットのチャット仲間の一人が突然「おまえたちのメールは覗かれている」という奇妙なメッセージを寄せたことがすべての始まりであった。チャット仲間はそれからひとしきり、「エシュロン」に関する情報を交換し合った。その当時は英文のサイトが中心で、「エシュロン」の情報を発見するのも、読み込んで理解するのも困難を極めた。が、それが却ってみんなの好奇心、探究心を刺激したのである。

「ECHELON」とは「軍隊・飛行機・船などの」階段状編隊」を意味する英語だが、どうやらこれはアメリカ、イギ

リスなど「UKUSA」同盟に加入する英語圏五カ国が、世界に張り巡らせている盗聴網を意味するコードネーム（暗号名）なのである。

この盗聴網は一九七〇年ごろ、世界最大の諜報機関、アメリカの国家安全保障局（NSA）がイギリスの政府情報本部（GCHQ）に呼びかけて始まったもので、東側の軍事情報に限らず、当初から西側の政治経済情報を盗聴のターゲットにしていた。

国際電話、携帯電話、ファックス、テレックス、衛星通信、Eメール、インターネット、マイクロウェーブ、FM波、短波……。つまり、世界を飛び交うあらゆる通信を根こそぎ傍受しようとするものである。

NSA最大の傍受施設はイギリスのメソウィズヒルにあり、アメリカのバックリールフィールド、オーストラリアのパインギャップのほか、「エシユロン」参加国ではないドイツのバードアイブリン

グ、日本の三沢基地にも重要な傍受施設が配置されている。

これらの傍受施設でキャッチした重要な通信情報は、すべてが一度、アメリカのメリーランド州フォートミードにあるNSAの本部に集められ、分析される。そして、収集を依頼したクライアント（参加五カ国の諜報機関）に通報されるのである。

そして、その最大のクライアント（注文者）こそがアメリカ中央情報局（Central Intelligence Agency）、すなわち、CIAなのである。その発注量の大きさを考えれば、「エシユロン」はまた、CIAの世界盗聴ネットワークだといっても過言ではない。

「おまえたちのメールは覗かれている」というのも嘘ではなかったのだ。

翌年の一九九九年になると「エシユロン」に関する日本語サイトも増えてきた。英司たちはこれらのサイトを競って発見しては読み漁った。そして、そのころか

ら新聞の記事にもなり始めた「エシユロン」情報の底の浅さを、チャット上で嘲笑しあったりしていたのである。

英司の父・磯崎正太郎はフリーランスのライターである。英司が小さいころはたしか口ひげを蓄えていたのだが、いつのころからか剃り落としてしまったようで、写真以外に確かな記憶はない。

やや細面の柔和な顔立ちで、ライターとしての押し出しに欠ける。それを補うためのひげだったようで、年を重ねた結果その必要を感じなくなったものであ

る。仕事柄なのか、いつも物知り顔で、何かといえば教えを授けようとする父の態度が気に入らなくて、だんだんとかとを決め込むことが多くなった。そんな英司が父をあらためて見直したのは、自分しか知らないと思っていた「エシユロン」のことを、驚くほど詳しく知っていたときである。

「ひよつとしたらライターというのは、

とてつもない物知りなのかもしれない。そうでなければできない仕事なのかもしれない」

そんな風に考えてみると、父のいつもの態度もやむをえないものがある。「まあ、許せるか」と思えるようになってきたのである。

「電話だってメールだって、みんなやられてるんだ。ほんとだよ」

英司がそういつたとき、正太郎はこう答えた。

「みんなじゃないよ、もっと冷静に考えてみてごらん。盗聴したってしょうがないものを盗聴すると思うかい。彼らは必要なだけをセレクトして盗聴するんだ。どうセレクトするかを知っていれば盗聴を避けることもできる。」

それにね、Eメールはインターネット回線を使っている。その盗聴には回線の節であるノードと呼ばれる場所に装置をつけて読み取るんだ。インターネットは通信経路を回線の事情で勝手に変える。ど

こを通って通信されるかはわからないんだよ。だから、世界のどこか一か所に装置をつけられすべてのメールが読まれる可能性はある。でもこれはあくまでも可能性にすぎない。実際には、そこを通る確率はほとんどないんだよ。わかるだろ。そのため、アメリカでは今、七か所のノードに装置をつけている、という。アメリカ国内だけでもそんなに必要だ、というわけだね。だけど日本の回線にはついていない。だから日本どうしのメールが読まれる可能性はそれほど高くない。

だから、やられてる、もうだめだ、と大げさに考えずに、いまはこれぐらいだ、これ以上は許さないぞ、と考えるほうがいい。CIAはきつと日本の回線にもいつか装置をつけたいと考えているに違いないんだ」

英司はさつそくこの考えをチャット仲間

に提案してみた。仲間はみんな、英司の主張を理解し、賛成してくれた。しかし、冷静な議論は長続きせず、「エシユロン」

情報そのものも当初に比べて、珍しいものではなくなってきたため、「エシユロン」に関するチャットは急速に減っていった。

そして、これに代わって登場したのが暗号ソフトをめぐる問題、サイバーテロに関する話題であつた。

とりわけ、九九年の年末が近づくにしたがつて、チャットはY2k（コンピュータの2000年誤作動問題）一色になったといつていい。

マイクロソフトのY2k対策用サイトに接続し、必要なソフトをダウンロードしたとき、英司は妙なことに気づいた。自分のコンピュータに必要なソフトが、瞬く間にチェックされている。

「これって、自分のコンピュータが覗かれてるってことではないのか」

二〇〇〇年の三月にはコンピュータ・ウイルス「I/Love/You」が話題になった。受け取ったパソコンのデータがやられるだけではなく、自動的に友

人あてにメールを出して感染させてしまうのである。

「こんなに始末の悪いウイルスをいったいだれが、何のために作ったんだろう」

チャット仲間はウイルス製造犯を口々にののしった。しかし、もつと恐るべきことが二か月後に発生した。フィリピン警察当局が、製造犯と思われる人物を特定し、そのアジトを急襲した、というのである。いったいなぜ、犯人が特定できたのだらうか。それが信じられない。

確かにメールには通信記録が組み込まれているので、どこから送られたものであるかを追跡することは簡単だ。また、「クッキー」を使えば、そのパソコン所有者の基本情報を覗くことができる。

しかし、である。高度なウイルスを作り出す能力を持った男が、こんなことに無警戒だったとはどうしても信じられない。

「彼らがまったく知らない、追跡の裏技があるのではないだろうか」

英司は以来、コンピュータ通信に対する警戒感をいっそう強く持つことになった。「クッキー」を受け取ったらすぐに消去する。これもいつしか英司の習い性になっていた。

それからしばらくの年月が流れたときである。英司は怪しいメールを受け取つて、うろたえた。

「お願いします」というタイトルと「このメールは安全です」という書き出しのほか、すべてが文字化けしている。ほか添付ファイルがついているのだが、とても、これを開く気にはならないのだ。

いっぞや巷を騒がせたコンピュータ・ウイルス「I／ROVE／YOU」ではないが、ファイルを開けばハード・ディスクのソフトやデータを破壊する悪質なウイルスに感染する恐れがある。

送信者は「you-horie@e-max.ne.jp」とある。もちろん心当たりはない。コンピュータ雑誌によればこんな場合は「そのまま削除しましょう」というのが最善

の「I／ROVE／YOU」対策だったことだった。

英司も雑誌の忠告に従い、メールをゴミ箱に入れようとポインターを「削除」に合わせた上で、もう一度文面を眺めてみた。と、どうだろう。文字化けと思えた文面に、字間こそ大きく開いているものの、カタカナとひらがなが交互に顔を出しているではないか。

「これは何かの暗号だ。文字化けなんかじゃない」

英司は早速、いくぶん緊張しながらメールの本文をプリントアウトしてみた。

お願いします

このメールは安全です。u...
X % :x*#>z:.. \$ # 檜 b.....
Op1Q「」た・78x 寤・9.....
ー*.\$・7P・2・q-XBれ・・・・%
2-z」W・J・+0@... 嘯「G.Cヤ・

Y]x·9T#"·HR(·3·····𐄂Q·2·····
#>♪··Y#Ch⊆P·'·····y%·,·°·
P/
T々々𐄂!··P··!x0@°·h·)。梅
"3「 \$4· -j ♂「 P _·i·Y·°·D
=、"r······1·X「"K!@···
KE·!5·2j √ 𐄂𐄂7·` (H)·1Z0·-·D@
J·zl°·"·

·𐄂P:0𐄂(Y)、𐄂𐄂HA+·R···!·°·3··
q`-·!l x······!。𐄂A}z·,「
𐄂819x0··zA!:(-QB··「q0 y"
·AJ!∖···0#-9「Rp·Z%-2d。」·腥·
#q·*cr ♂[V···] 𐄂𐄂R!·2·!"A \$·
X·"·(88。&次)!b4 𐄂)··」9·𐄂𐄂
304Y2R。0 𐄂𐄂·····8E0 𐄂!H+IX···
8·"」s·♪°·,」
(A %*#0 𐄂(S*·1·) -;·K·「;Has
𐄂··8·?·2「·····#*」!L 𐄂𐄂
𐄂L % w······U#B#2/ 3·」·
A。N······(。P·,1B「·A"𐄂𐄂
`21 l k \$ B···!7°·*8。<*···@
Jy·44/0·「𐄂D)_𐄂𐄂 TUZZ、-····

-「·····控」_f)((`·)·····))·
>?·[·····-5𐄂······a]。>\
@O 𐄂𐄂 z\r)\V 𐄂 /「ahq6-94?1@·
𐄂𐄂···?c4W·=·····p·#1T·𐄂𐄂···
!UJ······「[-<·°·BB 𐄂°·6·"E
𐄂𐄂EM √·····-u<2P·P<!OP··
"B"·6E°𐄂𐄂@、𐄂𐄂E°···3!Y u-
J!5<P 𐄂」Q7 𐄂𐄂n \ @?~𐄂𐄂?····!P(!
𐄂 u u 5?`Jvq 𐄂····**!| %···88|
𐄂·O、°·@·E···"「𐄂T2·2UJ 𐄂𐄂
J!」]·····
7}e6······E+°·"···(𐄂···
2!U!j%jd`2!2·2𐄂6·····𐄂𐄂𐄂
𐄂𐄂(「P!···dd<FL 𐄂:0a3(·····
𐄂𐄂𐄂𐄂p·"B""""B""6"·····𐄂𐄂
𐄂𐄂「P」···!c···
{Y!23! 𐄂𐄂····B"" 𐄂°BB6B 𐄂·
<<<TTT···GGG √ ^ ⊕「^·····
v>///cl 𐄂𐄂····[X8a!r····」[·
=Bp。B7'···c·𐄂·c···
、G「^c<5·𐄂𐄂|····𐄂 𐄂 % 88
7>0>· 𐄂 5z·44 —4v"𐄂+4····

「~OX \$!J}||8 𐄂𐄂 [·····°··6·
𐄂 HHHHH······TG=||] 𐄂 𐄂
5!<「!k」)·𐄂𐄂K·····&-r·····
~& 𐄂 08000」[·o{u 𐄂·····
𐄂 𐄂······}#𐄂???_(-
P(P<<2<PTT·····
GP······p 𐄂 𐄂°···||·····
66·e#·=𐄂#;\RQ 𐄂·+h·3"·····
|<O<v/·|||=# 𐄂·#B= s#·#·····
5=H: 𐄂R\
v 𐄂+/\md=}!O 𐄂𐄂「Pc`·z;:0%8rXL%ro 𐄂
𐄂······!#」°······s。R。Sst
!······?uu#H;R 𐄂 𐄂]P)·
<<「J<|<p`wU
𐄂····9·[!9x·q·°·····
#=|| 𐄂°==??F->Fj3 J_-J°·;z·!
hnh+7bb>"𐄂·····%-?F/S/Qs 𐄂·
5!]]·𐄂<<<<𐄂<2「^·P·····!f! 𐄂𐄂f·
Yfo{b;qq;}]」| 𐄂𐄂𐄂𐄂·|!=#s。」5=4·
4Db t·t& 𐄂 \$\$\$····?j \$2/?>
++t?? 𐄂·····4wsl_-][G u)P)5<)2 𐄂<
𐄂𐄂P·····PP·····D/) 𐄂 |k 𐄂𐄂𐄂

「~OX \$!J}||8 𐄂𐄂 [·····°··6·
𐄂 HHHHH······TG=||] 𐄂 𐄂
5!<「!k」)·𐄂𐄂K·····&-r·····
~& 𐄂 08000」[·o{u 𐄂·····
𐄂 𐄂······}#𐄂???_(-
P(P<<2<PTT·····
GP······p 𐄂 𐄂°···||·····
66·e#·=𐄂#;\RQ 𐄂·+h·3"·····
|<O<v/·|||=# 𐄂·#B= s#·#·····
5=H: 𐄂R\
v 𐄂+/\md=}!O 𐄂𐄂「Pc`·z;:0%8rXL%ro 𐄂
𐄂······!#」°······s。R。Sst
!······?uu#H;R 𐄂 𐄂]P)·
<<「J<|<p`wU
𐄂····9·[!9x·q·°·····
#=|| 𐄂°==??F->Fj3 J_-J°·;z·!
hnh+7bb>"𐄂·····%-?F/S/Qs 𐄂·
5!]]·𐄂<<<<𐄂<2「^·P·····!f! 𐄂𐄂f·
Yfo{b;qq;}]」| 𐄂𐄂𐄂𐄂·|!=#s。」5=4·
4Db t·t& 𐄂 \$\$\$····?j \$2/?>
++t?? 𐄂·····4wsl_-][G u)P)5<)2 𐄂<
𐄂𐄂P·····PP·····D/) 𐄂 |k 𐄂𐄂𐄂

|#.....QR.....π。TT 蒨。z: 劔.....
 bbbd ㄥ.....ss__j_ -
)<5<<<<P ㄱ.....[b お*0flit・y~] 掾
 /KH。°.....'.....※不 舞 b.....:fw ト.)
 tw 策 v i y 繁 skC.L9<9= /7T\.....
 。 h・D# 鉞 轡 ㄷ ㄷ)~knk ㊦.....t
 - tv・++・+・「・」U|・z|~.....
 `esOT` y)° kZ)~00
 nn ㄱ%44P_`T5H・z.....°.....(5kc)))
 p980° [@ nmx~nn~~x00x>xa2<・v|
 Il<<2<#>o?TT5p#HQ
 +.....タタ 嵐 5・y?25<・) #K8~
 00n0~) ((銕 4I2・2yT? れ 5H.....
 ~nn~~nn~@ d ㄱ a・(.....P 榎
 <*>・・j!・A` 國 TT` y`° 505)) ㄱ°・
 <@~@
 x|0Zxx0 00°。 0n~x0x@xM・
 J.J22IIIIU・PP(--#;S0?>`T5c#z・・
 44SS+`°°<°`k・(ㄱBp"・4+・+
 +7SS+?2 舞 3#Uc。°~・i ㄱ・})
 P(.....?1WW>j)°`TT)5#_? ー.....
 55|5HUH。°.....°.....た ㄱ・恂 ●'331

英司はこの奇妙な暗号に、思わず吹き出した。「こんなのは暗号なんかじゃない。誰もが知ってる狸(た抜き)文字だ。ノイズは多いが、そいつをどければ、簡単に読めちゃうじゃないか。きつと、子どもの他愛ないいたずらだな」と思ったからだ。
 ノイズを払うと文面はこうなる。
 「ワレ、シリタリ。ユエニ、アヤフシ。ウミ、ラブ、イ、ニ、ケサル。サクルニハ、ヒロメルニシカス。テンプヲ、アマタニオクレリ。ヒラカスモ、カマヒナシ。ネカワクハ、ヒトクセヨ。トキ、オノズト、キタレリ」
 英司はこれを漢字まじり文に直してみた。

古文が交じっているために、とつてもわかりにくい。ワープロソフトも、誤りを指摘する信号を出している。だから、この置き換えが正しいのかどうか、自信はない。
 でも、「海、らぶ、い、に」を除けばどうにか意味が通じる。とすると、「われ、知りたり。故に、危うし」がとても気になる。このまま放っておいてもいいものかどうか、悩んでしまうのである。
 結局、英司は父・正太郎にアドバイスを請うこととした。
 が、その結果を語る前に、話を一気に一〇年と二カ月前の一九九一年一月に巻き戻してみなければならぬ。舞台は東京のパレスホテルである。
 CIAの謀略 第一章 「陰謀」
 「篠山くんはあの話をどう思うかね」
 スピーカーがチェンジして、立食式のパーティー会場がいつそうの喧騒に包ま

れる。東京・丸の内のパレスホテル、パールルームでのことである。似たり寄ったりの挨拶に、もう耳を傾ける者もなく、数刻前から和装のコンパニオンが来場者に酒を注いでまわっている。

その人波を掻き分けるようにして、もうすっかり出来上がっているのではないかと見まごうほどに鼻先を赤くした男が、篠山グループが陣取る隅の円テーブルに近づいてきた。花井沢秀道という業界紙の記者である。

篠山啓志とは『週報・プレヴェュー』時代の記者仲間だが、その、謹厳実直な社風が肌に合わなかったのか、ほどなく退職して、現在の『エレクトロ・コミュニケーションズ』に移っている。

もともと、おいしい話があればどこにでも顔を出す男で、今日の新雑誌創刊記念パーティーも、アルバイト原稿の口を求めてやってきたのはいうまでもない。が、それよりもまず、確実な利益を、というわけだろうか。花井沢が手にする取

り皿の上には生ハムやサーモンが山のようなキャビアで半ば埋もれている。

「篠山くん、もう旧聞になってしまったからきみも知っているだろう。ブランドンブルグ門が開放され、ベルリンの壁が崩壊したという第一報に接して、鄧小平がおもわず『CIAにやられた』と叫んだという、あの話さ。あ話をきみはどう思うかね」

篠山グループとは『週報・プレヴェュー』でデスクを勤めた篠山啓志と『プレヴェュー』の周辺で仕事をしていた若手のフリーのライターが結集して生まれた臨時編成の取材チームで、「取材プロ・シンク」を名乗った。

「取材プロ・シンク」は正式には三年前の一九八八年に解散しているのだが、仕事領域の近さもあって、その後もゆるやかな交流が続き、業界からは篠山グループと目されている。

『週報・プレヴェュー』は元毎朝新聞社会部記者だった田村ひさしの個人紙で、広

告の掲載を一切せず、政財界にストレートな提言を行う週刊新聞で、政界疑惑の追及を売りに、根強いファンをもっていたが、一九八三年、田村の死によってその社会的使命を終えている。

田村の社会的な手法による疑獄事件の追及によって、毎朝は「社会部の毎朝」といわれるまでになったが、その毎朝新聞が何者かの圧力に屈して田村を切った、との、確度の高い噂が流れた。

その田村が時事問題に直言する新聞を出す、というので、毎朝に対する、あるいは毎朝のバックで圧力をかけた何者かに対する報復か、という噂が飛び交い、『プレヴェュー』創刊当時はマスコミ関係者から大いに注目された。しかし、田村はついに、そのことを語らぬままに世を去ったのである。

社会部的なセンスで政治を切る、ある意味で「シンク」は、この田村の遺志を継いだ取材チームだともいえた。

「鄧小平がそう叫んだっておかしくはな

い。実際、CIAが仕掛けた、といって間違いいはないからだ。でもな、あんたが考えているようなものとはちよつと違う」

篠山がちよつとおどけたそぶりで花井沢に答えた。

「何だよ、おれが考えてることつていうのは。おれはまだなにも言つてはいないぜ」

「ああ、こいつは失礼。確かにまだなにも言つちやあいなかった。でもわかるんだよ。よし、それじゃああんたが考えていることを当ててみせようじゃないか」

パーティーに退屈し始めていた篠山グループはもちろん、近くにいた何人かも、この話の行方に聞き耳を立てた。

「つまりこういうことだ。花井沢くんはCIAがベルリンの壁崩壊にあたつて何かを企んだ。そして、その何かを鄧小平が知つてゐる、と考へてゐる。おそらく歴史をひっくり返すような大謀略に違ひない。が、それがいったい何なのか。そ

このところがわからない。知りたいものだ、と、まあこんなところだろう」

「うむ、まあそんなところだ」

花井沢はあきらかに、おもしろくなさそうな表情を見せた。

「で、その何がおまえとは違ふというんだ」

「それはな、おまえが考へてゐるような派手な工作や立ち回り、スパイ映画もどきの大謀略などはなかった、ということさ。だからといって、この歴史的な大事件にCIAがまつたく絡んでいなかったといへば嘘になる。鄧小平がそれに氣づいてゐたとしても不思議はない」

「おいおい、何だよ。おまえはそれを知つてゐるとでも言うのかよ。えつ、どうなんだ」

篠山は「元シンク」のメンバーをぐるりと見渡し、最年長の、といつてもメンバーは篠山を除けばみなおなじぐらいの年恰好で、大差はなかったのだが、信頼度からみて堀田豊を指名した。

「堀田、ちよつと説明してやつてくれ」

氣楽なパーティーでもありすつかり楽しんでゐたためだろう。突然お鉢を回されて、堀田はやや戸惑い氣味だった。しかし、堀田はまた普段からよく弁の立つ男である。一度しやべり始めると、しり上がりに流暢になつていく。

鄧小平が「CIAにやられた」と叫んだという、この話、一説には鄧小平が江沢民にそう話したというものもあるのだが、この話がジャーナリストたちの裏情報に乗つて「元シンク」の忘年会の席にもたらされたとき、篠山啓志はにやりと笑つて、こゝろいつた、という。

「おいおい、CIAだつてよ。CIAが何もしくなかつて、遅かれ早かれベルリンの壁が崩壊することぐらい俺たちには読めていたよな。もつとも、CIAの関与がまつたくなかつたわけでもない。鄧小平はそのことを言つてゐるのかもしれない」

俺たち、とはいふまでもなく、篠山グ

ループ「元シンク」のこと。「取材プロ・シンク」は解散前、篠山啓志を中心にチームを組み、主に国際的な食糧問題を追究していた。

「だから、そのころのメンバーにとって、世界の穀物生産量や貿易量によって、世界の政治の動きを予想してみることにが習性になっていたんです。そんな中、ソ連の穀物生産量、とりわけ小麦の生産量が年々急落していることがわかった。ソ連は発表していませんでしたが、衛星写真を分析すればほぼ正確に計算できる。これはCIAの分析官の仕事です」堀田は気象衛星と偵察衛星をひとしきり強調してみせてから、およそこんな風に話を続けた。

ソ連の穀物生産の落ち込みは、コルホーズと呼ばれる集団生産方式の金属疲労、自然条件を無視した過剰な生産計画による土地の疲弊など、さまざまな要因が絡んでいるが、最大の原因はユーラシア内陸部の平均気温の低下である。

これは気まぐれな気候変動ではなく、地球全体の温暖化と一体になった傾向的なもの。すなわち、政治経済的な努力や改革では解決不可能な、慢性的、恒常的な穀物不足が予想された。この危機に際して、ソ連はアメリカからの穀物輸入という、決定的な敗北のシナリオを選択せざるを得なかった。

その結果、一九八〇年にはソ連のアフガニスタン侵攻の報復措置として、カーター政権が一七〇〇万トンに及ぶ穀物の対ソ禁輸措置をとり、ソ連が追い詰められたこともある。しかしこのときはアルゼンチンやオーストラリアからの買い付けが成功し、ソ連は急場を凌ぐことになる。

もともと、アメリカからの穀物輸入でまかなえたのはソ連国内での消費量に過ぎなかった。東欧はそれ以前から慢性的な穀物不足に喘いでおり、これを支えてきたのがソ連からの穀物援助だったのである。ところがソ連は次第にこの援助を

削減せざるを得なくなった。

そのしわ寄せが真っ先に現れたのがポーランドである。ポーランドでは飼料穀物を食用に回したため、まずは肉不足が出現し、ついで、主食であるパンの不足が現れた。この社会不安の上に、ワレサが率いる連帯労組が足場を築き、ポーランド出身のパウロ二世を教皇にしたローマंकトリックが援助の手を差し延べたのである。

この舞台をセットしたのがCIAである。CIAは穀物の収穫量と貿易量を計算し、輸出量を決定して、東欧の適度な社会不安を演出した。そして、バチカンとのタイアップを取り付けて、ワレサ支援の陣形を作り出したのである。

これがベルリンの壁の崩壊につながったというのなら、おそらくその通りであるし、これにCIAが関与していたというのであれば、これもその通りである。鄧小平の叫びには、理由があるのである。だが、CIAの構想の中に、ベルリンの

壁崩壊までは含まれてはいなかったはずだ。実際、アメリカはソ連の手を通さずに、直接東欧に食糧援助を行うことで、東欧の切り崩しを狙っていた。たとえ切り崩しに失敗したとしても、東欧に穀物市場を確保できるなら、それで十分なのである。

ポーランドはその実験場であった。もっとも、実験場にポーランドが選ばれたのは、ここが東欧最大のカトリック国であったから、というだけではない。ここをひっくり返すことができれば、東ドイツを裏返すチャンスが生まれる。堀田の言葉に従えば「ドミノ理論」ならぬ「オセロ理論」である。はさんでしまえば裏返せる。CIAにも、その程度の展望はあったはずだ。

この程度の展望が、一気に世界の歴史を書き換える事件に発展したのは、CIAにも読めなかった別な要因が発生したからである。

「これで決まりだな。遠からず、ベルリ

ンの壁は崩壊する。このままでは東欧はやっていけない」

篠山啓志がしたり顔で、そう断言したのは、チエルノブイリで原発が事故故を起こしたときであった。それはソ連の穀倉地帯、あるいはヨーロッパの穀倉地帯と呼ばれたウクライナの大部分に壊滅的な打撃を与えた。

ただでさえ不足気味のソ連の穀物生産が、これで一層の減産を余儀なくされる。東欧への食糧援助の復活は金輪際ありえない。東欧各国はこのことを痛感させられることになる。となれば、われ先に西側の援助を取り付けたいと考えるのは当然である。

こうして、切り崩すまでもないなし崩しが始まったのである。問題はベルリンの壁崩壊にとどまらず、この雪崩現象がどこまで広がるかに移っていった。

『ソ連の崩壊』篠山さんが出した結論はこれでした。アメリカの食糧援助には限界があつて、東欧すべてが崩壊し、アメ

リカに援助を求めるとなると、ソ連に回る分が不足することになる。ソ連がこれを防ぐにはソ連みずからの解体しかない。ソ連解体となればアメリカの援助はまずソ連に向けられます」

堀田が篠山の予言を披瀝する間、ウィングラスを傾けながら篠山はいかにも得意然として聞いていた。篠山が堀田を指名したのは、この予言のくだりを他人の口からしゃべってもらいたかったからだろうと思われた。

「篠山さんの着眼点に共鳴して、われわれは食糧問題をテーマに選んだ。食糧は最大の戦略物資である、という視点から世界を見たとき、われわれシンクがこのような結論に達するのは必然でした。そしてそれは現実のものとなったんです。ソ連の崩壊はもう目前です。こうなればいうまでもなく、東欧の崩壊です。これもオセロ理論の一種でしょう。ソ連が崩壊すると、東欧の一部に政情不安が生まれます。アメリカの援助が行き届かない。

またソ連の援助が途絶えた朝鮮民主主義人民共和国が苦境に追い込まれます。そして、この結論もいま現実のものとなりつつあります」

堀田の口調は次第に熱を帯び、テーブルを囲む人たちを惹きつけた。今はなきグループ・シンクが堀田の口に乗移ったかのようだった。もつとも、広い会場にはいくつも似たような輪ができていて、熱弁者が一人二人、中にいる。二次会シフトが自然に形成されていくのである。

篠山グループもそのままホテルの一階に移動。ラウンジの奥にある「ロイヤルバー」で飲みなおすことになった。コーナリーにカウンターはあるものの、人数が多いため、ボックスシートを三卓占領し、分かれて座ることになる。

篠山としては少々デリカシーに欠け、シックな店の雰囲気にはおよそ似つかわしくない花井沢が別行動を取ってくれる

ことを期待した。が、花井沢は堀田をぴつたりとマークしてバーまでついてきてしまった。篠山はやむなく花井沢とはちがうテーブルに席を取った。

めいめい、カクテルにフルーツ、チーズなどの軽いつまみを口にしながら最近の仕事のことなどを話す。ただ一人、スコッチをぐびぐびやっていた花井沢が、突然「どうせならウイスキーをボトルでもらいませんか」などと言いだす。が、これに乗る者はだれもいなかった。

それで臍を曲げたのか、あるいは酔いが回ったのか、突然、花井沢が大声を挙げはじめた。

「堀田君、といったかな。やつぱりさっきのはおかしい。納得がいかん。第一だな、食糧がじわじわ減産する程度のこと、鄧小平が叫び声を上げたりするか。『CIAにやられた』なんて叫んだりするか」

いきなりの剣幕に圧倒されて、花井沢の斜め前に座っていた堀田がたじろぐ。

「た、たしかにそれはちよつと変ですよ。ね。だからそれはきつと、誇張して伝えられたんじゃないですか。CIAのボディーブローが効いてきた、と話したことが、CIAのカウンターパンチに倒された、と伝えられた。そのほうが話としては面白いですからね」

「そんなものはおまえの当て推量だろう。俺たちはそもそも『やられた、と叫んだ』という伝聞を出発点にして問題を考えているんじゃないのかね。それを勝手に入れ替えてしまったんじゃないやあ話しにならない。ちがうかね」

花井沢はちよつと正面に座っていた磯崎に同意を求めた。磯崎正太郎、おなじ「取材プロ・シンク」の元メンバーである。伝聞を出発点にして問題を考えた結果が伝聞の書き替えになったわけだから、花井沢の非難はあたらない。それに「元シンク」が接した伝聞にはもう一説ある。

「叫んだ」というものではなく、国家主席の座を江沢民に譲ったばかりの鄧小平

が、挨拶にやってきた江沢民に「ささやいた」というものである。

が、花井沢としては「伝聞を出発点にして」というよりも「やられた、と叫んだ」という「伝聞を前提にして」問題を考えたかったのだろう。とすれば、議論はそもそもすれちがっている。

「わたしたちは、伝聞を前提にした話などに興味はありませんよ」と、磯崎はそう言おうとして言葉を呑んだ。酔った花井沢にそういつてみたところで、とても通じるとは思えなかったからだ。「興味はありませんよ」という言葉尻だけを捕らえて、頭に血が上つても始末が悪い。「おつしやる通り『CIAにやられた、と鄧小平が叫んだ』ということを前提にすれば、話は違ってきます」

昔、ゴールデン街ジャーナリスト、というのがいた。新宿の古い飲み屋街で、ここにたむろしては自己主張の強い議論を戦わす。篠山や花井沢はその世代のジャーナリストである。

磯崎もよくゴールデン街に連れて行かれたが、飲んだ席でいつも一番クールなのが彼だった。そのため、しばしば喧嘩の仲裁役をおおせつかう。損な役回りなのである。だが、この日はどうやら火に油を注いでしまった。

「ほれみろ、おまえらのグループにも道理のわかるやつがいる。もし仮にだ、百歩譲ってソ連の崩壊がチェルノブイリを引き金にしたものだとしよう。そうだとしてもその場合、事故は偶発的なものではない。CIAによって仕組まれたものだ。そしてその事実を、中国のスパイ組織がキャッチしていた」

「いくらなんでもそれはありませんよ。そんな工作が発覚したらCIAは破滅です。数万人の人を理由なく殺し、数十万人を、いや、ことによったら数百万にものぼる人を死の危険に巻き込んだ。そんなことを世界も、アメリカ市民も許すはずがありません」

クールな磯崎でも、声が上がった。が、

このとき、花井沢は以外に冷静だった。

「なに、これはたとえばの話さ。実際にありそうな話をすれば、ブランドンブルグ門に人々が押しかけたとき、戦車が一発発砲すれば事態は大きく変わっていたはずだ。天安門事件のときのように。CIAは何らかの形でその発砲命令を阻止した。あるいは発砲禁止命令をでっちあげた。これなら『やられた』という意味がよくわかる。そうだろう、堀田君。いや、待て、篠山だ。ソ連の崩壊を食糧問題と結びつけたのはおまえではなく、篠山だろう。おい、篠山のやつはどこへいった」

「おいおい、勘弁してくれよ、ここはゴールデン街じゃあないんだぜ」と、のどまですで出かかったが、

篠山啓志はその言葉を飲み込んだ。花井沢とは飲みたくないという気分に変わりはないが、名指しされ、居所を探されたのではやむをえない。すこしつきあつて静かにさせようか、と考えた。

とはいえ、篠山にはこの間の花井沢と堀田、花井沢と磯崎のやり取りは見えていない。「相手にしないほうがいいのにな」と、磯崎正太郎はそう思ったが、遅かった。「堀田や磯崎がやりこめられている」そう感じた篠山は、グラスを片手に席を移ってきた。

「おい、篠山、鄧小平がCIAにやられた、と叫ぶ以上、それはなんらかの工作活動を意味しているはずだろう。おまえが言う食糧戦略はアメリカの経済外交であって、工作ではない。そんなものは国務省がやればいいことで、CIAがしゃしゃり出るまでもないだろう」

篠山は堀田と磯崎の間に入り、腰をおろすと、まずは目の前にあったカッティング・フルーツを一切れ、口に放り込んだ。

「花井沢くん、きみはどうしてもCIAの謀略説を採りたいのだろう。しかしな、CIAといっても基本は諜報機関なんだ。主な任務は情報の収集と分析。年

がら年中、工作に、謀略に飛び回っているわけじゃあない」

「もちろん情報の収集や分析を任務とする者はいらる。しかしべつに謀略を専門とする工作員だっているだろう。おれはそいつらのことを言っている」

「いいかね、花井沢くん。CIAの工作員といったって、普段やっていることは国務省の役人と何も変わらない。いや、むしろ工作員の多くが普段は国務省の外交官というカバーをかぶって、各国の大使館に詰めている。そして国務省がやるようなことをやっているのさ。スパイ映画のような派手なことは何もない」

「それじゃあカストロ首相を暗殺しようとしたキューバはどうだ。アジェンデ政権を転覆したチリはどうだ。インドネシアでもヴェトナムでもコンゴでも、CIAは暗躍している。今もイラクのフセインの命を狙っているといわれている。これらもみな、謀略じゃあないというつもりか」

「そんなことはいつていない。それらはむしろ歴史的な偶然に支えられたレアケースだ、といっている。謀略はしばしば自国民をも欺いた上で行われる。そうでなければ成功は難しい。つまり、国民の合意を取り付けていない。だから、イラン・コントラ事件のように失敗に終わったときのつけは大きい。そう簡単に仕掛けられるものではない、ということだよ」

「おれは何も一般論を聞こうとしているんじゃない。鄧小平がCIAにやられた、といっている以上、実際に何らかの工作があつたんだろう、といっている。おまえは知らんかもしれないが、中国の諜報機関も優秀だぞ。CIAの動きはきっちりマークしている」

「だからはじめから工作がなかったとはいっていない。おまえが考えるような派手な工作はなかったらうといっている。いいか、たしかに小麦の輸出量をどうするか、なんてことは国務省か商務省の仕

事だろう。だがな、それによってポーランドを切り崩していくにはバチカンの協力が不可欠だった。でもな、まがりなりにもバチカンは世界のカトリックの総本山だ。アメリカ一国との外交取引に応じることなど考えられない。これはあくまでも表向きには、という話だがな」

「そこでCIAが動いた、というんだろ。しかし、それはいったいいつのことなんだ。風が吹けば桶屋が儲かる式の話で、工作というには遠すぎるんじゃないか」「だから最初からそんなに派手なものではないといっているだろう。それにこの工作が直接ベルリンの壁崩壊を狙ったものだったなどと、おれたちも考えてはいない」

「ほらみろ、そうだろう。だから別に工作なり謀略があったと考えるのが自然じゃないか。鄧小平はそのことをいつている」

「花井沢くん、あんたはどうしても派手な謀略と結びつけないんだな。しかし、

いかにCIAだといっても全能ではないんだ。歴史の流れを利用することはできても、歴史をひっくり返すような謀略がそう簡単に組み立てられてられるはずがない」

「篠山、おまえはCIAの暗躍を軽視しすぎている。そんなことだから日本は世界から舐められる。世界の現実には謀略の坩堝なのだよ。CIAだって、日本でなにをしているかわかったもんじゃない」

「それは違うぞ、花井沢。CIAが日本で大きな顔をしていられるのは、あんたのようにCIAを過大評価するやつが多いからだ。CIAがその気になれば、日本での政界工作や謀略を仕掛けることなど朝飯前だと思っているやつが多いからだ。その力を怖れるあまり、彼らの術中にはまる。敵に回されたくないと思うからだ」

「いまの日本ではたまたま謀略を仕掛ける必要がないだけだ。戦争直後は実際に数々の謀略を仕組んできた」

「だからそれを警戒しろ、というんだろ。それはわかる。だが、それは過去のことだ。おれはむしろ、謀略説を吹く前に、CIAの日常活動に注意しろ、といいたい。国務省の役人とはほとんど何も違わないようにみえる活動、合法の活動に過ぎないと見える情報収集に気をつけろ、といいたい。CIAがどうのという前に、日本社会は情報の管理に無関心すぎる。これをおろそかにすれば、いずれ日本は大変なことになる」

「話をすりかえるな。おれはCIAの脅威を言っている。情報管理の話をしていくわけではない。CIAを庇ってどうするんだ。荊山はCIAのエージェントか」「なにをばかなことを。CIAはな、そうやって意図的に謀略説を流すことさえあるんだぞ。力を過大に評価させたいからな。だからそもそも、鄧小平が叫んだという、その話の出所さえ疑ってみる必要があるんだ。調べてみたら花井沢だけが吹きまくっていた、ということだって

考えられないことではないんだ」

「なんだって、おれがエージェントだというつもりか。ふざけるんじゃない。よくもそんなことを」

「言い出したのはおまえだ。ふざけるな」

「昨日は参りましたね。ほんとにどうなることかと思った。それにしても篠山さんがあんなにオーバーヒートするのも珍しい。今にも殴りかからんばかりだった。よほど虫の居所が悪かったんだろうな」

パレスホテルでの雑誌創刊パーティー

の翌日、

磯崎正太郎はおなじ丸の内の一角で、再び堀田豊と会っていた。二人は元シנקのメンバーの中でもとりわけ守備範囲の重なるところが多く、よく、一緒に仕事をすることがある。

堀田は磯崎とは対照的で、あごの骨ががっしりした無骨な感じのする押し出しの強い男で、物事をすっぱりと断定するのを得意とする。といって、精密な論理

に欠けるわけではなく、いかにも精密そうに見える磯崎よりも上であることが多い。まずまずのコンビなのである。

この日も仕事の打ち合わせで、おなじ篠山グループの堀之内久子も同席している。堀之内は磯崎や堀田よりも少し若く、『週報・プレビュー』の記者経験はない。大学を出てからすぐ日本ジャーナリスト・スクールで学び、その実践過程の授業で「取材プロ・シנק」を知った。専門学校卒業後の押しかけメンバーである。

「ほんと、いつたいなにがあったの。突然大声を張り上げるんだもの、びっくりよ」

堀之内は終始別なテーブルにいたので、議論の中身はまったく飲み込めていない。

「簡単に言えば、日本のCIAの評価をめぐる意見対立さ。そして、互いに相手をCIAの手先だといったののしりあった。いや、それにしてもほんとにホッと

したぜ。また磯崎が割ってはいえることになるんじゃないかと思ったよ」

「いやいや、そいつだけはごめんですね。花井沢さんはでかいからなあ。あんな男の流れパンチを食らったらひとたまりもありません。それにあそこはゴールデン街じゃないんだ。こんな人知りませんという顔をして、さっさと逃げ出しますね」

「それにしても、昨日の話はおもしろかった。おれなんかもつい、花井沢と一緒に、CIAと聞くと謀略と直結したイメージを抱いてしまう。しかし、それがCIAの思うツボだとは考えもしなかった」

「007とか、スパイ大作戦のイメージが強いからね。まあ、考えようによつてはああしたスパイ映画も反共宣伝というばかりじゃなく、スパイ活動は国を守るなくてはならないものなんだ、スパイは英雄的愛国者なんだ、というプロパガンダでもあるんでしょうがね」

「それは間違いない。アメリカやイギリスの子どもたちはきつと、ああいう映画

を見てスパイに憧れるんだろう」

「それはぼくらにもあるでしょう。実はめっちゃめっちゃ地味な、日陰の毎日だったとしても、映画を見る限りカッコいいわけですからね」

「女から見てもかっこいいわよ。でも、のめりこみすぎて自分がその気になるなんてことはないわよね」

「ところで、あの後いろいろ考えてみたんだが、やっぱりこの国はどこかおかしい。たとえば今の駐日アメリカ大使のマイケル・アマコストは明らかにCIAだろう。普通なら密かに身を潜めているもんだ。ところが、それを隠すどころか八面六臂の活躍だろう。しかもそれを咎める者もない」

「ミスター・ガイアツですか。たしかに彼は怪しいですね。いちおう国務省畑を歩んではいますが、国防次官補になったこともある。CIAなら両省を股にかけても不思議はないですからね」

「磯崎はアマコストに詳しいのか」

「たまたまです。家が三鷹なもので、国際基督教大学（ICU）に知り合いが多いんです。彼はカールトン大学を卒業してからコロンビア大学で博士号を取得し、国際基督教大学の客員準教授として来日していますが、この経歴もCIAがリクルートする対象としてドンピタリだと聞いています。いまはどうなのかわかりませんが、ニューヨークのコロンビア大学といえば『菊と刀』を書いたルース・ベネディクト以来、日本研究のメッカなんです。同時にCIAの大事な草刈場にもなっていると聞きます」

「えっ、ほんとなの、いやだわ。あたしね、コロンビア大学に留学しようと思ってるの」

「なんで、また」

「ジャーナリズム論をちゃんと勉強したくって。日本ってあたしたちのようなフリーランスのライターのステータスって、すごく低いじゃない。でも向こうではそうじゃない。むしろフリーランスの

ほうが評価が高いわけでしょう。それってなんだろうなって、ずっと考えてたの」

「うんうん、よくわかる。ほんとに涙が出るくらい身につまされる」

「そうしたら誘ってくれる人があつて」

「いい話じゃないか。ぜひ行ってみるといい。ステータスが高い分だけ厳しいんだろうと思うがな。ともかく日本のジャーナリストでアメリカのジャーナリズムの手法を一から身につけた人というのは多くないから、貴重な財産になる」

「ごめんなさい。なんか話が横道にそれちゃったみたいね」

「うん、まあ経歴はともかく、やつがCIAだというのは間違いない。普通ならそこまで見えみえの人物を大使には起用しないだろう。外交活動がやりにくくなる。ところが日本では事情が違うんだろう。やつは前任者のマンスフィールドより遙かにのびのびと、裏工作に励んでいる。これも篠山さんがいつているCIA効果のひとつなんじゃないだろうか」

「なるほど、CIAを看板にして、ただの大使じゃないんだぞ、日本を揺さぶるぐらいわけないんだぞ、という無言の威圧を加えるわけですね」

「そして実際、日本の要人と密かに会い、外圧を加えて、結果的にアメリカの国益にかなった政策を導く」

「篠山さんが言っていたのもそのことなんだでしょう。国務省の役人と違ういように見える活動に気をつける、これに注意しないと日本は危ない」

「それともうひとつ。合法活動に過ぎないと見える情報収集に気をつける、これに注意しないと日本は危ない」

「それはどういうことなんですかね」

「うむ、確かなことはいえないが、たとえばだ。この国にはCIAの回し者としてかと思えない人物をわざわざ側近につけている議員が少なくない。埼玉選出の衆議院議員・浜川宅三郎がそうだ。彼の秘書のマイク・マレインは海軍情報部だからONI、直接CIAだというわけではな

いがIC（情報コミュニティー）を通じてCIA長官の傘下にあつた男だ。実際に浜川が外務務務次官だったとき、マイクはまだアメリカ大使館海軍武官補佐官の身分だったが、浜川にいろいろアドバイスをしている」

「危ない危ない。アドバイスを受ける、という以上、さまざまな内部情報を提供しているはずだしね。外国の諜報部に情報を提供するなんて、考えようによっては裏切り行為。外国では考えられないとんでもない話だね」

「それって、合法なのかしら」

「まあ、違法ではない」

「そおよね。アドバイスを取られるか入れないかは日本人側の問題ですものね。で、その人、何か問題でも起こしたの」

「それがはつきりしないのが諜報活動の怖さでもあるんだよね。だけどね、そのマイクという男、海軍武官補佐官時代、日本でなにをしていたと思う。ソ連の海軍戦力の調査と分析さ。思い出してくれ

よ、ソ連極東海軍の大増強がかまびすしく取りざたされたことがある」

「中曽根政権のときだね。ソ連脅威論が言われ、ソ連軍の北海道上陸を想定した軍事演習まで行われた。中曽根の日米運命共同体論が飛び出して、シーレーン防衛から、三海峡封鎖、果ては日本列島ハリネズミ論までが打ち出された」

「結果的にはあれが、日本の防衛費のパーセント枠突破の引き金になった。それがどうだ、ソ連が崩壊してみると何のことはない。極東海軍は張子の虎だったじゃないか。戦艦や空母はくず鉄どうぜんで、原潜にしても故障ばかり。まともに実戦には使えない。ピンポン球でも見分ける能力がある偵察衛星を持ったアメリカの諜報機関が、これを知らなかったと思うかい」

「そうか、マイクは絶対に知っていたはずだ。しかし嘘を言っていた。おそらく日本中をだまして歩いていた、と考えたほうがいいね」

「もちろんマイク一人じゃないだろうがね。政治家も役人も、マスコミもやられたわけさ。その結果、アメリカと日本の軍事産業が潤った。日本の防衛族とその周辺に群がる軍事関連産業の関係者はCIAを大いなる救世主、最強の同盟者と考えたことだろう」

「マスコミもやられたのか、残念だね。きつとソ連脅威論をぶってまわったディープ・スロートがいるんだろうね。そいつらもCIAのエージェントなのかもしれない」

「そういう対人工作、対人諜報活動のことをCIAではヒューマン・インテリジェント、略してヒューミントと呼んでいる。困ったことにこの国の要人のほとんどが、このヒューミントをうけている。そしてもっと困ったことに、政治家や政府の要人もそのことを恥じるのではなく、却って自慢げにしている。さすがに恥ずかしいのか、ソ連の極東海軍のことに関しては頬かむりを決め込んでいる

けれどな」

「おれはCIAにマークされるほどの大物なんだ、というゆがんだ優越感と、CIAにパイプを持つてゐるんだぞ、という無言の威圧感がうれいんでしょね」
「だが、それこそが国を滅ぼす。そんなことが自慢になる国はもう、国家の態をなしていない。篠山さんはそれを言おうとしたんだろうな」

一九八九年五月、駐日アメリカ大使に着任したマイケル・ヘイドン・アマコストは、高まるアメリカの「日本バッシング」の世論を背景に、精力的な活動を展開。日本にさまざまな要求を突きつけ、ミスター・ガイアツの異名をほしのままにした。

着任直前の四月二十八日、アメリカ通商代表部（USTR）が日本の貿易障壁（非関税障壁）を半導体など三四項目と認定。着任後の五月二十五日にはスパーク301条に基づく不公正貿易国とし

て日本を名指し。外圧の下準備を整えた。

慌てた通産省は七月、貿易不均衡是正の努力を示すため、アメリカに「輸入発掘チーム」を派遣したが、こんな思いつき程度のアイデアに成果が期待できるはずもなく、アメリカ側の要望という名の圧力に耳を傾けるほかはなくなった。

これが八九年の九月四日から始まった「日米構造協議」である。アマコストは協議実現のため、従来の外務省を窓口とする外交官活動を大きく踏み越え、他省庁、与野党、財界など、あらゆる場に外交攻勢を仕掛けた。

そんな中、当時、民自党は野党の選挙基盤になつていてという、それだけの理由で、国労、日教組解体のシナリオに続いて、生協の解体をスケジュールに載せていた（成功すれば自治労、農協もターゲットになるはずだった）。大規模小売店舗法を改正し、大規模店の規制を強めようと狙っていたのである。

ところがアメリカは、日本進出を狙つ

ていたトイザラスというおもちゃ屋一社のために大規模小売店舗法に噛み付き、構造協議の中で規制の緩和をもぎ取った。そして、これを「日本の消費者の利益」と称し、アメリカこそ「日本の健全野党」と言つてはばからなかった。

大規模小売店舗法の改正が決まった二日後の六月二七日には海部首相が公共投資の増額（一〇年間で430兆円）を決定。財政という内政の基本に、アメリカ政府の干渉を許した。

こうしたことは、これに続く八月二日に勃発した湾岸戦争で、決定的な意味を持つてくる。イラク軍がクエートに侵攻し、九時間後に全土を制圧した事件である。

アマコスト駐日アメリカ大使は一〇日、大使館の裏手にある大使公邸に民自党幹事長の大沢八郎を密かに呼び寄せ、ブッシュ大統領の「尋常ならざる覚悟」を伝えた。その上で、「中東に『日の丸』が立つような貢献」を要請したのである。

アマコストは海部首相、中山外相と会うよりも先に大沢と接触したのである。しかも、この一〇日の密会が、戦争勃発後だけで、少なくとも三度目になる。

二八日正午、常宿にしている赤坂プリンスホテルを出た大沢幹事長は首相公邸で、海部首相との昼食会談に臨んだ。

「エジプト、ヨルダン、トルコの三カ国に経済援助をドンとやる。現地への邦人救援機も二機飛ばす」と言う首相に対して、大沢は「そんなことでアメリカは納得しない。現行法でも自衛隊の中東派遣は可能だ。集団的自衛権とは違う」と主張。自衛隊派遣に難色を示す首相の翻意を迫った。

一〇月一四日には自衛隊の後方支援を認める国際平和協力法が成立。翌一九九一年一月一七日（多国籍軍によるバグダッド空爆Ⅱ「砂漠の嵐作戦」の翌日）には海部首相が多国籍軍によるイラク攻撃に「確たる支持」を表明（これがペルシャ湾への掃海艇派遣に結ばれる）。

二四日には民自党が多国籍軍に対する90億ドル（1兆2000億円）の追加支援を決めた。

アマコストはさらに二月八日、大使公邸に野党・公正党の石田委員長を招き、90億ドル追加支援の後押しを依頼。合意を取り付けている。ことはすべて、アメリカの青写真どおりに進んだのである。

青写真どおりに進んだのはこうした軍事面だけのことではない。

湾岸戦争シフトの裏で、大使はしっかりと山本農水相に会い、ウルグアイ・ラウンドでのコメ開放（関税化）問題に対し「貿易立国として責任ある回答を出すよう」要請することを忘れてはいない。

九一年の四月にはモスバーガー事務長官に率いられたアメリカの中堅企業一四社のトップが、対日輸出拡大を目指して来日。アメリカ政府、大使館の支援を受けた私企業の活動に、通産省が「日本市場攻略法」を伝授するという、アメリカ

の記者さえ首をかしげる奇妙な関係が出現した。

「アメリカのハイテク企業はヨーロッパで成功を収めている。日本でも立派に成功を収めるようがんばってほしい。われわれもあらゆるサポートを惜しまない」というモスバーガー長官の日本法人むけの挨拶に拍手する人々の中には、日本IBMや日本オラクルの社員らも交じっていた。

この二か月後の五月二七日には、埼玉土曜会の四九社が、談合疑惑で公正取引委員会の立ち入り検査を受けた。アメリカの建設業界の日本参入を阻む壁として批判されてきた「談合」に対して、公取委が重い腰を上げたのである。

一九九一年九月一二日、「元シンク」の想定どおり、ソ連のシラーエフ経済特別委員長が、60億ECU（約9800億円）相当分の食糧援助を西側に要請。二月一三日にはロシアが独立国家共同体への参加を表明して、ソヴィ

エト連邦の消滅が確定した。

丸の内のパレスホテルで新雑誌創刊記念パーティーが開かれ、その二次会の席で篠山啓志と花井沢秀道とが言い争った、あの日からほぼ一ヶ月後のことである。

このパーティー以後も、日本はまれに見る激動下にあった。一つ一つの出来事はそれぞれに重要で、関心も大きかったのだが、それが次々にやってくる。そのめまぐるしさの中で、磯崎正太郎はその全体像を見通す力を失っていた。

湾岸戦争が終わって、ソ連が解体。アメリカが軍事費を40億ドル削減し、その四分の一をロシアの援助に振り向けたことが象徴するように、冷戦は確実に終わりを告げ、新しい世紀がやってくるかのように見えた。

ソヴィエトの消滅が決まったとおなじ日、南北朝鮮がソウルで平和共存の合意書に調印して、統一への期待が高まった。そしてその三日後の二月一六日、中国

が台湾との交流促進のために「海峽兩岸關係協会」を設立。冷戦の終結が東アジアにも及ぶと思われた。

あとはアメリカとの貿易摩擦をいかに収めるか。それに集中すればよいものと思われた。ところがアメリカからもたらされた一つの情報すべてを一変させた。朝鮮民主主義人民共和国の核開発疑惑である。

これによつて一九九〇年九月、金丸・田辺と金日成の「共同宣言」調印によつて開かれた日朝国交正常化交渉は吹き飛び、民自党の武下派（旧田中派）と社文・公正両党による新党結成の動きが封じられた。

そして、それにとつて代わるかのように、元熊本県知事を中心とする新党構想が浮上（九二年五月）。「東京佐川急便事件」の勃発で金丸真が失脚（九二年十月）すると、おなじ武下派から大沢グループが分離の動きを見せ（同）、「平成刷新の会」などが結成される。

これら、新党結成の動きは、日米構造協議に対応するばかりではなく、日米安保条約への対応をも迫られることになったのである。すなわち、ソ連の脅威に代わる北朝鮮の、そして中国の脅威である。アマコストはこの国際環境のドラスティックな変化に対応し、アメリカの国際戦略にかなった日本を実現する力を、新党に期待した。

そして一九九三年八月六日、衆議院本会議の首班指名選挙でついに細川守弘が内閣総理大臣に指名され、非民自連立政権が発足することになった。

この間、磯崎の意識の中にほとんどCIAは存在していなかった。そしてまた篠山個人に対しても、篠山グループ全体に対しても、あまり強い関心を抱くことはなかった。

あえて言うなら、九二年の夏にニューヨークへ出発した堀之内久子の壮行会をみんなでやったこと。そして九三年の夏ごろから篠山啓志が盛んにテレビに出演

するようになり、以前のような切れ味鋭い舌鋒を失って、急速にテレビ人間化していったことぐらいだろう。

CIAの謀略 第2章「萌芽」

屋下がりのワイドショーである。料理研究家などと称する女たちにまじって、こやかに笑顔を振りまく篠山啓志が映っていた。国際問題の評論家として、最近、めきめき売り出し始めた男である。甘い切り口で焦点をぼかす彼の独特のおしゃべりには、評論家としての切れ味にかけ、いらつく視聴者もなくはない。が大方には、却ってそこが受けるのだろう。テレビに、雑誌に出ずっぱりの昨今である。この日も彼は、茶碗を片手に、飯をほおばったまま、ほごほご聞き取りにくい声で、わざとしゃべって見せていた。篠山が花井沢と激論を交わした雑誌創刊パーティーから二年と三カ月、磯崎は篠山に会うことはなかった。その間に篠山

は大きくブレイクしたのであるが、そのことに、磯崎はどこか納得できないものを感じていた。

そのいい例がこのワイドショーである。昨年（一九九三年）の八月、日本はみぞうおの冷夏に見舞われ、コメ不足が深刻化した。コメの自給そのものが危うくなって、その年の暮れには「一粒たりともコメは入れん」という、日本の食糧管理制度の大堤防に大穴が空いた。

日本はタイやアメリカからの、コメの緊急輸入を余儀なくされたのである。

それは、日本にコメの自由化を求めるアメリカなど、食料輸出国にとつても天の恵みだった。冷夏は、あまりにもタイミングのよい自然現象であつて、コメの輸入に反対する日本の農家にも、有無を言わせぬ力として迫ってきた。

そしていよいよ、この三月には実際に店頭から日本米が姿を消すことになる。いま、その日本米にたいする駆け込み需要が起こっていて、わずかな放出に

群がっでは行列ができ、パニックさえ起こっている。

こうした混乱を避けるためには、やむをえない措置だったとはいえ、日本の食習慣とはまったく合いそうにないこのコメを、無理やり食べさせるために、日本はさながら戒厳令下の報道統制にあるかのような感を呈した。

マスコミはこぞって、タイ米であるインディカ種（長粒米）の優れた面を強調し、献立のアイデアを提供した。ジャポニカ種（短粒米）に比べ粘り気のない欠陥を補うための炊き方の工夫、もち米との配合などの情報も提供した。

そしてまた、有名人や知識人を動員して、試食会なるものも開いて見せたのである。

「いやあ、これはおいしいですねえ」「日本米と少しも違わないじゃないですか」「これならタイ米を食べますよ。安いですねえ」……

磯崎はこのとき、有名人や知識人と称す

る人たちが何を言ったかをほとんど覚えている。

「たしかにタイ料理の中のタイ米はうまいけれど、日本食の食材としては問題外だ」

磯崎自身、うまい物を食うには自分で作るに限る、を身上とし、実際によく台所に立つ。もちろんそのためには買い物にも行く。食材を吟味する者にとって、これは決定的なことである。タイ米は日本米と比較するようなものではなく、別な食材なのである。

「いやあ、これはおいしいですねえ」「日本米と少しも違わないじゃないですか」「これならタイマイを食べますよ、安いですねえ」

だから、こうしたものいいに磯崎は強い不快感を抱いてしまう。なぜ、素直に「おいしくはないけれども我慢して食べましょうよ」とはいえないのか。オープンに議論して、「おすし屋さんには日本米を回しましょうよ」といった意見が、な

ぜ出ない。

磯崎はマスコミのこうした見えない強制に、大本営発表の似非情報をそのまま垂れ流し、人々を戦場に駆り立てていったかつての有名人や知識人の姿とおなじ臭いを感じてしまうのだ。

磯崎はべつに、「米は一粒たりとも」派の人間ではない。タイや東南アジア風の料理を食いたいと思うときがあり、そんな時、タイ米はぜひほしい食材である。せつかくタイ米をいれるのなら、タイ料理の知識や調味料も同時に入れてもらいたいのである。

だから、「うそはいけない。人々をくくらし、だまくらかして、そのドサクサ紛れに食営制度を変更しようなんて姑息なやり方は許せない」と思うのである。

「そもそも、いま、ほんとうに日本は米不足なのかどうか、どうもそれからして怪しいのだ。確かな情報を与えられてはいない」

磯崎は、昨夏のような冷夏が三年も続けばピンチだろうが、そういう長期的な事態に備えるなら緊急輸入ではなく、米の増産、減反政策の見直しであるべきだと考える。食糧は将来、地球規模で大量に不足し、緊急輸入など許されない事態になるのは目に見えている。

もつとも、磯崎が篠山に納得できないものを感じるのは、彼が姑息な情報操作の片棒を担いでいるから、というだけのことではない。

問題は篠山啓志が食糧問題の取材チームのリーダーとして、しっかりとした見識を持った男であったこと。磯崎自身、その男をリーダーとして評価し、信頼を寄せていたこと。最近の篠山の言動はこの二点を裏切るものだと思えるからである。

篠山は磯崎ら取材グループ・シンクのリーダーで、週刊誌や雑誌記事のアンカーをやっていた。彼はいっぱしの反骨精神を持ち合わせた古いタイプのジャー

ナリストで、姑息な大本営発表に協力するような人物ではなかったはずである。

いや、むしろ、駆け出しの磯崎ら取材グループにジャーナリズムの本旨を説き、導いてくれた敬すべき先輩のような存在である。その彼が、うまくもない米を、さもうまそうに食って見せているのである。

磯崎には、ひょうきんな演出で、わざと人目を引くそぶりをして見せても、篠山が決してタイ米をうまいと思っていないことは手にとるようにわかる。それはまた、とても悲しい光景でもあった。

われら、文字書きにとつて、TV電波はある種、虚像の世界である。内面の葛藤を単純化し、短い時間のうちに分かりやすく晒して見せる。つまりは瞬間芸のショーである。

それを得意とする者も、文字書きはある種のテレから自らを「電波芸者」などと言ったりする。が、それはそれ。表現形態は違うが報道の手法であることに違い

はない。ショーの大切さを、磯崎ももちろん知らないわけではない。

だから篠山が、見事な電波芸者を演じて見せたとして、それをとにかく言う筋合いはない。むしろ、新しい可能性を開いた先輩をそれなりに祝福すべき立場なのかもしれない。

が、そうだとしても、磯崎がワイドショーの篠山を見て悲しいと思う気持ちが消えるわけではない。

たくさんの日本人がジャポニカ種ではなくインディカ種を口にしてから半年ほどしたある日の日曜日、磯崎がまだベッドでうつらうつらしていたとき携帯電話が鳴り出した。

仕事先にはほとんど知られていない私用の携帯である。篠崎は自宅近くに仕事場を持っていて、原稿の締め切りが近づくのと泊り込んで執筆に打ち込む。携帯はそんなとき、家族との連絡に使われる。執筆時には仕事場の加入電話を留守電にし

てしまうことが多いからだ。また、仕事を留守電にしたときは、携帯が転送電話になる。

が、この日は日曜で、自宅にいる。留守電の転送機能も解除してある。携帯に電話が入ることはまずないのだ。「間違いない電話かなにかだろう」と、磯崎はそんなふうにぼんやりと考えながら電話に出た。

すると先方は、やたらとくぐもった声でこういうのだ。「おい、大丈夫か。おまえ一人か。誰かに聞かれてはいないだろうな」。つぶれた声ではあるが、声の主が誰であるかはすぐにわかった。

篠山啓志の取材グループの一員だった堀田豊である。彼に携帯電話の番号を教えたとすれば、携帯を手に入れた直後のはずで、それはもう二年もまえのことである。以来、堀田から携帯でのコールを受けた覚えはない。

かつて、磯崎と堀田は毎日のように会っては飲み、飲んで話した仕事仲間

である。が、ここ数年、仕事のジャンルがやや異なってきた、互いに忙しくなってきたことから、いくらか疎遠な状態が続いてきた。だから、ただ「どこかで会えないか」というだけの電話でも、磯崎にはなぜか懐かしく、気分が浮き立つ。

しかし、多少の懸念材料もある。堀田のあの沈んだ声はただ事ではない。「なにかあったのか」と訊ねても、「会ってから話す」と応えるのみなのだ。

そういえば、携帯に電話してきたことも謎である。いくら疎遠とはいえ、この二年間に限っても年に二、三回は会っている。そんな時、連絡を取り合ったのは携帯ではなく、普通の加入電話だった。急を要する連絡ならともかく、ただ会うための連絡に、わざわざ使い慣れていない携帯の番号を探すというのもおかしい話だ。

が、磯崎のこの疑問はすぐに解けた。指定された代々木の喫茶店は昼でも薄暗く、客はまばらだった。堀田はその一番

奥のテーブルに陣取り、背中を壁にもたせるように座っていた。その姿はどこか横柄な雰囲気であつたが、磯崎を認めるとすぐに背中を丸め、小さく手招きをした。いかにも思わせぶりの、秘密めいた仕種である。

磯崎が対面に座ると、堀田は黙って大判の茶封筒をテーブルに滑らせた。これまたいかにも思わせぶりの仕種だが、こちらのほうは彼らのいつものやり方で「ぐちゃぐちゃいう前にまず、資料に目を通せ」ということを意味している。要領よく事を運ぶための知恵で、秘密の取引があるわけでもなんでもない。

磯崎もそれは心得たものだから、すぐさまでも聞かずに中の資料を抜き出した。雑誌類のコピーであることは手にとる前からわかっていたが、出てきた資料の一枚目から、いきなりあの男のクロウズアップ写真のコピーが目飛び込んできた。国際問題評論家・篠山啓志である。「篠山じゃあないか。いったいどうい

ことなんだ」

まずは資料に目を通してから、という彼らの暗黙の約束事を無視して、磯崎はいきなりそんな質問をしてしまった。

「まあ待て、ともかくもう少し中身を見てくれ」

堀田はそういうと、再び磯崎がやつてくる前の、壁にもたれた姿勢に戻って、タバコをくゆらせ始めた。

『週刊ヴィジョン』一九九三年一二月二二日号、—NAFTA（北米自由貿易協定）成立と日本の進路

『月刊交流』九四年一月号別冊、—特集・岐路に立つ日米外交、クリントンの対日政策

『月刊ニューエイジ』九四年二月号、—政治改革から政界再編へ、そのポイント見出しを確認しながら、磯崎は堀田が入れたマージング部分を大急ぎで拾い読みしていく。篠山が最近の出版物で何を言っているのか。思えばあまり考えたこともなかった。

いわゆる、テレビメディアのほうに行ってしまった人間であり、甘口の解説ばかりを旨とする男である。磯崎との接点はそれだけ薄くなったといつていい。つまり、たまに目にしたときの違和感を除けば、興味が薄れたといつていい。

ところが、このコピーを見る限り、篠山はまた最近の二、三カ月、確固たる政治姿勢・思想信条に基づき、筆鋒鋭い論調を展開している。それも、見方によつては以前にも増して、自信に満ち溢れているといつてもいい。だが、違うのである。

以前とは明らかに論旨が違うのである。磯崎はいつそう目を皿のようにして、活字を追う。と、そのとき、とある月刊誌のリード文が目にとまった。「アメリカはほんとうに日本を救うのか」と題する『月刊未来』の防衛問題に関する記事である。そのリードにはこうあった。

「日米の絆は、両国の自由貿易を通じた相互依存関係に基礎を置くことではじめて堅固になる。わが国の食糧自給論、食

糧安保論は、両国の絆を弱め、日本を孤立化へと導く危険な発想である」

食糧安保論とは日本の食料自給率が七割を切った一九七三年ころから主張され始めた説で、自給率を高めることが国の安全に寄与する、というものだ。

日本は主要先進国の中でも桁外れに低い食糧自給率しか持たず、コメを除けば小麦、大豆などの主要穀物でさえ、その大部分を輸入に頼っている。この依存状態をそのままにしておいて、国の安全を語ることはそもそも不可能である、というこの主張は一時、党派を超えたコンセンサスとなり、一九八〇年には国会でも自給率を高めるための真剣な論議が戦わされ、「食糧自給力強化の国会決議」まで採択されたことがある。

食糧の完全自給は国の自衛措置であるばかりではなく、将来予想される地球規模での食糧不足に際して、豊かな工業先進国が採りうる国際的な責務である、ともいわれた。

世界が餓えている時代、自国で生産する能力があるにもかかわらず金に飽かして穀物を輸入しつづけることは、国際的な穀物相場を引き上げ、貧しい国の人々の暮らしを追いつめる「買占め」を意味する。この状態を放置しておけば、将来、日本は国際非難の標的になるだろう。

磯崎も堀田も、かつて、この篠山啓志を中心に、しばらくこのテーマと取り組んだものである。さまざまな雑誌に求められてさまざまな観点から、自給率を高める必要性を説いたのである。また、このキャンペーンを足がかりに、「取材プロ・シンク」のメンバーにもある種の専門分野が成り立ち、それぞれが自立していく契機にもなった。

食糧の自給から国際エネルギー問題へと進んでいった堀田豊、農の問題をエコロジカルに捉えていくことになった黒沼多恵子、日本の戦後史を研究するため、ライターを辞めた佐久間剛。そして、総合商社の問題から、日本型経営システム

の考察をはじめた磯崎正太郎、である。

食糧安保論はその後、100パーセントの自給が到底おぼつかない中で、次第に影を薄くしていく。とりわけ、コメ離れの進行が生み出したコメのだぶつきと、それが生み出す国民の税負担（食管理制度の逆ざや）を解消する必要から、コメの減反政策が推し進められることになる。この政策とは逆行する食糧安保論の勢いは影を潜めていくことになる。

ましてや、ガット・ウルグアイラウンドがスタートし、農産物を含むすべての生産物の自由な国際取引をめざして「例外なき関税化」の方針が打ち出されると、「一粒たりとも」という日本の食糧管理制度が最大の障害物になっていく。

日本が貿易立国を目指す限り、国連の貿易に関する一般協定を検討するテーブルであるウルグアイラウンドを日本の手で不調に終わらせることはできない。コメの輸入自由化で、何らかの妥協をせざるを得ないと追いつめられてしまう

と、食糧安保論もまた、障害になる説として、排除されることになる。

そして、その行き着くところが国を挙げた報道統制である。「外国産のおコメだって、おいしいではないか」という大キャンペーンである。もちろん、政府が強権を揮って報道統制をした形跡はない。しかしあの時、あのキャンペーンに異論をさしはさむことが許される雰囲気はなかった。あのとき、外国産米をたべることが日本人の国民的な責務だったのである。

有名人、知識人なるものがテレビのブラウン管の中で臭い芝居をし、かの男が見え見えのうそをつく。巷には不満の声があふれ、「あんな芝居にはだまされないぞ」といいながらも、結果的には、大きな流れに飲み込まれていく。

人々はそれなりに場をわきまえ、公の場では不満を口にしないから、ことはスムーズに進んでいく。先の対戦中の報道統制、戒厳令といえども多くの人にとつ

ではこのようなものだったのではないのか。直接的な強権は見えないところで密かに揮われる。

それはともかく、篠山啓志のあの不器用な芝居は、単に外国産米を食べましようという、あのときに必要とされた一過性の報道キャンペーンに乗ったものではなかった。そうではなく、食糧の自給、食糧安保論の否定という彼の政治姿勢、思想性に基づいた行動だったのである。

とすれば、これは彼の変節を意味した。篠崎たちは彼をリーダーとしてチームを組んで、長い間、日本の食糧の自給率向上を目指して仕事をしてきた。その間に食糧安保の必要性について、チーム内にはどんな迷いも異論もなかったはずなのである。

メンバーはその後、少しずつ、それぞれの専門分野に分かれ、違った媒体で、違ったアプローチの仕事をするようになっていくが、このとき手に入れた基本認識についてはその後も揺らぐことなく維持さ

れた、と、磯崎は確信している。もちろんそこには篠山も含まれていた。

磯崎はリードに続き、本文の活字を追う。堀田がつけたマーカーの黄色い線に沿って視線が滑っていく。そして、強調されたキーワードに目が止まる。釘付けになる。

「なんだって、そんなばかな」

磯崎は一瞬、目を疑って、前後の文脈を再確認する。しかし、それは読み違いではなかった。

本文は明らかにこう主張していた。

「アメリカは食糧を戦略に利用することはない、と言明している。したがって、食糧自給率が低いからといって、それが直ちにわが国の安全性を脅かすことにはならない」

つまり、「アメリカを信用しろ。食糧の確保に当たっても、アメリカに依存していれば安全だ」という主張である。

確かにアメリカは、日本のコメ市場を開放するため、近年「食糧を戦略物資とし

て利用することはない」というコメントを強調するようになっていく。しかし、これには具体的な裏づけが何もない。

それどころか、アメリカは国際政治において、食糧援助という名の食糧戦略を多用しており、中東政策の大転換となったエジプト・ムバラク政権のイスラエルに対する穏健政策への転換も、その成果のひとつであった。エジプトのこの転換がなければ湾岸戦争はアメリカにとって、より困難なものであったはずである。

また、アメリカは国内向けには常にコンピュータ技術と並び食糧が重要な戦略物資だと位置づけて、過剰なまでの生産を維持するため、主要な農産物の生産には補助金を出しているほどなのである。

そしてまた、一九七三年の大干ばつに際しては、日本の困惑をよそに、大豆の禁輸政策さえ実施した。日本の豆腐、味噌、しょうゆ業界は大パニックに陥ったのである。

ほんの数例でもこうしたことを列記して

みれば、食糧は戦略物資であつて、一般流通商品でないことは明らかなのである。

磯崎らの取材チームはこの点に関する大量の資料と、反論の余地のない事実を集めた。だから、そのすべてを篠山は熟知しているのだ。それにもかかわらず「アメリカは食糧を戦略に利用することはない」といい切っている。これは驚きであつた。

「これはひどい」
堀田が持参したコピー資料はまだ半分ほど残っていたが、磯崎はそれらに目を通すことも忘れて声を上げた。

「そうだろう」
堀田も、もうその先に目を通せと促すことはなかった。

「変節漢、ということか」
ややあつてから、沈黙を破つたのは磯崎である。この間に磯崎はもつと先まで思考をめぐらせていた。

人の思考回路はあいまいだし、時として、思い違いを修正しなければならないことがある。それが重なっていけば、本人が意識せずとも、傍からは変節と見られることも珍しくはない。だが、この変節は人の内面の作用として生まれたにしては大きすぎる。

「確かにわたしたちは、やつの単なる手足に過ぎなかつたのかもしれない。が、チームには一体感があつた。そのすべてを裏切るなんてことは、個人の内面の作用だけではとても背負いきれるもんじゃない」

磯崎はいわゆる良心の働きというものを素朴に信じていた。だから、外部からの何らかの働きかけがあつて、変節が起つたとしたか考えられないのである。

そしてまた堀田の奇妙な電話である。この久々の再会の秘密めいたセッティングである。わざわざなぜ携帯に電話してきただのか。わざわざなぜ、以前なら恒例であつた新宿や渋谷の喫茶店ではなく、

代々木の、それもこんなに寂れた店を指定してきたのか。

こうした材料から考えると、磯崎にもいくつかの想定ができた。篠山は何らかの外部機関の代弁をするようになったのだ。しかも、その外部機関は公然と名指しすることの難しい、密かなやり取りを必要とする、危険な側面を持つ機関であるに違いない。すくなくとも堀田はそう結論したのだ。

だから磯崎は、このとき「変節漢、というのか」という言い方をする必要もなかった。「CIA、ということか」と言ってみることもできた。しかし、そういつてしまうことによる、その後の問題の大きさを計ることができなかった。

そしてまた、問題を言い当ててしまうことで、堀田から「なぜそう思う」と問われた時、それを説明する合理的な根拠を何も持ち合わせていなかった。だから磯崎はむしろ、その根拠を堀田から引き出す必要があつた。

堀田は信用のおけるやつである、磯崎は常々そう思っている。武骨といつてもいいほど変節を嫌う。この、直線的な思考は時として思想信条を超える。たとえ相手がどのような思想信条の持ち主であっても、揺るがぬ思想を持ち、それを貫いて生きるものには最大級の評価を惜しまない。

その堀田に、今、磯崎は瀬踏みされているのかもしれない。「堀田はわたしの態度を計っている」それに気づいたとき、磯崎は逃げを打った。核心を射抜いてしまいう前に、こちらから様子を見よう。その様子見の姿勢が「変節漢」という言葉につながった。

「変節漢か……、そうなんだよ」堀田はこの二つの言葉の間に、やたらとタバコを空ぶかしした。やはり磯崎を計っているようである。

「でも、そんな言葉で済ますわけにはいかない」

その通りだ。磯崎も堀田のこの言葉を

待っていた。ところが、次の言葉は完全に磯崎の予想を越えていた。

「確かにあいつは変節漢かもしれない。しかし、当時からあいつは、俺たちのデータを意図的に無視するところがあった」いったい、堀田は何をいおうとしているのか。磯崎にはその先の展開が読めなくなった。

「あのころ、俺たちは純粹無垢だった。ライターとしての基本、ジャーナリストとしての使命に燃えていた」

その通りである。だから、それを体现するような人格であったあの男の周りに、磯崎らは集まり、チームを結成した。そして、思想信条には頼らない「地を這う取材」を通して真実を明らかにして行くという、目標を掲げた。

「その結果、われわれは思いもしない事実面に直面させられた。覚えているだろう」もちろん、そういうわれて「忘れませんでした」と言い切れる磯崎ではない。磯崎の頭はオーバーヒートにも近い高速回転を要求

され、チームの力量不足で利用し切れなかったデータ・ファイルの山の数々を記憶に呼び覚ました。

そこには、地を這う取材ならではの、表層的な食糧安保論ではカバーできない問題がくつきりと捉えられていた。

取材チームは、複数の、というより、日本を代表するほとんどの総合商社を直接取材し、ほとんどおなじ反応を手に入れた。というよりも、最初はほんの偶然から、三菱物産の穀物担当部長がオフレコで漏らした話である。

それをかいつまんで言えばこうである。

「日本にはアメリカのような諜報機関がない。総合商社は国を挙げての利益追求機関のように言われるが、実体はまったく違う。日本は日本の総合商社の安全にほとんど貢献してくれていない。

私たちの活動に必要な情報を何も提供してくれないのはもちろんだが、私たちが集めたさやかな情報を必死に聴取して、国の基本方針を決めているといって

もよいほどのていたらくだ。こんなレベルの關係で、日本の商社が政府と一体化した利益追求団体だなどといわれるのは笑止千番である」

さらに続けると、

「われわれ商社マンはベトナムでもカンボジアでもそうだったが、世界のあらゆる紛争地で仕事をしている。危険と背中合わせの任務を遂行しているといってもいい。

危険だからといって、寄りつかないわけにはいかない。なぜなら、そこには必ずライバルがいるからだ。最大のライバルはほかでもない、アメリカの業者である」

当時、ロッキード事件の裁判はなお続いており、ダグラス・グラマン事件の余韻もまだ覚めやらぬころだった。相次ぐ不正で、日本独特の存在であった総合商社は、国の内外からの厳しい批判にさらされていたのである。この、三菱物産の重役のコメントは、そうした批判に対す

る苛立ちのようにも感じられた。

「そのライバルであるアメリカの業者は、現地の軍や諜報機関と密接に連携し、危険が迫るとすばやく撤退した。われわれはといえば、彼らの動向を見て撤退を決める。日本大使館が危険情報を流すのはそれからのことである。つまり、情報の流れはアメリカ政府↓アメリカ業者↓われわれ↓日本政府、ということになる」

今にして思えば、この話はなかなか興味深く、深く追求せずに放置してしまっただことがひどく悔やまれる。やはり、総合商社の肩はもてないという社会的な雰囲気のようなものがあつたからなのかもしれない。

この重役が「オフレコで・・・」というのは実はこの部分ではなく、これから後に続く話である。

「日本のライバルはアメリカだが、アメリカのライバルもまた日本なのだ。われわれはソ連を恐れてはいない。ほんとうに怖いのはソ連ではなく、アメリカだと

いうことさ、おわかりかな」

ふむふむ、さもありなん。そのとき磯崎はそんなふうに余裕を持つて聞いていた。そんな磯崎を吹き飛ばすような発言。これを爆弾発言というのだろうか。

「ソ連はたとえ侵略してきても、日本を破壊するようなことはない。ソ連がほしいのはわれわれの経済力であり、技術力なのだ。だから破壊はできない。しかし、そうなればアメリカはあらゆる口実を見つけて日本を徹底的に破壊する。

よろしいかな、日本の経済力、技術力こそがアメリカにとつての最大の敵なのだ。だからそいつがソ連に流れることを許さない」

予想だにしなかった発言に、戸惑いを隠せない磯崎を眺めて、どこか楽しんでいような風もうかがえる部長であつた。部長の口調の中には、先刻まで覗いていた苛立ちが消えている。

「部長がおっしゃる破壊というのは、物理的な破壊をさすのでしょうか。つまり

軍事的な……」

「うむ、その通り。それが可能なチャンスを作り出す、ということだ」

「それは日本がソ連の支配下に組み込まれる、ということをお前に、おっしゃられているわけですね」

「そういうことだ。だがこのことは覚えておいてもいいだろう。日本とアメリカはいよいよ経済戦争状態に突入した。つまり、物理的な破壊はできないが、そうでない破壊はありうるということだ」

「日本の経済を物理的な手段に訴えずに叩く、ということなら、ソ連の支配下に組み込まれているかどうかは関係ない、ということですね」

「その通り。アメリカはそのチャンスを狙っている」

「それはもう始まっているのですか」と、磯崎はそう聞こうとして、躊躇った。なぜ躊躇ったのか、磯崎はもう覚えていないのだが、いま思い返せばあのロッキード事件も、ダグラス・グラマン事件もア

メリカによる日本経済叩きの一環として、考えてみることも不可能ではない。

部長はおそらく、あの時、日本の総合商社が最初のターゲットになっている、と、そういったかったのに違いない。だが磯崎は話を変えてしまった。

「そのことに日本政府は気づいているのですか」

「うむ、気づいてはいる。だが、認識は甘い。本気で手を打たなければ日本は負ける」

当時はまだ、日本がアメリカに追いついたという認識もなかったところである。だから、日本が負ける、という言葉も、衝撃的ではあったが、どこか遠い世界のこのように、現実感を持って迫ってくるものではなかった。マスコミが日米経済戦争に言及するようになるにはなお数年の時間が必要だった。

磯崎はこの話を取材チームのみんなに伝えた。誰もが興味を持つ話ではあったが、やはり現実感や緊迫感には欠けていた。

それでも、機会がある限り、穀物担当部長の話の裏づけを取ってみよう、ということになった。

そしてその結果は、会社によって温度差はあるものの、取材したすべての商社が共通する危機感を抱いていた。すなわち、アメリカこそが最大の敵だという認識である。

だから、われわれ、取材チームのレポートには何らかの形でアメリカに対する警戒感が盛り込まれていた。そしてまた、アメリカの食糧戦略に関するレポートは、太平洋戦争直後の占領期にまでさかのぼって集められた。

たとえば日本人の食生活の大変革を狙った、ララの小麦粉援助と、学校へのパン食給食の導入。これが結局日本の食糧（小麦）のアメリカ依存を決定づけた。

だが、これらのデータはついに篠山のレポートで使われることはなかった。しかし、磯崎自身はこれらのデータを利用したレポートも書いているので、彼には今

日の今日まで、堀田のように「データが意図的に無視された」という印象はなかったのである。

「日米戦争のことか」

磯崎は堀田の顔を覗き込むようにして、そう聞いた。

「そうだ、それだよ。あいつはアメリカが好きだった」

「アメリカが好き、だって」

磯崎はそう聞き返した。「そんな言葉では済まされない」と言った堀田が、「好き」などという主観以外に何もない言葉で済ませてしまうなんて、なんということをするのか、と思ったからだ。

「ああ、そうなんだ。あいつは一度もアメリカを非難したことがない」

「変節漢ではだめか」

「ああ、だめだ。CIAなら、あまっちょろい変節漢など、エージェントとして使ったりしない」

「なに、CIAだって、それはということだ」

磯崎が予想したとおりの言葉が出てきた。待っていた言葉だといつてもいい。が、もしそれが事実だとすれば、篠山の指示に従ってジャーナリストの基礎を築いてきたといつても過言ではない彼の立場は根底からくつがえってしまう。つまり磯崎が絶対に認めたくない事実でもある。

CIAのエージェントと思しき人物はマスコミ関係者の中にも存在する。中には米軍機の提供を受け、基地から基地へと移動する者さえあると聞く。

もちろん、こうした公然派はほんの一握りで、多くは隠れCIAだという。彼らが、少しずつ、見えないように世論を操作し、国の政策に影響を与える。こうしたエージェント本来の仕事は密かに行われる。公然派はむしろ死に体で、陽動作戦に動員される程度の役割しか持たない。

そうした基本的なことは磯崎も知っている。ジャーナリストと称するものの中に

はCIAに限らず、さまざまな組織のエージェントが暗躍している。政府や企業のエージェント、少数集団のエージェント、相場や美術品の価格を操るエージェント……。

そうした自己利益への誘導とは無縁な、報道の使命を貫徹する真のジャーナリストであり続けることは、実はきわめて難しいことなのである。

公器たる新聞でさえ、その社の主張や利益に沿って記事はゆがむ。

「あのころ、おれたちは純粹無垢だった。ライターとしての基本、ジャーナリストとしての使命に燃えていた」という堀田も、磯崎も、そうした現実を拒否して理想のジャーナリストを志した。そして、その彼らを導いたのがほかでもない、あの男、篠山啓志なのであった。

「取材費の水増し請求など、ケチなまねはするな」「飲食はいい。だが、土産は寿司折以上のものを受け取るな」「どんなに苦しくとも、ペンだけで稼げ。ほか

のものに頼るな」……。

どこかにおもねり、筆先を曲げるぐら
いなら売れないライターであつてもやむ
をえない。そう覚悟した磯崎は、これら
の戒めを完璧に守ってきた。戒めは取材
や執筆活動、人間づきあいにも及んでお
り、それをクリアすることは至難なこ
とであつたにもかかわらず、である。

だから、彼らにとつて、CIAという言
葉が持つ意味はあまりにも大きい。ほん
とくに、あの男がCIAのエージェント
なのか。そして、それはいつたいいつか
らなのか。

「おまえは俺が言った言葉の根拠を聞き
たいのだろう」

「……………」

「だけどな、そんなもの、俺も持ちあわ
せちゃあいない。少なくとも、俺たちが
根拠という意味では、のことだがな」

堀田は慎重だった。いや、原則的だった、
といったほうがいい。

「少なくともわれわれジャーナリストが
物事を断定するときは、三つのルートか
ら導かれた、確度Aの情報でなければな
らない」

これもまた、かの男の戒めであつた。

われわれは、その「裏」を取るために「地
を這う取材」を必要とするのであつた。

「まあ、いい。ともかくこの写真を見て
くれ」

堀田は、よれたスーツの裏ポケットから、
別な封筒を取り出し、中の一枚を磯崎に
示した。

なにやら、パーティー会場のようなどこ
ろで、あの男が欧米人らしき男と、グラ
スを合わせている姿が映っている。

「いうまでもなく、こいつがわれらの篠
山だ。そしてこの、隣にいる男、誰だか
わかるかな」

磯崎は首を振った。見当もつかない。

「エズラ・ボーゲルさ。『ジャパン・アズ
・ナンバーワン』を書いた、あの男だよ」

「……………」

「おまえは知らないかもしれないが、彼
はいま、CIAの付属機関・国家情報評
議会（NIC）の東アジア担当分析官に
納まつている」

「まさか」

「そう、そのまさか、さ」

「誉め殺しか。あの本で、日本は自信を
持った。調子に乗った。アメリカを超え
たと思つた」

「そういうことさ。やられたんだよ。日
本はいい氣になつてバブルに走り、アメ
リカを買おうとまでした。それをアメリ
カ人が誉めると思うかね。そんなことは
ありえない。誉め殺そうとしている、と、
そう見破らなくてはいけなかった」

「それができたのは、われわれだったの
か。われわれはあの時、そのきつかけを
誰よりも早くつかんでいた、ということ
か」

「その通りだ。俺たちは、なにかを遣り
残した」

堀田はそういうと、裏ポケットの封筒か

らもう一枚の写真を取り出した。

「これは、ある写真週刊誌がスクープした一枚だ。もう説明の必要はあるまい。こつちが長期政権の民自党を追いつ落とした連立政権の中心党・進取党特別顧問の大沢八郎、そして隣がエズラ・ボーゲルだ」

「なに、あの進取党がCIAと……」
「取り乱すな。こんなもの、まだ何の根拠にもならないだろう。あの本の著者との記念写真だといわれればそれまでのことだ。」

だが、おまえはこの状況を放っておけるか。おけないだろう」

「……………」

「だから電話した。篠山とCIA、大沢八郎とCIA、このつながりの裏になにがあるのか、それを追ってみる必要があるだろう。違うか」

「つまり、おかしくなった篠山の発言の根拠を見つけよう、裏を取ろう、というわけか」

「もちろん空振りかも知れない。だからおまえしか誘えない。そうだろう」
確かに堀田の言うとおりだ。

磯崎は考える。

「わたしはこんな事態に直面して、知らぬ振りができるほど姑息ではない。世間ズレもしていない。そしてまた、わたしもたったこれだけの根拠をもとに、この件で誰かを誘うとしたら堀田ぐらいしか考えつかない」

CIAとはいってもなく、非合法の工作活動を行うアメリカの秘密諜報機関である。その国にとっては国を守る英雄であつても、工作の対象となる相手国にとつてはそうはいかない。危険であるばかりではなく、その姿が見えないだけに厄介な警戒を要する存在であるのだ。

したがって、CIAは高度なテクニクを用いて身分を秘匿しなければならないし、日本人がそのエージェントであるとか友人であるということはそれだけで周囲から警戒されざるを得ない。彼を通し

て貴重な情報がCIAに流れてしまい、日本の、あるいは自分が関係している企業や団体の損失になるかもしれないからである。

つまり、われわれ日本人にとって、CIAに友人がいるということだけでも秘匿すべき事実なのである。なにかの確証を握り、それを手がかりに取材をするのではない限り、裏を取ることに困難なテーマであるのは火を見るよりも明らかなことなのだ。

しかし、われわれにはことの成否や利害損得を超えて、個人的興味や社会的意義のあるテーマには喜んで喰らいつくジャーナリスト精神が殊のほか、旺盛なのだ。そのことを互いによく知り尽くしている。

しかも磯崎たちの場合、彼らの過去のグループワークが、彼らの思いとは異なつた形で利用された可能性を抱えている。そうした利用のされ方は避けられないことではあるのだが、その利用者が赤の他

注意が必要だ」

「携帯に電話をくれたのもそのためか」

「その通り。ま、気休めに過ぎないかもしれないが、いまのところ、デジタル通信のほうが安全性は高い」

「盗聴されにくい、ということか」

「そういうことだ。信号にスクランブルがかかっている、すぐには解読できない。もちろん、俺たちが実際に動き出して、マークされていたら、安心はできんがな」

「マークされていないなら、回線電話でもいいんじゃないのか」

「そうかもしれない。が、これは念には念を入れろ、という警告さ。甘い発想では危ないぞ、というメッセージを伝えたかった」

「そうか、わかった。今後は念のため、われわれの連絡も携帯ですとしよう」

「違う。それではだめだ。細かな情報交換は通信を使わず、直接会ったときにする。その時の場所を決めておこう。そのひとつがこの喫茶店だ。会うのはこうし

た場所だけ。互いの自宅や事務所は使わない」

堀田は磯崎の予想以上の慎重さで、ことに臨もうとしている。

「堀田の関心は篠山の動向そのものではなく、直接CIAにあるらしい。だが、わたしたちはいったいそれをどうやって調べたらいいというのか」

さまざまな取材ルートが頭に浮かんで消える。多くの障害があつて、ルートが寸断されてしまうのだ。磯崎は一人、途方にくれていた。

そんな磯崎の戸惑いをおもしろそうに窺いながら、堀田が口を開く。

「知っているか。やつは進取党の隠れ顧問でもあるらしい」

「なに、ほんとうか。それじゃあ図式はほぼできあがっているんだな。篠山と大沢八郎はグルか」

「かもな。けれど、事はそう簡単にはいかないんだ。やつが進取党の顧問に納まったのは大沢とのつながりが縁だから

人ではなく、グループのリーダーであつたとすれば、それがどのように利用されたのかを把握しておきたい、と考えるのはごく自然なことだろう。磯崎はこれもジャーナリストの責任のとり方のひとつだと思っている。

だから磯崎は、堀田に声をかけられたときから、このテーマからは半ば逃れられない運命にあつた。そのことはまた堀田も同様であつたろう。

「空振りかも知れない、か。確かにそうだな。何も出なかったとき、われわれは膨大な時間を空費する。でも、それはいい。そんな仕事には慣れっこだ。そうではなく、出したバットにたまたまボールがヒットして、場外ホームランでもかっ飛ばしてしまつたらどうなるんだ。そっちのほうに危なくはないのか」

「そりゃあ危ない。まして、当たったボールがホームランになっていることに気がつかない場合はそれこそ危険極まりない。だからバットを振るときには細心の

ではない。刷新の会の代表・岩槻鉄人との人脈だ」

「あの石見市長の岩槻か」

「そう。岩槻がアメリカ・カーグル社の相談役をやっていたとき、篠山はアメリカでやつに会っているらしい」

「そうか。あの取材のときも篠山はアメリカに飛んでいるが、穀物メジャーのカーグルにも取材をしている。確か、本社はシアトルだったよな。でも、取材には裏があった」

「またまた、おまえは結論が早すぎる。そんなことはまだ何もいえない。いま言えるのはこれだけだ。篠山はアメリカで岩槻と知り合い、石見市長選で一肌脱いだ。篠山の生まれは東京だが、親父の郷は石見なんだ」

「それは知らなかった」

「そして、岩槻が政界刷新の会を立ち上げると、そのブレーンに収まった。刷新の会はその後、進取党に合流していくが、その過程で篠山は大沢に接近し、進取党

の隠れ顧問になっていく」

「そうか。これでとりあえずの手がかりはあるわけだな。きみのことだ、進取党とCIAの関係には探りを入れているんだろう。当面、そちらはきみにまかせるとして、ちよつと心当たりがある。石見はわたしが当たってみよう。なぜ岩槻鉄人なのか、何か出てくるかもしれない」

具体的な手がかり、足場が見つければある程度の情報は集まる。選挙なら対立候補からの情報が引き出せるし、島根といわず石見にも、磯崎のネットワークは伸びている。だてに20年もジャーナリストをやってきたわけではないことが、こういうときに証明される。

「よし、当面はそれでいいこう。しばらくはこちらも隠密行動だ。連絡にはくれぐれも注意してくれよな」

「はははっ」

われわれはもうすっかり諜報員気取りだ。危ない、ということがジャーナリスト魂を少しくすぐる。

「じゃあ、わたしから先に引き上げる。きみはもう少しここにいてくれ」

密談をしていたためか夜のような気がしていたが、外はまだ明るかった。予備校生なのだろう。学生の一団が磯崎とすれ違いに、喫茶店に姿を消した。

CIAの謀略 第3章「不審」

水を打ったような湖面に、ゆっくりと日が落ちていく。一面が鈍い金色に照り返り、湖上にあるすべてのものを影絵のように黒く浮き立たせる、宍道湖はこの瞬間が最も美しく、神秘的だ。

磯崎が松江を訪れたのはこれで何度目になるだろう。初めて訪れたときから、磯崎はこの景色が病みつきになり、松江温泉の宍道湖畔にある鄙びた観光食堂で、素魚のてんぷらをいただくのを恒例としている。

松江は年間を通じて雨が多く、いつでもこの景色に出会えるとは限らない

のではあるが、幸いなことに磯崎の場合はまだ一度もはずしたことがない。

「お客さん、東京からですか。今日はついていますよ。この季節、湖がこんなに美しいのは珍しい」

食堂の主人である。磯崎は初めてこの店に立ち寄ったとき、「酒のつまみに」といつてサービスしてくれた「アゴのちくわ」がうれしくて、「以来、ひいきにしている」と、いいかけたがやめにした。この瞬間が惜しいのである。落日に向けてぐい飲みを捧げると、金色の光がかすかにこちら側に回りこんでくる。その輝いた輪郭に唇を当てると、酒の味が二倍にも三倍にも感じられるのである。

「石見の線はわたしが当たりましょう」と言っではみたものの、実際にはこの三ヶ月、何もできることはなかった。通信が危険だとなれば、たとえ周辺取材だとしても電話取材で済ますのは難しい。ましてや、相手の反応がわからない手紙で、うまく用件を伝えることなど不可能

に近い。

何か口実を見つけて会った上で、様子を見ながら切り出すしかないのが隠密取材というものだ。しかしそれをするには、石見の国（島根県）はあまりにも遠かった。

そうして磯崎が手をこまぬいているその間にも、日本をとりまく政治状況は大きな変貌を続けていた。

政権の交代は猫の目のようで、コメ・パニックの一カ月後には、佐川急便事件の責任をとって細川首相が辞任。後をうけて成立した羽田内閣も三ヶ月の短命に終わり、社文党の村山党首を担いだ民自・社文・さきのりの新連立政権が誕生。社文党が日米安保条約の受け入れを表明するとともに、自衛隊やシーレーン防衛を合憲であると表明するなど、これまでの党是を180度転換した。

一方、目をアジア情勢に移してみれば、天安門事件依頼くすぶっていた米中関係が、クリントン大統領の人権問題棚上げ

方針によって、一気に氷解し、COCO M（対共産圏輸出統制委員会）の輸出規制緩和によってアメリカの対中貿易が飛躍的に進展するきっかけをつくった。

北朝鮮の核疑惑についても、核査察の拒否からIAEA脱退、アメリカの報復攻撃という最悪のシナリオへと向かうかに見えた米朝交渉は、一転、軽水炉転換支援と交換に、北朝鮮が査察を受け入れることとなった。この裏には、韓国によるアメリカの北朝鮮攻撃（作戦のコードネームはUSFK5027）を阻止する必死の工作があったのだが、ともあれ、胸をなでおろす和解ムードの空白期が訪れた。

しかし日米関係では、アメリカ政府が一企業の代表と化し、スーパー301条による制裁をちらつかせながら、モトローラの携帯電話仕様を日本でも採用するよう迫るなど、ごり押し政策がいつそう強まり、九四年の九月には自動車、自動車部品、板ガラスなどをめぐる日米新経

済協議（日米包括協議）が開かれるにいたった。

この協議のためワシントンに乗り込んだ河野洋平副総理・外相、橋本竜太郎通産相は、相次いでカンター米通商代表と精力的な交渉を重ねるが、アメリカの強硬な姿勢の前に会談は決裂。これを受けてアメリカ政府は一〇月一日、スーパー301条の発動を宣言した。

むろん日本も、これを不当な経済制裁と受け止め、年明けに発足する予定のWTOに「提訴する」と対抗の意思表示をしたものの、アメリカが301条の対象として指定したのは包括協議の対象外だった紙や木材。事態はもはや冷静な論議の場ではなく、なりふりかまわぬバトルの場と化していた。

そのため、筋を通した日本の外交手法に、あからさまな批判は少なかったものの、今後予想されるアメリカの報復の 에스カレートにたいして、底知れぬ恐怖感を抱く者が多かった。「何か打つ手はなかつ

たのか」という、冷やかな受け止め方である。

そして一〇月八日、われわれにとつて無視できない大きなニュースが飛び込んできた。『ニューヨーク・タイムズ』が「一九五〇年代から六〇年代にかけて、CIAが日本の民自党に数百万ドルの資金援助をしていた」ことをすっぱ抜いたのである。

このレポートはさらにこう続いている。「日米間の貿易摩擦が激しくなり始めた七〇年代初頭以降、CIAは、共産勢力を押さえるための民自党の援助よりも、日本に関する情報収集に重点を移した。七〇年代末から八〇年代初頭に東京で活動したCIA職員によれば、CIAはあらゆる官庁に浸透し、首相側近にも情報提供者がいたとされ、農産物交渉での日本政府の立場を事前につかんでいたという」

これは日本人の誰もが程度予想していたことである。が、ことはこの国の主

権にかかわるゆゆしき問題である。信憑性の高い報道がなされた以上、その中身を追及し、事実を明らかにしなければならない。国際関係上からも日本が主権国家であることを示すためには「やっぱりな」ではすまないのだ。

本来なら五〇～六〇年代に民自党の対抗勢力だった社文党が真っ先に取り上げるべき問題だった。しかし、政権与党として民自党と連立を組んでいる社文党には、本気でこの問題を追及する気配はなかった。報道では、野党に流れた資金もある、という。社文党が動かないのはそのせいだ、との噂も流れた。

民自党も社文党もおなじ穴のムジナ。とすれば、野に下った進取党にとっては、連立与党、既成政党批判の絶好のチャンスが訪れたといえるだろう。ましてや、ことあるごとに主権国家としての「ふつうの国」を目指す、と発言する大沢にとつては看過し得ない問題でなければならなかった。

ところが、この国を挙げての大問題に対して、進取党もまた一向に動こうとはしないのだ。おざなりな質問や批判を口にするだけで、真相究明などする気はまったく窺えなかった。

さらにこのレポートで、CIA担当窓口として実名を挙げられた後藤田正春は、当初、マスコミの取材に対して「あくまでも党の担当として」と答えていたが、後に前言を翻し、一切の関与を否定している。この対応にも納得できないものが残った。

磯崎と堀田とは、早速この問題で秘密会議を開いた。

「進取党は今後、どう出るんだろう」

「おそらく、これ以上動くまい」

「進取党にCIAは叩けない、というわけか」

「そうなんだろう。党の中核はもともと民自党の出身で、おなじ脛に傷を持っている。これはおまえの担当だが、刷新の会の岩槻だってCIAを叩く側には回ら

んだろう」

「それはそうです。しかし、新党日本の連中はどうです。ここで動かなければ、彼らの存在意義はなくなる」

「さて、かれらだってCIAの対日工作と無縁であるのかどうか」

「さきのりはどうだろう。彼らも民自党出身ということですか」

「それもある。が、それだけではない。代表の竹村義正が、なぜかこの五月にアメリカのCIA本部を訪ねている」

「ラングレーを、ですか」

「そう。彼のほうからたつてのお願いをして、ウールジー長官に面会した。会談というより事情説明、もつとありていに言えば命乞いだったと、俺はにらんでいる」

「五月ということは羽田政権、さきぶれはもう連立を降りているとき、ということですね。で、いったい何の命乞いなんですか」

「簡単に言えばこうだろう。この先、私

が首班に選ばれるような事態になっても妨害はしないでくれ、引きずり下ろさないでくれ、と、そういうことだ」

「つまり竹村には首班に選ばれる芽があった」

「が、その芽をつぶす力がCIAにはある。少なくとも竹村はそう信じていた」
「なるほど。で、竹村は何を恐れていたんです」

「北朝鮮だよ。竹村は北朝鮮とアメリカがこんなにも険悪になるとは予想していなかった。だから北朝鮮とのパイプを太くするため、金丸訪朝団とともに動いた。まあ、彼流の東アジア安定策なんだろう」

「国盗りの切り札にしようとも考えていたのかな。ところが、それではCIAに睨まれる、首班になるには足かせになる。そう思い直したというわけですか。しかし、そのためにわざわざバージニア州のラングレーまで行くとなるとこれはただ事ではないですね。日本の首相にな

るためにはアメリカのお墨付きが必要だ、といっているみたいなものですからね。資金援助の追及どころの騒ぎではない」

「少なくとも竹村はそう考えたということだ」

「・・・・・・」

磯崎は一瞬、堀田の言葉が理解できずに戸惑った。磯崎の理解では、日本の首班候補の多くがアメリカ詣でを当然のように考える、と思っていたからだ。

「竹村は何かを知っていたんじゃないか。だから自分が首班候補にでもなれば、たちどころに総攻撃を喰らう恐れがある」

「進取党ですか」

「そう。ほんの少し前まで、さきふれも進取党と連立を組んでいた。その進取党がC I Aと強い協力関係にあったとしたら、竹村がそれに気づいてもおかしくはない」

「進取党と連立を組んだままで首班を狙うなら問題はないけれど、これは竹村嫌

いの大沢が許さない。かといって連立を解消してみても、C I Aに誤解されたままではうまくない。このままではC I Aと組んだ大沢に足元をすくわれる。事情説明に馳せ参じなけりゃならん、ということですか」

「私は別に、東アジアの安定を考えて行動したにすぎません。北朝鮮の核開発に手を差し伸べようとか、アメリカのアジア戦略に水を注そうという魂胆があったわけではないんです。誤解があったらどうかお許しください、というわけさ」

「それにしてもその命乞いをアメリカ政府に行うならまだしも、C I Aにするというんだから驚きですね。ウルジーC I A長官も内心、さぞ鼻高々だったことでしょうね」

「いうまでもないことだが、ホワイトハウスのC I Aとはイコールではない。ある種の緊張関係を抱えた二重権力状態だといっても差し支えない。そして、竹村の立場からすれば恐ろしいのはアメリカ

政府よりもC I A、この判断は間違っていない。いずれにせよ彼の行動はおれたちの仮説Ⅱ進取党C I A説を裏付けるものであって、裏切るものではない」

そうなのだ。C I Aは大統領に直属した諜報機関であって、その行動は予算や人事（長官だけは大統領が任命する）を含め、議会から完全に独立している。監視を受けないのだ。確かに大統領によって統制を受けるが、それはたてまえであって、大統領のほうが選挙情報を握られてC I Aにコントロールされることも少なくはない。

「戦後外交裏面史を研究している佐久間に言わせると、この二重権力状態はもつと奥が深い。彼によればC I Aを実質的に動かしているのはアメリカ国民ではなく、国際資本なのだそうだ。だから場合によってはアメリカ国民の利益に反する行動をとることもありうる」

堀田は、元取材プロ・シンクのメンバーであった歴史研究家の佐久間剛に、

『ニューヨーク・タイムズ』の件で意見を求めたという。

佐久間は『ニューヨーク・タイムズ』を操る黒幕も、CIAを動かしている国際資本とおなじ勢力で、『ニューヨーク・タイムズ』は重要な場面ではよくCIAの代弁者になる」という。

そして「今回のすっぱぬきも間違いない、CIAと示し合わせた上でのリークだろう」というのだそうである。

が、わからないのはその狙いである。民自党とCIAとの癒着をいま暴くことで、CIAにはいったいどんな利益があるというのだろうか。佐久間も堀田も、これについての明確な答えは出せなかったようだ。

「この報道の背後には、俺たちがまだ気づいていないファクターが潜んでいるに違いない。それを明らかにするためにも、地を這う取材が必要だ。篠山とCIAと進取党、おれたちの着眼点は悪くない」

堀田はそれでも満足そうな笑みを浮か

べた。

日が落ちて、夕焼け雲の反射だろうか、宍道湖の湖面がわずかなオレンジの残照を湛えて揺らめいている。何かの舟が、櫂の音を忍ばせて湖面を滑る。網打ちに出るところなのかもしれない。

中海の干拓事業が進めば、やがてこの宍道湖も死の海になるといわれていた。少なくとも、重要な産品であるシジミは絶滅し、名産の素魚も半減する。「そうなれば二度とこの食堂で素魚のてんぷらに舌鼓を打つこともなかったろうな」

磯崎はあらためて箸先のてんぷらに目をやった。

だが、状況は一変した。政界の混乱は、島根を足場にする民自党のドン、武下昇元首相の再登場を期待させる雰囲気を生み出した。虎視眈々、折りあらば、の状況が生まれたのである。

首相に「元」がついてからの武下は、ふるさと創生とブラジル・サミット、つ

まりは地方分権と環境保護を二枚看板に存在をアピールしていた。だから、彼が首相として再登場するためには、ふるさとの環境を守っておく必要があったのである。

国民はなお、鮎の俎上を阻む長良川河口堰の強引な運用開始を覚えている。政府の論理は、生態系を無視した旧式なもので、疑問を投げかける新しい研究を前に完全に破綻していた。強引な運用は生態系に対する暴力と化したのである。

少なくとも、いかに政界のドンといえども地元環境保護運動を圧殺して、首相の座を狙うことは許されない状況が生まれつつあった。

こうして、中海の干拓は急速にブレーキがかかったのだ。もちろんその裏には地元の環境団体の長年にわたる地道な活動があった。それが干拓事業を遅らせ、簡単にはひねり潰せない対抗勢力としての存在感を作り出していた。

「松江に行ってくれませんか。中海の干

拓断念の見通しと背景を探ってきてほしい」

K誌の編集長がじきじきに磯崎に取材を依頼してきた。なぜ磯崎なのか、彼が持つ島根とのパイプを知った上での依頼なのか。それとも行き当たりばつたりの取材力を期待してのことなのか。こまごまとしたことを考えるには及ばなかった。磯崎にとつては渡りに舟、ただそれだけのことである。

おそらく、自費でもやって来ることになったろう。でも、仕事でくることができるのはいろんな意味でありがたい。CIAを口に出さなくとも、この地の多くのキー・パーソンに出会うことができるからだ。

実際、こうして磯崎はいま、松江にいます。そして、中海干拓中止をめぐる政治的背景の取材を口実にしながら多くの人に会い、すでにCIAに関する有力な情報を手に入れている。

ここは「国引き神話」を持つほど朝鮮

半島に近く、隠岐島や韓国との間で領有を争っている竹島（独島）の玄関口に当たる。隠岐、竹島、ウルルン島（鬱陵島）と辿れば北朝鮮にも近い要衝の地なのだ。日本一の水揚げ量を誇る境港にも、漁船を通じて韓国や北朝鮮の情報が数多く飛び込んでくるという。

それらの情報はもちろん日本の外事警察や内閣情報調査室の係官などが収集に当たっているのだが、彼らに混じって、CIAのエージェントらしき者も暗躍している、というのだ。CIAが直接松江に関心を持つているとは考えてもみなかった磯崎にとつて、これは新鮮な驚きだった。

CIAは境港にはいる漁船に対して、北朝鮮の港湾の海水採取を依頼していたこともあるという。水の分析から港湾に注ぐ河川の上流部に化学兵器工場があるかどうかを調べたのである。

もし岩槻鉄人がCIAと結んだ人物であるとするなら、なぜ彼は石見市長に

なったのか。なぜもつと、それにふさわしい都市を狙わなかったのか。磯崎が抱えていた最大の疑問がこれだった。が、これはどうやら、解けたようだ。島根という土地が持つ特性を、もつと考えてみればよかったのである。

日はとつぷりと暮れ、宍道湖もただ対岸の松江市内の明かりを逆さに映すだけとなった。時計もすでに六時半を回っている。約束の七時にはまだ間があつたが、磯崎は一足先に、約束のホテルに移ることにした。

ホテルといっても、レストランや喫茶店、それにカラオケバーが同居する、一種の雑居ビルといったほうが似合うだろう。入り口の植え込みを飾る極彩色の豆電球がひどく軽薄で、昔流行った「電飾マン」を思い出す。

ラウンジはただっ広くて薄暗く、客の姿はまったく見えない。なるほど、ここなら話がしやすいと思う。電話による手短なアポイントだったにもかかわらず

ず、松永は旧交を温めるだけの儀礼的な訪問ではないことをよく理解してくれていた。

松永正紘、地元『山陰新報』の記者をしているが、以前は東京の通信社に勤めていた。磯崎とはそのときからのつきあいである。彼が松江に帰ったのは、父の跡を継いで政界に進出するためだったが、定数削減で島根が民自党王国になってしまつて、果たせず、『山陰新報』で健筆を揮うにいたっている。

「地を這う取材」とはややニュアンスが異なるが、人脈を駆使して、ターゲットを追い詰める、好奇心と突撃精神にあふれた生粋のジャーナリストである。彼が東京にいたら、磯崎は迷わず、彼を仲間に取り入れたことだろう。

CIAの対日工作を追う、というのは、それこそ彼にうってつけのテーマだ。磯崎はそのとき、彼がよく戦後日本におけるCIAの謀略について語っていたことを思い出した。「松川事件」「下山事件」

「三鷹事件」……。そして「帝銀事件」にもCIAが関与している、と力説していた。できすぎた期待ではあるが、そのとき磯崎の脳裏には「ひよつとして彼は、CIAの研究者なのかもしれない」との、思いが掠めたほどである。

東京では時間にルーズな男という印象があつたが、この日、松永は午後七時きつかりに現れた。

「いやあ、よくきてくれたな。二年ぶりだろ、いや、三年ぶりか」

前回会つたのも、この松江である。やはりこのホテルに近い松江城の裏手の店でいっぱいやつた。あれからもう三年の歳月が流れている。

「さて、要件は手短に済ませて、飲みにしようや」

彼はラウンジのソファにどつかと腰を据えると、茶封筒を投げてよこした。

「おまえがほしい資料はこれだろう」

松永には電話では何もしゃべっていない。それなのにこの早手回しはなんだろう。

う。目を丸くしながら封筒の資料を引き出す。ラウンジの明かりが薄暗くてよく読めない。ようやく磯崎の目が慣れてきて、何の資料かが判読できた。

驚きである。これはこれで、貴重な資料であつた。磯崎の表向きの来訪が中海干拓の中止問題であることを彼は勝手に察知していた。だが、中海問題なら、アポをとるとき、電話でそう伝えていたはずだ。隠し事は無用であろう。

だが、これは磯崎の勝手な判断だつた。松永は磯崎が来訪の目的を明確にしなかったため、表面的なデータではなく秘密を要するような情報がほしい、と受け取つた。そして、これが、その情報なのであつた。

資料には武下元首相の腰巾着のように寄り添う地元・土建業者の存在とその行動、彼と島根県知事、松江市長とのつながり、民自党国会議員や県議、市議のネットワークがあますところなくフォローアップされていた。

要するに、中海干拓をめぐる利権構造の全貌である。「ふるさと創生」の、生臭い実態である。

持つべきものは友である。これほどの極秘資料を、こんなに簡単に渡してくれる。これも松永がこの使い方について、磯崎を絶対的に信頼してくれていればこそ、のことなのである。

これがあれば、武下再登板か中海干拓のどちらかは潰せる。磯崎はそう直感した。中海の干拓見直しにわかに現実味を帯びてきた裏には、こうした背景があったのだ。

磯崎は思わぬ拾い物に深く深く感謝した。茶封筒に向かつて、二礼、三礼してみせたのである。

「さすがは松さんだ。これでわたしの表向きの仕事は完璧ですよ、ありがとう。ほんとうに助かった」

「表向きの仕事だつて、何か裏があるのか」

「そう。残念ながら、まだ飲みには出ら

れない」

「じゃあ、その、裏の話とやらを聞こうじゃないか」

「松さんは昔、CIAに詳しかったですよね」

「CIA……、ああ、興味は持っていた」

「単刀直入に言いまししょう。わたしはCIAと岩槻鉄人との関係を調べにきたんです。もつといえ、その両者の関係に、評論家の篠山啓志がどう絡んでいるのかを調べにきた。というのも、ひょっとしたらわたし自身が彼のデータマンとして、CIAに協力させられていたかもしれないからなんです」

「つまりなにか、ライターとしてのおまえの面子がかかっているということか」

「そう取ってもらつてもかまわない。面子はともかくとして、決着はつけておきたい」

「中途半端にしておくのはいやだということか。昔のことなのに、おまえらしい

な。けれど、石見市長について、俺はそれほど詳しくはない。事前に言ってくれば打つ手はあったと思うがな」

「申し訳ない。電話ではまずいと思った」
「うむ、それが正解だろうな。確かに、岩槻鉄人がCIAのエージェントではないか、という噂はいくつかある。元々、外国企業の重役だからな。そんな噂が立つてもおかしくはない」

「たとえば」

「彼には初めから、石見のために市長として何かをしようとする意欲が窺えない。ある種、アメリカ型リベリズムのショーウィンドウ、実験ブースとしてテナントを借りた。それが石見ではないか、ということだ」

「つまり、石見でなくてもよかった」

「それは間違いない。石見はただ、テナントとして適当な大きさだっただけだろう。これにまつわる噂はいくつかある。資料を後で送ろう。郵便物の開封などお手のものだろうから、安全な送り先を教

えてくれ」

「ありがたい」

「ただ、おれとしては岩槻にちよつと違つた関心を抱いている。彼が何者なのか、どうも読めない」

「……………」

「地方分権を、おまえはどう考える」

「必要なことじゃあないですか。積極的に進めるべきだ。もちろん弊害を抑える工夫も考えなければならぬでしょうけどね」

「まあそれが、平均的な受け止め方だろう。模範解答といつてもいい。だがな、おれのように地方にいたるとな、これがけつこう怖い。地域ボスが利権を独占して、チェックが効かない。そんな弊害だらけの分権になる可能性だって大きい」

「だからチェックは必要です」

「誰がチェックするというんだ。地方議会か、国会か、それとも自治省か」

「自治省ではまずいということですか」

「そうだ。これまで、地方を牛耳ってい

たのは自治省だ。知事を含め、地方の首長は自治省の天下り先になってきた。それを通して自治省の地方支配が図られてきたわけだ。この支配に風穴を開けたのが民自党の田中派なんだ。列島改造という土建政治の登場だよ」

「地方利権の独占ですか。中海もそうだな、というんですね」

「そう。田中派は建設省とか農水省などと結びついて、自治省の牙城である地方首長を奪い始めた。熊本県知事に田中中学校の細川が送り込まれたのがその典型だ。地方分権はまず、彼らの声として挙がつてきた」

「……………」

「この地方に則していえば、隣の鳥取県は戦後一貫して内務官僚、自治官僚の王国だ。そして、その触手は島根にも伸びていた。ところが一九七一年、七五年と、県を二分する知事選が行われ、七五年、ついに内務官僚の山野が敗退。以後、島根県政は完全に武下・田中派の手に落ち

た。その背後にいたのが石見の山林地主・田部井家だ」

「自治省のライバルが田中派だというのはわかります。田中派叩きの結果、金丸真の腰巾着だった山梨県知事がやられた。その結果、金丸自身も政治力を失った。田中派も分裂した。自治省は警察庁を通じて警察力を持っていますからね」

「つまり、民自党と進取党に分かれてしまった田中派は、自治省にとつても目の敵にするような敵ではない、ということだ。むしろ彼らの分権論を後押しし、チェック役としての権限を手に入れたほうが得策と読んだ」

「むずかしい。本当にそうですか」

「あくまでも仮説だ。が、おれの関心というのはそのパワーバランスのど真ん中に、岩槻が降りてきた、ということだ。石見市は田部井家の本拠地。武下丸抱えの市長が立つてもおかしくはない土地柄だ。ところが岩槻は田中派大沢グループの新党結成の動きに呼応しつつも距離を

おき、一方で着実に、自治省のお先棒を担いでいる。これは田部井がそれを認めている、ということの意味する」

「お先棒を担いでいる、というのは」

「彼の政策の目玉は自治省受け売りの住民カードシステムだ。彼は新党の具体的な政策立案の中でも、国民カードの導入を叫んでいる。これを自治省と田中派新党グループの手打ちとみることもできる。田部井のような地方名族にとつても、両者の手打ちは歓迎すべきことだろう。つまりは自治省の手の内での地方分権ということだ」

「国民カードの導入か。プライバシーに問題のある、健康カードというやつですね」

「厚生省のシステムとは違う。自治省が盛んに進めようとしているシステムだ。石見はそのシステムの実験場になろうとしている」

「うーむ、岩槻はCIAのエージェントであるというよりも、自治省のエージェ

ントなんですか」

「なんだ、がっかりしたようだな。お気の毒に。でも、俺はうきうきしている。というのみな、考えてみると自治省のエージェントとCIAのエージェントとは矛盾しないんだよ。俺はいま、その整理で頭がいっぱいだ。いいだろう。場所を替えて、昔の話をしよう。いい店がある」

「待つてくれ。篠山はどうなんです」

「篠山は今でこそ、あちこちでちやほやされているが、まったくの無名だった。石見には看板も地盤もあつたわけではない。やつの親父が石見空港の誘致に動いたというが、それも選挙用にこしらえたアドバルーンだろう。だから、俺はむしろ、東京で何があつたのかを知りたい。何でやつは東京で急速に名を上げたのか」

「石見に行っても無駄ですか」

「そんなことはないだろう。でも誰に会う」

「市職の北村という男です」

「自治職労か、大丈夫だろうな。下手をするとは筒抜けになるぞ。地方では自治職労も自治省も違わないところが少なくない。それよりもこいつに会うといい。『山陰新報』の石見通信員だ。若いが頼りになる」

「そういうと松永はメモ書きの入った名刺を渡してくれた。」

「ちょうどいい。この書き込みは岩槻の政策事務所の住所だ。その女性秘書が東京の篠山との連絡役だ、といわれている。下世話な話だが、なかなかの別嬪で、岩槻と篠山、どっちの女か、というのがおれたち地方紙記者のもっぱらの関心事さ。おまえも拝んでいくといい」

磯崎たちの車は松江で一番の繁華街に入った。宍道湖と中海とをつなぐ運河のようにくびれた部分、その北側に繁華街が形成されている。煌煌と明かりを照らしたメノウ細工の店の前で、彼らはタク

シーを降りた。そうして、そこから一本わき道に逸れると、もうそこは深閑とした闇の世界だった。

「東京と違って松江は狭いからな、こうした隠れ家も必要なんだ」

そういつて案内された裏町の小料理屋は、いかにも隠れ家というにふさわしいたたずまいを持っていた。松永が暖簾をくぐると、女将が磯崎をみとめ、松永に目で合図を送る。松永もそれに目で応える。何かの対話が成立し、二人は誰もいない二階に通された。

「さあ、ここなら何を話しても大丈夫だ。酔払ってもかまわんぞ」

それはもう、酔うまで飲みたいという松永の意思表示に他ならなかった。宍道湖のこまやかな味わいとは違う、境港で水揚げされた豪快な魚介類が続々と登場した。松永は、やたらとご機嫌になっている。

「知つてのとおり自治省の前身は内務省だ。内務省は警保局に特高（特別高等警

察）を抱えていたばかりではなく、地方局に大政翼賛会を組織させ、国民を戦争に駆り立てた。つまり占領軍にとつて、絶大な権力をもった戦犯だったわけだ」

「だからGHQによつて解体され、警保局が自治体警察に、地方局が自治庁になった。現在の警察庁と自治省というわけですね」

「当初、GHQは内務省の解体に熱心だった。だから目の敵にされた特高警察官など、どこにも行く当てがなかった。それどころか、いつ、戦犯として引つ立てられるかもしれない恐怖の中にいた。

だが、こうした事態の出現はGHQの総意ではなかった。これも有名な話だが、GHQには二つの路線があった。GS（民生局）とG2（軍・参謀第二部）の対立だ」

「GSは日本の民主化を追及し、旧軍の解体から、財閥の解体を目指したんですね。一方、G2は日米両国の財閥と結び、日本を反共の砦とするために再軍備を目指した。」

民生局長のホイットニーとウィーロビー少将との対決だったかな」

「話が早いな、さすがはおまえだ」

「いやいや、これはわたしたち文屋の基礎知識でしょう。当初優勢だったGSは、中国共産党の伸張などにつれてG2に圧倒されていく。日本を反共の防波堤に、とか、日本を反共の工場に、といった主張が勝ちを占めていく。その過程で、財閥解体をすすめたマッカーサーの解任劇が起きるんですね」

「さて、そうしたゆり戻しの過程で、内務省内に何が起こったか、だ。解体された内務省はその復権、再建を目指す、GHQを恨んではいけない。正確に言えば、G2に感謝している」

「というところ」

「特高警察の多くが、彼らの諜報機関に雇われ、ソ連や中国、朝鮮の情報収集に活用されたからだ。彼らの一部はその後、CIAのエージェントとして働くことになる。」

余談だが内務省職員の再雇用に駆け回った職員組合の委員長がほかでもない、あの後藤田正春さ。

同時にまたG2は、特高の再就職口として、法務庁の中に特別審査局を用意した。これが現在の公調（公安調査庁）だ。つまり公調は創設当初から日本周辺の共產主義の動きを、アメリカのために調査・報告する機関だった」

「そうだったんですか。で、それは今でも続いているんですか」

「続いている。もちろん現在では、同盟国間の非公式な相互情報交換という形をとっているがね。この関係はそれほど露骨ではないがCIAと警察庁、CIAと内調（内閣情報調査室）にもある。ICPO（国際刑事警察機構）とか、刑事犯の相互引渡し条約とかいう公式の協力関係に加えて、たくさんの非公式な関係が成り立っている」

「たとえば」

「たとえばそうだなあ、警察庁の諜報要

員はCIAで訓練を受けている」

「えっ、そんなばかな」

「ばかな、じゃあない。現実だ。毎年全国 の県警から、若手諜報要員が、ラングレーのCIA本部に送り込まれている」

「なんということだ。われわれは穴の毛まで抜かれてしまっているわけか。これじゃあ、CIAが日本をスパイしているとしても、まともに抗議できないわけですね」

「まあ、占領政策というのはそうしたものさ。アメリカは日本を反共の砦として育てながらも、アメリカをしのぐ力をつけさせないよう、手綱をつけるのを忘れなかった。自衛隊と警察はその優等生として育ってきたんだ」

「そうでなければ叩かれていたわけですか。警察だって、いまだに自治体警察のままだったかもしれませんね。ともあれ、そこまではわかりました。でも、それは主に警保局の問題でしょう。地方局はどうなんです。CIAのエージェントと自

治省のエージェントとが、どうして矛盾しないんですか」

「うむ、どう言えばいいのか、まだ整理はできない。なにしろさつき降って沸いた発想なんだからな、そう焦らすな」

「別に焦らすつもりはないさ」

「こういおう。GSはすでに、戦後日本を作り、スタートさせてしまった。G2がその修正を図ったが、それはあくまでも修正にほかならない。内務省は解体され、もう、戦前のような巨大権力は持たなくなっていた。いや、こう言い換えよう。すでに自治省を巨大権力に戻さない装置が稼働していた」

「それはなんなんです」

「大蔵省さ。予算編成権を手中にするこ

とで、戦前、省の中の省だった内務省に代わり、戦後、この地位についたのが大蔵省だ。この国のグランドデザインを描く実権が内務省から大蔵省に移行した。この権限を大蔵省が簡単に手放すわけがない」

「たしかに、自治省がいくら内務省に帰りたいと思っても、大蔵省が予算措置を講じなければ不可能なことはよくわかります」

「つまり、戦後の省庁の権力構造は、自治省の野望を大蔵省が抑える、という形で維持されてきたといえる。思い出してみろ。自衛隊の肥大化だって、これ食い止めてきた確かな力は平和勢力というよりも、大蔵省が引いた予算の1パーセント枠だった」

「なるほど、大蔵省がGSにかわり、G2の跳ね上がりにより一定の箍をはめてきた、ということですか」

「もちろんそれは、大蔵省が平和勢力であるとか、リベラルであるとかを意味してはいない。政府内でそうした位置に立つことが権力の源泉だからこそ、その立場を大切にしてきたまじだろ」

「なるほど、読めた。その大蔵省がいま、CIAにとつても邪魔になっている、ということですか。確かに大蔵省はいま、

日本経済の閉鎖性や官僚主義の典型のようになつて、叩かれてる。この二月の日米協議でクリントンは大沢に、共通の敵は日本の役人だとまで言ったそうだが、あれも主要に大蔵官僚をさした発言だったのかもしれない。とすると、大蔵省や通産省とは違い、自治省にとつてアメリカのジャパンバッシングは追い風なのかもしれないね」

「少なくとも直接痛みは感じていない。自治省はいま盛んに官僚主義批判をやっているよ。まるで、自分たちは官僚ではないかのようにね」

「CIAと自治省は、大蔵省という共通の敵を見出したんですね」

「そういう仮説も立てられる、ということだ。行政改革、省庁再編の嵐の中、今、中央省庁でなにが起きているか。一口で言えば自治省と大蔵省のつづしあいさ。自治省が解体されるか、大蔵省が二分割されるか。もっともこれは他人の受け売りだ。詳しいことは『共合通信』の春田

に聞くといい。おれの昔の同僚だよ。いまでも仲がいい」

「わかった。東京に戻ったらさっそく会ってみますよ」

「ひとつ念を押しておく。岩槻が導入を計画している市民カードは自治省のものだ。厚生省が主導する基礎年金番号と福祉カード、このバックには大蔵省がついている。このカードをめぐるでも、自治省と大蔵省は主導権を争っている。大蔵・厚生連合と言えはいかな。厚生省も来年の1月からモデル都市を設定して実験を始めるらしい。兵庫県の芦屋と尼崎だそう」

「どっちが優勢なんですか」

「大蔵・厚生連合が先行していた。が、石見の実験のおかげで、いまは五分五分。だから岩槻鉄人の存在は大きいわけだ。この勝負はおそらく、自治省・大蔵省戦争の行方を占う鍵になる」

目覚めがよかったものだから、早めに

チェックアウトを済ませ、磯崎は一畑電鉄の待合室に向かった。松江温泉を始発駅に、宍道湖沿いに島根半島を出雲まで行くローカルな私鉄である。

ゆっくり行くので、松江駅に出てJRを使うよりも遥かに時間がかかる。しかし、この鉄道には磯崎にしかわからない愛着があるのである。

それというのも、ここを走る電車のすべてが東京の西武鉄道の払い下げで、磯崎がよく利用していたものなのである。中には彼が幼いころ、窓辺にしがみついて景色を眺めた、鉦打ちだらけの旧型車両まであって、けなげにも現役で働いていたからなのである。

彼の当時の電車好きときたら、そんなじょそこらのものとはわけが違っていただろう。それは磯崎が高校生になってからも鉄道研究部に所属していたことから窺い知れる。その彼の前に、三五年の歳月を隔てて、なつかしの鉦打ち電車が姿をあらわした。磯崎が狂喜したのも無理は

なからうというものだ。

彼はすっかり昔に戻って、運転席の後ろに陣取り、開けてくる出雲の風景を堪能したのであった。あのときから三年、引込み線に、あの鉦打ち電車はまだ確かにあった。いまも現役であるのかどうか定かではないが、磯崎はゆっくり休息して、生き長らえてほしいと思う。

磯崎はまだほとんど乗客のいない早朝の一畑電鉄で、出雲に向かった。この車両も鉦打ち電車の二代後ぐらいの後継車両で、時代を感じさせるすばらしいものである。が、さすがにもう、運転席の後ろに陣取る気は起こらない。

出雲から石見へ、JRとタクシーを乗り継いで市庁舎に着いたときはもう午後一時を回っていた。松永の忠告はあったが、約束である。磯崎はまず、石見市職の北村という男に会ってみることにした。市役所分室の組合事務所を訪れると、北村はすぐに現れた。ニコニコと愛想はいが、どこかで疑っているところがある。

それはもつともなことで、人を介して紹介はしてもらったが、こちらの用件は何も伝えていない。磯崎は明らかに、突然現れた怪しい「文屋」なのであった。

「遠くからわざわざどうも。で、ご用件は何でしたっけね。何かお伺いしてましたっけ」

「いや、ちょっと例の件で」

「ああ、市民カードね。いろんなところから視察にきますよ。ほとんどが市町村の担当者。それに比べれば少数だけど、組合も来ますよ。市の担当者に案内させましょうか。この申込書に記入していたければ、すぐにご案内できますよ」

「いや、別に公式見解を聞きにきたわけじゃあないんです。あなたのご意見でけっこうだ」

「私の意見といっても別に……。まずはシステムをご覧になってからのほうがよろしいかと」

何のことはない。けっきよく磯崎も岩槻が自慢の市民カード視察者の一人に力

ウントされてしまった。システム導入の経緯、試験利用状況の説明、そして、カードの製作現場。だまって説明を受けた磯崎はこれでまたまた、岩槻の、そして自治省の株を少しだけ押し上げたことになる。

「いやあ、いろいろいいことばかりを並べていますがね、現場は大変なんですよ。なにしろ仕事が減るところか、二重手間ばかりでしてね」

「組合は反対しているんですか」

「いやあ、もう至上命令みたいなもので、とても反対は言い出せない。市長生命に賭けて取り組んでいるんだ、というわけです」

「周りはどうなんです」

「市長のスタンドプレーでしょ。大向こうをうならせるだけで、みんな、鼻白んできますよ」

「市民の評判はどうなんです」

「よくないですね。大して便利になるわけじゃあないんです。そのくせ、プライ

バシーの不安が大きい。私だってこんなのではない、というのが正直なところですよ。もらった人だって、使うのは最初だけ。それからタンスにしまいこんでおしまいでしょう。やっかいなだけですから」

まあ、北村という男の個人的な意見だから、話半分に割り引くとしても、たいしたシステムではないらしい。それにしては東京でのマスコミの評判が高いのが不思議だ。新し物好きということもあるだろうが、岩槻の、あるいは自治省の力の入れようが見えてくる。

市民全員を対象にした本格稼働は一九九七年度からだ、という。

けっきょく、「夕飯でも」という北村の誘いを断り、CIAについては一言も触れずに市役所を退去した。

もちろん、松永から紹介された『山陰新報』の通信員に会うためである。

留守番電話が自動転送になっているのだろう。磯沼というその男とはすぐに連

絡が取れた。どんな連絡方法をとったのかはわからないが、松永から磯崎訪問のことはすでに伝わっていた。

磯沼は自分でも岩槻がCIA、もしくはより広いアメリカの諜報機関のエージェントではないか、と疑って、調べている、という。そういう中で、ヨーロッパの秘密結社・フリーメーソンのメンバーではないかとの説にも出くわしたそうである。が、いずれも噂の域を出ない、という。

篠山と岩槻の出会いとは間違いなくアメリカのシアトルであり、それ以前に接触があつた様子はない、という。ただし、篠山の父・光之助は地元農協の顔で、家畜飼料の新しい輸入先の開拓に、しばしばアメリカを訪れていたらしい。

市長選では篠山が選対本部長を務めたが、実際の仕切りは宗像という、山陰では見かけない選挙プロがどこからやってきて、地元の運動員をまとめていた、という。運動員らに聞いても、宗像の正

体はわからず、大沢らが手配した人物ではないか、と運動員自身、想像していた程度だそうである。

篠山と岩槻の力関係は、選挙前までは完全に岩槻が上だった、という。ところがその後、関係は徐々に逆転し、最近では東京の篠山に、なにかとお伺いを立てることが増えているようだ、ともいう。

「そのメッセンジャーになつているのが政策事務所の池島という女です。東京へのお伺いが増えてきて、最近ではほとんど事務所に顔を見せることがなくなつたようです」

「松永が言つてた女かな、なんでもすごい美人だという」

「ええ、そうなんです」

「エージェントつて、その女じゃないでしょうね」

「それはスパイ映画の観すぎでしょう。ベッドで秘密を探り出すというのならともかく、メッセンジャーとしては目立ちすぎますよ。いつ、どこで、誰にあつた

か、調べればすぐにばれてしまいます」

「なるほど、たしかにその通りだ。君もなかなかできますね」

「冗談はやめてください。こんなことはだれにでもわかります」

「ああ、こいつは失礼。明日、東京へ帰る前に政策事務所に寄つてみますよ、後援者のような顔をしてね。またくることがあるかもしれない。そのときはよろしく」

「そちらの情報もくださいよ」

「わかつてます」

岩槻政策事務所は市庁舎からそう遠くない静かな一角にあつた。ふらりと立ち寄るにしては人通りの少ないところだ。立ち寄つたところで何か取材できる見込みはない。こちらの足がつくだけに終わるかもしれないのだ。

「まずいぞ」と、そんな思いがちらり磯崎の脳裏を掠めた。こんな場合、彼は建物の前を止まらずにやり過ごし、まず、中の様子を窺う。次に、道路の反対側か

ら道を渡る振りをして、じつくりと中を見通す。幸いこの事務所は二階建てだが、一階の正面はガラス戸になつている。太陽の反射に注意すれば、中は覗ける。

ふらりと立ち寄つても不自然でないかどうか、何を口実にすれば訪問が正当化できるかどうか。これをその瞬間に見極めようというのだ。

「わたしこそ、スパイになつたようだな」と、そんな風に考えると、磯崎はちよつとおかしな気分になつた。

道路を渡り、ガラス戸越しに中を見える。受付らしきところに大きなポスターが張つてあつた。

『石見ふるさと銀山祭り』

「よし、これにしよう。これに協力したがつている後援者、これでいい。そういえば、石見銀山を支配する大久保石見守長安という徳川家康の右腕がいた。これも話題にできるぞ」

ドアに手をかけ、開けようとする瞬間だった。事務所の中からなにかを指示す

る女性の声が響いた。その女にふと目をやった磯崎は、電撃に打たれたように踵を返した。見られただろうか、気づかれただろうか。そんなことはもうどうでもよかった。一刻も早く、この場から立ち去るのが先だったのだ。

「そうだったのか。池島というのは、池島佳苗のことだったのか。昨日はなぜそれに気づかなかったのだろうか。いや、無理もない。もう昔のことだ。佳苗の存在が遠くなっているのも当然だ」

それはもう、十五年以上昔のことになる。篠山と食糧問題でチームを組むよりも前のことだ。篠山はよく、不思議な若い女性を連れていた。ラスベガスのダンサーのように着飾った右翼の少女、男とトラブって家出した新左翼の少女。もともと彼女は親戚の娘だといっていた。そしてこの、池島佳苗。

たしか、出身は北海道。札幌だったような気がする。そこで赴任してきた男に恋をした。いわゆる不倫の恋である。そ

して、彼を追って上京し、一時、同棲したこともあるといっていた。みんなに反対されて、別れたのだという。

上京は、まだ二十歳前だったのではなかったか。その彼女がなぜ篠山と知り合ったのか、磯崎は何も聞かされていない。ともあれ、やや小柄ではあるがプロポジションはすばらしく、息を呑むほどかわいい娘だった。

「お世辞にも文章がうまいとはいえなかったが、頭は切れたなあ。編集の仕事があつという間に覚え、我らライター仲間には重宝がられたものだった」

磯崎はあれこれと昔を振り返った。「そういうえば佳苗には信じがたい特技があつたなあ」

野球である。というよりも、バッティングである。小さい体で、鋭いスイングをし、120キロのスピードボールをやすやすと打ち返す。

当時、新宿で120キロのピッチングマシーンが置いてあるバッティングセン

ターは一軒しかなかったし、ゲージはひとつきりで、いつもたいがい空いていた。こういえば、野球を知らない人でもそれがどれほどすごいものか、想像してもらえよう。

磯崎は110キロが精一杯、120キロはもう、まぐれ当たりの世界になる。そのため彼はもつぱらゲージの外から眺めるばかりなのだった。

バッティングは例の男から習ったという。草野球チームのリーダーで、同棲を始める前、野球の練習を家を開ける口実に使っていた。しかも律儀にも、男はほんとうにバッティングセンターへ行ったらしいのだ。それが彼女の天性を目覚めさせることになった。

「でも、目覚めさせたといっても、彼女のこの才能をいっただけだけの人が知っているのだろうか。才能を発揮する場があつたとは思えない。おそらく、グラウンドで、彼女のこの才能に触れたものは一人もいなかったのではないだろう

か」

磯崎はあらためて妙なことを考えている自分に気づく。

「ああ、気持ちがよかった。すっかり汗をかいたわ。どこかで汗を流していかない」

「ビールでもぐいとやるか」

「いいえ、それよりシャワーがいいわ」

バッティングセンターに初めて寄った、その後であった。磯崎の場合は、これが最初だった。とてもさわやかな、夢のようなセックスだった。

しかし不思議なことに二回、三回と逢瀬を重ねても、関係が深まるという実感があったくないのだ。いつもゼロからの出発であり、そのたびに完結する。なぜそうなるのか、磯崎は「もう少し確かめてみたかった」という思いを、しばらく引きずっていたような気もする。

しかし、その機会は突然失われたのである。初めて会ったときから一年ほどしてからだろうか。彼女はあるレジャー誌

のカメラ取材に同行して、沖縄に出かけた。モデルを連れて、スキンダイビングの写真を撮るために、である。

ところがそれっきり、彼女は戻ってこなかった。石垣島でスキンダイビングのインストラクターになるといつて、現地に定住してしまったのだ。そしてほどなく最後の仕事となったレジャー誌が送られてきた。

グラビアのトップを飾っていたのは連れて行ったモデルではなく、彼女だった。優雅に水中を舞う池島佳苗。天性はバッティング・センスばかりではなかったのだ。彼女はとてつもないやつだ、と思うほかはなかった。

だが、その彼女が、どうして岩槻政策事務所などにいるのだろうか。一五年という歳月が流れている。だからその間に何が起ころうともおかしくはない。とはいうものの、どうにも結び付けようのない現実。奇奇怪怪とはこのことである。

CIA の謀略 第4章 「同志」

「最上階には窓がない」という噂の建物をも、もう一度この目で確認しておこうと、磯崎と堀田は虎ノ門の喫茶店で待ち合わせる。その足でアメリカ大使館に向かった。朝から神戸で大地震があったというニュースで持ちきりの、いやな一日である。

アメリカ大使館は霞ヶ関ビルの前、日本たばこ本社の角を曲がると突き当たり位置する。ベトナム戦争が激しかったころは連日のようにデモ隊が押しかけていた一角で、一九七三年には核マル派の学生たちに占拠されたこともある。

当時の大使館はバルコニーやポーチのある落ち着いた洋館で、多少とも人のぬくもりが感じられた。が、占拠後、建て替えた新館は、飾り気のない人を寄せつけぬ、寒々としたビルである。

「ほら、あれが噂の十二階だよ」

堀田が大使館の最上階を指差す。十一

階までの各階は、各階ごと一直線に連なったガラス窓がはまっている。十一階まで数えるのはとても簡単なのだ。そしてその上に、もう一列ガラス窓をはめるスペースがある。ここが幻の十二階なのである。

正確性を期すなら、大使館の最上階は段違いになっており、半分は一階少ない。ガラスが入っているのは十階までで、窓のない十一階がその上に乗っている部分が半分ある。

その段違いになっている最上階部分の壁が、うつすらとピンク色に輝いて見える。

「あの最上階ぜんぶが日本のCIA本部になっているという。窓があると中の会話が外から読み取られてしまう。音波だけじゃない、電波だって、電磁波だって、部屋の中で発生したあらゆる振動は窓ガラスに影響する」

「だから窓をはめなかったわけだね」

「映画『ダイハード』にも出てくるが、

レーザー光を窓に当てて読み取るドイツ製のすごいやつがあるらしい。読み取れるのを防ぐには窓をつぶすしかないわけだ。もちろん、それだけじゃ安心してきまい。あの壁の中には電磁シールドなどが埋め込まれているはずだ」

以前から、何度も目にしたことのある建物である。が、こうしてあらためて眺めてみると、アメリカという国の、のっぴきならない緊張感というものがひしひしと伝わってくる。

「今年の一月二〇日、ウールジーCIA長官が密かに日本を訪れた。そのとき長官は、細川、羽田、大沢に会っている。

例のエズラ・ボーゲルをお供に連れてね」

「なるほど、竹村が焦るのも無理ないですね。一人おいてけぼりを食ったわけだ」

「CIAによる連立政権に対するてこ入れだろうな。しかし、長官じきじきの訪日には別な狙いもあった」

「なんですか、それは」

「うん、当初はこれがわからず、ロシア

の対外情報庁（SVR）や中国の国家安全部も総力をあげて長官を追跡したらしい。が、けっきよく長官はアメリカ大使館を出なかった」

「CIA本部に詰めていたというわけですね」

「そうなんだ。そして、それが長官来日の真の理由だった」

「というと」

「CIAの機構改革だよ。長官じきじきに指揮をする必要があったのだから、ただ事でないことはわかるだろう。ロシア、中国の諜報員が目を光らせているのを承知の上で、各地のCIA幹部をこの十二階に集めたという」

「危険を冒してまでの非常召集、ってわけですか。それで機構改革とは解せませんね」

「そうだろう。つまり、機構改革に伴う意識改革だったんだ。形式的な機構改革では収まらない、意識改革を要する大規模な機構改革だったってことさ」

「長官はCIA改革の蜜命を帯び、その遂行のための訓示を垂れにきたってわけですか」

「そういうことだ。極言すれば、あの日から駐日のCIA要員は反共軍事諜報機関から対日経済諜報機関に様変わりしたといっている」

「それは別に、今年から始まったことではないんでしょう」

「たしかにな。ソヴィエトの崩壊による冷戦構造の終焉に伴って、反共の軍事諜報機関としての役割が大幅にダウンするとともに、CIAの組織の生き残りをかけた転進が始まったわけだ」

「それがドイツ、フランス、日本など、従来同盟国だった国々の経済情報調査だったわけですよ。そのなかでも、主要な標的とされたのが、貿易摩擦でバッシングの対象となっていた日本だといっている。たしかに当時は日本を叩くためだったからCIAでも何でも使え、そのためなら予算をつぎ込んだって惜しくない

い、という雰囲気がありましたからね」

「ああ、一九九一年にはウールジーCIA長官が日本の経済情報をターゲットにする、と宣言している。しかし、いくら宣言してみても180度の急転回ができない。ロシアの政情も不安定で、保守勢力の巻き返しの可能性もあったし、旧ソヴィエトの周辺からの核拡散の恐れも高かった。組織を根本的に改めるわけにはいかなかったわけだ」

アメリカ大使館の正門に突き当たって、右左、どちらへ行こうか途惑ってしまふ。話に夢中で、打ち合わせていなかったためだ。いかにも怪しい二人に、衛手が怪訝な目を向ける。

人通りはここまでで、この先は右でも左でも歩行者は極めて少ない。そんな場面で怪しい二人が、危ない話をしている。そう思うと磯崎はなぜか可笑しくて、思わずにんまりとしてしまふ。

が、次の瞬間にはそんな自分に冷や水を浴びせるように、写真を撮られてはいな

いか、尾けられてはいないか、と、あたりをこつそりと窺いたくなる磯崎であった。といつても、キヨロキヨロするわけにはいかない。

「で、そのシフトチェンジがいつ起きたかということだが、やっぱり大きいのは九三年のクリントン政権の登場だろう。彼が大統領になるに当たって、民主党系のシンクタンク、アスペン研究所が、一通の報告書をまとめている。タイトルは『ライジング・サンを管理する』、つまりは冷戦後の対日戦略レポートだ」

『ライジング・サン』ですか。太平洋戦争での日本の膨張政策をショッキングな映像で描いたアメリカ映画のタイトルだったかな。いや、対日警戒を促す単行本が原作だったという記憶もある。日本に恐怖心を抱かせるにはもってこいのタイトルですね」

磯崎はむかし観た映画のシーンを思い出した。実写に交じって、南京虐殺の創作映像が挟み込まれていたために、日本

の一部から反発の声が上がった映画である。

「そう、その単行本がたぶん情緒的だとすれば、この対日警戒レポートには情緒のかけらもない。この政治版レポートをまとめたのがジョセフ・ナイという男だ。彼はこの業績によって、クリントン政権下のNIC議長に抜擢された。CIA長官に直属する情報機関で、国家情報会議というのがその正式名称だ。そして、このレポートの協力者がハーバード大学の僚友、エズラ・ボーゲルというわけさ」

「そうすると、ナイ＝ボーゲル路線の採用がCIA、あるいはアメリカのシフトチェンジをもたらした、というわけですか」

「そうともいえる。しかし、佐久間剛に言わせればこのレポートには下敷きがあるのだそう。ソヴィエト崩壊の三年前、すでにこの事態を予想して、冷戦後の世界の問題点をローマクラブが検討している。フリーメーソンとも近い秘密政治ク

ラブさ。

ローマクラブはその中で、儒教＝イスラム勢力と西洋キリスト教勢力との文明の衝突に警告を発し、日本のアメリカ離れ、アジア傾斜、対中接近に大きな警戒感を表明したという。ナイ＝ボーゲルのレポートはこのローマクラブの懸念を詳細に再検討したものといってもいい」

「文明の衝突か。『フォーリン・アフェアーズ』で諸文明の衝突を発表したサミエル・ハッティントンもハーバード大学の教授でしたね。ローマクラブはそれよりも遙か以前に、日本のアジア化、つまりは日本警戒論を展開していたってことになる」

突き当りを右に取ったふたりは、たちまち六本木通りに出た。赤坂ツインタワーや全日空ホテルなど、付近に落ち着ける場所はいくらでもあったのだが、こうして歩きながら話すのが一番安全なような気がして、休む気にはならなかった。といって、もちろん尾けられている気配

があつたわけでもなんでもない。

「フリーメーソンといいローマクラブといい、彼らの世界認識には不気味なものがありますね」

「そうだな。未来分析とか、予見というにとどまらない、彼らの青写真にそって世界を動かす力を備えているところがあ

る」

「こういつてしまうと身も蓋もないんですが、CIAだって国連だって彼らが世界を動かすためのカードの一枚かもしれない」

「そうかもしれない。アメリカという国家もな。けれど、おれたちが迫りうるCIAというのはやっぱりどこまでもアメリカの国家機関のひとつとしてのCIAさ。それを超えたらもうお手上げだ」

スパイとか国際的な陰謀とかを考えていると、どうしても話がおかしなところへ飛んでしまう。空想とは言いい切れないのだが、確たる事実もなく、捉えどころを失うのである。堀田に「CIAを追っ

てみよう」といわれたとき、口には出さなかったものの磯崎が躊躇ったものがこれだった。

堀田もそれを感じたのか、話はすぐに現実的なテーマに戻った。

「シフトチェンジをしたからって、いつも使っていない機械は錆び付いているし、巨大なマシンは先端までオイルが回らない」

「シフトチェンジにしたがって組織をスームスに機能させるための機構改革、意識改革、それが一月のウールジの来日だってわけですね」

「それはもうわかったらう。ところが今回の来日にはもうひとつ、裏がある」

「おやおや、思わせぶりですね。まだ何かあるんですか、だったらそれを先に言ってくださいよ」

「おお、悪かった。ウールジ、ボーゲルのチームは来日する前にバンコクとソウルに立ち寄っている。ここでもCIAの現地要員を前に、シフトチェンジの訓

話を垂れたことは間違いない。ソウルでは北朝鮮の核疑惑に対するアメリカの制裁に関して、踏み込んだ協議をしている」

「あの時期、韓国に立ち寄ったのなら当然そうでしょうね」

「裏というのはその話ではない」

「まったく、いいかげんにしてくださいよ」

「裏というのはあの時、もう一チーム、アジア派遣チームがあつたということさ」

「えつ、ウールジ、ボーゲルのチームとは別ということですか」

「そう。こいつは公式訪問で、ロイド・ベンツェン財務長官とジョセフ・ナイN IC議長がタッグを組んでいる。そしてこのチームは、バンコクでウールジ＝ボーゲルチームと別れ、北京を訪問している。その後、韓国に立ち寄ったといわれるが、これは非公式で、確認は取れていない」

「ナイとボーゲルが、ベンツェンとウー

ルジをエスコートした格好ですか。うむ、これをどう読めばいいんでしょうかねえ」

「そう、まさにそれをどう読むかが問題なんだ」

「CIAの内部問題を越えた何か、東アジア全体にかかわる何か、大きなもののシフトチェンジということですかね」

「もちろん結論は下せない。が、この時点でクリントン政権はCIA、というよりナイ＝ボーゲル路線に沿って何かを変えようと考えた。おそらくクリントンの対中最恵国待遇の無条件延長や、北朝鮮との核査察と軽水炉支援の取引合意とも深く絡み合っているはずだ。クリントン政権の内部ではアジアにおける軍事経済政策のパッケージを『ナイ・イニシアチブ』と呼んでいるらしい」

「ナイ・イニシアチブですか。なにか日本封じ込めシフトのような気がしますね。とすると、アメリカの北朝鮮侵攻作戦はなんだったんだ、という疑問が生ま

れます」

「単なる陽動作戦でないとするなら、軍とホワイトハウスの不一致だとみるべきだろう。北朝鮮侵攻作戦はナイ・イニシアチブ以前の発想が生んだものだろう。クリントンのアジア政策転換に対する、軍あるいはCIA守旧派の抵抗の現れだといってもいい」

「となると、そのアスペン研究所から出した『ライジング・サンを管理する』というレポートをもっときっちり分析してみる必要がありますね」

「そうだろう。こいつはまもなく手に入る。ところで、例の大沢とエズラ・ボーゲルのツーショット写真はこのときのものらしい。ボーゲルが親しかったのは大沢よりもむしろ細川だったようなんだ」

「とすると、大沢はアマコストの直属というわけですか」

「いいや、そればかりではない。大沢にはアメリカ大使館のエース、ジミー・フォスター参事官がついていた」

「CIAですか」

「間違った。ジミー・フォスターはアマコストに請われて参事官に就任。一時、フィリピン人民軍対策にマニラに配置換えされたが、一九九一年、再びアマコストの補佐官として日本に復帰している。つまり奴さんはアマコストの懐刀といっている。その彼がこのウールジー長官來訪後、政務担当チーフから経済担当チーフに所属換えされている」

「なんと露骨な。大使館のエースが政務担当チーフから経済担当チーフに移ったということは、アメリカの対アジア政策が軍事から経済重視に変わったことを象徴しているようなもんじゃあないですか。つまり対日敵視でしょう」

「それだけじゃあない。さらに大胆なことに、CIAはこの七月、大沢をアメリカに呼びつけている」

「七月といえばもう村山社文党政権ですね。大沢は敗北の責任をとって進取党の代表幹事を辞した直後だ」

「そう、その彼をジョセフ・ナイとエズラ・ボーゲルがワシントンに呼び寄せた。そこにはレーガン、ブッシュ政権下の国防族、リチャード・アーミテージも加わっていたようだ。いわゆる日米安保重視派の重鎮だ」

「共和党の国防族のトップが同席しているんですか。ここからも何か臭いますね。そこでなにが話されたんです」

「わからん。『フォーサイト』の九月号にその一部がすっぱ抜かれているが、このレポートもハーバード大学の研究員だ。極秘会談の中身が流れるとすれば、ナイ＝ボーゲルサイドからの情報に違いない。割り引いて読まなければならないだろう」

「ううむ、大沢め、いったいどこを向いて政治をしているというんでしょうか」

磯崎はマスコミ嫌い、大衆蔑視の大沢が、CIAのトップとにこやかに会談する姿を勝手に思い描いて、思わず怒りが口をついた。

磯崎と堀田は六本木から溜池を回って、再び虎ノ門の喫茶店に引き返した。ここで『共合通信』の春田と会う約束になっていたからである。『山陰新報』の松永から紹介された、行政府の内部事情に詳しいという人物である。

しかし、約束の四時を三〇分待っても春田は現れない。アメリカ大使館前を過ぎてからというものの、尾行が気になってしょうがない二人であつたが、ほど近い喫茶店で待たされるというのも、何か落ち着かない感じがぬぐえない。

そんなところへ「磯崎さま、磯崎さま、お電話でございます」というアナウンスが流れてきた。磯崎がいやな感じで腰を上げようとする、「ちよつと待て」と堀田が小声で制した。

電話に出る者の様子を窺っている客がないかどうか、堀田がゆつくりと店内を見渡す。怪しい男といえば、新聞を大きく広げ、食い入るように見入っていて、顔もわからぬやつぐらいだ。堀田はその

男をしばらく観察したが、身動きひとつしないという点を除けば、これといつて不審な点は見出せない。

「よし、いいだろう。電話に出てくれ」

相手はやはり春田だった。「申し訳ないが、今日はキャンセルにしてくれ」との電話である。早朝、神戸一帯で起きた大地震のため、岡山からの電車がすべて神戸でストップし、帰京できなくなった、というのである。

春田は社命によつて須磨から姫路に折り返し、ホテルに宿を取つて、そのまま現地取材にはいつている、という。たしかにみぞうおの大地震であるらしく、朝からすべてのテレビが地震のニュース一色になっている。

現地はさぞや大混乱であろう。事情が事情である。キャンセルの電話を入れてくれただけでも感謝しなければならないのかもしれない。そして春田は結局、二週間、現地に張り付いた。そのため彼に会つたのは一ヶ月後、おなじ虎ノ門でのこと

である。

こざつぱりしたダークスーツに刈り上げた髪、フレームのないメガネにシヨルダーバッグ。春田はいかにも通信社の記者然とした姿で現れた。この日も約束の時間に二〇分遅れたことにひどく恐縮してはいたが、弁解は前回の阪神大震災のことに終始した。

しかも、神戸の被災状況を細かに語る間も、腕時計にしきりに目をやる。どうやら次の約束を気にしているようなのだが、そのことは口にしない。それを察したわれわれも、「今日のところはおよその概略をお願いしたい」と水を向けるにとどめ、事務的に事が流れるよう、配慮した。

「春田昭彦、政治部遊軍」と、名刺にはそうあつた。セカンドにもサードにも回れるシヨート・ストップ、臨機応変に行動する遊撃手のことだ。

「いや、時間は気にしないでください。でも概略、といわれても困りますね。私

にはいったいなんの概略なのかわかりませんからね」

そうなのである。松永正統、彼は春田に大事なことをなにも伝えていなかった。それでも春田がこうしてやってきてくれるのだからありがたい。

「われわれはいま、このめまぐるしく変わる日本の政界の動きにアメリカどう関与しているのか、その点に興味があつて取材を進めています。」

そんな中、松永さんにお目にかかったわけだが、その彼がぜひあなたに会えと言う。いまの政府の内部対立に詳しいし、アメリカの関与についてもなにか情報をもっているかもしれない、というんです」

私の説明が要領を得なかったのか、春田は小首をかしげて黙っている。

「端的にいえば、政府内の力関係がこの政界再編にどう絡んでいるのか。大蔵省と自治省の対立はいまどうなっているのか、それを教えていただきたい」

「それとアメリカとは、どうつながるん

ですか」

「いや、それがよく見えない。しかし、CIAと自治省の間に共通の利益があるような気がするもので……」

「これはまた意外な話ですねえ。CIAと自治省ですか。……で、CIAと自治省に共通利害があるとして、それがなんなんですか」

「われわれの関心はCIAと政界再編の関係にありました。再編を操ったのはCIAだったのではないか、ということですよ。それに対して松永さんは、操ったのは自治省、ひょっとしたらCIAと組んだ自治省ではないかという。もしそうならこれは聞き捨てならない情報です」

「知つての通り自治大臣は国家公安委員長を兼ねています。だから自治省が警察庁と近いのはわかりますが、CIAと自治省というよりはCIAと警察庁でしょう。CIAと警察庁とは昔から強い協力関係がありますよ。」

日本は国内の東側情報をCIAに提供す

る見返りとして、海外の軍事や麻薬・テロ、あるいは日本赤軍などの活動情報などを提供してもらっている。日本が海外に強力な諜報機関を持たない以上、CIAの情報には感謝すべきなんじゃありませんか」

「いやそれは、アメリカと日本の利害が一致していることが前提です。そうでなければどんな情報をつかまされるか、わかったものじゃありません」

「失礼ですが、あなた方は日本の構造改革に反対ですか。日本の官僚支配を放置することに賛成ですか。CIAであれ警察庁であれ、あるいは自治省であれ、どこがこの国の構造に穴をあける必要があるんじゃないませんか」

「そうはいきません。穴をあけるのはあくまでも民意であるべきです。自治省や警察庁が民意を代表しているならともかく、アメリカの意を受けて動いているのであれば許せません」

「なるほど、松永さんが言う通り、あな

た方は私たちとおなじお考えのようですね。実は前回のお約束の日の前日、私は岡山で松永さんと会っていたのです。私たちのテーマはCIAではなく内務省だったのですが、どうやらCIAを無視するわけにはいかなくなりました。しかし、相手は恐ろしく強力ですよ」

「予想はしています。とりあえず政府内の力関係の中で、自治省がどんな位置にあるのか、そのことをお話しただきたい」

春田はわれわれの要求に対して、きわめて整理された話をしてくれた。前半はおまかな歴史だったが、これは松江で松永から聞いた話とよくかみ合っていた。

「牧民官という言葉をご存知ですか。戦前、内務官僚を自称してこう呼んだ。要するに国民は羊で、それを導くのが内務省だというわけです。牧童といえいいか、牧羊犬といえいいか。特高警察などはそれ自身がオオカミのような気がし

ますけど、内務官僚自身はオオカミから国民を守る役目を任じていたわけです」

では、牧民官が言うところのオオカミとは何か。

「オオカミとは利権をあさる国家権力のことなんです。内務省からすれば、戦後の大蔵省を中心とした支配の構造は、かわい羊たちが中央省庁の食い物にされている、自治体が食い荒らされている」と映る」

つまり、内務省の地方支配が貫徹していたときは、各省が内務省に日参した。行政の九割以上が実際には地方で実施される。そのため知事を握る内務省の了解を取り付けない限り、なにもできなかった。

ところが戦後、G2が真の民主主義、地方自治を実現しようと、内務省を排除したため、地方は却って中央の草刈場になってしまった、というのである。

牧民官としてのわきまを身につけていない他省庁の官僚が知事となり、県や市

の重要ポストを奪い合う。つぎつぎに地方事務所を開設して、法律を作っては、許認可権限を手に入れる。このトップに補助金行政の総元締め、大蔵省が君臨する。戦前の内務省詣でに替わる大蔵省詣での始まりである。

内務省解体後、地方役人に身をやつとして復活の機を窺っていた牧民官たちにとって、これらのすべてが我慢ならないことなのである。実際、地方のこの不満を背景に、内務省は復活の足がかりを手に入れたのである。

地方財政の健全化を目指してシャープ使用節団が来日すると、日本側の窓口として、内務省の残骸である総理庁自治課と地方財政委員会を統合。地方自治庁を発足させたのを足がかりに、自治庁、自治省と変身を遂げ、なお、内務省あるいは内務省への脱皮を狙いつづけている。

そして、その際の正面の敵が大蔵省であり、背後の敵が地方の利権を掠める建設省や運輸省、農水省など。そしてまた、

これらの経済官庁に巣食った田中派の政治手法なのである。

「かつては一都一道二府三六県、その主要ポストである知事、副知事、総務部長、財政課長のほとんどを内務省が握っていました。解体されてからもしばらくはこの状態が続いたんです。でも、いま知事は一八人で、半分以上です。主要四ポストをひとつも握っていないのは沖縄県と神奈川県です」

「やはり沖縄ですか」

「そうともいえませんが、あそこには沖縄開発庁がある。自治省にとっておもしろくないのは神奈川県でしょう。神奈川県では自治省の出向ポストは市町村課長ただひとつ。ところが建設省ポストは都市部長、河港課長、都市計画課長、国道調整担当土木部参事、都市総務室専任技官。これが持つ意味はお分かりでしょう」

「田中派ですか」

「というより、あそこは革新知事だったため、田中の政治構造が生んだ内務省政

治の希薄化だといっておきましょう」

「神奈川県以外で目立ったところを上げると」

「山形です。ここは総務部長を大蔵が握り、自治省は財政課長に甘んじている。総勢では自治省三、建設省三、厚生省一、農水省二、大蔵、通産、運輸各一、となっています。中央による地方荒しの典型です」

「この中央シフトがミニ新幹線を実現するパワーになったわけですね」

ともあれ自治省はまず、正面の敵に挑んだ。それが地方への財源確保。地方交付金の新設と、その増額だった。補助金中心の財政手当てでは、中央による地方荒しは進む一方になる。これに対して、算出方法を明確にした交付金なら地方の自主財源に当てられるからである。

そして、自治省がこの配分に一枚かむことで、地方に睨みを利かせることができる。自治省が交付金の増額を狙い、大蔵省が押さえ込む、この構図は戦後の省

庁対立の中で最も根の深いものである。自治省は地方分権を前提とした地方徴税権の確立まで射程に入れながら大蔵省と対決した。

しかし、高度成長で財政が潤っている間は、多くの利権が発生し、そこに諸勢力が群がるため、自治省に勝ち目はなかった。そこに降って沸いたのが臨時行政調査会、いわゆる臨調による行政改革だった。

「CIAとの関係をあえて見つけるとするなら、土光臨調を始めた中曽根首相でしょう。風見鶏といわれ、首相の目はな」といわれていた彼を首相に押し上げたのはCIAだ、という噂が強かった」

「CIAかどうかは別として、彼はレーガンさんの覚えがめでたかったのは事実だし、民自党の総裁選直前に訪米したことが、総裁選での勝利を決定づけたのも確かなようです」

「その彼が、臨調で土光さんの参謀役として、旧内務官僚の瀬島をつけた。そし

で、利権から遠い、として、調査会の委員に警察官僚を大量に登用した。どうみてもこれは自治省・内務省シフトです」

「後藤田さんや秦野さんを厚遇したのも中曽根首相でしたね」

「内閣官房副長官は警察庁長官だった後藤田がこのポストについてから影の総理といわれる地位を手に入れた。このポストは旧内務省の持ち回りで、最近では自治省事務次官、警察庁長官が交代で就任する官僚の最高ポストになっている。それまでの影の総理は内政審議室長が握っていて、このポストには大蔵省のナンバー2が配属されてきている」

「つまり影の総理も大蔵から内務にシフトしたというわけですね。で、初歩的な質問で申し訳ないが、いま、誰なんですか」

「これはもうずっと旧内務官僚で、自治省事務次官だった石原信雄です」

「ずっと、といういつからですか」

「武下内閣ですから、何年前になりますか」

か」

「連立の組換えで、首相がころころ変わった間も、影の総理はずっと変わらなかったわけですか」

それまで、聞き役に徹していた堀田が急に言葉をはさんだ。

「しまった。どうやらおれはもう一人のプレーヤーを見落としていたようだ。武下内閣のとき事務方の官房副長官が石原だとして、その時の政務方の副長官は誰でしたっけ」

「たしか大沢八郎です」

「やっぱ。とすると海部内閣の首相側近は石原だったわけか」

「そうです。大沢と石原は湾岸戦争のとき、首相に国際的な貢献を迫った両雄だと見られています。もっとありていにいえば、大沢の考えを石原が首相にプッシュした」

「だとするとCIAと石原の接触も考えられる」

「そうですね。当時はリクルート事件の

尻拭いで、党も首相も力がなかった。アメリカが大沢に頼ったのも彼が持つ実権です。アメリカがもう一人の実力者に接触しなかったとは考えにくい」

「アマコスト・石原ラインですか」

「CIA・自治省ラインですね」

「昨年の春、民自党がひそかに行政改革のたたき台をつくりました。これによれば自治省は民生部分が厚生省に、選挙などの管理部門が総務庁に吸収され、解体されることになっていました」

「言われてみれば自治省の仕事なんてそんなものだと思いますね」

「たたき台を作ったのは橋本のブレーン、通産省の誰かだといわれている。行政改革で大蔵の財政と金融の分離をとりつけ、内務省復活の足がかりを得ようとしていた自治省は烈火のごとく怒りました。民自党の議員一人一人を呼びつけ、自治省解体を言うようなやつは選挙で落としてやる、と脅したそうです」

「そういう脅しが通用してしまうという現実が恐ろしいですね。自治省はそんな力を持ってしまっている」

「地方に張り巡らされた自治省人脈、それに警察ですよ。参議員の村上コータロウが過労死したのは全国で組織員が選挙違反で挙げられたため、という話は、民自党議員の中には強く刻み込まれている。内務省は戦前、翼賛選挙を仕切ってきた実績もあるわけですしね」

「自治省がなり振りかまわぬ反撃に出てきたわけですね」

「橋本のブレーンがトラの尾を踏んだわけです。もともと、自治省は当初、橋本のブレーンが大蔵の役人だと考えたようです。というのも、国民総背番号制をめぐって、自治省と大蔵省は見えない戦争の最中だった」

「松永さんが言っていた厚生省のカードと自治省のカードの違いですね」

「そうです。納税番号がほしかった大蔵省は一九八五年にグリーンカード制の導

入に成功した。ところが実施直前になって自治省につぶされてしまっています。自治省の意を受けて動いたのは金丸と春日一幸です。以来、大蔵は厚生省の年金番号を基礎としたカードに期待します。これに対して自治省は住民票に番号を振り、カード制を導入しようと考えた」

「つまり、どっちがカード制の主導権を握るかという戦争なんですね。松永さんによれば五分五分だとか」

「いや、自治省の勝です。神風としかいえないような出来事、それが先日の阪神淡路大震災だったのです。私も取材してきましたが、厚生省のカード制の実用テストをする予定だった芦屋、尼崎両市のコンピュータシステムは壊滅的な状態でした」

「実用テストができなくなってしまった」
「そうです。その上、広域防災に国土庁では限界がある、内務省が必要だ、といった声が挙がって、耐火性のカードがあればもっと迅速な身元確認ができたのに、

と、自治省のツボにはまったような議論が勢いを増しています」

「.....」

「もっとも、地震以前から勝負がついていた、ともいえるんです。自治省は厚生省に迫って、年金番号を年金以外にも使うのなら、自治体職員が加入する共済年金保険の国民年金保険への統合を許さない、と脅しました。そして、年金事務以外には使わない、という念書を探っている」

「役所間で念書を交わすとは、すごい話ですね。たかがカードのヘゲモニー争いで、そこまでするのはどうしてなんですかね」

「番号制とカード制が将来の行政の基礎になる、という基本的な読みがあります。これを握ったところが官庁の中の官庁の地位を確実にする」

「たしかにそれが省を超えた共通番号や共通カードになれば、主管庁が解体されるなんてことは考えられませんか」

「そしてもうひとつ、自治省の宿願が果たせる」

「なんですか、それは」

「地方徴税権です。地方徴税権のネットワークは具体的な税の徴収で、地方税にしても国税庁の権限に依拠しています。しかし、国税庁に拠らない徴税法もあります」

「自動車ですね」

「その通り。車検制度とナンバー登録、それに警察による取り締まりがそれを可能にした。このシステムは自治省が警察庁と運輸省を巻き込んで作り上げたものです。そこでです、人が番号を付され、カードを持たされたらどうなります」

「人が自動車並になるということですか。法律や取り締まり方次第では、税を納めずには町も歩けない。そうなれば国税庁は無用になりますね」

「そうですね。すぐにそんなことはできないでしょうが、自治省にはそこまでの展望がある、ということです。それがわかってから大蔵省はカードのヘゲモ

ニーを自治省には渡せない」

「水面下でそんな戦争があつたんですか。まったく知らなかった」

「みんな知りませんよ。でも、この帰趨は将来の日本のあり方に決定的な影響を与えます」

「で、自治省の勝ですか」

「厚生省のシステムに対しては、ということ。大蔵としてはまだ、独自の番号を持つ道が残っている。だから、自治省としては大蔵に独自の番号制を持たせないように動くはず」

「春田さんたちが自治省にこだわつておられるのはなぜなんです。田中の利権政治から訣別し、地方分権を進める、と聞けば、それが悪いこととは思えない。むしろ必要なことだと思えますが」

「文字通り、そうであるならいいんです。でも、実際には旧内務省による失地回復、戦前回帰になりかねない。大政翼賛会的な息苦しい取り締まり社会はごめんです。彼らはバランスよりもパーフェク

トを重んじる。彼らがコントロールするカードシステムはいずれ私たちの完全支配に向かう。それを誰かが阻止しなければならいんです」

「つまり、プライバシーとか自由への関心なんですか」

「いや、それもあるがそもそもその出発は別でした。日本経済がなぜ急に失速したのか、日本のシステムがなぜ急に批判されるようになったのか。その疑問を解くうちにアメリカと防衛庁、自治省が浮上してきた。そこで人が目を向けない自治省をウォッチングすることになったんです。が、わたしたちもCIAを見落としていたわけではありませんよ」

「私たちって、松永さんのことですか」

「いや、そうではありません。むしろ、彼も無縁ではないんですが、別なグループがあるんです。そのメンバーには近々お引き合わせすることになると思います。今日もこれから、彼らに会います。それとも、よろしかったら行ってみます

か。そうであればさつそく電話で同意を取り付けますから」

磯崎と堀田は春田に案内されるままに夕食を済ませ、タクシーに乗り込んだ。行き先は帝都大学経済研究棟。その一室に水島経済政策研究室はあった。

日本型マネジメントによる日本型福祉政策を提案する水島邦彦帝都大学教授の研究室である。以前は軽食コーナーだったところを会議室用に改造し、水島研究室がほとんど独占的に使用しているということで、大学の研究室とは思えぬほど広い。とはいえ、未整理の資料が山積みになっているところなど、いかにも昔ながらの研究室然としている。

磯崎たちはまず、この会議のまとめ役である研究室助手の溝口幸一という男に紹介された。春田よりやや年上、四〇少し前だろうか。長身で、ややがっしりしたスポーツマン・タイプの男である。

溝口はまず、この会は秘密会であること、通常是水島先生の許可が必要なこ

と、今日は留守で許可は取っていないこと、すべてはオフレコで記事にはしないこと、などを手短かに伝え、了承を求めた。また、その上で、会のCIAに対する関心のあらましを話し、堀田にレクチャーを依頼した。

溝口によればこの会は水島ゼミを卒業し、中央省庁に就職した人たちの自由な勉強会で、定まったテーマはなかったという。ところが七、八年前からアメリカで日本叩きが強まり、ファンダメンタリストによる「日本特殊性論」が持ち出され始めると、日本の学界でも「レーガノミックス」を評価し「日本型経済運営」を見直す声が高まった、という。

また、ソビエトの崩壊はマルクス経済学の凋落を決定づけ、その余波は水島邦彦のようなケインズ経済学にも及び始めているという。つまり、福祉型の社会調整論さえ「古い」と決めつけ、市場原理絶対の競争論が幅を利かせている、という。

学界のこの傾向はいずれ官界にも及んでくる。

しかしそれは実のところ、政治の死、資本の元蓄積段階への退行ではないのか。経済活動に対する国家の敗北、金融アナキズムの許容ではないのか。会のテーマは次第にそこへ絞り込まれていったという。

なぜこんなことになったのか。その原因を探るうちに浮き上がってきたのがCIAである。また、その威を借りて勢力の拡大、あるいは縮小の防止に努めたのが防衛庁と警察庁、そして、そのグラندوقデザインを描いたのが自治省ではないのか、というのである。

幸い溝口は来年、地方大学での助教授の口が決まったという。が、大学のリストラで、マルクス経済学は全滅。ケインズ経済学も選別が厳しくなつて、いまや死活的な状況なのだ、と笑った。

この日の出席者は春田と溝口のほか、五人。通産、大蔵、厚生各省のほか、J

ETROと国会図書館の職員が参加していた。

前回の会合での課題報告があったあと、堀田がCIAについてのレクチャーを行った。大沢八郎など、具体的な名前を上げることが避けはしたが、みな熱心に耳を傾けていた。

「CIAの前身、OSSはイギリスの支援によって作られた戦時諜報組織です。大戦が終れば当然解散すべきものだった。ところが、大戦によって空前の利益を上げた軍事産業はその利益の継続を目指して軍産複合体（ミリタリー・インダストリアル・コンプレクス）を組織。ソ連を仮想敵国にした準戦時体制を維持。トルーマン・ドクトリンによって、これを正当化します。

トルーマン・ドクトリンとは『平和よりも自由』、経済の自由な活動を保障し、あらゆる統制を排除するためには戦争をも辞さない、というものです。ここでいう経済活動とはアメリカの産業

とこれへのイギリスの投資を意味します。

これを護るためにつくられたのが一九四七年の『国家安全法』で、CIAは国家安全法で特権を与えられた軍産複合体の利益を保証する諜報組織だといっている。

CIAは発足と同時に、同じく軍の通信諜報機関だったNSA（国家安全保障局）を傘下に収め、イギリスの通信諜報機関GCHQ（政府通信本部）とともにUKUSA同盟を結ぶことになります。UKとはユニテッド・キングダム、USAはいうまでもなくアメリカです。

この軍産複合体は影の政府としてアメリカをコントロール。これを利用したアイゼンハワーもそのパワーに恐怖し、退任直前『軍産複合体に気をつけろ』というメッセージを残します。これに込め、メスを入れようとしたのがJF・ケネディーでしたが、その結果、軍産複合体の手によって暗殺されます。

この事実をつかんだジョンソンも、退任直前に演説をし、事実を公表しようとしたましたが、その部分は放送から削除されていました。この影の政府と手を組んだのがニクソンで、その一端が暴露されたのがウォーターゲート事件です。このときの世論が、CIAに非合法活動を許さないという箍をはめることになりました。

ソ連の解体はCIAの存在基盤を揺るがすものです。もし、ウォーターゲート事件がなかったら、CIAは非合法の謀略を仕組んでも、新たな存在基盤を作り出したはずです。すなわち、仮想敵国の創出です。だからこれを合法的にやらなければならない。そうでなければ膨大な予算を獲得できない。

そうしたとき選ばれたのが経済大国・日本です。軍事諜報組織から経済諜報組織への転換、という意味でなら必ずしも日本である必要はない。事実、ソ連の崩壊以前からCIAは日本、西ドイツ、フ

ランスの技術関連情報の収集、活用をやっていた。日本、ドイツの資料はソ連には及ばぬものの、中国など他の共産圏と比べても見劣りしない、という話もあります。

では、なぜ日本か。ここにおいでの方皆さんはすでにお気づきのことだと思います。そうです、トルーマン・ドクトリンです。一切の経済統制を排除する、そのためには戦争をも辞さない、というあの考え方にとって、日本の経済システムは新たな仮想敵として格好の標的となりうるのです。これはおりしも巨大な貿易赤字で悩むアメリカの国民感情とも一致しました。

一九九一年、CIAは『ジャパン二〇〇〇』という日本レポートをまとめますが、これがCIAの対日宣戦布告だといつていいでしょう。以後、CIAはこれにそった対日諜報活動を行っている。すなわち、産業スパイです。でも、この極秘レポートがロサンジェルス・タ

イムスにすっぱ抜かれた意味を考えると、次のことが言えます。

これは連邦予算の策定時というタイミングのよさ、などから見てもすっぱ抜かれたのではなく、CIAの側から意図的にリークされたものといえる。つまりは議会対策です。

CIAでさえも、議会対策のためにこんなレポートをまとめる必要がある、リークする必要があったということ。それはアメリカがすでに軍産複合体の掌握下にはないということを意味している。ソ連の崩壊とレーガン、ブッシュからクリントンへの政権交代が象徴するもの、それをもっと正確に読まなければならないことを意味しています」

CIAの謀略 第5章「脅威」

「堀田さんはこの記事をもうごらんになつていますよね」

そういつてJETRO職員の長谷

川宗之が新聞のコピーを配り始めた。一九九五年一月三日から五日付けの『産経新聞』と、一月六日付けの『共同』配信記事である。

「なぜたて続けにCIAなのかわかりませんが、気になるのでコピーしてきまして」

『産経』の記事は元CIA・NOCだった男のインタビュー。NOCとはノン・オフィシャル・カバールの略で、大使館員や軍人などの公式身分を持たない民間偽装要員のことだ。

また『共同』の記事は「CIA東京支局の活動概要」と題するもので、主にオフィシャル・カバールの活動を紹介している。

東京支局は東アジアを活動範囲にしているが、『共同』によれば「一等書記官の肩書きを持つ東京支局長以下、在京大使館、大阪総領事館に外交官を装う要員、横田、横須賀、座間などに米軍との連絡要員ら、大手米企業駐在員を装った民間

偽装要員の合計約六〇人で構成」されている、という。

「この数字は私のデータと少し違います。六〇人というのは八〇年代のもので、現在（一九九五年）は八〇〇一〇〇、あるいはそれ以上ともいわれています」

堀田豊が自信ありげに答えた。

「記事を補足していくと、現在、アメリカ大使館の経済担当官はほとんどがCIAだといわれている。補佐官、副領事といった肩書きにもCIAが多い。八〇年代の情報だが、六〇人のうち一三人がいわゆるNOCだった。この他に単発契約の民間人がいて、一定の活動を依頼されている。これをDCO、ダイバースファイド・カバードファイサーと呼んでいる。そして、そのほかに八〇〇人ほどのエージェントを抱えているが、そのほとんどは日本人だそうだ」

『共同』の記事はCIAの活動の一端に触れており、ターゲットとして高品位テレビ、半導体、新素材、通信、原子力、

ロケット、人工衛星といったハイテク技術の軍事転用の可能性などが上げられている。

また「企業としてはセラミックの京セラ、カラーテレビのシャドーマスク技術を持つ大日本印刷のほか、ロケット、人工衛星技術等を持つ宇宙開発事業団、三菱重工、石川島播磨が調査対象になった」とある。

『共同』の記事はともかく、『産経』の記事を見てください。ここで、私たちのことがやたらに持ち上げられている。元NOC氏は『ジェットロ（日本貿易振興会）は真の商業情報機関であり、CIAが弱い北朝鮮の情報に関し極めて正確だった』といっています」

長谷川はそういつて、苦々しげに新聞のコピーを手の甲で叩いて見せた。なぜ彼がそんな仕種をするのか、他の参加者には皆目わからず、きょとんとしながら、彼の次の言葉を待った。

「いうまでもなく、われわれジェットロは

純粋な商業情報機関です。しかし、アメリカはそう見ていない。たとえば一九九一年二月、CIAがロチェスター工科大学に委託してつくらせた研究レポート『ジャパン2000』ではこんなことを言っている。

『日本は全米一五の領事館、外務省、通産省やジェットロ、さらに商社の情報システムを利用して米国内の経済諜報活動をやりたい放題。道徳心や人権意識に欠け、集団主義思考が強い日本人が世界的な経済支配の陰謀を企てている』

だからニューヨークのジェットロ事務所を日本の産業スパイの巣だとして、FBIが常時監視を続けている。そしてCIAのスパイ活動もわれわれに対する対抗上、必要だと主張しているんです」

CIAはアメリカ国内での活動を禁じられているので、こうした防諜活動は基本的にFBIが担当する。

「このインタビューではCIAがジェットロを敵視していることをおくびにも出さ

ず、われわれを持ち上げている。そしてこんどはCIAの活動も、われわれの活動同様の一般的な情報収集であるかのようなイメージを打ち出して見せている。こんなの、悪い冗談としか言いようがない」

「元NOCさんは、CIAの情報の八割は国会図書館や政府刊行物センターで集められる情報だといっているけど、本当かしらね」

国会図書館司書の杉井美紗だ。

それに堀田が答える。

「嘘じゃないだろう。もちろん国会図書館で調べたわけじゃあないだろうがね。CIAはまず、目をつけたエージェントにその種の価値の薄い情報を集めさせる。そのほうが安全だからね。そうした結びつきを、時には何年にも渡って続け、ごくごくたまに価値ある情報にありつく。問題は非合法的に集められる一割二割の情報にあるわけさ」

「それはそうなのでしょうが、彼らはよ

く虎ノ門のジェットロ・ライブラリーを利用していらしいんです」

「いやあ、彼らの活動にはさまざまな形態があるが実に悠長というか、ゆとりがある。知っていますか、天城会議というやつ。まあ、さまざまな問題をテーマにした知識人会議なんですが、企業メセナーの一種ですね。企業のトップや役人、マスコミ関係者などが参加します。別に教育者を集めた天城学長会議というのも持っていますよ。」

日本IBMが伊豆に持っているすばらしい宿泊施設で開かれるんで、もちろん主催は日本IBMですが、実態は明らかにCIAの宣伝活動です。みんなそれとなくわかってはいるんですが、なにか直接要求されるわけではありませんから、顔合わせに行くんです。実際、休養にもなるし勉強にもなりますからね」

厚生省統計局の大貫隆一だ。コンピュータに関連した新技術や国際的な情報を逸早くつかむにはいい会議なのだと

いう。

「天城会議は一企業のメセナーにはとどまるものではありませんよ。一九八四年、中曽根首相が設置した臨時教育審議会（臨教審）に専門委員を出している。日本の教育を考えるのになんでIBMか、と思うのですが、知識人の心をくすぐるという日頃の会議の活動が、こういう形で生きてきているわけなんです」

春田の言葉には参加者みんなが驚きの声を上げた。

「IBMはすごいですね。あそこは大量のNOCを抱えているんじゃないですか。六本木にある日本IBM本社の西館、あのビルに入っている米国IBM直属のコンサルティング会社・IBMアジア・パシフィックですか、あそこなんかもうCIAとおなじ仕事をしているといってもいいようなものです。六本木を見下ろすように建っているながら、正面には通用口しかなくて、正門が裏手の本館に向かって開いている。八角形の奇妙なビルです。

いちおう日本をはじめとするアジア、太平洋地域一八か国の営業、サービス、開発支援、ガイダンスを行っている会社なんですかね」

「そういえば、ボクのところにも妙なやつがきましたなあ。アメリカ大使館から金融政策のことで説明を聞きたい、というアポが入った。それで待っていると、どこかそぶりが変なので、どちらさんかと聞くと、わけのわからん研究所の名前を言うんです。名刺は、と聞くと、持ち合わせていない、と答える。何度かやり取りしたら、ようやく名刺を出しまして、それがIBMなんです。本当の社員かどうかはわかりませんがね」

通産省の水越亨と大蔵省の中川伸一のやりとりだ。

「そういえば、あの『権の実会』というのはなんなんですか」

幹事役の溝口幸一が口をはさんだ。それに大貫が答える。

「あれは日本IBMの社長だった椎名武

雄が主催していた集まりで、情報収集に熱心な政治家や財界人が沢山参加しています。役人も多く参加していて、各省揃っているんですよ。個人ではとても賄えない大変な接待費を使っていますが、資金源はいまだに謎です」

「CIAのピーアール機関だというのが定説でしょう。しかも、それを承知で政財官、それにマスコミ、知識人たちが群がっているのだから驚きです」

「久保田というのは『権の実会』の顧問をやったんでしょ」

再び水越と中川のやりとりになる。

「彼は怪しげなやつでした。リクルート事件でも彼との関係でやられたやつが少なくない。NTTルートはそうじゃないのかな。だけど、事件発覚後、久保田はぱったりと姿を消した」

「怪しい人物に対して、警察はちゃんとマークしているんでしょうか」

「警視庁の公安は多少やつてるようですが、内閣調査室は動いてなさそうですよ。

以前、後藤田さんはウォルフレンをマークしていました」

「公安調査庁も一九八八年に、NOCの活動があまりにも露骨だというんで、あるオフィスを急襲し、一〇人を越すスパイに自主的にお帰り願っているんです。ただ日本の場合、適当な取締法がないために、こんなふうに帰国をお願いするしかない。また、それを公表することもできないんです」「一〇人ものNOCがいたとなれば、それはもうアジア・パシフィックだとしか考えられませんか」

「そういないから、苦しい」

「それに日本人側だって、それと知ってつき合って、利用されずに利用する、という道もありますよね。これは違法じゃないでしょうから、マークはむずかしい。石原慎太郎とジミー・フォスターの関係がそうでしょう」

「大沢とジミー・フォスターの関係もそうだという人がいますね。しかし、これはもうまったく違う。主張の一部がアメ

リカ寄りなんじゃない。すべてです。次期支援戦闘機F SXの共同開発修正問題、湾岸戦争への対米貢献、モトローラ通信方式への周波数帯割譲……いままさるなにを、というレベルの話です」

「あれには参りましたね。羽田のあと、自陣営に竹村がいたのに、彼を棒に振り、民自党の海部元首相を新総理に担いだ。湾岸戦争で、すっかりお世話になった見返り、とでもいうんですかね。その上、民自党の中曽根元首相が党議拘束を無視してただ一人、海部に投票した。あれはいったいなんだったんです」

「アメリカ一派の旗揚げ興行ですか。日本の国会はここまでアメリカに侵されている、というのを世界に披露して見せたようなもんですよ。なんともお恥ずかしい」

溝口が口をはさんでから、会議は一気に活発となり、もう、誰がなにを話しているのかを区別するのがむずかしい状態になった。それをまた、軌道に戻したの

は例のJETRO男の長谷川だった。

「通産省はどうなんです。相当やられているんじゃないですか。ジェット口はすこいですよ。ニューヨーク事務所の職員が自宅まで盗聴されている。電話に雑音が混じる、音量が突然下がる、なんてことはみんな経験しています」

「そういう話はうちでも聞きますよ。ワシントンに転勤になって家を借りたら、一週間で電話の変調が始まった、という人もいます。アメリカには住民登録はないですから、尾行して家突き止めたわけです。」

しかし、いまの技術からいえば、盗聴だつて気づかれないでしょうね。それにしても変な話だ。JETROさんはそんな目に会いながらも、アメリカ企業の日本進出のお世話をしている」

「まったくです。外国の商業活動のお手伝いをする国なんて、聞いたことがありません。政府のお手伝いならともかく民間の企業活動なんですからね。進出で痛

手をこうむる日本の企業にどう説明ができるものやら」

「みなさん、そろそろ終了の時間なんです。この機会にぜひ、ボクの通産省における印象をまとめておきたい。残れる人だけでけっこうですので、ちよつとおつきあい願えませんか」

通産省の水越が、なにか思いつめたような顔をして、溝口の同意を求めた。

「もちろん自由な参加と自由な討論がこの会の趣旨です。お帰りの人もいるだろうから一端休憩して、あらためて水越さんの話を聞くことにしましょう」

「われわれも参加させてもらつてもいいのですか」

「もちろんです」

堀田の質問に、水越と溝口が同時に答えた。

「通産の話、私も大変興味があるんですが、どうしても帰ってやらなければならぬ仕事がある。申し訳ないが帰ります。

またぜひ、話をお聞かせください」

レザーコートの際を直しながら、春田昭彦が出て行ったほかは、誰も帰ろうとするものはいない。ほどなく、水越の話が始まった。

「ロッキード事件が起きたとき、ぼくはまだ学生でした。権力者の不正には激しい憤りを覚えていましたから、日本の捜査陣の限界に歯噛みし、アメリカの捜査協力に対して心から拍手したものです。大学を出て、通産省に入省してまもなく起こったダグラス・グラマン事件でも、大商社の不正に許しがたいものを感じていました。

もちろん不正は不正で、裁かれるべきなんです。が、いま思えば、あの二つの事件はいずれもアメリカが発火点だった。アメリカが問題にして、日本の捜査陣が動いた。その結果なにが起きたか、それを考えると見えてくるものがあります。

当時、日本の強さ、技術力、輸出力の強さを示すものに、総合商社×通産省

×行政指導×があつたのを覚えておいででしょう。英語の辞書にも載つたといふので、ずいぶんと話題になったものです。二つの事件は結局、アメリカが考える日本の強さの秘密、すなわち×総合商社×に大打撃を与えることになった。

そこにはアメリカの何らかの意図が感じられます。事実、ロッキード事件でロッキード社の代理人・児玉誉士夫と田中・小佐野の関係を暴いたチャーチ委員会（委員会は児玉を軍国主義的極右政治勢力の著名な指導者とよんだ）は児玉が笹川良一と並ぶ、戦後日本の二大黒幕であると同時にCIAのエージェントであつたことを明らかにした。つまりあの事件は児玉と笹川のボス争いなんかじゃなく、CIAとチャーチ委員会の暗闘とその痛み分け、日本に矛先を向けることで両者が妥協した結果の手打ちだったのです。

二つの事件で丸紅と日商岩井が狙い撃ちされましたが、CIAは別に、三菱商

事を盗聴していたことが明らかになっています。ケーシーCIA長官の時代ですから八〇年代の初頭のことですよ。堀田さんがいわれる、ソ連崩壊よりもずっと前から、CIAは同盟国に対する経済スパイをやっていたことになりました。

一説によれば総合商社に対する監視活動は一九七三年、中東のオイルマネーの行方を突き止めるために始めた、ともいわれています。OPEC（石油輸出国機構）に対する対抗措置だ、というわけですから、まあ、理屈はいろいろつけられるものですがね」

ここまで一気にしゃべってから、水越は少し間を開けた。しかし、その間に口をはさもうとするものは誰もいない。改装されてはいるものの古い建物なので空調の具合がよくないのだろう。少しけづつてきたものか、溝口が立って、窓を少し開けた。寒気が隙間風になつて会議室を舞った。

「ぼくがアメリカに対して決定的に見方

を変えたのが一九八二年六月のIBM産業スパイ事件です。FBIがIBMの機密情報を不法入手した容疑で日立製作所と三菱電機の社員を逮捕した事件です。

たしかに、IBMに忍び込み情報を盗み出すという日立と三菱の社員がやった行為は犯罪です。重大な犯罪、といってもいい。しかし、逃亡の恐れも何もない、犯行を認め、反省しているサラリーマンに後ろ手錠をして、カメラの前にさらし、世界に放映する必要がはたしてあるのでしようか。

これが重要な外交問題になりうることを、アメリカ政府も認識していたはずです。ということはあのテレビシーンもまたアメリカ政府が事前に演出したことだと考えて間違いありません。

知つてのとおり、事件には最初からシリオがあった。IBMから資料を盗み出し、両社に売り込んだ男、わざわざ一部に欠損のある資料を渡し、欠損部分を手に入れたと思わせた男がFBIの回し

者、日本では許されないおとり捜査であつたことも明らかになっています。

この事件で、アメリカは何を手に入れたのでしょうか。産業スパイは許されない行為なんだよ、というメッセージでしょうか。だとすれば、それは両刃の剣です。CIAもまたダメージを受ける。

そうではなく、実際に起きたのは通産省の権威失墜でした。それも日立、三菱にIBM互換路線をとらせた通産省の行政指導のあり方が問われた。業界を指導し、補助金を注ぎ込む日本のシステムが保護貿易、不正競争の典型として非難されるきっかけを開いた。通産省はその得意技において弱みを握られてしまった。この立場はその後の構造協議へと引き継がれていきます。

日本の強いところを叩け、これがアメリカの経済再生の秘策だったように思えます。

実は、おなじころ、これを指示したCIAの秘密レポートがあるのです。そこに

は叩く日本企業としてNTT、トヨタ自動車、富士通、NECの四社が名指しされています。NTTに対しては分割民営化の要求として出てきたし、先ほど話していたリクルートの関連もそうかも知れません。富士通、NECに対しては知的所有権の問題（IBM富士通著作権紛争）や半導体の市場占有率（シェア）の割讓（日米半導体協定）要求がそうです。トヨタに対しては、いま大詰めを迎えている日米自動車協定の延長交渉がその一環だといえるでしょう。

叩く、というのは違いますが、CIAはこの間、京セラにずうっと興味を持っていまして、新素材、とりわけ、セラミックスの自動車エンジンの開発で日米間で溝が開けられないようにずうっと監視してきたのも事実です。ハイテク技術の開発組織の構成、研究開発内容、予算規模、開発部門の住所、役員の氏名等の情報を常にフォローしていました。

一九八七年四月、いわゆる東芝ココム

違反事件が勃発します。東芝の子会社・東芝機械がC O C O M（対共產圏輸出統制委員会）で規制されている工作機械をソ連に輸出したとして、警視庁が捜索に入った事件です。結局通産省としては、東芝機械に対して共產圏諸国に対して一年間の輸出禁止処分を課すはかなかったのですが、アメリカの世論はこれに納得せず、親会社の東芝製品の輸入禁止にまでエスカレート。C I Aのターゲットは最初から東芝本体にあったのでしょうか、このやり方はあまりにも理不尽です。C I Aは七九年以降の旧東欧圏での東芝の活動を徹底して調べていたのです。いわゆる監視行動です。しかしそこに不正はなかった。そこで子会社を引っ掛け、親会社を巻き込んだ。もっともこんな制裁をはねつけられなかった通産は自国の産業を保護育成するどころか、不当な要求から防衛することもできなかったことを意味する。

ココムの規制基準はアメリカが勝手に

決め、同盟国に押し付けているものです。そして、その基準を守らせるために、アメリカが警視庁を利用し、警視庁がそれに応えた。これをいったいどう考えたらいいんでしょうか。そのときはこれも同盟関係か、と、自分で自分を納得させましたよ。ところがいま、アメリカは何をやっていますか。勝手に米中和解を演出し、基準を緩和して、中国に禁止されていた電子機器を輸出し始めている。こんなばかなことがありますか。日本政府はF B Iに通報し、アメリカ政府を逮捕してもらわなければならない。そうでしょう。

そして件のリクルート事件です。分割を免れ、強力な事業体として存続するN T Tに対する揺さぶりのひとつとして、C I Aが仕掛けたものと見えなくもない。

こうしたことを通じて何が起ったのか。世界に冠たる通産省の存在意義の消滅です。ここで皆さんに話すのは釈迦に

説法のようなのですが、政治とは何らかの操作です。自然に任せてはおけないものがあるから、保護や育成といった操作を加える。ところが、通産の行動はすべて自由競争の妨げになる。これがアメリカの論理です。

そしていま、通産は何もしなくなった。通産省はいらない、特許庁と公取委（公正取引委員会）だけあればいい、なんていう自嘲的な声も聞こえてきます。反対にアメリカは通産省の手法を大胆に取り入れ、あらゆる保護育成策を講じています。

一九九三年九月、クリントンは産官合同の未来車プロジェクト（P N G V）をぶち上げました。これは自動車のビッグ3（G M、フォード、クライスラー）と六の省庁（エネルギー省、運輸省、商務省など）六つの公立研究所が協力して十年で燃料効率三倍のクルマを開発しようというものです。このやり方は今後、高効率モーターやバッテリー、超軽量新素材、

高性能コンピュータ、半導体、液晶パネルなどにも広げて行くという。スーパ一三〇一条だって、保護主義そのものじゃないですか。その結果、自動車はもう十分に日本を迎え撃つ体力を手に入れた。いや、もうすでに日本を脅かす存在、このままでは日本の主力メーカーが倒されます。

それなのになお、自動車の対米輸出自主規制の延長ですか。しかも今度は半導体並に数量規制をしるという。自主規制では生ぬるいという。半導体交渉で数量を盛り込んでしまったのがまずもって間違っていたわけですが、自動車にもこれを適用しろという。

要求をのめばまた次の要求が始まる。日本はもう後退しすぎました。アメリカに對して、どこまで卑屈になれ、というのでしょうか。このままではもう、本当に通産省はいらない。アメリカ商務省の外局で十分です」

水越の口調は次第に熱を帯び、力強いも

のに変わってきた。考えに考え、ひとり思いを確かめるように話を進めていたのだが、コム事件になるころには立て板に水。普段から省内で、同様の不満を漏らしていた様子がありありとうかがえる。

「ところで、日米自動車交渉はどうなるんですか。抗戦論ですか」

誰かが質問した。

『NO! といえる日本』ですか」

「茶化さないでよ、そんな言い方。そんなに簡単じゃないから水越くんも悩んでいるんじゃないの」

この声は図書館司書嬢の杉井だ。

「そうなんです。すくなくとも数量規制は絶対に阻止するという点で、省内の意見は一致している。会談決裂をも辞さない。ところが、です。そのためにはまだまだやらなければならぬことが沢山ある。たとえばヨーロッパ諸国に、単なる賛意を取りつけるだけでなく、具体的な提案をしてもらうための根回しをすると

か、相も変らぬ対米一辺倒の外務省に新しい時代認識を植え込むとか、WTOへの提訴の準備を終えておくとか。自動車課（機械情報産業局）を超えて、全省が一丸になってことに当たらなければならぬことは多いんです。けれども省内ではそのための態勢がまったく取れていない。

それどころか、去年の局長辞任の後遺症が今でも続いている、省内派閥の対立が解消されていない。進取党の政権下で熊谷通産大臣が次期事務次官候補の内藤（正久）産業政策局長に辞職を求めたあの事件です。その報復に村山内閣の橋本通産相は進取党に近い熊野（英昭）事務次官を切りました。本人は「自主」辞任だといってますがね。

省内では進取党・大沢に近いグループを「四人組」または「反柵橋派」、民自党・梶山に近いグループを「柵橋派」というんですが、いまだに怪文書が出回って

は、右往左往している始末。ついには相手陣営の局長の業者との癒着スキャンダルを検察に垂れこむ、という騒ぎまで起きています」

「その四人組にCIAの影はないのかな」堀田が尋ねる。

「いや、ないとは言いません」

「とすると、こうした交渉の局面をにらんで送り込まれたエージェントとも考えられる」

「考えられますが、それはちよつと飛躍が大きすぎるように思います。ベースはやはり大沢・梶山（静六）の八・六戦争ではないでしょうか。それに大沢流のアメリカ型政治論が結びついた結果だと思っていますが」

「思い過ごしならばいいが。何派であるかどうかはともかく、通産にはCIAのエージェントが必ずもぐりこんでいる。用心するに越したことはないと思いますよ」

「はい、ぼくもそう思います」

四年後に行われる長野の冬季オリンピックで、世界五大陸をインターネットで結んだ大合唱が企画されているというので、その取材のため、磯崎は久々に通産省を訪れた。

通産省は以前から官庁街の食堂の中でも品質のよさではずば抜けた評判で、他省庁を訪れた者も、何かにつけて通産の地下食堂を利用したものである。その地下食堂も新館建設に伴って一変し、いまや一級のレストラン街である。クオリティーの高さはもちろんだが、明り取りの内庭が前面ガラス張りで見える通路があり、レストラン街にいろかぎり、ここがお役所の地下であることを忘れてしまう。

磯崎はいつものように中華レストランで昼食を済ませた。

通産には新館と旧館を結ぶ通路がある。その片隅に公衆電話が一台置いてあるのだが、その電話に向かって、背を丸めている男がいた。後姿なので自信はな

いが、どこかで会った男のような気がして、磯崎は記憶の人物ファイルを手繰った。

「通産、通産、通産……」通産の人物ファイルはそう多くはない。すぐ水越亭という名前がヒットした。帝都大学水島研究室で会って以来、四カ月が過ぎている。

この間にもいろいろなことがあった。まず、世間を騒がせた地下鉄サリン事件を上げなければならない。地下鉄・霞ヶ関駅を通過する上下五本の電車内で毒ガス・サリンが撒かれ、6人が死亡、5500人以上が重軽傷を負った（三月二〇日）。以後、始まったオウム真理教の捜査の過程で、再び、内務省復活の声が上げられた。

破綻した東京協和・安全の二信組救済に都が乗り出すことへの不満が高まる中、東京協和の前理事長と東京税関長の癒着が明るみに出て、蔵相を含む七人が処分された（三月十三日）事件も注目される。また、影の総理・石原信雄が民自・社文・

さきふれ・自連の与党各党および公正の推薦を受け、東京都知事選に立候補。自治省が満を持しての選挙戦であったのだが、青島幸男にあえなく敗れ去った（四月九日）。自治省が民自党と進めた「TOKYO（東京・大阪・京都・横浜・沖縄）制覇作戦」は挫折したのである。

そしていよいよ四月十二日、ワシントンのアメリカ商務省で、日米包括経済協議の焦点であった「自動車交渉」が始まった。そしてその二日後、『NO!』といえる日本』の著者・石原慎太郎が、なぜか議員辞職を表明した。

電話に聞き耳を立てると思われてもいやなので、やや距離を開けて、終るのを待ってから声をかけた。

「お久しぶり。いまは忙しい最中じゃないんですか。自動車交渉、日本もけっこう突っ張ってるじゃありませんか」

「いやあ、それがどうも……、ちよつとここでは……。庁内からは電話もできないありさまで。ああ、ちよつといい。

退庁後、中川くんに会うんです。あのときの大蔵省の男ですよ。時間があつたらあとで彼のところに寄つて下さい。ええと、これが彼の名刺です」

大蔵省は霞ヶ関の中央通りをはさんで、通産省新館の向かいにある。明るいモダンな建物とは対照的な、アーチ状の入口を持つ時代がかった建物だ。完成したのは一九四三年なので、まさに戦時中の建造物だというわけだ。

大蔵省も通産省と同様、最近は受けが悪く、官庁の中の官庁という輝かしいイメージはない。バブル崩壊後の長引く不況に打つ手を持たず、内需拡大を求める海外からの信用をも失った。

そうした中で、二信組救済をめぐり、幹部の不正が発覚したのだ。とりわけ中島義男主計局次長は東京協和の売春接待（ノーパンしゃぶしゃぶ）をうけた上、公務員法に違反する副業を行い、不正蓄財・脱税をしながら、依願退職で済ませてしまったことに対する国民の怒りは大

きかった。

大蔵分割論どころか大蔵解体論も現れ、「大蔵四〇年体制論」が出現するに至った。すなわち大蔵省の得意技である「護送船団方式」等は、戦時中の統制経済下でつくられたもので、建物同様、戦前の遺物。自由主義経済、市場原理に反する体制だ、というものである。これはまた、「日本型社会主義」という言葉によつて問題化された。

サラリーマンから納税者意識を奪う源泉徴収制度もそのひとつで、磯崎にも、共感できる部分が少なくはなかった。しかし、である。「アメリカは強いところを叩く」と言つた水越の言葉が気にかかる。これもまたアメリカの日本たたきの一環ではないだろうか、という疑問である。大蔵省の入口はどう見ても地上一階だが、公式には地階。したがって、六階建てに見える建物も、五階建てである。アーチ状の正門の左の柱に「大蔵省」、右の柱に「国税庁」の看板が掲げられている。

左手に入るとすぐ受付があつて、ここで面会の趣旨を告げる。これといつてなかつたが、ただ「取材」である旨を言つて、主税局・中川伸一に連絡をとつてもらつた。

霞ヶ関の政府出版物センターで時間をつぶしたので、まもなく五時。「すぐ退けるので、食堂で待つていてください」というのだが、こちらのほうは通産と違い、ゆったりくつろぐという気にはなれない。

古い建物なので、天井もさぞや高かつたことだろうが、いまやそのスペースにはがっちり空調ダクトが埋め込まれている。しかもそれ自体がもう古いのである。今だったらもう少しましな改装をするだろう。よく見れば空調の鉄板が剥き出しのところさえある。

「ビール・セット」なるものを頼むと、小さなジョッキに、これまた小さな冷奴と枝豆がついてきた。どこをとつてもおよそ贅沢とは縁のない庁舎構造で、とて

もノーパンしゃぶしゃぶとは結び付けようがないのである。

が、磯崎は「これが曲者なのかもしれない」などと思つてみる。

「やあ、お元気ですか。水越は七時ころになるといつてましたから、もう少しここで時間をつぶしましょう。ところでどうなりました、あの評論家先生は。たしか磯崎さんが追及しておられたんでしたよね」

ほどなく中川が現れ、おなじセットを注文した。

「いま、都財政を立て直すには行政のプ口が必要だ、という論調で、盛んに石原信雄の応援をしていましたが、CIAとの関係は謎のままです。そういえば、宗像という岩槻鉄人の市長選挙とおなじ選挙参謀が石原陣営に加勢したという未確認情報もあります」

「そのうえ……」と話を接ぐうとして、磯崎は躊躇した。「そういうば、この話は前回の集まりでは出ていない」ことに

気づいたからだ。岩槻の政策事務所の池島佳苗が石原選挙事務所に入ったという未確認情報もあつたのだ。

その後、彼女は沢の議員秘書として、議員会館に詰めている、という話もある。この確認は知り合いの議員秘書に問い合わせれば簡単に済むことだったので、なぜかまだやっていない。

「ところで磯崎さん、私もねえ、あれ以来考えてみたんですが、こんな結論に達したんです。アメリカは強いところを叩く、というあの水越の説ですよ。あの説が正しければ、アメリカのターゲットは大企業、民自党、通産省、大蔵省ということになる。これが日本経済を支えた四本柱です。

そしてまず、大企業がやられた。次に民自党がやられ、通産省がやられた。とすれば、次は大蔵省ということになる。というよりも、もうそのシナリオは始まつている。そう思えてならないんです」
「東京協和の接待汚職ですか」

「いや、あれは明らかに国内的な問題ですが、そういう直接的な問題ではなく、円高攻勢だとか、金融自由化、そしてビッグバン……そうしたものが日本経済を弱体化させ、大蔵省の存在意義を奪っていくことになる、ということですよ」

「だからといって、護送船団方式を維持するのは問題でしょう。結局は天下りにつながる」

「それはおっしゃる通りかもしれませんが。しかし、たとえば企業の、あるいは銀行の営業力にはさまざまなファクターがある。アメリカが嫌う系列だってそのひとつでしょう。しかし、アメリカ的格付けの考え方の中には、こうした信用が持つ力は含まれない。その格付けに、いま日本の企業は振り回されようとしています」

「たしかに何かの意図をもって、勝手な格付けの見直しをされてはたまらないですよ。タイミングによってはいじめにもなる。でも、グローバルな基準で格付

け評価をすること自体は必要だと思えますがね」

「気になるのはそのタイミングなんです。大和證券のニューヨーク支店の不正申告問題（九二年三月一日）もそうでした。

たしかに違法には違いないが『飛ばし』は穴埋めの一時的代替策として日本ではふつうに行われていた。早く自主的に手当てするのを待つ。そのチャンスを与える。これが日本的風土の中の慣行、武士の情けというやつです。

それに対して、情けをかけるのは違法だと、バツサリくる。大和証券ばかりではなく、大蔵省も信用できないぞ、と、そういうイメージが定着するタイミングを見計らったようにやってくる」

「むしろあれは、最初から大蔵叩きが目的でしょう。大蔵省が大和の不正を隠すと予想して、隠すのを待っていた」

「そうしたことがこれからも増えるんじゃないかと心配しているんです」

「そうかもしれませんね。しかし、大蔵

省ももっとガラス張りにならないと。そこそやっていたら、そりゃあやられですよ」

七時ということだったが、多少は遅れるだろうとたかをくくって指定の店に行った。中川と水越がシマにしている赤坂の小さなクラブで、和服の似合うママが、手伝いの若い娘と二人で切り盛りしていた。

なんの飾り気もない急な階段を上がり、扉を押すと、ひばの樹のにおいのようすがいい香りに包まれた。「いらっしやいませ」というママの声は容姿に似合わず若やいだものだったが、すぐ後から「よう、きたか」という水越の野太い声が追ってきて、今日の集まりがなんの艶もないものであることをあらためて思い知らされる。

入口の左手がすぐカウンターバーで、その奥に白木造りの間仕切りで仕切られた三つばかりのボックス・シートがある。

まだ客は誰もおらず、カウンターに座っていた水越とともに、奥のボックスのひとつを占領した。

「今日は驚いたでしょう。ぼくも驚いた。でも、あんなところから電話していたおかげで、こうして会うことができたわけです。いや、もう通産省は完全におかしい。どこで誰に話を聴かれるか知れたものじゃあない。どちらかの派に属して、仲間で周りを固めているものは別ですが、ぼくのような一匹狼は純粋な仕事以外で職場の電話を使うことができないんです」

「それであんなところから電話していたんですね」

「そうなんです。たかが中川に連絡していただけないですけどね」

「おれへの電話がたかが、かね。おまえのガス抜きにとって、なくてはならない電話なんじゃないのかね」

「はは、そうかも知れませぬね」

「ところでね……」水越は足を組替える

と、身を乗り出して話し始めた。

「やはりいるようです。通産の中にスパイがね。しかし、それと両グループの誹謗中傷合戦とが重なってしまつて、なにを信じていいのやら、まったくわからない状態になっている。やつがスパイだという噂を流す者もありますからね」

「つまり、スパイが中傷合戦を隠れ蓑に、活動している、というわけですか」

「そういうことです」

「なにか、心当たりでも」

「まずは、いま大詰めを迎えようとしている自動車交渉について、順を追つてお話ししましょう。

ご存知のように今回の自動車交渉は二年前に始まったものです。そして、昨年の二月、つまり一九九四年の二月十七日、細川「クリントン会談で、輸出削減量を具体的な数字で示せ」という数量規制の要求に対して、細川首相が初めてNOと言った。歴史的な「決裂」が起こったわけです。

日本のマスコミは最初、熱狂しました。

しかし、数日するとその熱はすっかり冷め、アメリカの報復を恐れる論調に代わったものです。この隙を攻められ、モトローラの自動車・携帯電話への参入要求に屈する結果になる。これを演出したのがカンター通商代表と大沢八郎です。

このときもCIAは首相のNOを事前に察知し、待っていたのだと思います。が、本当の決裂ではなく、仕切りなおした。しかし、打開の道はなく、問題がWTOの場に持ち込まれる可能性が高かった。

WTOの場に持ち込まればヨーロッパは完全に日本の味方。日本が勝利し、スーパー301条は二度と抜くことのできない宝刀になります。そのほうがスッキリしてよかったのかもしれない。

ぼくが前に『すくなくとも数量規制は絶対に阻止する点で、省内の意見は一致している。会談決裂をも辞さない』と言ったのは、その覚悟ができていて、という

ことを含んだことだった。

だから、今度のカンター通商代表と橋本通産相の会談でも、決裂含みで推移するはずでした。決裂は双方にとって重いツケを負うことになるので、舞台裏は緊張するはずです。ところが、日本側が密かに「自主プラン」なるオプシオンを策定すると、アメリカの態度は一変し、さまざまな揺さぶりをかけ始めたのです。五月の四日にバンクーバーでのカンター・橋本会談が物別れに終わるとすぐ、クリントンが「強硬措置」を示唆し、決裂後の六日には国家経済会議（NEC）が、日本への制裁リストを公表。日本のWTO提訴（五月十七日）に対しては日米航空交渉での対日制裁をぶつけるなど、日本の手の内を見透かした、余裕の反撃を繰り出してきた。

に関する電話ができない、話ができない。庁内は探りあいの修羅場と化してしまっただけです。

こうなればもう、ペースはアメリカのもの。自主プラン、オプシオンをはさんだ攻防戦が始まり、やがて日本に白旗が上がるでしょう。大臣は今日、ジュネーブに飛び立ちましたが、これはもう明らかに手打ちの旅です。アメリカの報復が始まって、それに対応できる省内事情にはないからです。

ぎりぎり突っ張った、という筋書きだけはしっかりと書いて、妥協です。自主プランというのはいくらかの数字です。規制ではないにしても、何らかの数字の書き込みを受け入れる。アメリカはこれを数量規制と解し、日本はこれを、あくまでもアメリカの自主的想定に過ぎないと解す。日本、お得意の玉虫色です。でも、通用するのは国内だけでしょう。世界に玉虫色はない。合意文書に書き込みを認めた日本の言い分は通じない。た

だ、アメリカの解釈はWTOの方針には反している。この点が今後どうなるか、です」

結局、この水越の懸念は的中した。ジュネーブのアメリカ通商代表部で行われた橋本・カンター会談は三日目によりやく合意を見せ、NEC（国家経済会議）の対日制裁が発動される直前の歩み寄りとなった。双方の解釈がずれたまま、合意文書が発表され、対日制裁の解除と日本のWTO提訴取り下げがバーターされた（六月二十八日）。

クリントン大統領はこの数字を早くも「数値目標」として国の内外にアピール。アメリカ中部六州のいわゆる自動車州を中心に、翌年の大統領選再選にむけた票固めに走った。

また、このアメリカの外交的勝利の直後、カンター通商代表は、交渉の勝利に感謝して、CIAに真っ先に感謝状を手渡した。

この噂を伝え聞き、さすがの通産省も

放つては置けなくなった。両派の対立に油を注いではまずいので、密かな調査ではあったが、いちおう局長クラスの執務室を中心に盗聴防止のスクリーニングをかけたのである。しかし、盗聴機に類するものは何も発見されなかった。

自動車メーカー各社でもおなじ結果だった。

ところが、一九九五年一〇月十五日の『ニューヨーク・タイムズ』が「日米自動車・同部品交渉のジュネーブでの最終局面で、CIA東京支部と、国家安全保障局（NSA）の電子盗聴装置を使って通産省首脳と自動車メーカー担当者などの会話を盗聴して、カンター通商代表に報告していた」ことを報じた。

実はこのCIAによる盗聴記事はすでに『ロサンゼルス・タイムズ』が七月二三日付で報道していたのだが、これには日本のマスコミも気づかなかった、というお粗末もある。

またしばらくして、前年の細川・クリン

トン会談でも、根回し役であった木内特使のホテルから日本への電話が盗聴されていたことを、NBCテレビが報道している。

この、CIAのとてもない所業に対して、一〇月二二日、四極通商閣僚会議の機会を捉え、橋本通産相はカンター通商代表に対して、「大変不愉快だ」との不快感を表明。それだけで、このCIA盗聴事件は収束を見せた。

おなじ日、沖縄では九月四日に起きた米兵による少女暴行事件に抗議し、日米地位協定の見直しを求める総決起大会が開かれ、五万八〇〇〇人が参加して騒然としていた。

何かが変わる、変えなければならない。そんな思いが人々の心の中に芽生え始めたとき、再び大沢が登場した。

「アメリカ海兵隊は必要だ」「地位協定には手をつけず、運用で解決すべきだ」すなわち、アメリカの代弁であった。

CIAの謀略 第6章「反撃」

磯崎正太郎は朝のワイドショーなるものを、あまり真剣に見ることがない。自宅近くに仕事場を借り、自分のペースで仕事を進めるので、定時の出勤というものがない。そのため、起床時間が遅くなりがちで、ワイドショーの時間帯が朝のアイドリング時間と重なるからだ。洗面の途中であることもあれば、まだ寝ぼけ状態の頭を引きずっていることもある。

それに、すつきりしたら、まずかじりつくのはその日の新聞である。これに目を通さぬ限り、一日が始まらない。

もともと、この日（一九九五年一〇月二二日）は少しちがった。昨晩の深夜ニュースで橋本通産相がカンター通商代表に「不快」を表明した、と簡単に報道されたのだが、その詳細が取り上げられるかもしれないと思ったからだ。

なにしろCIAが通産省を盗聴してい

た、という重大事件だ。簡単な「不快表明」だけでは収まらない、具体的な要求がなにかきつとあったはずだと思うのは当然のことだろう。

「アメリカ軍基地の七〇パーセントが沖縄に集中しているという事実は、いくら沖縄が東アジアで戦略的に重要な位置にあることを勘案しても、異様というほかはありませんね。沖縄県民の怒りはよく理解できます。もっと日本全体が防衛を分担するという意識を持たなければいけません。」

と同時に、少女の痛ましい事件が二度と再発することのないよう、早急に手を打つ必要がありますが、地位協定の見直しともなると実現までに相当な時間がかかると思います。より現実的な対策が必要なのではないでしょうか」

昨日、沖縄の宜野湾市で開かれた、沖縄県民総決起大会の映像が流れる前で、篠山啓志がニュース解説をしている。

「篠山め、結局は、防衛分担という名の

基地移転でお茶を濁そうというわけか」

憤りを覚えるのだが、まだ眠気が抜けない。磯崎はあくびをかみ殺しながら、次のニュースを待った。しかしいつこうに四極通商関係会議に関するイギリスからの外電が取り上げられる様子はない。やむなく、いつものように朝刊を手にとった。

するとそのとき、ハンガーに吊るし、鴨居にかけたままの上着のポケットで、携帯電話が鳴った。

「堀田だろうか、それとも水越」

「不快表明」のニュースを聞いた後、どちらも磯崎から電話しようかと思っていた相手だ。

「やあ、磯崎さん、水越です。まったく、何とも情けない限りで。どうやらあの『大変不愉快だ』という表明だけでおしまい

のようですよ。省内にも、これ以上追及しようとする声はほとんどない」

「本当ですか。予想はしていたが、それでもひどいですね」

「やっぱり内部から何かをするのは無理なようです。磯崎さんのようなひとに動いてもらわないと」

「いやいや、わたしにできることなんてなにもありませんよ。でも、何かしなければ、と、考えていたのは事実です」

「そうですか、そいつはありがたい」
「堀田に相談してみます」

「ぜひお願いします、助かります。では、ぼくのほうで中川には連絡を入れておきますので、近いうちに打ち合わせでもやれたら」

「わかりました。ところで水越さんに電話してもご迷惑ではないのですか」

「そうですね。まずいことが出てくることがあるかもしれませんが。とりあえず中川を連絡役にしておきましょう。細かいことは追ってまた」

携帯を常用していない磯崎は、いつもの習性で、通話が終るととりあえず一端電源を切ってしまう。それから慌てて再度通電するのである。このときも、堀

田に電話するため、慌てて電源を入れなおした。するとタイミングよく、その瞬間に電話がかかってきた。堀田からである。

「おい、聞いたかい、あきれたものだ。CIAによる盗聴が明らかにになったとき、政府は何も動こうとしなかった。マスコミにせつつかれるかたちで野坂（官房長官）（浩賢）がししぶ『外交ルートで事実関係を照会する』と国会答弁しただけだ。そんな照会にアメリカが答えるわけがない」

「二応事実なら捜査機関が対応する、と言ってますがね。野党の国会質問も形式的なら、政府答弁も形式的。馴れ合いで、怒りの影もなかった」

「昨日の橋本の抗議もそうだったようだ。春田の話では、通産の担当記者からの又聞きだが、橋本はそもそもこの件で抗議するつもりはなかったそうだ。ところが、外国の記者から質問を浴びて、抗議する

ほかなくなつた」

「フランスを始め、ヨーロッパではCIAの活動に対する評価は厳しいですからね。当然、日本も何らかの報復を考えているんだろう、それを聞きたい、という質問だったんでしょいうね」

「日本もCIAの諜報活動に対する厳しい対応を見せなければ、国際社会で通用しなくなるだろう。主権国家とはとてもいえない」

「それこそ、大沢の言う『ふつうの国』ですね」

「ほんとうに、なぜあいつらがこういうときに鳴かず飛ばずなのかが不思議でならない。本当なら先頭に立つべきだろうに」

「彼らの正体はつきりした、ということでしょう。それだけです」

「そうだな。あいつらは結局、兄貴がぶら下げている腰の拳銃を欲しがって、駄々をこねているにすぎないわけだ。兄貴はどこまでもカッコよく、自分も拳銃

を下げれば兄貴みたいになれると錯覚している」

「だから兄貴を悪くは言わない」

「言えない」

「これから時間、ありますか。携帯電話だからといって安心はできない。あなたと私のどちらかがマークされているとすれば、スクランブルがかけてあつても一瞬で解読されるようですから」

「その通りだな。これから例のところで落ち合うとしよう」

磯崎と堀田は、また代々木にある喫茶店で落ち合った。フロアが広く、照明が自然光に近いため、奥が暗い店である。

「これはアメリカの情報専門誌『マザー・ジョーンズ』の九五年五、六月号だ。かいつまんで言うところのことだ。ほら、この前の水島研究室での通産省の水越の発言を覚えているだろう。クリントンが産官共同で燃料効率の高い自動車の開発をしているという、あの話さ」

堀田が雑誌を示しながら解説する。

「P N G Vプロジェクトですね」

「そう、それだ。そのプロジェクトに関連してC I Aが日本の自動車メーカーが開発中の燃料電池（電気自動車用バッテリー）の非公開技術を密かに入手し、ビッグ3（米自動車三大メーカー）に、提供した、というんだ」

「完全なスパイ行為ですね」

「そう。しかもこの記事によれば、C I Aのエドワード・ラトラック顧問が『C I Aは日本国内で産業スパイをしている』と認めているそうだ。このP N G Vプロジェクトでも京セラが標的に上げられている」

「さて、そこまでいわれた日本はなにをすべきか、ですね」

「そう、そいつが問題だ。この二月にフランスが一人のN O Cを含む五人のC I A要員をスパイ容疑で追放した。日本でも、ああした措置ができればいいのだが」

「あれは変な事件でしたね」

「カネと色、いかにもスパイ事件という

感じがしたな」

フランスの『ル・モンド』紙によれば、C I Aはフランス政府の通信分野の情報を入手するため、パラデュール首相の若い側近に狙いを定め、環境団体の広報担当という非公式カバールを纏った女スパイがパーティーの席で側近に言い寄り、何度かの逢瀬を重ねた後、寝物語に「外交や経済の情報を提供してくれたら一回5000フランを支払う」と持ちかけた。

これを察知したフランスの諜報員が「あの女はC I Aのスパイだぞ」と告げた上で「そのまま関係を続けてくれるよう」要請。二重スパイとなった側近がC I Aの活動を報告したために、五人の容疑が固まった、というのだ。

「追放するには容疑を特定する捜査能力、追放できる法的権限、アメリカに対して実行できる政治力、この三つが必要になるでしょうが、どう考えても日本にはその一つもありません。フランスのような対抗措置は取れない、ということになり

ますね」

「つまり、それを作ろう、という声が出るだろう」

『「スパイ防止法」ですね」

「まあ、そういうことだろうが、あれはだめだ。スパイ防止法は確か、一九八五年、中曽根内閣時代に民自党の右派宗教団体に近いタカ派が議員立法として打ち出したもので、ソ連や中国のスパイ活動の防止を名目に、左翼や市民団体の行動を監視しようとしたもの。」

冷戦構造を前提としているのでC I Aに対する監視の必要性についての配慮がない。というよりむしろC I Aの諜報活動を手助けするための法案だ」

「結局、市民団体の反対で、廃案になったものですね。やはり、どこがどんな手段で防止するのかを明確にしないと、やたらに警察の捜査権限ばかりが肥大化してしまう」

磯崎が心配するのは、捜査権限の肥大化が人権を圧迫する可能性である。政府

が国民をスパイする、というのでは、何のためのスパイ防止なのかわからなくなる。この点については堀田も同感で、以心伝心、細かな説明をしなくても問題点が伝わるのだ。堀田は間髪を入れずに反応した。

「要はそうならないようにするにはどうしたらいいのかだ」

「ひょっとしたら、水越さんたちはそうした問題意識もないままに、防止法を作ろうというんじゃないでしょうか」

「あるいは、日本版C I Aをつくらう、とかな」

「それも危険ですね。世界と対峙できる政治力がないままに、捜査力や追放権限を手にしても、報復合戦でめった打ちに会うのは目に見えている。そうなると、そのストレスを国内の政敵に向ける恐れが出てきます」

「組織は一度作ると、何かの名目を見つけては自己増殖するものだからな。そうになると始めに対象を海外の諜報活動に

限つても、いつのまにかそれを越えてしまう」

「その自己増殖を阻止する仕組みを同時に作らないといけないわけですね。まあ、しかし、スパイ活動に対する何かの対抗措置が必要なのは明らかです」

「とにかくまず、水越や中川、春田がどう考えているのか、その辺を聞いてみるほかはあるまい」

広々とした空き地の真中を舗装した道路が走る。クルマがかりうじてすれ違えるほどの道路の両側に、アカシヤの樹が立ち並び、遠近画法の絵のように一点に向かって収斂していく。

東京にもまだこれだけの土地があったのだ、と思う。その先に、柱が太く、窓の小さいくすんだ色の大きなビルが、どっしりと建っている。水島経済政策研究室の入っている、帝大経済研究棟だ。

今日の水島研究室の付属会議室はすっかり片づけができていて、未整理の資料

の山も姿を消している。しかし、参加者が多いため、会議室はずっと狭く感じられる。

予定の午後三時を少し回ったところ、前橋経済大学助教授となった溝口幸一の司会で、水島邦彦帝都大学教授が立ち上がり、短い挨拶をした。政府の審議会を掛け持ちする白髪の好々爺だが、ネクタイの趣味のせいか、姿勢が良かったためか、実際の年よりはかなり若く見える。

が、磯崎はこの会議の雰囲気にも早くも違和感を覚えた。いつもの例会とは別にセツトされた会議であることは明らかに、磯崎や堀田が発足させようとするものとはズレていた。

案の定、席上に配られた進行表には「違法諜報活動阻止機関研究準備会」というタイトルが打たれていた。磯崎は、学者や役人が得意とするこうしたカッチリした会議は苦手なのである。と同時に、もうすでにこのタイトルで案内が送られ、タイトルが一人歩きを始めている。「そ

れで大丈夫なのか」という思いがcaすめるのである。

もつとも、進行表の最初には「現状の分析」とあり、通産の水越亨が報告をすべきだったが、大蔵の中川伸一が水越の言葉を途中で引き取つて、緊急報告をするところを見ると、あまりカッチリと組み立てられた会議ではなさそうだった。タイトルの一人歩きも磯崎の思い過ごしかもしれない。

「容赦ない、ということなのでしょう。戦争なのだから仕方ない。戦争なのだという認識がなかった私たちが甘かったのです」

一九九五年九月二六日大和銀行のニューヨーク支店で米国債の帳簿外投資を長年続けて失敗し、穴埋めに証券を無断売却した日本人行員（井口俊英）が逮捕された。この金融取引はコンピュータによるもので、行動はFBIにもCIAにも完全に把握されていた。

ところが、大和銀行も、報告を受けた

大蔵省も十一億ドルにのぼる巨額損失をアメリカ金融当局に報告せず、カリブ海のケイマン諸島にあるトンネル会社に損失を移転して隠蔽を図ろうとした。が、それが不可能と見るや、頭取が辞任、会長も身を引き、大蔵省はといえば大和銀行に対する業務改善命令を出すことで、体面をとりつくろつた（一〇月九日）。

しかし、米連邦準備制度理事会（FRB）などのアメリカ銀行監督当局は納得せず、大和銀行のアメリカ追放を決定し、九〇日以内の業務撤退を命令した。

営業停止ではなく、追放というのは異例な措置で、大和の信用失墜のみならず、大蔵省の国際的な信用失墜、日本の金融界全体の信用失墜につながる事件になった。

「CIAは金融情報をも掌握し、アメリカの利益になるよう、効果的にリークする。今回の事件でこのことが明らかになりました。つまり、事件は今後も繰り返す、ということです。アメリカは次々に

日本の金融システムに挑戦してくるにちがいありません」

中川の説明に対して、長い髪を後ろで束ね、化粧はないが、はつらつとしたイメージを持つ図書館司書嬢が質問する。杉井美紗である。

「すみません。いまの話、よくわかりませんでした。結局、日本の金融界の情報公開、ディスクロージャーが進んでいないということなのでしょう。隠蔽体質を捨てるほうが先だと思いますが」

「それはそうです。それはそうなんです。日本の金融界の不正に対してはFBI、CIAはもちろん証券取引委員会（SEC）、財務省関税局など四万八千人の調査員が一年もかけて調査したものだ、といいます。こんな大きな損失ではないにしろ、何か出てきますよ。叩いてほりが出ないという世界ではないですからね。要するに、日本のシステムが狙い撃ちされている。システムの改善が追いつくペースではないんです」

「でも、やっぱり隠蔽はだめよ。叩かれても仕方がないわ」

「ちよつと話がずれてやしませんか」

水越が慌てている。以前にも見かけた厚生省の男、大貫隆一が立ち上がった。

「中川さん、言わんとすることはわかりますが、いまは逆風が吹いている。二信組に加えてコスモ信組、兵庫銀行の経営破綻。問題は和だけじゃないのだから、理解はされませんよ。金融問題に関してはこしばらく、石抱きの刑に黙って耐えるしかないんじゃないですか」

「それはそうかもしれませんが、これだけはいつておきます。クリントン政権になつてから諜報の主軸は国防から経済に移りました。これは政権の性格が変わったことによります。クリントンが新設した経済安全保障会議（NEC）は従来の国家安全保障会議（NSC）をしのぐ政権の中心組織になりましたが、今度の自動車交渉でも、ここが交渉の主体になっていました。

この構想の下、CIAにも経済諜報を中心とする第五局が編成され、昨年はFBI、国防総省のスタッフを集めて『国防諜センター（NACIC）』を発足させています。また、CIAの関連組織である国家情報会議（NIC）スタッフに国際金融のエキスパート、ロバート・フォーバー財務省顧問が起用されている。

一方、FBIも米国内の防諜活動を担当する専門部署を開設したし、来年にはスパイ取締法の改正強化を狙っています。また、昨年の九月には対外諜報監視法が改正され、スパイ活動の容疑がかけられた者は令状なしで監視・盗聴されるばかりではなく、自宅・事務所の家宅搜索までできるようになっています。これには人権上、批判が強いんですね。

つまり、私たちが手をこまぬいている間にも、アメリカは着々と経済スパイ活動と、経済スパイ活動の防止に力を入れていくんだということです。いま、こんな

にひどい、ということは、これからもっとひどくなる、ということの意味しているのです」

ここでマイクが再び水越に戻った。

「この一〇月、商務長官が『海外の公共事業入札で米国企業と競合する外国企業がどんな不当手段を用いているか』と題する秘密文書を議会に提出しています。

CIAに詳しいジャーナリストの矢部武氏によれば、これには『外国企業一〇〇社が賄賂などの不正手段で海外の公共事業を獲得し、その総額は450億ドルに達する』とあつたそうです。

CIAはこれらの不正行為を国務省に報告。国務省が外交ルートを使つてその企業、もしくは、発注政府に抗議し、アメリカ企業の受注を有利に導く、というわけですね。

ある意味では、贈収賄を監視する国際警察なんです、アメリカ企業は対象外だし、違法性の基準は独断と偏見。アメリカ企業が政府と結んで、食糧援助やOD

A、先端兵器の輸出などを賄賂代わりに使っていることには知らん顔なんだから頭にきまず。

ともあれCIAの支援で海外の公共事業にありついた総額は数年間で300億ドルにのぼるといいます。たとえばCIAが不正を暴いたことで、フランスに行きかけていた総額60億ドルのエジプトの航空プロジェクトが、アメリカのマクドネル・ダグラス社とボーイング社の共同チームの手に落ちています」

「その国家防諜センターについて、もう少し詳しくご説明ください」

「はい。これは九四年五月に発足したスパイ防止組織で、アメリカ国内で活動する外国の情報機関や産業スパイからアメリカ企業を守ることを目的にしています。

スタッフはFBI、CIA、NSA（国家安全保障局）、DIA（国防情報局）などのカウンター・エスピオナージ、すなわち防諜専門家で、事務局はCIAに

あります。

主な活動は防諜そのものですが、アメリカ企業からの防諜対策についての相談に応じたり、社員の防諜意識向上のための教育やトレーニングをも引き受けています」

「企業のほうの評判といえますか。本当にそういうことを必要としているのでしょうか」

「教育トレーニングについて言えば、このサービスは今年の始め、NACIIC（国家防諜センター）が実施した全米の主要企業1400社に対するアンケートの結果、要望が強かったために始めたものです。必要としている企業がかなりある、ということでしょう」

「日本の企業はどうなのでしょう」

「盗聴対象として名指しされた京セラにしてもトヨタにしても、事実調査をしたが盗聴された気配はない、とし、社内体制は万全、といっています。

こうした楽天性は政府もおなじで、私ど

も通産省の機械情報産業局情報処理振興課には企業のコンピュータ・システムに侵入され、何者かに資料が改ざんされた事件だけでも月に一〇〇〜二〇〇件の報告が上がってきます。

防諜意識の甘さを示す数字なんです、それでも省としては『情報収集はアメリカばかりでなく、すれすれのところで各国がやっていること。おのおのの企業が自己防衛していくしかない』というだけです。

なにしろ対外的に最大の機密事項を抱える外務省でさえ、窓ガラスを防諜用にしたのは新庁舎になった今年から。昨年までは筒抜けだったわけです。かく言う通産省だってお寒い限り。重要な電話はホテルからではなく公衆電話を使い、なんて、その程度のことではとても防諜対策などとはいえませんよ」

中川にしても水越にしても、短期間のうちにすっかりCIA研究家になってしまっている。相当いろんなものを読み

漁ったのだろう。その学習意欲には舌を巻く。

「初歩的な質問ですみませんが、NSAとかDIAというのはどんな組織なんですか」

「アメリカの諜報機関は数が多くて複雑なんです。次回までには一覧表にしておきます。簡単に言いますと、CIA長官をヘッドとする情報コミュニティーというのがあり、これは主だった一三の諜報機関から構成されています。CIAもFBIもNSAもDIAも、すべてがその構成メンバーです。

CIAは独立機関ですが、FBIは司法省、NSAとDIAは国防省に所属しています。国防省には陸・海・空それぞれの軍事諜報機関がありますが、これらの機関を束ね、国防省としての姿勢を表するのがDIA。三軍とは独立し、暗号解読専門に設立されたのがNSAです。

NSAの前身は日本軍の暗号解読にも

活躍した古い諜報機関で、潜水艦のスクリー音などを含むあらゆる信号（シグナル）を傍受することを任務としています。

これをシグナル・インテリジェント、略してシギントと呼んでいます。電話、コンピュータ、衛星通信など、通信技術が発達した現代、NSAの任務は巨大化しており、予算はCIAの数倍、人員でもCIAを上回るアメリカ最大の諜報機関に成長しています。

任務の重大性もあって、予算や人員構成はCIA同様、秘密になっています。国防総省の管理下にありますが、実際の運営は国防総省と中央情報局（CIA）の協議で遂行されます。

独自の衛星を所有するほか、世界各地に二〇〇〇の通信基地を持っており、日本でも三沢や沖縄の『像の檻』と呼ばれる短波基地はNSAのものだといわれています」

「公表はされていないでしょうが、予

算とか人員はどの程度だと予想されているのでしょうか」

「CIAの人員は二万人弱。予算は三千億円。情報コミュニティー全体で二〇数万人、年間予算は三兆円と推定されています」

その数字の大きさに、誰もが息をのみ、会場が一瞬静まり返った。各自が頭の中で、いろいろなものと比較している。磯崎も日本の国家予算と比較して、アメリカの諜報ソフトと張り合うのが現実的ではないことを、あらためて確信した。

「一応、アメリカの対日諜報戦略の現状がご理解いただけたことと存じます。それを踏まえ、次はわれわれに何が可能なのか、何をすべきなのか、これを話し合いたいと思います」

司会者は再び溝口助教授である。口火を切ったのは堀田であった。

「まず、できないこと、やるべきでないことははっきりしています。われわれに

はCIAのような謀略や工作は不可能です。平和ボケ、という言葉が象徴するように、まずはそのような素地がない。身構えとか意識とかいうものは短期的に形成するわけにはいきません。

また、工作を要するような積極的な対象が見当たりませんし、工作の見返りが期待できない以上、予算にも限りがあります」

アメリカのあまりに巨額な予算規模を前にして、参加者一同が言葉を失った直後なので、堀田の言葉には説得力があった。たちまち、大きな方向が決まったといえる。

「ここでの議論をもつばら防諜すなわち日本における違法な諜報活動の阻止に絞ろう、というのが堀田さんのご意見のようですが、そう理解してよろしいですか」

堀田がうなづく。

「ご異議がなければその線で議論を進めたいと思いますが、いかがでしょうか」「意義はありません。が、やっぱりフラ

ンスとまでは言いませんが、諜報活動に不正手段を用いたり、謀略工作を行った者は国外退去させるぐらいの実効性あるものにしたいですな」

「いや、それも難しいと思いますね。法整備はできたとしても、諜報活動の捜査には相当の人材が必要だし、追放には国としての手腕や度量も必要になる。堀田さんではないけれど、それが今の日本にあるとは思えません」

「いまはないにしても、それを目指して鍛えていかなければならない」

「いいえ、もっと基本的なことから始めたほうがいいと思うわ。たとえば外国研究、地域研究。防諜活動なんて、それからだわ」

「いや、それだけなら外務省もジェットロもやっている。そんなもの、創るといつたら、おれたちの研究では不足だとかのか。だったら人をよこせ、カネをよこせ、といい出すに違いない」

「いいえ、外務省やジェットロの情報は有

機的に結合されているとはいえませんが。その他に総合商社の海外情報なども集めて、分析し、提供する、そんな機関はまだないでしょう。それだけでもベンチャー企業なんか ずいぶん助かるわ」

「さっき話に出たNACIC、国家防諜センターですか。あれなんかも参考になると思いますけれど」

「いやいや、このようにランブルに話しているても埒があかない。ひとつ整理をしてみませんか。まずは、今日日本が何をやっているかを把握すること。ついで、それを越える目標を何か立て、その何かをするには何が足りないかを炙り出し、それを補うものを法制面と組織面で明らかにする。最後に、意識などの人的な部分をどうするかを検討し、再び何をする、という前提に立ち返って、目標に修正を加える」

「いま、春田さんから、議事の進行に対する、すつきりした意見が出されました。これを順に検討していくのもよし、ある

いはプロジェクトチームに分け、つけ合
わせるという手もありそうです。

まずは、日本が今何をやっているか。
つまりこの国の諜報の現状を共有してお
くことにしましょう。春田さん、いかが
でしょう」

「はい、わかりました。では私から日本
の諜報活動の現状について、簡単にまと
めておきます。

まず、日本にも各諜報機関を統合する
『内閣合同情報会議』というのがあり、
その下に六つの諜報機関が配置されてい
ます。内閣官房の『内閣情報調査室』『内
閣安全保障室』、外務省『国際情報局』、
法務省『公安調査庁』、防衛庁『防衛局』、
警察庁『警備局』の六つです。

ただこれは代表者会議に過ぎず、たが
いの情報を刷り合わせる、といったこと
はありません。というよりもむしろ、省
庁のセクシヨナリズムから、情報を隠し
あう傾向さえあるようです。

この中で最大のものはいうまでもなく

警察庁『警備局』、いわゆる公安警察です。
警備局設置の目的には、あらゆる情報の
収集、というのがあって、CIAの関係
者をマークするのはこの外事課が担当
することになっています。

しかし警備局の関心はほとんど国内に
向けられていますし、外事課の関心は
もっぱら在日外国人や共産圏諸国のスパ
イとの接触です。外事課は通信所を各地
に持ち、通信傍受をしています。これ
もほとんどが共産諸国対応です。

そのためCIAとは蜜月でしたが、最
近はやや距離ができています。防
衛庁『防衛局』のほうは相変わらずの蜜
月です。

内閣合同情報会議に加わっていない諜
報類似機関（情報機関）が、防衛庁統合
幕僚会議の『情報本部』、通産省の『日
本貿易振興会（JETRO）』、海上保安
庁『警備救難部警備第二課』、労働省労
政局『労働組合課』。防衛庁統合幕僚会
議の『情報本部』はアメリカの国防情報

局と同様の防衛情報の総元締め。『労働
組合課』はいわゆる組合活動家の情報収
集で、内閣調査室や公安調査庁同様、冷
戦構造に基づく共産主義者対策、思想傾
向把握が主な役割です。

こうした冷戦構造の産物は公安調査庁
同様に『無用論』の風にさらされており
まして、行政改革の中で削減が避けられ
ないものと見られています。

破壊活動防止法（破防法）の実行部隊
として結成された公安調査庁は破防法そ
のものが使いにくい法律でもあるため、
存在基盤を見出せずにいましたが、オウ
ム真理教の事件で息を吹き返し、オウム
への破防法適用に期待をかけておりま
す。

しかし、これらの各機関は互いに自己
の縄張りを脅かす存在でもあるため、し
ばしば足の引っ張り合いを演じます。自
己の手で、オウムに引導を渡したい警察
庁は、オウム事件に対する破防法適用に
おしなべて消極的です。

以上のほか、警視庁公安をはじめ、各県警本部の公安部があります。これが警察庁警備局と一体ではないことが、オウム事件で図らずも表面化しています。捜査をめぐって、警察庁が警視庁長官に抗議し、異例の長官辞任事件が起きています」

春田は日本の諜報機関の概略を紹介し、続けて、その能力、活動などを紹介した。その中でも注目を集めたのはシギント、つまり通信の傍受態勢である。

警察庁にはアジアICPO（国際刑事警察機構）のアジア送信所と秘密の通信基地があり、後者（東京都日野市三沢に施設があるが、機構上、存在しないことになっている）がシギントを担当している、という。

また、前者がある旧陸軍中野学校跡地には別に、通信職員の教育を行なう警察大学校附属警察情報通信学校と警察情報通信研究センター（旧・警察通信研究センター）があり、人材の育成から、暗号

技術の開発、携帯電話の盗聴技術の開発などを行っている、という。

日野の通信基地は共產圏諸国の通信傍受、朝鮮民主主義人民共和国の工作員と本国などの通信傍受、暗号解読、国内無線・携帯電話傍受などをおこなっている。通信傍受によって船舶の侵入なども監視していて、各県警、海上保安庁への通報体制も確立している。

また、アメリカが一度「日本もNTTの黙認の上で、回線電話の盗聴をし、麻薬取引のほか産業スパイの摘発を試みたことがある」といつているが、それは事実かもしれないこと。日野の秘密組織が立ち上がるに当たって、アメリカの協力を得、足抜けできない関係にある可能性もあること、など、のつぴきならない話も語られた。

そして、各機関同士の縄張り争いは必ず見られるもので、アメリカでも、CIAの結成に対して最大の抵抗を示したのはFBIであったこと。そのFBIも結成

に当たっては各市警察、州警察の反対にあったこと。日本でも、新しい形で何らかの機関を立ち上げるとき、最大の抵抗を示すのは警察庁（次いで外務省、諜報の性格によっては防衛庁）であろうことが語られた。

「幸い、私たちのこの集まりに自治・警察、外務、防衛の関係者はおりません。彼らが私たちの動きを察知すれば、必ず妨害に出てきます。

彼らを巻き込む手もありますが、内閣合同情報会議で見られたように、それぞれのセクシヨナリズムは強い。新しいものを生み出すのは困難だろうと予想されま

す。
あるいはまた、すべてを警察庁警備局にゆだねる、という選択肢もございます。しかし、これにはCIAとの癒着の可能性、不透明性、権力集中の危険性など、リスクの判断が必要なのは言うまでもありません。

いま、私は日本の諜報機関はセクシヨナ

リズムが強く、統括するセンターがない、と申しました。が、これをよいことに、自由に操っているのがCIAだ、という見方があります。CIAだけがすべての諜報機関とコネクションを持ち、適当な情報を提供しては互いを競わせ、巨大な情報力に物を言わせてこれらの機関を統括している。これは日本政府を超えた力です。

つまり、本来の統括センターの登場は、CIAにとっても目の上のたんこぶ。妨害工作が発動されても不思議ではないのです。

そこで、お願いなのですが、私たちのこの集まりを、当面、けして口外しないでいただきたい。今しばらく、われわれだけで準備する期間が必要です」

会場が緊張から静まり返り、ついで、大きな拍手が沸きあがった。春田へのねぎらいの拍手と、口外しないという約束を確認する拍手とが、ないまぜになったものである。

そしてまた、春田の熱弁は「新しい形を追及しよう」という参加者全員の合意を自然に作り出した。水越、堀田、春田の歯車がうまくかみ合い、回り始めた。

参加者は、新しい形を法制面から検討するグループ、組織面から検討するグループ、人材面から検討するグループに分かれ、それぞれが検討を重ねた上で、再会することとした。

磯崎は法制面、堀田は組織面での検討グループに参加することとなった。

『合同通信』の会議室はステージつきのちよつとした集会場であつた。その窓際に会議用テーブルが並べられ、デスクトップのパソコンが四台ほど置かれていた。

この日は『Qの会（違法諜報活動阻止機関研究準備会のことをこう呼ぶ）』の法制班の初会合である。『合同通信』の春田は組織班であつたが、法制班に会場を世話してくれたのである。

磯崎の出席が早すぎ、その前の会議が終つていなかったのである。しかし、そこには磯崎が到着するのを待つかのようにして、春田の姿があつた。

「やあ、来ましたね。ちようどいい」

春田は一番左のパソコンのキーボードを叩いてから、正面に向き直った。残りの三台のパソコンが一斉にカリカリと音を立て始め、それぞれに速度は違うものの、おなじ画像が開き始める。アメリカ大使館の全景写真だろう。まずは最上階・幻の十二階が現れた。あの、窓のない階である。

「磯崎さん、たしかこの間、長野オリンピックでの世界大合唱のことをお書きでしたよね。インターネットで世界を結び、大会会場に大合唱を流す、というあれですよ」

「ええ、ほんの豆記事ですがね」

「あのとき、各地のタイムラグがどの程度出るといつていましたっけ」

「記事では細かく触れてませんが、日本

の裏側の南米だとすると、光速は一秒間に地球を七回り半するわけですから、原理的には一五分の一秒あればいいわけです。しかし、インターネットの回線は直線ではありませんし、実際、どの経路を辿って目的地に到達するかはネットの状況次第。そのときによって異なるわけです。

そこで、長野の場合は、相当の寄り道をして大丈夫なように、四分の一秒のタイムラグを設け、最後に到達した音声と同時に、それまでストックしておいた他地域の音声を放出するようにしています」

「ということは、最大0.25秒のズレを見込んでいるというわけですね」

「その通りです」

「その場合、違和感はあるんでしょうか」
「あります。会場で歌う日本の合唱団にとって、遅れてくる自分の声に慣れるのは大変なようです。それに、ゆれ、の問題があります。インターネットは気まぐ

れに到達経路を変更します。そうになると、到達時間が異なると、同時放出するリズムにずれが生じるんです。私には聞き取れませんでしたけれどね」

「そうですね。じつは当社でも来年度から電送写真をすべて衛星通信に切り替えるんですけれど、私はタイムラグが心配なんです。衛星を経由したほうがタイムラグが大きくなる。とすると、衛星通信を途中で傍受して加工し、地上系で送ってすりかえる、ということが可能です。もちろんすぐにばれるでしょうがね」

「いやあ、それは恐ろしい。春田さん、あなたはとんでもないことを考えますね」

「好きなんです、こういうことを考えるのが。そうだ、これ知ってますか」

春田は再びパソコンに向かうと、ワープロソフトらしきものを立ち上げた。そして、マイククロホンらしきものを頭にセットした。

「これはIBMが今度出した日本語の音

声入力ソフト『ボイス・タイプ』なんです。読み上げるとそれが文字になる。まあ、見ていてください」

そういうと、胸ポケットから一枚のメモを取り出して、ゆっくりと、一語ずつ、間を開けて読み上げた。

「アメリカワ ニホン セイフノ トイ
アワセニ タイシテ テン カンケイ
トウキョクト キョウギ シタ ケツカ
テン ベイコク セイフ トシテワ
……」

これがパソコンの画面上で、次々と文章になつていく。

「アメリカは日本政府の問い合わせに対して、関係当局と協議した結果、米国防府としては情報活動について何もコメントできない、と開き直った」

「どうです、すごいものでしょう。なぜアメリカが日本語入力ソフトを、と思いますが、まあ、日本は先を越されたわけですよ」

「これは日本では弱いIBMのシェアを

確実に上げますね」

「ボクはこれを、軍事技術の転用じゃあるまいかと考えているんです。もちろん最初は英語バージョンだったのでしょうがね」

「軍事技術ですか」

「そう、つまりは盗聴です。文字データであれば簡単に検索できるのはご存知でしょう」

「ヤフーやインフォシークといった検索ソフトがそうですね。世界中のホームページから一瞬にして必要なキーワードをピックアップしてくれる」

「でも、音声のままではそれができない。これをテキストデータに変換できたらどうですか」

「文字データとしてストックし、必要なときに検索できる」

「そうですね。でも、まだだめなようなんです。軍事技術の民生への転用は、能力を一桁落とす、と聞きます。だから、実際には一〇倍の能力があるとしま

す。処理速度が一〇倍、認識率が一〇倍……、それでも盗聴には使えません。

これだけ認識してもらうには、沢山の文章を読み上げて、ボクの声紋や読むときの癖などを記憶させておかなければなら

ないのです。声紋が割れている有名人は別として、盗聴相手にこんな訓練をしてもらうわけにはいきませんからね」

「いずれはできるようになるかもしれませんがね。それにしても、すごいことを考える」

「いやあ、この間、もう一度『ロサンゼルス・タイムズ』と『ニューヨーク・タイムズ』の日米自動車交渉の記事を読み直してみたんですが、盗聴したのはCIAだけじゃない。CIAとNSAなんです

ね。NSAといえば通信傍受が専門、つまりシギントの世界です。とすると、CIAはおそらく盗聴器を仕掛けただけです。内容を聞いていたのはNSAでしょう。この盗聴器は傍受した音声信号を衛

星に向けて発信するようになっていたんだと思いますよ。

それも、指向性の強い電波なら、横漏れ電波であるサイドローブが小さいので、従来のスクリーニングでは発見は難しいでしょうね」

「よくテレビでやっているようなアンテナでは発見できないということですか」

「そう、盗聴器の真上にきたときにしか発見できないのではないのでしょうか」

「通信衛星に向けて発信しているから、地上からでは発見しにくいわけですね。それはたしかに手ごわい」

「ともかく、この分野のテクノロジーは日に日に向上しています。技術の向上を読み込んだ上で、防諜を考えていかないと、すぐに陳腐で時代遅れなものになってしまふということです」

「本当にそうですね」

磯崎が春田と話しこんでいる間に、「Qの会」法制班のメンバーが次々にやって

きては二人の話に耳を傾けていた。法制班は通産省の水越亨を中心に、磯崎正太郎、厚生省の大貫隆一、国会司書の杉井美紗、JETROの長谷川宗之を含め、総勢一〇人になる。この初会合には二人が欠席したが、春田昭彦がオブザーバーとして参加した。

といっても、立法の経験があるものは国会図書館の司書として、資料面の手伝いで参加したことのある杉井だけ。いささか心もとない素人集団である。

「最終的に何を目指し、どんなものをつくるのが見えていない中で、法制面を検討する、というのは雲をつかむようなものですが、ともかく、組織面での困難さを脇において考えることができる、というプラス面を生かして、積極的な発言をお願いいたします。

まずは口火を、立法作業の経験をお持ちの杉井さんをお願いします」

「経験なんていわれても、困ります。普通はモデルがあつて、それに肉付けをし

ていくわけで、参考にアメリカのスパイ取締法のコピーをお配りしましたが、アメリカのものはさまざまベースがあつた上での法律なので、ベースが何も無い日本での参考になるかどうか、自身がありません。

また、いま水越くんが、いえ、水越さんが組織面での困難さを脇におく、と言われましたが、先日、春田さんがおつしやつたように、政府内に断絶があるのだとすると、それを無視して法制面の議論をしても徒労に終わると思うんです」

「徒労に終る、というのは」

「法案はできても、成立する可能性がない、というのでは空しいと思うんです。結果的にそうなるのはやむを得ませんが、少なくとも成立を前提に論議したいんです」

「賛成ですね。何でもあり、では話が広がりますと思うんです。成立可能性を一つのボーダーラインにしましょうよ」

杉井の提案に対して大貫が支持をした。水越も賛成しているようだ。

「春田さんによれば自治・警察、外務、防衛は反対するかもしれないという。もしこれが正しいとすれば、法案は閣議の議題にもならない、ということの意味します。そうなる前につぶされる。そういうことですよね、春田さん」

オブザーバーの春田が立ち上がる。

「はい、法案は普通、どこかの省庁が提案しまして、内閣官房がこれを取り上げ、事務次官会議にかけます。ここで全会一致になれば閣議にかけられるわけです。

で、問題は内閣官房でして、総理大臣、官房長官はともかく、実権を握っているのが事務方の官房副長官と三人の首相秘書官です。その内訳は、官房副長官が自治省（あるいは旧内務省系官庁）、首相秘書官は内政審議室担当が大蔵省、外政審議室担当が外務省、安全保障室担当が警察庁。つまり賛成が見込めるのは大蔵の一人だけなんです。

そのため、成立を前提に考えれば警察庁を取り定める法案か、議員立法しかない。警察庁を取り込むかどうかは組織班の議論の行方を見なければなりません。が、法制班としてはまず、議員立法として進める方向で話せばいいんじゃないでしょうか」

「私もそれがいいと考えています。それに、議員立法で成立を狙うためには、あまり中身の濃いものや、複雑なものはありません。超党派で賛成してもらえる、わかりやすいものがないと思うんです」

「新たな規制」というより、緩やかな宣言、といったもの」

「制限より、宣言ですな」

法制班の議論はその後、終電間際まで続けられた。初会合は顔合わせみたいなものだと考えていた磯崎は、突っ込んだ実質的な議論にすっかり面食らってしまった。

議論はまず、制限か、宣言か、でもめた。「せっかくなので以上、追放を求めるこ

とができる程度の実効力が必要だ」という意見も根強かったからだ。また、宣言的なものだとしても、対スパイ向けのなか、日本側の意識向上を目指すのか、でズレがうまれた。

また、組織班の議論によつては、相応の実効力が必要になり、その場合には「規制法」と「組織法」が必要になるだろうし、人材班の論議によつては「日本人向けの事業法」も必要になるだろう、という話も出された。

その結果、とりあえず、従来の犯罪の枠を越えない最小限の「規制法」と、「事業法」の前文になるような「カウンタ・エスピオナージ宣言」をつくってみよう、ということになった。

「規制法を作るなら、参議院法制局の誰かにチェックをお願いするといいわ」
司書嬢の杉井が、自らの経験をもとに発言した。

「議員立法だから、内閣法制局は元々お呼びではないわ。で、衆議院法制局は内

閣法制局とつながっている。相談したら、まず、内閣官房に筒抜けになるわ。その点、参議院はおおらかよ。こちらの考えに沿ってアドバイスをしてくれる。それに、知り合いもいるの」

「おお、そいつはいい。で、この集まりに出てくれそうなやつかい」

「と思うけど、職務上、それはまずいんじゃないの」

当初、磯崎は、学者や役人が得意とするカッチリした会議は苦手だと考えていた。しかし、今日のこの進行を見ていると、あながち、そうもいえないと思うようになってきた。なんといいても能率がいいのである。ことが着々と前に進んで、堂堂巡りが無い。

そしてまた、極めて現実的なのである。どうやら、議員立法をつくる際の議員の目当てまでできている。その場合の票読みから多数工作までも、やりだしそうな連中なのだ。おそらくこれは現実的な提案を行政の中で実現してきた水島邦彦と

いう男のキャラクターなのだろう。磯崎正太郎はそう考えた。

CIAの謀略 第7章「脅迫」

防諜法案

第一条 目的

本法は、外国政府または外国企業・団体の利益のため、不法な手段により、わが国の政治、経済、防衛上の機密を侵し、手続きを歪める工作から、わが国、企業および国民の利益と安全を守ることを目的とする。

第二条 対象

本法は、違法諜報活動を行う外国人および、違法であることを知りながら、外国人より対価を受けて違法諜報活動を行う本邦人、活動の手段たる設備を対象とする。

第三条 定義

本法でいう違法諜報活動とは、刑事罰

に当たる犯罪行為のうち、特に政令で定めたものをいう。

第四条 センター

本法の実効性を確保するため、総務庁内に防諜活動センターを置く。センターの長は総務長官が任命する。センターの構成は防諜活動センター設置法に定める。

第五条 命令

センターの長は、違法諜報活動を行った外国人、および日本人に対する、日本国内における在留資格を除く行政特権の停止または禁止を命ずることができる。また、右の活動によつて失われた現状の回復を命ずることができる。

ただし、外交特権の停止および外国政府に現状の回復を求める場合は、センターの長の告発に基づき、外務大臣がこれを執行する。

第六条 補佐

センターの長が右の命令を下すに当たっては、防諜活動センター設置法が定

める保佐人会議の承認を受けなければならない。

.....

.....

「Qの会」法制班は、二、三回の会合を重ねた段階で、大まかな「規制法」と「宣言」素案とをこしらえた。詰めは先送り、ということを進めた素案ではあるが、これだけの文案を詰めるのにも、相当の議論を要した。しかも、検討課題として残された問題は条項ごとに複数存在するため、まさに問題山積の様相を呈している。

とりわけ議論が百出したのは、外国人、本邦人と規定することによつて、外国人に対する差別と偏見が強化されることはないのか、をめぐる問題であった。また、その際、在日外国人、とりわけ定住外国人をどう扱うのか、という問題であった。会議はこうしたデリケートな問題で、しばしば堂堂巡りを続けたのである。

磯崎が驚いたのは、最小限の「規制法」を作ってみる、という目的で始めた法案

化作業であるのに、いざ法文にしようとする、強く規制の方向が打ち出されてしまう、ということであった。

誰かが気づいて問題を指摘する。と、たしかに、そんなに強い規制はだれもが望んでいないことに思いいたる。

結局、法律的な言い回しというものは自然に規制強化を求めるものではないだろう。だから、これを緩和するため、例外規定や但し書き、解釈の幅を広げるためのとってつけたような字句挿入が多用される。

そしてその結果、法律的な言い回しになれていない者には読めない、難解な文章が出来上がる。

「困ったものだ。どうも、わたしに向いてる仕事とは思えませんねえ」

磯崎は法制班に入ったことに後悔を感じ始めていた。

このように、多くの問題を将来にはらみながらも、法制班はともかく第一次素案を完成した。これを全体会に懸け、それ

までの先送り懸案の解決を探りながら第二次素案を練る。この作業は第一次素案を固めることに比べたらずっと楽であるように思われた。

法制班はともかくも第一のハードルをクリアし、この日、軽い祝杯をあげたのである。

法制班の集まりを終えて、帰宅すると、この日も夜中の十二時を越えていた。「班の連中は、いささかワーカーホリックに近い」と思ったが、自分も確実にその一人であると思うと、どこか耐えがたいものがある。そろそろ息子が大事な年齢になってくる、ということも、そうした思いがきざす大きな原因の一つである。

磯崎は一人息子の英司が五年生になった昨年の四月に、時代の波に遅れないようにとデスクトップのパソコンを買い与えた。はじめのころこそ矢継ぎ早の質問に辟易していたが、今ではすっかり手について、マニュアルの文字も読めないのにどんなソフトもこなしてしまう。子

どもの勘のよさには磯崎も脱帽だ。

最近では、ゲーム機よりもパソコンで、毎晩遅くまでキーボードを叩いている。いったいいつ寝ているのかと思うほどなのである。

このところ多忙な磯崎にとって、パソコンに養育係を押し付けることができず、もつきの辛いと思うこともあるのだが、仕事場に詰めると食事にも別にながちな磯崎のこと、おかげで英司と話す機会もめっきり減って、いささか後ろめたさをも感じている。

「すれ違いか、まずいな」と、そう思った磯崎は、何か息子の部屋を叩く口実を探した。「CIAって知ってるか」と、水を向ければ乗ってくるのはわかっていて、この問題で家族を巻き込んではいけない、という直感が磯崎の口を重くしていた。

磯崎はこの間、「Qの会」のことについて、家族はもちろん、ほかの誰にもしゃべったことはない。が、そうしたこと

を、会のみんなが守れるとはとても思えない。「Qの会」の存在はもう広く知れ渡っているのかもしれない。堀田とふたりだけのときには心配する必要のなかった、不信と不安とが交錯するのである。

磯崎が口実を見つけるのに苦労しているとき、久しぶりに英司のほうからやってきた。

「とうさん、エイズってなに」

磯崎は思いもせぬ質問に面食らった。免疫不全症候群という言葉や、免疫不全がもたらす病状の説明ならすぐにもできる。が、英司が求めているのはそのような答えではなさそうだった。

「ぼく、最近、エイズなんだ。英司じゃなくて、みんながエイズって呼ぶ」

「ううん、そいつは困った。そういう心無い揶揄が多いから、今じゃあエイズという言い方はしなくなったんだけど」

「HIVというんだってね」

「そうだよ。だからおまえのあだ名もいつかは消える運命にあるわけさ。そんな

に嘆くこともあるまい」

「今日、テレビで大臣が謝待っていたよ。菅とかっていう人。お役所が誤りを認めて、謝罪するのは初めてのことなんだって。川田隆平さんてひとが話してた」

白血病の治療薬である血液製剤でHIVウィルスに感染した青年だ。「エイズによる差別」に果敢に挑戦し、実名を公表した上で、政府・厚生省を告発した。

「すごいよねえ。あのひと、自分は死ぬかもしれないんでしょう。それなのに、よくあんな活動ができるよね」

「ほんとにそうだねえ」

磯崎はそう答えながらも、少し違うことを考えていた。「もし、川田隆平が磯崎英司だったら、私はいまCIAの追及など、やっていなかっただろう。英司のために、政府・厚生省と全力で戦っていただろう」と、思うのだ。

「でさあ、ぼく、変なホームページ、見つけたんだ。同性愛者、って何」

「同性愛者、っていうのは読んで字の如

し、同性を愛する人さ。男が男を、女が女を好きになるのが同性愛。男が女を、女が男を好きになるのが異性愛。父さんは男で、異性である母さんを愛している。だから異性愛者さ。もし父さんが男を愛してたり、母さんが女を愛していれば、父さんも母さんも同性愛者ということになる」

「やつぱりそういうことなのか。でさ、そのホームページにはね、アメリカが同性愛者を退治するために、エイズという生物兵器を発明し、送り込んだんだ、と書いてあるんだよ。CIAという秘密組織がエイズの研究をしたんだって。父さん、CIAって、知ってる」

HIVウィルスという、それまでまったく知られていなかったレトロ・ウイルスが突如出現し、地球の隅々で猛威を振るう、という不思議な現象。そこに人間的なおいを感じるのは磯崎ばかりではなかった。

アメリカの八〇年代はブラック・パ

ワーにとって代わるゲイ・パワーの時代ともいわれ、ニューヨーク、カリフォルニア、マイアミなどで大きな力を築いていた。アメリカの政治も、ゲイ・パワーを無視しては成り立たなくなるほどの状況が生まれたのである。

ところが、その勢いをくじくように、突如降って沸いたのが「エイズ騒動」であった。この免疫不全症候群はなにもゲイに特有の症状ではなく、だれもが同様に罹患する恐れのあることは早くから知られていたことなのであるが、なぜかゲイに固有の奇病のように報道されてきた。

このタイミングと、この扱いを裏読みすれば、そこに謀略の影が浮かんできるのである。「エイズウイルスはCIAが作り出したものではないか」そういう噂は、巷間に溢れていたのである。

じつさい、CIAの謀略工作には、想像を絶するものが少なくない。CIAが行った被爆の人体実験や、プエル・ト

リコ女性にたいする避妊手術、幻覚剤LSDの開発と配布、戦後処理に絡む麻薬取引の支援など。どれをとっても人類に對する敵対行為だとしか言いようがない。

しかも、麻薬に関してはいまなお灰色で、コロンビアの麻薬を異様に敵視しているのも、大英帝国時代から続くイギリスの麻薬シンジケートの秩序を揺るがし、利益を損ねているからだ、との見方もある。

「おまえ、そんなホームページ覗いてるのか。CIAって、アメリカのスパイ組織だろ。『007』なんかでみるじゃないか」「なにいつてるんだ。『007』はM16じゃないか。あれはイギリスのスパイ組織だよ。『007』はなんとか『つていうのがあって、それだけはモデルがダレスとかいうCIAの昔のえらい人なんだって」

「なんだ、詳しいんじゃないか。父さんのほうがむしろ素人だ、たいしたことは知らない。なにしろ知られないように動

くのがスパイだからな。で、英司はCIAをどう思う」

「わかんないよ。でも、ほんとにいるんなら、わくわくするな。やっぱりカッコいい」

「たぶん本物はかつこよくないぞ。なにしろ目立たないように、こそこそやるのがスパイの仕事だからな」

「そうか。でも、国のために命を賭ける、ってかつこよくない」

「うわ、おまえもテレビに冒されてるな。命なんかだれも賭けてないよ。だからすごい道具を使うんじゃないか。それに、むずかしいのはなにが『国のため』なのかわからない、ということさ。たとえば同性愛者を減らすことがどうして国のためになるんだい。そんなことをしてはいけない、というほうが国のためかもしれない」

「そうだね。でも、やっぱりエイズはいやだ」

「ううむ、おまえのあだ名には困ったも

のだ。でも、そのうち消えてしまいうさ。気にするな。

それはともかく、HIVは恐ろしいウイルスだが、怖くはない。感染しないように自分で注意すれば防ぐことができるからだ。だからあんまり大騒ぎすることはないんだ。

でも、川田君たちの場合は事情が違う。

お医者さんが注意を怠ったために感染してしまった。ああいうケースは、自分では注意しきれないからね」

「お医者さんじゃなくて、大臣が謝ったんだよ」

「それはね、厚生大臣にはお医者さんに注意するよう、指導する責任があったからさ。厚生省は危険があるのを知っているが、お医者さんがやることを黙ってみていた」

「たしかにきみが言ったとおりだったよ。おれたちはまるで石抱きの刑にあっている。大和銀行事件のその後を知ってるか

い。あいつらは大和銀行の不正を知りながら、大蔵省がどう始末をつけるのか、黙ってみていた。

あいつらとは、いうまでもなくCIAだ。CIA傘下のDDI（情報本部）が大和の不正を報告すると、ドイツCIA長官が、大和の巨額損失事件をトップ・シークレットにした。

大蔵省が大和を庇うと予測して、てぐすねひいて待っていた、といったほうが真実に近いだろう。うちは奴さんの注文どおりに動いてしまったわけだ。連邦準備制度理事会のグリーンズパン議長は上院公聴会で大蔵省を公式に批判した。

そして、その二日後に、今度はニューヨーク証券取引所が野村證券の財務報告に不正があるとして一〇〇万ドルの罰金と、社外取締役の選任を命じた。おまえたちは信用できないというわけさ。

だが、本音はまた別にある。今、アメリカが一番恐れているのは、不良債権を抱えた日本の都銀が、苦し紛れにアメリカ

カ国債を一齐に投売りすることなんだ。そうなれば、世界の経済システムが大混乱に陥る。

だから、おまえらの不正はお見通しなんだ。国債の投売りなんかしたら叩き潰すぞ、アメリカの力を甘く見るなどっている。

不正は大和だけじゃない。ほかの都銀もやっている。いまは大和だけにとどめておくから、かわりに大蔵省がお縄につきなさい、神妙に石抱きの刑を甘受しなさい、というわけだ」

「Qの会」全体会はこの日も水島研究室で行われた。篠崎は電車の遅れのため開始時間に間に合わなかったが、会は予定どおり始まっていた。が、会の雰囲気がいいつもと違う。どこかぴりぴりしているのだ。

となりのJETROの長谷川に小声で訊ねると、どうも厚生省の大貫が「会を辞めたい」といい出し、大蔵の中川が彼の引止めにかかっているらしいのだ。

「CIAばかりじゃないだろう。国民も本当に怒っている。大蔵省の過剰接待や住専処理に対する怒りは日本人には珍しく、一過性のものではない」

「だからとうとう、昨年の暮れに事務次官が辞任することになった。不祥事との関連を否定しているけど、そんなものはだれが見ても明らかで、あれは引責辞任です。」

が、溝口さんが言われるように、国民の怒りは一過性ではない。引責、ということにしてしまうと、事務次官だけでは収まらなくなる可能性がある。担当部署の責任者にも及びかねない、という不安が、省内に溢れている。針の筵に座らされているのは、なにも厚生省ばかりではない。

「ぼくがいつてるのは中川さんという針の筵と少し違うんです。相手がみえない。これからどうなっていくのかが読めない。省内はみんな疑心暗鬼です。少なくとも薬事局はね。」

製薬会社を相手取った損害賠償請求訴訟に続いて、今度は主治医の帝京大学副学長を殺人容疑で告訴ですよ。省内から証拠が出てきて、ついには大臣の謝罪でしょう。

いったいいつからこんなことになってしまったのか、みんな頭を抱えています。振り返ってみれば水俣だっておかしかったし、スモンだっておかしかった。

従来のやり方は国民の命よりも企業の利益のほうを大事にしていた。それじゃあいけないって、気づいている人は気づいてたんだ。水俣では担当職員に自殺者まで出してしまった。

悪いのは副学長ばかりじゃない。同じような考えに染まっていたみんなが、それぞれに共犯なんです。だから、怖れ、浮き足立っている。この刑事責任はどこまで及ぶのだろうか、ってね。考えてみれば、警察と検察の動き次第なんです。だから、いま、警察を刺激したくない。いや、ぼくが、というんじゃないんで

す。でも、ぼくが今こんなことをしていると知ったら、同僚はどう思いますか。とにかくやめてくれ、というに決まっている」

「実際、そんな人がいたんですか」

「いや、そんなことはありません。ただ、とにかくいまの厚生省は変なんです。何か追い込まれている」

「だからって、そんなあいまいなもので

『Qの会』をやめることはないだろう」

「まあそうなんですけど、しばらく休ませてもらいたい、と。もう少し言えば、この一月から立ち上げた基礎年金番号制度が、ランニングテストなしにスタートしたためかミスばかりで、現場が大混乱してしまっているんです。これはぼくの責任ですから」

「それはそれは。さぞや自治省が喜んでいることでしょうね」

「ほんとにそうなんです。仕事を楽にしようということから始めた番号制の導入が裏目に出ってしまった。もう、たいへん

です」

「まあ、休みたいというものを無理に引き止めるわけにはいきませんでしょう。でも、われわれの活動はこれからが本番だ。そうしたときに厚生省内部の様子はぜひ知りたい。そういう情報はこれからもいただけると思いますなあ。どうでしょう」

「もちろん、そうしたことは適宜ご報告いたしますし、ふつうにやれる協力はしていくつもりでおりますから。問題なのは会のメンバーとしてマークされることと、実際、忙しくて時間が足りないことだけなんです」

どうやら、会はまだ始まっておらず、正式な議題に入る前に大貫から脱会の申し入れがあったようだった。

「それじゃあ始めますか」

溝口がそう切り出して、会はスタートした。

「組織班の論議をまとめますと、アメリカ

カの組織が理想的かどうかは別として、警察と諜報は異なるもので、組織上分ける必要がある。ところが警察庁は明らかに国民の議論を待たず、不透明な形で日本でのFBIとCIAを独占しようとしている、ということですね。だから警察庁の抵抗があつても、別途の組織を作る必要がある、と、そういうことですね」

溝口の整理を引き取つて、春田が続ける。

「諜報には少なくとも外務省、警察庁、防衛庁の情報をもとめる必要があるのに、阪神淡路大震災での対応を見る限り、警察が防衛庁に情報を提供することは考えられない。」

また、アメリカ寄りになりすぎた現在の外務、防衛の情報を警察庁がただ集めても、たいして役立つものはない。これらの上に乗つて、諜報活動を指揮する法的権限を持った機関が不可欠だ、ということです。

当然これは、密かに警察庁が進めようと

している体外的な諜報活動、防諜活動とは対立するものですし、最終的にはその機能、機材等は新組織が受け継ぐべきものです」

「補足しますと……」と、今度は堀田が続ける。

「CIAの子分として、日本におけるソ連の影響を監視してきた公安調査庁がいま、存在意義を失つて、CIA張りの諜報機関に転進して活路を見出そうとしている。」

ここを使う手もあるにはあるのですが、オウム真理教に対する破防法適用に全庁の未来を賭けてしまった。この、場当たりの先見性のないところをみると、その能力はあまり期待できない。警察庁に足元を見られるのが落ちだと考えられます。ここを吸収するにしても、新しい組織が必要です」

ここで杉井が発言を求めた。

「公安調査庁はだめです。市民運動に不信を買いました。いまもまた、組織

の生き残りのため、市民運動情報を選挙運動用に、民自党議員に売ろうとしています。こうした組織を吸収しても、新しい組織は国民の広い支持を得られないと思います」

「それは本当ですか。やはり無能なんですね」

堀田が答える。

「市民運動情報を含め、選挙情報を買っているのは警察です。個々の議員に対してじゃあないですけどね。公安調査庁の情報なんて、警察庁の情報に比べたら屁のようなもんだ。そんなこともわからない連中じゃあ、新組織でも使えませんか」

「これについて、法制班からもっとほか

にないですか」

水越が立ち上がる。

「閣議提出の関門として、内閣官房の首相秘書官が三人います。外務、大蔵、警察の三省庁から派遣され、外務担当秘書官は外務省と防衛庁、警察担当秘書官は主に自治省、警察庁の代表として行動す

る。

また、内閣官房副長官はどうしても旧内務省系の省庁を代弁し、その他を大蔵担当秘書官が代表することになる。

この図式からいって、法務省傘下の公安調査庁が新組織に横滑りできるような芽はありませんね。全省庁の事務次官会議で多数意見を占めても、秘書官のレベルでつぶされる。もちろんここを通過しても官房副長官が潰しにかかることでしょう。

というより、そもそも、新しい防諜組織が必要かどうか、というところで、この構想はつぶされる、というのが法制班の結論です。組織班が警察と手を組む、という結論を出すなら、法案の政府提案もありうる。しかし、それがないとすれば、法案は議員立法でいくしかない、と、これが法制班の結論です」

人材班からは公安調査庁、内閣調査室の人材も有効だが、やはり核となるのは当面、警察庁警備部だという。また、ア

メリカや総合商社の情報に頼りすぎている外務省には、もつと独自の情報収集力を持つてもらう必要がある、と同時に、新組織のメンバーを受け入れ、協力していく態勢が必要だ、とする。

日本では官民の人材交流、人材移動がほとんどないため、NOC（ノン・オフィシャル・カバー）、いわゆる民間人を偽装して諜報活動に当てる手段が極めて限定される、という。

いずれにせよ、本格的な諜報機関は人材面からも作りようがなく、防諜だけに限った活動にならざるを得ない、ということであった。

戦前の陸軍中野学校のような精鋭を生む素地そのものが失われている今日、精鋭の存在を前提にした特殊任務を考えても無駄であり、却って危険でもある、というのである。

全体会を終え、別れ際に、堀田が磯崎にささやいた。

「あいっには何かあるな。ひよっとした

ら、おれたちの計画はもう漏れているのかもしれない」

「あいつ」とは、長谷川のことである。厚生省はこれからも、次々に暗部が暴かれる。「あいつは、おそらくその一部を知っている」。堀田の不気味な予言である。

石垣港のフェリー棧橋とやや離れたところに、離島行きの船着場がある。いかにも南の島らしい木の実や貝殻を組み合わせた手作りのアクセサリー・シヨップやアーサー汁を飲ませる定食屋、釣具店など、小さな店が建ち並ぶ岸壁の一角だ。釣具店の並びにある切符売り場も、待合所というにはいささか手狭で、船のお客は三々五々、近くの土産物屋を覗いて時間をすごす。時間がくると、切符売り場から出てきた船長が、大声で叫ぶのである。

「小浜島行き、出るよーう」

「おーい、あんたらも乗るんだろーう」

岸壁のはずれから、若い娘が二人、ムギワラ帽子を手で押さえながら、必死で駆けてくる。暑い風だが爽やかである。

船は二十人乗りぐらいの白いクルーザーで、足が速い。しぶきを上げて海原を切り裂く感じで、キャビンの片隅以外はどこにいても、このしぶきを浴びてしまう。が、もちろん、キャビンで小さくなっている客は一人もない。

右前方から緑の深い島影が迫ってくる。別荘地で名高い竹富島だ。しかし、快速クルーザーは竹富島をやり過ごしていつそうスピードを増す。シャツはびったりと肌につき、髪の毛からは水が滴る。

船のへさきに近いところで、だれよりも濡れているのはさっきの二人の娘たち。キャツ、キャツと上げる歓声が、うなるエンジン音にも負けずに響いてくる。

四〇数分の旅程、小浜島の船着場に降り立つと、だれもが濡れすぎた自分を発見する。ハンカチやタオルで顔を拭く姿がそこここに広がる。

島にバスはなく、船着場には迎えの車が並んでいる。近くに集落はないので、全員が何がしかの車に乗ることになる。島唯一のリゾートホテル、「はいむるぶし」への客は磯崎を含め、総勢六人。緑の送迎用ワゴンに乗り込んだ。

「はいむるぶし」とは「はえ（南）」「むれ（群）」「ぼし（星）」つまり「南群星」で、琉球語で南十字星を意味する。この島では南半球の目当て星（極星）が地平線上に姿をあらわすのである。

ホテルはヤマハが鳴り物入りで始めたリゾート展開の代表的なもので、知名度は高い。が、沖縄本島のような巨大なホテルとは違い、こざっぱりしていて、居心地のよいホテルだった。

一階のラウンジのコーナーに、マリンスポーツのガイド・カウンターがあつて、海の青さを強調したさまざまなポスターやチラシに溢れている。しかし、目の前に広がる海を凌ぐ輝きはない。写真は現実に圧倒されているのである。

マリンスポーツ・コーナーの中心的なメニューはやはりスキン・ダイビングで、大半のスペースを占めている。磯崎は壁に貼られたポスターの一枚、若い女が遊泳する水中写真に目を凝らしたが、それはあの池島佳苗のものではなかった。

九五年九月、沖縄本島北部の住宅街で、買物帰りの小学生少女が三人の米兵に車で拉致され、乱暴された事件は、返還後もいっこうに縮小されないまま多くの米軍基地を抱える沖縄に激しい怒りを呼び起こした。

とりわけ、犯人の米兵たちは犯行後、かねての予定通り、基地内に逃げ込み、犯人が特定されても、日米地位協定に基づき、犯人の逮捕、身柄拘束ができなかったことは、日米安保条約と、その地位協定の問題に火をつけた。

事件の半月後、連立与党と政府は日米地位協定の見直しを含む再検討を約束。折から迫っていた基地借用地の契約期限切れに当たって、延長契約を拒否する地権

者に代わり、知事が代理署名してくれるよう、懐柔策に出た。

しかし、第二次世界大戦での沖縄戦の悲惨さを知る大田知事は代理署名を拒否。代わりに基地縮小を求めた。

日本の周辺有事を想定して、日米安保条約のガイドライン見直しを急ぐアメリカは、九六年四月一五日、沖縄の米軍基地の二〇パーセント縮小を発表。これには沖縄の心臓部にある海兵隊基地・普天間基地の返還も含まれていた。

が、これも見掛け倒しで、アメリカ軍の極東一〇万人体制を堅持し、海兵隊の基地機能も低下させないことが前提で、普天間の返還も単なる日本の国家予算を使った移転・リニューアルにほかならなかった。

そのため、問題はさらにこじれ、実際に契約切れを迎えた楚辺通信所などに地権者が立ち入る事態が生まれた。また、代理署名を拒否した大田知事は、国を相手の訴訟で敗訴。地権者が再契約を拒否す

る土地の強制使用が続くことになる。

この国のやり方に対する対抗措置が、九六年六月二日に臨時県議会で可決した「在沖縄米軍基地の整理・縮小と、日米地位協定見直しの是非を問う県民投票条例案」である。

投票は九月の八日。沖縄はこの日に向かって、いっそう反基地の思いを強く燃えたたせようとしていた。

「沖縄に行ってくださいませんか」

磯崎が某月刊誌からそんな依頼を受けたのは、沖縄が住民投票に向けて燃え上がる最中のことであった。投票に合わせ、沖縄特集を組むのだということで、渡された企画書に目を通すと、巻頭にあいつの名前があった。あの評論家、篠山啓志である。

篠山に与えられた仮タイトルは「沖縄の地勢から極東の危機管理を考える」。磯崎のそれは「現地レポート・基地の重圧の中で」とある。

この構成を見るだけで、特集の狙いは

明らかだった。「沖縄も大変だけど、基地は必要。知恵を尽くすが、我慢もしてね」といったタッチの編集姿勢になっている。

背骨を通すのは篠山の論文で、磯崎のレポートは明らかに添え物だ。しかし、今、沖縄を語る以上落とすこのできないレポートであることも事実である。

結局のところ、篠山の論文に肉付けを与えるだけに終る恐れも少なくはない。が、そうであっても「こいつは人任せにはできないぞ」と、磯崎はそう考えて、この依頼に応じることにした。

「承知しました。行きましょう」と、そう返事をしたとたんに、脳裏をよぎった名前、それが池島佳苗である。

小浜島の「はいむるぶし」といえば、沖縄本島からはまだ大分先になる。ついというには大旅行だが、季節はいい。七月中に本島から原稿を送ってしまえば、ちよつとした夏休みにもなる。

磯崎は「基地の重圧」に苦しむ沖縄の

人たちを取材したその足で、南のリゾートアイランドへ赴くことに後ろめたさがないわけではなかった。いや、十分に後ろめたさを感じていた、といったほうがいい。

だから、何か自分を納得させる口実を必要とした。バブル崩壊以後、沖縄の離島のリゾートは厳しい。彼らの苦境を少しでも緩和することができのなら、と、そんなことも考えたが、これではとても自分を納得させられない。

池島佳苗だ。彼女には何かある。彼女が昔、スキン・ダイビングのインストラクターをやっていたという小浜島に行けば、その何かをつかむことができるかもしれない。磯崎はそのため「はいむるぶし」にやつてきたのだ。

夕食後、「はいむるぶし」建設以前からこの島にあった、老舗のマリンスポーツ・センターに足を伸ばした。ここも「はいむるぶし」にあやかっつて、リニューアルされ、若いダイバーたちのおしゃれな

定宿になっている。池島はこのセンターのインストラクターになった。

センターの受付けカウンターは、明日の予約を取る客で、ひとしきり賑わっていた。小浜島からさらに南の二つの島がスキン・ダイブのメッカで、島のいたる所に日本を代表するすばらしいポイントがあるのだという。

また、島の途中にも美しいさんご礁のポイントがあつて、もぐれない者でも船底をガラス張りにした船から覗けるので、評判なのだ、という。

カウンターの若いガイドに「ここまできて、さんご礁の海を見ずに帰る手はない」といわれ、磯崎もさつそく予約を入れることにした。そのガイドに「インストラクターか」と聞くと「そうだ」という。客が減るのを見計らつて、彼を捕まえた。「ずいぶん昔のことになるんだけど、池島佳苗つて人がここでインストラクターをやつてたはずなんだ」

「池島佳苗ですか、知りませんねえ」

「ここに写真があるんだけど」

磯崎は、佳苗から送られてきた最後のレジャー雑誌をなんとか発見して持参した。

「うわー、こりゃあ古いわ。俺なんかじゃぜんぜん無理だよ。こいつがそうなのかい。すっごいいい女じゃんか。この写真、確かにうちのポイントだよ。あした、こ行くよ」

「ああ、そうだ。古いアルバムならいっぱいあるよ。ちゃんと揃ってるかどうかはわかんないけどな。ちょっと待って、いま見つけてくるわ」

「お客さん、こつちだ。このキャビネットの中、ぜんぶそうだよ。持ちきれないから勝手に見てよ。そのテーブル使っているよ。もう何年も触ってないから、汚れてるかもな」

アルバムはマリンスポーツ・センターのリニューアル・オープン の式典から始めて、ずっと最近まで、年二、三冊で、四〇冊ほどが揃っていた。センター全体

のアルバムではなく、マリンスポーツ中心のアルバムで、池島佳苗はすぐに見つかった。

なにかとても懐かしいものに出会った気分になった。だが、ここにいる佳苗は磯崎にとつて、まったく知らない佳苗であるはずだった。

請われて撮らせたものだろうか。佳苗の写真には客らしい男との二ショット、三ショット・シーンが多い。ウエットスーツが彼女のボディラインをいやがうえにも強調している。引き締まった彼女のウエストに手を回している男も少なくない。

そして、やはりいた。篠山啓志、あの男だ。二ショットが何枚か続き、次のアルバムになると、今度は三ショットが現れた。見覚えのある政治家、作家、そして外国人。どうやら篠山の招待客らしい。だが、それがだれなのかわからない。

磯崎は外国人が写ったその写真を抜き取り、何点かの写真を入れ替えて、抜き取っ

たことを悟られないように工夫したが、おそらくこれは決定的な証拠だろう。この男がCIAの要員であることはそのうち判明するに違いない。磯崎はそう考えた。

さんご礁は限りなく美しく、青いネオンのような魚の群れが身を翻した。黄色と黒のストライプを持つおしゃれな魚が、ピンクの編柄の岩をつつくと、岩はぱたりと閉じ、ただのいかついゴロタ石になった。

「お客さん、ラッキーだよ。そいつはギアといってね、東京じゃあシャゴウ貝、ビーナスが乗ってる絵で有名なシャコ貝の一種だ。刺身にするとうまいんだよ。拾ってくかい。うわ、すごい。こんなにでかいのは滅多にいないよ」

「ほら、あれが西表(いりおもて)だ。歩いて行けそうだよ。行けるんだ。潮が退いたときにはね」

真っ白なサンゴが海底に敷き詰められ、水の屈折で海面に浮いて見える。この白

いじゅうたんが小浜島の西海岸から、西表島の東海岸まで続いている。

このあたりには素朴な民家が多く、そのどこかに泊まっているのだろう。クルーザーに同乗した二人の娘が泳いでいる。赤や黄色の原色の水着が白と青、それに西表島の緑によく映えている。

「あのころは「はいむるぶし」に泊まっていた有名ながよくましてね。最近はずいぶん減りました。若い人が多くなって、利幅も減りましたね」

センターにあるレストランの料理長だ。ギアを刺身にさばいてもらった。池島佳苗を覚えていた。

「人気者だったですよ。マスコット、というんですか。いや、アイドルだ。なんかこう、センター全体が華やいでしたよね。マスコミなんかよく来ていた」
あらためてアルバムを眺める。一枚一枚は申し分のない写真なのだが、何か引つかかる。どれもこれも、鮮やかに笑っているのだが、表情がみなハンで押した

ように同じだということに気がついた。それは篠山と写っているときでも変わりがなかった。

「お疲れさまでした」

東京に戻ると、編集部からの伝言があった。「戻ったら電話をよこせ」というのである。なんだろう、と電話をする。と、「とにかく社に顔を出せ」という。暑い中、しぶしぶ出かけてみたわけだ。「おう、ずいぶん焼けてるな。さぞやいいバカンスだったんだろう。ところで、珍しい人がキミを待っている。会議室にきているよ。行ってやってくれ」

「だれですか」

「篠山啓志だよ、篠山先生かな」

なんと、まったく予想もしなかった事態に立ち至った。なんの心の準備もないままに、いきなり篠山に会うハメになり、磯崎はいささか慌てた。

が、考えてみればいっしょに特集を組んだ間柄である。当然、磯崎の名も篠山

に伝わっていたはずなのだ。とすれば、磯崎のほうから一言あいさつの声をかけておくべき立場であったのだ。そうした社交儀礼的なことに、磯崎は何よりも弱い。

それにしても、デスクは明らかにこの件だけで磯崎を呼び寄せた。要件も告げずに、である。もつとも、デスクが「篠山先生が呼びだ」と告げていたら、磯崎はどうしただろう。いまよりももっと困惑していたかもしれない。いまはもう、出たとこ勝負。会うほかはない。

「よお、ご無沙汰じゃないか。レポート、読ませてもらったよ。力作だな、さすがにおまえだよ。胸のうえまで込み上げてきている怒りというのかな、その実感の前では、米軍の駐留を正当化しようとするおれの論文なんかすっかり形無しだ」
「ありがとうございます。篠山さんの文章は読んでいませんでなんともお答えできませんが、私のレポートに関して言うならば、これは私の力量というよりも、

沖繩がおかれた現状そのものが持つ切迫感といえますか、説得力ではないかと思うんです」

「うむ、それもある。確かにそれもある」

篠山は腕を組むとしきりに深くうなずくのである。磯崎は、篠山がこれから何を言いたいのかが読めずに訝った。が、次の瞬間、篠山は一転してリラックスした表情になった。

「石垣島に行つたんだってな。石垣のどこへ行つたんだい」

「白保です」

篠山はとっさに嘘をついた。

「白保を拠点にしながら、島を一巡りしてきました」

「白保はどうだった」

「よかったですよ。やはり自然の宝庫というんですか。海の恵みがすばらしい。ギアの刺身とか、ウニなんかもう、その場ではおぼりました。ああいうのがほんとの贅沢なんだ、と思いましたね」

「離島には行かなかつたのか。あの辺り

はいいところがいっぱいあるだろう」

「ええ、残念ながら今回は時間がなくていけませんでした。いつか、西表か与那国に行きたいと思っています」

「西表はいいぞ。マングローブの原生林が鬱蒼としていて、川沿いにどこまでも続いている」

「行つたことがありませんか」

「おお、もうずっと昔のことだけどな。与那国には行つたことがない。あそこからは台湾が見えるそうだな」

「ええ、そのようです」

ひとしきり、八重山諸島の話が続いたが、ついぞ小浜島の話は出ずじまい。周辺をぐるぐる回っているような、居心地の悪い奇妙な会話になってしまった。

「ところで……」

篠山の表情がまた一変した。

「磯崎は最近、おもしろいことを始めたそうじゃないか」

「おもしろいこと、なんですか、それは」とぼけたってだめだよ。おまえがなに

をやってるかなんて、みんなお見通しなんだから。はっはっは」

「そうだとすると、ちよつと気持ちが悪いですねえ」

「まあ、おまえがなにをやろうとそれはかまわんさ。だがな、あれはだめだよ。芽がない。潰されてしまうのがオチじゃないかな」

「潰される。いったいどこが潰すというんです」

「野党かもしれない、アメリカ辺りからプッシュされた外務省かもしれない」

「アメリカ、ですか。つまりCIA」

「いやいや、そんなに短絡的になつてはいかんよ。構造、じゃないかね。政治構造。つまりね、今の日本は、アメリカの行動をチェックできるような政治構造にはなっていないということだよ。わかるかね」

「それは承知しています。だからこそ、それを変えようとしている。チェックできる政治体質、社会体質を持たなければ

ならないと思うんです」

「それをあんな直線的なやり方で実現できると思っているのかな。そんなことで実現できるぐらいなら、それを構造などといひはしない。正攻法でやってくるものを叩き潰す力を備えているからこそ、構造というのだよ」

「お説はわかります。だから、沖縄の米軍基地もやむをえないというわけですね」

「それはちがう。おれは少なくとも、米軍基地があつたままでもいいなんて思ったことは一度もないぞ。おまえのレポートにだって、ほんとうに心打たれている。現実の痛みを絶対に忘れてはいけないんだと思つている」

「私たちの合言葉は『地を這う取材』でしたからね」

「その通りだ。その点ではおまえに脱帽だよ。おれもたまには初心に戻る必要がある。だがな、それだけでは構造を変えられない。構造の内部に分け入つて、構

造の中の矛盾を衝かなければだめだ」

「構造の内部のどこかと手を結んで、というんでしよう」

「そう、時にはそれも必要だ」

「たとえ、それが外国でも」

「そう、それも時には必要だ」

「いやですね。わたしにはできません」

「古いなあ、古すぎる。国を単位にものを考えるのはもう時代遅れだよ。もつと地に足の着いた生活のレベルに視点を置くべきじゃあないだろうか。その上で、自在な手段を模索する」

「篠山さんにそんなことを言われるとは思つてもみませんでした」

「そんなことはないだろう。これがおれの本当の姿だ。そして、今日おれがおまえを呼んでもらつたのはほかでもない。磯崎におれを手伝つてほしいと思つてゐるからだ」

「なんですつて」

「そんなに驚くな。知つてのとおり、おれにはいま沢山の取材スタッフがいる。

が、ほんとうに力のあるやつがない。おまえが来て、引つ張つていつてもらいたいんだ。もちろん、おれが考えるように動く必要はない。おまえが考える通りに動けばいい。『地を這う取材』が合言葉だ」

「ちよつと待つてください。それはあまりにもとつぴな話です。とても現実的とは思えません」

「それはおまえから見た場合だろう。おれからすれば別にとつぴな話ではない。もちろんすぐに返事をしろといつてゐるんじゃあない。考えておいてもらえばそれでいい」

「それはそうでしょう。篠山さんはわたしが集めた材料を好きなようにカットして、使えばいいだけでしょからね。篠山さんはいまや大沢のブレーンとしても、立派に地歩を固めている。そんな人の下で、いつたいなにをどうして、自由に引つ張ることができるといふんですか」

「大沢は民族主義者だ、いや、国粹主義者かな。いずれにせよ、おれとはちがう。おれがやつブレーンとして地歩を固めている、などというのは、大きな間違いだ」

「そうはいっても、構造に分け入り、構造に取り入ったつもりが、もう足抜けできなくなつて、構造の一部に化してしまふ、ということもよくある話です。そうならもうなにも変えることはできません」

「だから、初心忘れるべからずだ。おまえに手伝つてほしい、という話と混同してもらつては困る。だが、やつぱり、あれはだめだ。骨折り損というやつだ。おまえなら別のやり方があるだろう。法律をいじるのは学者か役人に任せておけばいい。おまえには少しも似合わないぞ」

「法律をいじるのは似合わないという点はわたしも同感です。しかし、さっきの話ですが、あれはなかったことにしてください」

CIAの謀略 第8章 「待機」

アメリカ軍の整理・縮小と、日米地位協定の見直しの賛否を求める沖繩の県民投票は一九九六年九月八日に実施され、その結果賛成が八九%を越えた。

県民投票に法的効力はないとして、必死でボイコットを呼びかけた民自党などの抵抗もむなしく、全有権者の過半数にのぼる人々が、基地の縮小と協定見直しを求めて投票したことになる。この勝利に、沖繩は沸きかえつたのである。

日米安全保障条約に付属する協定である「日米安全保障条約に伴う米軍および軍属の地位に関する協定（日米地位協定）」は、米軍人と軍属の日本におけるさまざまな「特権」を定めた協定である。さながら、占領軍の特権リストにも近い屈辱的な内容で、独立国を相手にした協定とは思われない条項で溢れている。

これによれば、日本の官憲は米軍人を直接捜査・逮捕できない。捜査権は軍警察

（MP）にあり、軍警察が日本法に基づいて起訴した場合に限って、身柄を引き取ることができる。起訴せず、軍規に基づき本国送還にでもしてしまえば、日本の官憲は出る幕がないのである。

九五年九月に沖繩の少女を襲った三人の米兵も、地位協定に基づき、軍警察によって身柄を拘束された。日本側に引き渡すよう求めた沖繩県警の申し入れは無視されたのである。高まる世論と衆人環視の中、日本の裁判所に起訴されたが、環視がなければどうなったかわかったものではない。過去には、そのままアメリカに逃亡、という事件もあったのである。

実際、裁判中も、三人の米兵は、沖繩の世論が騒がしく「公正な裁判が受けられない」として、裁判の管轄権をアメリカへ移すよう、求めたのである。日本側の声が小さければ、裁判権さえ奪われかねなかったのだ。

こんな無法なルールがまかり通っている日米地位協定は、見直しどころか即刻破

棄しても不思議のないシロモノである。ところが、政府・民自党は見直しを避け、運用の変更でお茶を濁したのである。

つまり、捜査権、逮捕・起訴権、裁判権など基本的な国家主権はすべてアメリカにゆだねたまま、殺人や強姦などの凶悪犯罪に限って、起訴前に身柄を日本側に引き渡す、という運用の変更をアメリカ側と約束したに過ぎないのである。アメリカさまの恩惠的措置によって、引き渡していただけるようになった、というだけのことである。

こんな交渉をやつてのけた政府の役人は国賊というにふさわしい。そして、彼らはもう次のステージ、すなわち日米安保条約のガイドラインをアメリカの要求に沿って見直す交渉に入っていたのである。アメリカは日本の後方支援を取りつけ、アジア太平洋からインド洋に至る領域での安上がりな軍事展開を望んでいたからである。

一九九七年四月一日、沖縄米軍用地の

暫定使用を認める「駐留軍用地特別措置法」が、衆議院本会議で可決成立した。それも九割が賛成という、圧倒的多数であった。これによって、アメリカ軍の特権はさらに拡大した。

この、九割が賛成という驚くべき数字に、民自党の幹事長さえもが日本異変を感じざるを得なかった。彼はこの国会を指して「大政翼賛会になる危惧を感じる」と、演説したのである。

「Qの会」法制班の集まりがあつたのは、この沖縄切捨て国会の一〇日後のことであつた。この日のレポーターである杉井美紗は、会議が始まる前から浮かぬ顔つきで、「だめだったわ」「だめなのよ」とつぶやいていた。

「じゃあさつそく、杉井さんから、その『だめだったのよ』の中味を聞いてみることにしましょう。お願いします」

この日も大学で司書の杉井と同期だったという水越の司会で会議が始まった。

「前回の約束どおり、わたしは『規制法案』

と『組織法案』とを、参議院法制局の知人にチェックしてもらうよう、お願いしてきました。

びっしりと赤い書き込みがはいつていて、手厳しくやられるものと覚悟して意見を伺ったところ、法案は比較的よくできていて、とのことで、赤い書き込みは彼の熱意の現れ、とも言えるものでした。つまり、関係する条文と解釈で摩擦を起こす可能性を含め、考えられる限りでの参考意見が付されていて、法案の審議にも役立ちそうな書き込みなのです。

もちろん、法案がパーフェクトではなく、字句訂正から条文修正まで、指摘された点があります。たとえば『規制法（防諜法案）』の一〇条で『報告義務』を定めています、その但し書きに『不適当と認めたものを除いて』とある。これと『情報公開法』との関係が不透明だ、といわれました。

報告義務を原則にし、例外を列举すべきだといわれました。

指摘された点を詰めていく作業は、それなりに大変だろうな、という印象を持っています。でも、そんなことは問題ではありません。『だめだった』のは、そんなことじゃあないんです」

「というところ……」

「だめなんです。わたしたちの計画そのものがだめなんです」

「どうということなんでしょう」

「彼はこういいました。『それで、あなた方は何をしようというのですか。ソ連のスパイ、中国のスパイ、それともイギリスの、フランスのスパイから日本を守るうというのですか。それなら有効です。あまりに平和的ですが、無駄ではありません。でも、まさかアメリカのスパイから日本を守ろうと考えているんじゃないやないでしょうね』と。」

『老婆心ながら言わせていただくと、そいつはできません』と。つまり、だめなんです」

「わかりません。どうということなんでしょう」

う」

「彼はこういいました。『だれが捜査するのですか。だれがどう、証拠を押収するのですか』と。」

わたしは答えました。『第一義的には、違法を特定する警察官ですし、本法が規定する執行官にもその権限があります』とね。

彼は笑ってこういいます。『相手が民間人だったら、それも可能ですよね。いわゆるNOCというやつですか。でも日本じゃあほとんどがオフィシャル・カパーでしょう。みんな軍人か外交官です。でも、彼らの捜査はできませんよ』と。あたしは頭を金槌で叩かれたような気分になりました。

『安保条約ですか』と聞くと、彼がうなづきました。

『日米地位協定ですか』と聞くと、やっぱりうなづきました。

『沖繩とおなじですか』と聞くと、今度も、深く、深くうなづきました。そういうこ

となんです」

「いま、杉井さんから、とても重大な話がされました。実はぼくもそんなこともあるうかと、日米地位協定を読んでみたんですが、確かにこんな条項がありました。地位協定のうち、刑事裁判権に関する合意書『五のA』のa』です。ゆっくり読みますので、注意して聞いてください」

水越がメモを読み上げる。

「権限を与えられたすべての急使その他機密文書もしくは機密資料を運搬または送達する任務に従事しているすべての軍務要員は、その任務の性質により、その使命と所属部隊をたしかめるという必要以上に他の目的のためにその身柄を拘束されず、且つ、その所持する文書または資料はその所持を奪われ、開披され又は検査されない旨、相互に合意される。」

犯罪がおかされ、且つ、日本国の法律執行員から要求された時は、右の急使その他の者は、任務終了後直ちに日本国の

法律機関に出頭するものとする。かかる者が完全に能力を失ったときには、合衆国の軍当局は直ちに通知を受け、且つ、これらの者の所持する文書又は資料は開披され又は検査されることなく直ちに引渡されるものとする」

「なんだよそれは。めちゃくちゃじゃないか」

一字一句、聞き漏らすまいとしていた JETRO の長谷川が、腹に据えかねたような表情で立ち上がった。

「つまりなにかい、犯罪を犯してくたばっているアメリカ野郎の所持品検査もできないというわけか。目の前でスパイされ、現行犯でとっ捕まえても、身柄拘束はおろか、その証拠品さえ押収できないということか。ふざけるなよ。こんな合意文書、いったいだれがこしらえたんだよ」

「沖縄だってそうじゃないの。これが沖縄の人たちの怒りだったのよ」

「まったくだ。強姦したってひき逃げしたって、スパイをしたってお構いなし。

これじゃあやつらがつけあがるわけだ。謝罪してすむ問題じゃあないぞ。なめるなよ」

「長谷川くん、まだそんなに怒らないですよ。もっと先があるんだから」

「えっ、刑事裁判に関する合意書だけじゃ足りないっていうの」

「そうよ、水越くん。おなじ地位協定における基本労務契約に関する合意書、というのがあるの。これによれば、日本はアメリカのスパイ活動に対する必要な要員を提供しなければならないことになっているわ」

「なんということ。じゃあ、そいつを読んでみてください」

「日本政府は、つぎの要員を米軍に提供する義務をおう。『軍事情報分析員 A』『同 B』『上級作戦分析員』『軍事人類学研究分析員 A』『同 B』『情報調査員』『工場監察技師』『細菌学職』『製図師』『地理学職』『特殊語学顧問』『犯罪調査職』。

これらの職種がどんな任務を帯び、ど

こに配属されるのか、といったことはこの合意書に細かく規定されているわ。でも、実際のところなにをやっているかは『MSA 秘密保護法』や『刑事特別法』『公務員法』の守秘義務などによって厳しくガードされ、外部に漏れ出さないようになっているの。この、外部というのは日本のことよ」

「ガオーツ、頭にきた。もう許せない、もう我慢できない。こんなことを押し付けておきながら、やつらは安保条約ただ乗り論を持ち出して日本を非難し、挙句の果てには思いやり予算まで分捕っていたのかよ。ふざけるなよ」

長谷川は真つ赤になって怒り狂っている。そして、他の参加者はみな青ざめている。

結局のところ、日米安保条約はアメリカの軍務要員の出入国の自由、関税調査の免除、免税、日本官庁優先使用権、航空管制・通信・調達における優先権、裁判特権など、あらゆる特権を保証してい

る。そして、CIAなど、軍務要員とは無縁な機関員にも軍務要員と区別がつかないカバーをわざわざ保証している。

アメリカ大使館の職員は外交特権を保有したまま、外交官身分を秘匿できる。外交官ナンバーの車を使わなくてもいいし、外交官名簿に登録する必要もない。これによってCIAの機関員は軍務要員とも大使館員とも区別されずに、泳ぎ回ることができるようになっていく。

「たしか春田さんは前に、日本の対CIAカウンタ・エスピオナージは警察庁警備局外事課が担当している、といっていましたね。ところが今の杉井さんの話によれば、日本の官憲は手も足も出ない。これはどういうことですか」

仕事が終わって、社の会議室を覗いた組織班の春田が、そのまま討議に加わった。その春田昭彦に、待ってましたとばかりに長谷川宗之が質問を浴びせたのである。

「結局は日本の警察の体質だというしかありませんね。CIAは軍務要員でもなければ外交官でもない。だから、西ドイツ警察は一九五二年の暮れ、CIAの武装部隊のアジトを急襲し、全員を逮捕しています。」

それによって米独の関係が冷え込んだかというところ、そんなことはありません。時のアメリカ大統領アイゼンハワーはCIAのアレン・ダレス長官を西ドイツに派遣し、アデナウアー首相に対して何とか怒りを収めてもらった。礼を尽くしたわけです」

「沖縄の場合を考えてみると、実際、アメリカの横暴に対して一番腹を立てているのは現場の痛みを知る第一線の警察官じゃあないでしょうか。それなのになぜ彼らの中から不満の声があがってこないのか、それが不思議です。」

普通の神経の持ち主なら、日米地位協定には反対してもおかしくない。それに、実際に協定を変えるだけの政治力を持つ

ている」

「その、現場とは遠い、政治力を持った連中がおかしいのじゃないだろうか。彼らが、自らの政治力の源泉としてアメリカを、CIAを必要としてきた」

「でも、それじゃあ現場はたまりませんね。米軍基地をたくさん抱える都道府県では、警察官もストレスでおかしくなってしまうんじゃないだろうか。アメリカ人が絡んだ事件はみんな手が出せない」「このコピーを見てください。一九九五年一月四日付けの『週刊ダイヤモンド』の記事です」

JETROの長谷川が一枚のコピーをひらひらして見せた。

「皆さんのこれまでの論議で、この記事が何を言っているのかようやくわかりましたよ。ぼくのようにすぐ頭に血が上る者にはなかなかこういう文章は読めません」

その記事には元警察庁長官の、こんなコメントが載っていた。

「CIA関係者を、かつてのソ連のKGB関係者と同列に論ずるのは間違いですよ。」

日米はあくまでも「友好国」なのであって、米政府職員であるCIA職員を情報関係者だからといって一人一人尾行するなんてことはできるものではない。

しかし、彼らが盗聴、封書開封などの明らかな違法行為をしている「現場」を押さえた場合は別ですよ。だがその場合でも、今年二月にフランス政府が駐仏大使館員五人を国外追放したような措置をとれるかどうか」

そして、記事はこれを受け、「ただし、この元警察庁長官は今回の騒動を契機に『日本も諜報機関をつくれ』とする意見が台頭していることに對して、『それは危険であり、あまりヒステリーを起こさないほうがいい』と冷静さを保つよう警告している」と結んでいる。

「つまり、ぼく流に解釈すればこういうことですか。日本ではフランスのような

対応を取ることは不可能だ。違法行為の現場を押さえることも難しい。だから、ほんらい、警察庁長官ともなればそうした事態を改善する立場にあるのだが、それはしたくない。

だから、主従関係にあるアメリカと日本を、友好国だからといくらめ、事態を改善しようとする勢力にヒステリーという言葉を投げつけて、押さえ込もうとしているのだ、と」

「そうよ、そうだと思うわ。第一、あたしたちの中にCIAをKGBと同列に論じている人なんていますか。だれもいないでしょう。CIAの諜報活動はKGBのそれとはまったくちがう。KGBの活動のターゲットは日本ではなくアメリカだもの。それに対してCIAのターゲットは直接、日本。脅威の質が違うでしょうに」

「この元警察庁長官は、ほんらい、いま日本がアメリカとの関係において置かれている厳しい立場を国民の前に明らかに

すべきなんだ。それを知る最良の立場にある。

諜報機関をつくろうとする動きに対しても、なぜ危険なのかを説明すべき立場なんだ。日米地位協定や、それをめぐる合意文書がどれだけわれわれの主権を制限し、警察官の活動を歪めているか、それを語るべきなんだ。

それを、こんなコメントでごまかそうとする。日本の警察のこの体質こそが、叩かれっぱなしの日本を作った。彼らが、日本経済を失速させた責任は大きい」

水越が、みんなの怒りを引き取った。
「で、どうします。問題はそれでしよう。つまりこれからどうするか」

水越の一言で、みんながようやく我に返った。

「そうね、それよね。この法案をどうするかよね」

「CIAの規制ができないんなら意味はないしなあ」

「あたし、ほんととは規制法には乗り気じゃ

なかったのよ。事業法一本でいいと思っていた。規制を増やせば利権が生まれ、知らないところで権力が育つ。そのイタチごっこはやめたいわ。でも、日米地位協定は許せないわ。これに楔を打ち込む手段がほしい」

「規制法は明らかに、地位協定に抵触する。条約は国内法に優先するから、日米安保条約を拘束することはありえない。しかし、地位協定の、しかもその周辺付属文書に過ぎない確認書が国内法を無視できるとは考えられません。国内法が作られれば、いずれは確認書の見直しが必要になる。そして、それが地位協定の見直しに結ばれていく。わたしは規制法が地位協定に楔を打ち込む手段になると思いますね」

「いずれにしても、時の勢いというものがなければ、議員立法の成立は難しい。つまり、時の勢い待ち、ということでしょう。しかも、その勢いは合意書の見直しはおろか地位協定の抜本改定を可能にする

ものだと思うんです。

だから、そのためにも規制法を準備しておかなければならない。タイミングのよい法案の提出は地位協定の見直しをも不可避にすると思うんです。われわれで協定の見直しを提案してもいいじゃないですか」

「つまり、我らの労作である『規制法案』と『組織法案』はこのまま維持し、完成に向けて引き続き細部を詰める、ということではないでしょうか。

反対者はなさそうですが、いかがですか」
水越が参加者一同を見回して、さらに続ける。

「法案の扱いはそれでいいとしまして、提出のタイミングを考える場合にどうしても確認しておきたいことがあります。皆さんは法案と抵触する合意書に不満をお持ちなのか、それとも、その大枠を決めている地位協定に反対しておられるのか、それとも日米安保条約そのものに疑

問を感じておられるのか。その点はどうなのでしょう」

「日米安保条約はどう見ても戦勝国と敗戦国の主従関係を基礎としたもので、友好や同盟といった対等な関係を目指したものでないのは明らかです。したがって、今日の、あるいは将来の日米関係を反映したものに变える必要があるのは確かです。

ただ、すでに日本の防衛体制は日米安保を前提に組み立てられてしまっている。したがって条約の破棄には十分な論議と準備が必要です。簡単に結論を出すのはむずかしい。

しかし、一部にあるようにこれを軍事条約から経済、社会を含むグローバルな条約に変えていくというなら地位協定の抜本的な見直しが不可欠です」

「いや、アメリカがそんなことを望んでいるとは思えません。欲しいのは従属的な軍事協力と占領地同然の地位協定で、それらはワンセットだ。占領地扱いはこ

めんだ、と考える限り、安保は破棄するしかありません。というより、占領地並みの有利な地位協定を失ったら、安保条約をアメリカが破棄してくる可能性も大きい。われわれはそれを覚悟しておく必要がある」

「安保条約に対する距離の取り方は提出のタイミングと関係するものですが、法案の中味とは直接関係がありません。法制班で論議するより、全体会に諮る案件だと思っています。

ただ、法案を準備しようという以上、これと抵触する合意書は破棄するつもりで結束したほうがいい。地位協定に関しては、その限りで見直しを求めるべきではないでしょうか」

「少なくとも、現状のままの地位協定ではだめだ、と。そういうことですね。みなさんはいかがでしょう」

この論議を聞きながら、磯崎は大沢八郎のことを考えていた。大沢は日本を「普通の国」にする、といいながら、もう

一方で「日米安保の堅持」を主張していた。しかし、安保条約は日本を隷属国として扱っているの、普通の国とは矛盾してしまふことになる。

その点、『NO』と言える「ツッポン」の著者・石原慎太郎の場合はずっとすつきりしている。自主防衛、すなわち安保破棄なのだ。少なくとも、それを覚悟せよ、と訴えている。

大沢はこの自己矛盾をどんなふうに整理しているのだろうか。それがひどく気になった。そしてまた、大沢の「プレーンではない」という篠山啓志。彼はこの辺りをどう見ているのだろうか。

「Qの会」が結成され、班構成になつてから、堀田とじっくり話す場面が減っている。そういえばアスペン研究所が発表したジョセフ・ナイの『ライジング・サンを管理する』を分析する約束もあのままだった。

堀田のことだ。もうそれはすっかり済ませていよう。磯崎はぜひそれを聞いて

みたいものだ、と思った。

磯崎は小浜島以来、手に入れた写真を持ち歩いている。が、顔写真から人名を確認するというのは意外に困難なものだということがわかった。写真に写った第三の男の正体はどうしてもわからずじまいた。

大沢の秘書をしているという池島佳苗は今どうしているのだろうか。彼女に確認を取るのもっとも手っ取り早い方法だが、それはまた、もっとも危険な方法かもしれないなかった。

篠山啓志にぶつけるべきだったのか、とも考える。しかし、こいつはもう時すでに遅し、である。

それにしても、篠山と大沢の微妙なずれはなんだろう。篠山と大沢と、そしてひよつとしたら池島と、そのうちの誰かがCIAのエージェントに間違いはないのだが、篠山と大沢とCIAというそれまでの図式が、磯崎の中でいま確実に揺らいでいる。

「Qの会」の動きが筒抜けであることは、磯崎に対する篠山の言動ばかりではなく、いくつかの兆候から確実なものになってきていた。

大蔵、厚生不祥事はその後もとどまることを知らず、高齢者福祉施設の不正で、ことは大貫隆一の所属する厚生省年金局にも及んだ。そのさい、厚生男は上司から「Qの会」の活動内容を質され、「退会済み」と返答。「その立場を堅持するよう」釘をさされた、という。

「こうなったら活動内容を秘密にする意味はありません。活動を公然化し、超党派の議員立法をめざして歩みを進めたほうが得策じゃありませんか」という溝口の意見が多数を占め、『積極待機』という言葉が会の合言葉のようになってきた。

そしてこの日（一九九七年七月三日）の全体会は初めて水島研究室から飛び出し、参議院議員会館の会議室で開かれた。

のである。議員会館の会議案内の掲示板にはみんながもうとつくに忘れていた「違法課報活動阻止機関研究準備会」なる名称が掲げられていた。

代表幹事は春田昭彦、幹事には議員会館での会議をセツトした杉井美紗、堀田豊、それに『山陰新報』の松永正紘の三人が名を連ねている。議員立法という性格上、役人には幹事をご遠慮願うとともに、水島系経済学者たちとも一線を引いた布陣である。

また、この日の会合には、顧問として超党派の国会議員が名を連ねた。会の趣旨は各会派に趣旨説明を行ったところ、相当に関心が高く、議員個人のレベルでは広範な層から受け入れられそうだと、という感触を持てたのである。

「やあ、遠くからお疲れさまでした」

春田が到着した松永を会議室の入口で出迎え、面識のない会のメンバーに次々と引き合わせている。磯崎も慌てて堀田を紹介した。

思えば磯崎や堀田がこの会と接触を持つようになったのも、松永が春田を紹介してくれたからこそである。その松永が堀田と初対面だったことに、磯崎はあらためて驚かされる。

会はず、この日の設定に関しての、杉井の説明から始まった。

「党派に偏りが起きないように、全党に声をかけ『今後の連絡を含め、顧問を一人立てて欲しい』と申し入れ、考慮中の二党を除き、賛同をいただいた。一会派から複数の顧問が出ているのは議員の希望によるもので、当会の偏りを示すものではない」というような趣旨であった。

続いて水越のほうから『防諜法案』の説明が行われ、参加していた議員や議員秘書に対し、法案成立への協力を依頼して第一部を終了。顧問議員の退席後、内輪の討論である第二部に移った。事情に暗い議員たちにいきなり懸案事項をぶつけるのは得策でないと思われたからだ。第二部では、堀田が法案成立に向けての

懸念される問題点、解決すべき課題を整理。これを受けて、最大の問題点である日米安保条約に伴う『地位協定』をどうするのか、の論議に入った。

口火を切ったのは中川伸一だった。

「その裁判権に関する合意書ですか。ひどい文面だと思いますね。もしアメリカが軍の関係者とCIAとを混同させようとしたら、わが国の官憲はなすすべがなくなる。」

急使とかいう者に識別できる何かを義務付けなかったら、軍の急使であるのかCIAの隠密であるのかの区別がつかないだけでなく、他の一般アメリカ人、一般外国人、あるいは外国人かもしれない日本人との区別もつかないはず。そもそも警察活動が成り立たない」

「もう正確には覚えていないけど、昔、変な事件がいっぱいあったような気がする。」

ファントム戦闘機が九州大学の校舎に突っ込んだときも、警察は現場確保以上

の動きができず、米軍も学生の反対で機体回収を止された。戦闘機がいつまでも校舎に刺さっていたんで印象に残っているけど、警察の動きが鈍かったのは戦闘機が機密の塊だったからなんだろう」

「偵察機のU2機がXXXXXXした事件でも、日本政府は嘘をつきとおした。アメリカの機密に触れるからなんだろうが、国会で国民をだますことが正当化されるとすれば、民主主義は成立しない。合意書が、あるいは地位協定がこれを要請しているんなら、これは憲法違反であって、安保条約が国内法に優先するとしても憲法は越えられないのだから、協定は無効だということになる」

「つまり、地位協定に唯々諾々と従って、職務を遂行してきたと称する警察官、検察官、外務省の役人ほか、これを正当化し、深く追求せずに庇ってきた裁判官、政治家、評論家などはすべてが売国奴だということですよ。国家主権を放棄したこんな協定を受け入れながら国家権力を振

り回すなんて、信じられない」
ここで堀田が立ち上がり、発言を求めた。

「みなさん裁判権に関する合意書へのご意見ばかりなので、あえて労務契約に関する合意書についての意見を言わせてもらいます。」

現在の在日米軍の任務の七〇パーセント以上が、この労務契約で上げられている要員を必要とする、情報部門で構成されています。したがって、この要員は相当の数にのぼると予想されますが、その実体がまったく不透明です。

また、ほんとうに軍事上必要な情報なのか、それ以外の情報なのか、軍の情報機関に配属されているのか、CIAが要求するセクションに配属されているのかを確かめるすべはありません。

つまり、日本人が日本の資金でCIAのために情報収集や情報分析をさせられても、それを拒否できないどころか、その立場に置かれていることを表明するこ

とも許されない。こんなことが許されていいのでしょうか。

問題はこの諜報要員が秘密のベールに覆われている、ということですよ。たとえば、政府機関の研究員が、その身分のままでヘッドハンティングされてはいないのか。スパイとしての訓練を受けた上で、再度政府機関にもぐりこまれる恐れはないのか。確認のすべがまったくないのです」

「変ですよねえ。『工場監察技師』なんて、産業スパイそのまんまじゃないのかい。『細菌学職』なんて、生物兵器の研究者にちがいない。

在日米軍は一時、『地理学職』と『製図師』を大量に動員して、中国のすべての井戸や湧き水の位置を地図化していたそうじゃないか。細菌戦に際して細菌を投入する作戦図だろう。こんなものに日本人が動員されていいのかね。

幸い今じゃ、日本人の代わりにスパイ衛星がやってくれてるんだろぅけどね」

「人道に関する罪ですか」

「確かに、他の軍事協力と同列には語れない問題があるね。しかも、行動の決定が外国にある、というのが問題だ」

『情報調査員』『犯罪調査職』というのはなんですか。公安調査庁とか警察庁の関係者が協力させられるのでしょうか。ど、その身分はどうなっているんでしょう。ひどく気になるんです。そのまま使っているのかもしれない」

「まさか、それはないでしょう」

「いや、在日米軍やCIA同様、日本の捜査機関、情報機関も秘密のベールに包まれていて、闇は深い。捜査上の都合で、隠されていることがたくさんある」

「気になるというのは、先日（六月二六日）判決です。共産党国際部長宅電話盗聴事件で、神奈川県警の現職（一九八六年当時）警察官五人の関与が認められた、あの東京高裁判決です。

判決は五人の犯行を立証しながら、盗聴を指令した黒幕の認定がない。にもか

わらず、国と神奈川県に四〇〇万円の損害賠償を命じ、警察庁も神奈川県警も関与を否定しながら賠償に応じ、最高裁への上告はしないという、不可解な結末です。

しかも八七年には神奈川県警本部長が辞職し、県警警備部長が総務庁に転出させられています。警察庁は始め引責人事ではない、としていました。後に、引責とも取れる発言をしています。

あたし、この事件には最初から裏があるんじゃないかと思っていました。というのも盗聴そのものはプロの仕事ですが、装置は旧式で、発見してくれといわんばかりに装置が放置されていたということ。それに、国際部長宅は東京都町田市にあるのに、警視庁ではなく神奈川県警の警察官が実行していること。これっておかしいと思うんです」

「なるほど、そいつはすごい推理だぞ。つまり、神奈川県警の警察官をアメリカ軍の諜報部、あるいはCIAが直接指揮

した。こう考えれば多くの矛盾が解決する」

「ええ。残るのは、組織上そんなことが可能なのか、ということと、なぜ、わざわざ発覚するような手を使ったのか、ということだけなんです」

杉井の意外な問題提起に、堀田が強い関心を抱いたようだった。

「組織上可能かどうか、ということになると、わからないとしか言いようがない。しかし考えてみれば、不可能だという確証もない。そのぐらい、この国の警察制度はわかりにくいということだ」

「神奈川県警、というのはおもしろいですね」

ここに春田が割って入った。

「神奈川県というのは最初にCIAの工作訓練所ができたところです。武蔵小杉駅の近くにあった東川クラブというのがそれで、G2のキャノン機関もここに吸収されたんです。」

CIAは初め、日本郵船ビルに本部を

置きますが、その後、六支部体制をとり、厚木に統括本部を移します。アメリカ大使館支部は厚木の下に置かれたのです。

在日米軍の中樞が神奈川県にあったことも見落とせません。横須賀海軍基地、厚木飛行場。とりわけ厚木はCIAの対中謀略基地として重要な役割を果たしていました。ここで多くの在日中国人を訓練し、スパイとして中国本土に送り出したのです。

在日中国人が日本から消えるのですよ。警察の協力なしにできると思いますか」

「それだけじゃあない。人道上あまりにもひどいので、アメリカがひた隠しにし、いまだに資料の公開を拒んでいる事がある。朝鮮戦争で北の捕虜になった一〇〇人足らずのアメリカ兵の救出に、一万人を越す在日朝鮮人が送り込まれた。何の援護もなく落下傘降下をさせられ、みんな犬死です。彼らも事前に厚木で訓練を受けていた」

「そうか、緊密な連携があったんだ。そうでなければ横浜や川崎を抱える神奈川県での警察活動は不可能だった。自治体警察だったら当然、米軍と何らかの密約を交わしただろう。たぶんそれはやむをえなかった。でも、それは当時のことで、今は……」

「まちがえないほうがいい。今も基本は自治体警察だ。トップ人事を警察庁が押さえ、広域事件に対処する、というのが警察庁設置のタテマエだ。

けれど、戦後、内務省・国家警察を解体して自治体警察を作り出したアメリカにとつてはどうだ。こんなタテマエは通じない。制度的にみてもそうだが、アメリカから見ればいまだに自治体警察のままだといえる。とすれば、交わした密約は廃棄する必要もない」

「なんということだ。もしそれが本当なら、とんでもないことだ」

「といっても、確認のすべはない。警察の内部情報が異様に保護されている今の

政治構造のままでは、警察がなにをいおうと信用できるものではない。一定の情報公開を義務づけるほかはないわけだ」

「つまり、現職の警察官のままで、軍のカバーをかぶったCIAに指揮される、ということもありえないことじゃあないわけね」

「謀略工作までやるのは異様だけれど、依頼を受けて動くのは日常茶飯事なんだろう。だから、感覚が麻痺してくる」

「この辺りを徹底的に暴かなくちゃいけないわね。そうでなければ、防諜法を作ったってザル法にもならないわ。警察が情報をお届けしちゃうわけですもん」

「戦後の謀略事件と神奈川警察の関連を洗う必要もあるのかな。三鷹事件を仕掛けたと思われるアメリカ人が相模湖に浮いていた。が、その後の捜査はなぜかない。土地に詳しい人ならご存知だろうが、あそこは中央本線だが、神奈川県ですからね」

松永が、古い事件を紹介した。

「そうすると、もうひとつの謎だね。CIAに指示された警察官が、なぜ、すぐに足がつくような盗聴をやったのか、ということだ」

「絶対にあるぞ、何かの理由が。何とかそいつを見つけ出してやる」

長谷川が、また吠えた。

「みなさま、たいへん論議に熱が入っておるところですが、ここで少々お時間を頂戴し、わざわざ島根から駆けつけてくれました本会幹事でもあります松永正統さんより、内務省系情報機関構想についての報告をお願いしたいと思います」

春田に紹介されて、松永がゆつくりと立ち上がった。会議室をぐるりと見渡し、やや間をおいてから、語りだす、このタイミングの取り方に、磯崎は政治家を目標にした彼が身につけた風格のようなものを感じざるを得なかった。

「ここおいでのみなさんは、どちらかといえば経済官庁型の思考をお持ちの方

が多いのではないかと、思います。内閣官房というなら、内政審議室タイプとでも申しましょうか。

しかし、この国には外政審議室タイプの思考方法をもっぱらとする者も、安全保障室タイプの思考を得意とする者もあるもので、それらの研究を抜きにしては世の中、動きません。

ということでは、みなさんが見落としておられる内務省系情報機関構想について、お話ししたいと思います。この構想は未完ではありますが、すでに存在しております。すなわち、当会の構想同様、待機状態にあるわけです。

発案者は内閣官房副長官だった石原信雄（長野オリンピック組織委員長）。きっかけは一九九四年七月、北朝鮮の金日成総書記の死去を事前に察知できず、死去後も連絡体制の悪さから、有事に対する備えが何一つできなかったこと。そしてそれを受けて、首相官邸の危機管理の甘

さがマスコミによって強く批判されたこと、だといわれます。

つまり、名目は官邸機能の強化であります。そして、その実体は内政、外政、安保の三室の壁を取り払い、共通の情報機関をつくること。その上に旧内務省、つまりは自治省と警察庁が君臨する、という支配の構図です。

一九九四年一〇月二一日付けの『産経新聞』はこれを「日本版『NSC』設置へ『危機管理』見直し 内閣情報会議も常設に」と、報じています。NSCとは、アメリカの国家安全保障会議のことですね。

具体的には内政、外政、安保の三室長を局長クラスから次官クラスに格上げする。内閣情報調査室を事務局に、定例に閣僚局長会議を設置する。緊急時には安保室の下に連絡情報委員会を設置する。安全保障会議を充実し、テーマに応じて郵政、運輸、法務を参加させる。この四点です。

これによって、内政審議室傘下の三省が、緊急時には全省が安全保障室の傘下に入り、自治省・警察庁の官邸掌握が一気に進む。と同時に、外務・防衛の外政審議室の力が相対的に低下し、内政審議室はずたずたに引き裂かれる。

これはある種のクーデターなんです。大蔵省を中心に進んできた戦後体制の終わり、自治省・警察庁による戦後支配の始まりを意味している。

ここで注意して欲しいのは、これが単純な戦前回帰ではない、ということ。これによって防衛庁の力はむしろ低下する。軍と内務省との力関係は、戦前と逆転しているのです。

なぜこういうことが可能になったのか。それは脅威の質が変わったからです。仮想敵がソヴィエトから朝鮮民主主義人民共和国に代わったからです。彼の在任中の専売特許が半島の危機でした。明日にでもやってくる、と叫び続けて、地歩を固めていった。

官邸、すなわち石原信雄は朝鮮半島の危機を邦人の救出と、難民の上陸対策、散兵による小地域占領に絞り込み、その危機を煽った。こうした危機への出番は自衛隊よりも警察なのです。もちろん核の脅威もありますが、こいつは自衛隊でも対応できるしろものではないので別問題です。

中曽根時代の後藤田にもできなかったこと、内務省支配のクーデターが外政審議室、内政審議室の抵抗もなく進むかに見えた。それを可能にしたのが武下内閣から村山内閣まで七代、七年にも及ぶ長期にわたって、石原が官僚の最高ポストに君臨した結果だといっている。

そしてもしこの構想が実現していたら、この会の『防諜法案』など日本版NSCの前で、吹き飛ばされていたにちがいないりません。かりに、成立できたとしても、これがCIAを規制するものになるなど、とても考えられません。日本版NSCは『防諜法』の実行組織を

傘下に収め、CIAの情報もありがたく頂戴して、この国の方向を決定していくことになるのは火を見るように明らかです。

しかし、彼はこの構想を隠密裏に進め、内閣官房長官にも報告しなかった。が、その一方で構想の重要性をマスコミにリークして支持を仰いだ。今お話した産経の記事などがそうです。これをマスコミは「大きなミスを犯した」と指摘していますが、どうでしょうか。私はこの時点では孤軍奮闘、ほかに方法はなかったのだと思っています。

時の官房長官は権力の肥大化に敏感な社文党の五十嵐（広三）だったからたまたまない。構想の危険性をかぎつけた五十嵐は激怒し、石原のもくろみは頓挫した。とはいっても、彼は現実に官庁を横断的に動かした。構想は白紙といっています。が、実績は残ったのです。つまりタイミング待ち。息を吹き返すまでの、待機なのです」

「つまり、自治省・石原構想と、われわれの『防諜法案』と、二つの相容れない構想が待機状態にある、ということですね。

まえに法制班の会議で、元警察庁長官のコメントが紹介されたんです。長谷川さんだったかな。そのコメントで、日本にも諜報機関を、の声を『ヒステリーを起こさないほうがいい』と批判していたのは、そういう背景もあるのですね」

「と思いますよ。わたしたちの法案が成立すれば自治省、というよりも、警察庁を含む旧内務省・石原構想は抜本的に見直さざるを得ない」

「で、その後、内務省・石原構想はどうなったのでしょうか」

「眠っています。しかし、阪神淡路大震災で危機管理を仕切ったのは実質的に警察です。自衛隊の出動も、外国からの救援も拒否し、救助よりも身元確認を優先させた。これは朝鮮半島有事の演習のように見えました。

そして、待つてましたとばかりに背番号構想を打ち出した。住民票をベースにした番号システムの構築と、カードの携帯です。身元確認が手早くできれば危機管理がやりやすい、という論理です。

そして、オーム真理教の事件に対しては、法務省主導の破壊活動防止法適用に反対し、警察庁の捜査権限が飛躍的に高まる『組織犯罪対策法』を持ち出してきた。

個々の場面では確実に内務省・石原構想の足掛かりが築かれようとしているのです。

ほんとうのところ、構想を軌道に乗せ、これを花道に引退して、都知事選に打って出たかったのでしょうか。が、結局は九五年の知事選に、空手で出馬することになりました。

自治省官僚が都知事を押さえる。これもまた、内務官僚の悲願です。彼はその実現のために、与野党相乗り、必勝態勢で知事選に臨んだ。

わたしが関心を持ったのは石見市長の岩

槻鉄人の動きです。彼は自治省の回し者のような動きをしていましたから、表面はわきあいあいに見えましたが、武下昇にとっては目の上のたんこぶ。水面下では追い出しにかかっていた。

岩槻も石見市長は腰掛けにすぎないので、自治省の後ろ盾をもらいながら、東京都知事の座を狙っていた。そこに石原が天下ってくる。岩槻の目算は外れたわけです。

自治省としては島根県知事あたりで納まって、武下一派の金権政治を押さえてくれればありがたかった。が、自治省は岩槻を大きく育てすぎてしまった。島根県知事で納まる器ではなくなってしまったのです。

そこで民自党と自治省は彼を大阪府知事に押し込めようと全力で動いた。岩槻もぐらついたようだが、結局はご承知のとおり、政党の後ろ盾もなく都知事選に立候補。石原と激突するわけです。

ここには自治省の独善的な体質と、それ

ゆえのよろさがうかがえます。この調整の失敗には石原構想の白紙撤回と似たものがうかがえます。しかし、なぜか実力以上に威勢がいい。強引な手法にはそれなりの目算、裏づけがあるはずなんです。わたしはこの裏にはCIAの支持がある、と睨んでいます。

CIAは一九九〇年以降、軍事諜報から経済諜報に主軸を移した、といわれますが、もうひとつ、見落としてはならないのが警察諜報の重視です。麻薬、テロ、武器取引といった警察諜報を世界的に組織することで、アメリカの覇権を確立しようとしている。

自治・警察という旧内務省勢力はこれと結びつくことによって、国内での主導権を握ろうとしている。進取党の大沢と自治省官僚の石原は、CIAの力を背景に日本の既存権力を打ち倒し、実権を握ろうとする双璧なんです。

自治省にとって、都知事の座は何であったか。自治省の思惑にそった地方分権の

指令塔です。逆にいえば、東京に反対されれば多くのことが行き詰まる。だから、自治省の構想外だった青島都知事の登場は青天の霹靂でした。

自治省はまず、都知事が就任するのが恒例の全国知事会長の座を『素人で不安だから』という理由で勝手に取り上げ、元自治省官僚の梶原岐阜県知事にすげ換えました。

狙いは何だったかという点、住民票ベースの番号システムを下から推進することにあつた。梶原は知事会長名で、このシステムに賛成し、岐阜県独自でもシステムを導入する、と息巻いています。

コンピュータによる番号管理をCIAが望んでいるのかどうかはわかりませんが、反対はしないでしよう。世界最大のコンピュータ・ファイルはNATO（北大西洋軍事同盟）のものかイスラエルのモサド（中央諜報機関）のものだといわれています。どちらもCIAに近い組織ですからね。

地元、島根の情報筋では、評論家の篠山

啓志が岩槻政策事務所に送り込んだ池島佳苗の動向に注目が集まっています。この磯崎くんによれば篠山はCIAかもしれない、ということですが、われわれの間でも、その疑いを強めています。

その篠山が送り込んだ池島が、東京都知事選では岩槻ではなく石原を応援した。そしていま、彼女は大沢の秘書に納まっている。CIAはおそらく、岩槻よりもおいしい石原に乗り換えた。われわれは池島の動きをそう読んでいます。

ローカルな視点で申し訳ないが、そうだからこそ見えてくるものもあるんだと思っっています。もうひとつ、言い添えておきますと、石原が考えている北の散兵による小地域占領のモデルが島根です。難民の大量上陸想定地でもあります。わたしは石見市でカードの導入実験が行われたのも、このことと無縁ではないと考えております」

CIAの謀略 第9章 「展開」

「ジョセフ・ナイやエズラ・ボーゲルがまとめたアスペン研究所の『ライジング・サンを管理する』を、大雑把にまとめる」ということになる」

磯崎と堀田は久しぶりに二人だけで会うことになった。いつもの代々木の喫茶店は思いのほか混んでいて、密談を交わすにはふさわしくなかったのも、二人は残暑の日差しを街路樹の葉陰と高速道路の影とで避けながら、千駄ヶ谷に向かった。

神宮の森からは秋の訪れを告げるヒゲラシゼミの声が届いてきた。

プランターで溢れ返り、花の咲き乱れる明るい店があつて、パティオ風の席がなん卓か道路沿いに並んでいる。

「おれたちにはおよそ似つかわしくないな」などつぶやきながらも、結局はそこに落ちていた。密談は道路の喧騒の中へと溶けていってしまうだろう。

「このレポートはポスト冷戦後、日本が進む方向には四つの可能性がある、という。」

ひとつは従来どおり、日米安保を機軸にアメリカとの関係を最優先しながら、東アジアの安定を模索していく道。ふたつめは普通の国として日米安保から離脱して、独自の軍事・経済政策を構築する道。三つめはアジアの経済ブロック化を目指して、東アジアを糾合する道。四つめは国連などの国際機関を重視し、その枠の中で国益を擁護する道。

この四つだ」

「なるほど、その選択肢は私たち自身の中にもある程度意識されている。目新しいものじゃあないなあ」

「その通りだ。しかし、このレポートはまず始めに、第一の選択は非現実的だ、として切り捨てている」

「従来どおり、安保にすがら、というチョイスはない、というわけか。これは大胆だね」

「そうなんだ。日本人の多くがいまだに日米安保の中で眠り込んでいるというのに、ナイとボーゲルは、そうはいかないだろう、としているわけだ。日本の脱アメリカは避けられない、というわけなんだ。だから、次に、日本がどこへ向かうように誘導するのがアメリカの国益にかなうのか、を検討している」

「極めてクールなレポートなんですね」

「そう思う。しかし、アジアのブロック化についてはあまり根拠も示さずに、現実的な選択肢は二か四だ、と短絡している。つまり、単独防衛国家か、集団自衛

国家かのチョイスになる、としている」

「つまり、ブロック化の芽は摘む、そうはさせない、というのがアメリカの国益の前提にあるでしょうね。だからマレーシアのマハティール首相が提唱するE A E C（東アジア経済協議体）構想を潰して、空疎なA P E C（アジア太平洋経済会議）を押し付けた。

A P E Cでは広すぎて、地球規模の利害

とは異なる地域に固有の共通利害がなにも見出せない。だから九五年、大阪でのA P E Cに共和党との対決、という国内問題を優先したクリントンは、なんのためらいもなく欠席して見せた。マハティールはさぞかし悔しかったろうと思いますね」

「やっぱり日本の敗北だといっている。日本はアメリカに対して頭が上がらず、円経済圏の樹立など、夢のまた夢だ、というメッセージをアジア諸国に発信してしまった。

日本、頼るに足らず、というメッセージは世界大戦のときにアジア諸国に植えつけた侵略国家・日本のイメージに勝るとも劣らぬ決定的なダメージだよ」

「A P E Cの枠組みを飲む代わりに、E A E Cの構想を半歩でも進めるべきだったんですね。この国はアメリカに対して何の駆け引きもできない。顔色をうかがうだけの外交なんだ。

けれど、確かにこの間の日本経済の失速

で、第三の芽はなくなりましたね。円経済圏などという構想はもう二度と登場することはなさそうです。ナイ「ボーゲル・レポートには先見の明があったというわけです」

磯崎はテーブルの上に飾られた水盆に浮かぶデンファールの花房を、苛立ちを静めるためにつついてみた。

「さて、そこでだ。日本の進路は単独防衛か集団自衛に向かう。が、一人前の国家として、単独の防衛力を持つ、という方向、これが日本の再軍備を意味することとは間違いない。もつとありてい言え、行き着くところは核戦力の保有である。

レポートはこれをアメリカの国益に対する最大の脅威とみなしている。つまり、あらゆる手段を講じてこれを阻止し、第四の道、国際機関を通じて国益と安全を確保する道へと日本を誘導すべきだ、と主張している」

「安全保障理事会の常任理事国入り、国

連平和維持軍への参加、この間の民自党や進取党の主張はそれだね。両党とも、安保条約堅持を前提にしていますかね。これに殊のほか熱心なのが沢大沢じゃないだろうか」

「さて、問題はそこだ。ほんとうに沢大沢は集団自衛論者なのだろうか」

「そうは思いませんね。PKO、PKFへの参加は自衛隊の海外派兵のための口実で、とりあえずの方便でしょう。国連外交に対するビジョンなどなにも持っていないように見えます」

で、狙っているのは憲法九条の改正、集団自衛権の確立、その後に自衛隊の国軍化、日米安保の離脱じゃないですか。手順は違うが、石原慎太郎とおなじ匂いを感じますね」

「つまり、単独防衛主義」

「もつといえ、国粋主義」

「沢大沢が言う『普通の国』とは、誇りを持って世界に伸して行く、アメリカやイギリスのような国、ちょっと割り引いてフラ

ンスのような国」

「たぶんそうなのでしょうが、あきれますよね。アメリカもイギリスもアングロサクソン連合だし、フランスはEUの一角。いまだき単独で世界に伸していける国なんてありはしない」

隣の国と手を結ばなければならないときに国粋主義ですよ。時代錯誤もいいところだ」

「そう、そいつはアジアにとつても世界にとつても危険だと、ナイ＝ボーゲルは考えた。そしてわれわれとおなじように、大沢に疑いを抱いた」

「なんと、大沢はCIAにとつて好都合な人物ではなかったのか」

「CIAがナイ＝ボーゲル路線を採用するまではそうだった。ナイ＝ボーゲルによつて、あるいはクリントン政権がアジア政策を『ナイ＝イニシアチブ』によつて進めていこうと決めたことによつて、大事な盟友だった大沢は、アメリカの国益を脅かす危険人物に変わったわけだ」

「なんと、それじゃあまったくいい面の皮だね。おだてられて木に登られた豚みたいなものじゃないか。なにしろCIAのケースオフィサーと目されているジミー・フォスターに言わせれば『大沢を政治家にしたのは俺』だそうですからね」

「実際、政権の座から滑り落ちてしまつて、フィクサーとしての実権を失つてから見限られたわけだから、路線の違いはともかく、単純に利用価値がなくなった、と取れないわけじゃあないけどな」

そしてもうひとつ、CIAにとつて、大沢以上に有用な相手が現れた。だからますます用済みになった、とも解される」

「その、有用な相手というのが石原信雄ですね。石原がリードする民自党も悪くないじゃないか。社文党の首相になつても手綱が効いている。大蔵省はガタガタだ、というわけですね」

実際、民自・社文の連立を支えたと思われる野中・梶山・亀井のうち、梶山・亀井は警察官僚で石原とも近い。野中にし

ても内務官僚のドン・後藤田の息がかかった人物です。石原はCIAにとつてもキーパーソンであつたに違いありません。

で、その、大沢が見限られたのはいつのことなんです」

「前に話したと思うが、一九九四年の一月にウールジーCIA長官がボーゲルを伴つて東アジアを歴訪した」

「ああ、覚えている。たしか、非公式な歴訪で、公式には別にベンツェン財務長官とナイのチームがアジアを訪れていた。あのことですね」

「そう。あの旅はCIAのアジア政策の転換を現場に正確に伝えるためのものだった。中味は軍事重視から経済重視への転換にとどまらず、ナイ＝ボーゲル路線の採用を周知させるものでもあつたわけだ。

つまりは日本の軍事大国化の阻止、日本の核兵器保有の阻止。これがCIAの目標のひとつに加つた」

「その瞬間に、大沢の立場はなくなつた、というわけですね。たしか、あのときはまだ日本は核不拡散条約（CTBT）への態度を保留し、核兵器保有の道を残していましたからね」

「大沢がほんとに見限られたのは、そのあとだ。これも前に話したことだが、大沢はその年の七月にナイとボーゲルに呼び出され、ワシントンに飛んでいる」

「日米安保を重視する共和党国防族のアーミテージが同席していた、という会谈ですね」

「そう、あの会談こそ大沢の本音を探るためにセットされた、口頭試問だったというわけさ。ナイとボーゲルは初めから大沢を疑っていた。だからアーミテージを同席させて『ほら、見てみる、言つた通りだろ』とやった。これで大沢のCIA内での役割は終つた。つまり、見限られたわけだ」

「大沢はなにを話したんですか」

「持論の国連重視をとうとうと語つたよ

うだ。それはそれで問題はない。が、ナイとボーゲルは微妙な違いを嗅ぎ取つたのだろう。

大沢は日本の国家責任を果たすために、アメリカ同様、国連に貢献する、と述べた。いわゆる国際貢献論だ。そして、イコール・パートナーになつた日米の安保こそ、強力だ、と主張した」

「アメリカから見ても正論のように思えるが」

「何を言つてる。アメリカはそれでは困るのだ。アメリカは別に国連に貢献しようなんぞと考へてはいない。国連など国益追及の道具建てのひとつに過ぎない。利益が対立すればいつだって即座に切つて捨てる。だからアメリカは日本に国連を通じて、アメリカに貢献してもらいたいと考へている。イコール・パートナーが欲しいのではなく、ジュニア・パートナーのまま、国際舞台に出てきて欲しいのだ」

「なんと身勝手な」

「といつても、それがアメリカという国だ。どうにもならない。それだけじゃない。大沢が決定的に見限られたのは国連へのアプローチに関してばかりではなくて、E A E Cに対する評価に関してだったらしい」

「という」と

「おまえがさつき言った意見さ」

「えっ」

「大沢はE A E Cがアジア経済のブロック化を目指すのには反対だが、域内経済の活性化を目指すならいいのではないか。日本の参加に反対しないで欲しい、とやった」

「同感だ」

「だが、さつきも言ったように、ナイ＝ボーゲル路線にとつて、このチョイスはない。C I Aが目进行ける男としては、完全に失格なんだよ。ナイ＝ボーゲル路線によれば、イコール・パートナーとかアジアのブロック化とか、そんな大それたことを窺うのはそれだけで危険人物な

のだ」

「参ったね。日本人はやつぱりほとんどが危険人物なんだろうね。C I Aのエージェントになるのは並大抵のことじゃないさそうだ。それにしても、大沢は厳しいな」

「そうだろう。大沢が急にニコニコ始めたのはそれからだ」

「こわもての撤回か。虎の威を失った狐だね。よく見てみたら、狐でもなく狸だった」

「ところで、磯崎は堀之内久子覚えてるだろう」

「もちろんだよ。二年前にも会つてるじゃないか。コロンビア大学の修士課程を卒業して一時帰国したときだ」

「ああ、そうだったか」

「ニューヨークの出版社に勤めているんだろ。なんといったっけ」

「スタンソンとか言つてたな。ブロードウェイの一角にある、という」

「で、彼女がどうした」

「うむ、彼女が変だ。これまで、いろいろ情報をくれていたんだが、それが途絶えた。というより文面から情報が消えた。判字文のような、意味不明の文脈がはさまっていることはあるが、あとは単なる時候のあいさつになった。

判字文からわかつたのは『海、Love、以、つまり『Sea、愛、A』だ」

「なんで『以』が『A』だ」

「以は『いろは』の『い』だ。つまり、『A B C』の『A』」

「なんだかちやちだなあ」

「まあ、そういうな。ともかく彼女はC I Aを怖れている。仮に親書を開封されても困らないような注意が施されていて、おれが出す手紙でも、注意するよう念を押してきている。だから、いったいどうしたんだ、と聞くのもためらっている」

「ううん、そいつは困つたなあ。で、いたい彼女はどんな情報を送つてよこして

いたんです」

「むこうの出版事情、それにCIAの動き」

「CIAの動き、ですか」

「ああ、そうだ。おれが前に話したCIAのバックにある軍産複合体のことを、久子は『OBグループ』と呼んでいる。つまり、CIAはウオーターゲート事件を契機に、内部対立が生まれた、このだ。」

国内法に基づき、大統領の指揮下で、与えられた役割を全うしようとする『若手グループ』が台頭して、闇の権力を維持しようとする『OBグループ』と対立した。この若手グループがウオーターゲート事件の解明に協力した、というのだ。

ところが、この両者の対立の間隙を縫って、レーガン、ブッシュ両共和党大統領に取り入ったのが、CIAに古くから潜んでいた『古参グループ』で、彼らはイスラエルの『モサド』と強力に結び

ついていた。

ブッシュのブレインも、これまでの共和党お抱えの伝統的なシンクタンクとは無縁の、マンハッタンにうごめく無数の親イスラエル謀略機関の中のいくつかで、『古参グループ』と強力な一体関係にあった、という。

イスラエルのために彼らが仕掛けた謀略こそ、イラクの壊滅、すなわち湾岸戦争だったという」

「湾岸戦争のCIA謀略説は、ずいぶん明らかになっていますね。」

イラン・イラク戦争でイラクを支持していたアメリカは、停戦後の経済再建に石油価格の上昇を望んでいたイラクに、クウェート侵攻を許した。

クウェートがOPEC(石油輸出国機構)の約束を無視して石油を大增産し、価格低迷を招いていたからです。

しかし、実際にイラクがクウェートを侵略すると一転して、フセインを国際犯罪者に仕立て上げ、イラクを叩き潰した。

このシナリオを書いたのはCIAとイスラエルのモサドだ、ということで、証拠がずるずる出てきています」

「あれを劇的な勝利だ、といって、もう手を上げて喜んでいるのはイスラエルと日本だけ。日本はアメリカ情報、それもニューヨーク・ワシントン情報漬けになっていると同時に、広い国際感覚をまるで持ちあわせていない。彼女は日本を、軽佻浮薄で、みつともない国だ、とまで言ってるよ。」

久子によれば、ニューヨークとワシントンは異様なところで、ユダヤ資本の支配とシオニストのロビーストが暗躍するイスラエル植民地だ、という。そこから発信される情報を見て、アメリカの意向だ、世界の潮流だなどと考える日本人がいるとすれば、それは愚の骨頂だ、とも言っている。

アメリカでは多くの人が湾岸戦争の勝利でベトナム戦争の後遺症から脱出できたことをよしとしながらも、イスラエル

に振り回されて、大きなツケを負った、と考えている。

全イスラムを敵に回し、未来永劫、アメリカがイスラエルを守り切ることなどできるわけがない。イスラエル自身の和平努力が不可欠だ。ところがモサドは、この努力を怠って、ツケをアメリカに回した。

CIAの『古参グループ』はそのために、嘘の情報さえ流し、アメリカ政府に莫大な損害を与えた。この事実が今、『OBグループ』と『若手グループ』から告発されている。

作戦遂行上からもCIAの発言力を削ぐとするペンタゴン、国防を軍事力から経済力にシフトしようとするホワイトハウス（クリントン）のまえで、CIAが生き残るためには、『OBグループ』『若手グループ』が手を結び、CIAから『モサド』の影響力を徹底的に排除するほかはなかったわけだ。

大沢はこの『古参グループ』に利用され

た。だから今では排除の対象なのさ」

「なるほど、それはよく整理された話ですが、それじゃあ九六年九月のイラク再爆撃はなんだったんです」

「あれはよく言われるように、再選に向けてのムード作りさ。対外的には国連の面子ということもある。アメリカはなしる国連とは別個に多国籍軍を組織したが、名目は国連決議の実行だった。だから湾岸戦争終結後も決議の実行という国連の体面を担保しなければならなかった。

と同時に、なお力を持っている『古参グループ』を納得させる行動も必要だった。彼らはクリントンの政策に対する批判を強めていたからだ」

「つまり、日本人よりもまだアメリカ人のほうが事態を冷静に見ているということかな。自己利益を求めてうごめく者も、まあ、冷静といえば冷静だからね」

「ともかく、あのときの日本はおかしかった。みんなニューヨーク情報一色に染め

られて熱病に冒されたみたいだったよ。一年前にはフセインのフの字も知らなかった連中が、何十年も前からの宿敵のように、あることないこと、口角泡を飛ばしてあげつらっていた。

多国籍軍の攻撃を正当化するためにニューヨークが流したクエート少女の情報、小児病院がひどい状態だと証言したあの少女は在米クウェート人で、証言はやらせだった。イラクの油田破壊で汚れた鳥の映像も、別な場所のものだった。

日本の政府や評論家が盛んに口にした『ソ連も支持している戦争だ』というのも嘘だった。ホワイトハウスが流したこの嘘に、ソ連は正式に抗議している。

日本ほどではないにしろ、同様のことがヨーロッパでも起こったようだ。もちろんモサドが仕組んだことだが、ニューヨークの、そして、アメリカやイギリスの大マスコミをすべて手の内に入れている国際ユダヤ資本が効果的に動いたことは間違いない。

アメリカでは当時のことを振り返って『世界のフセインのイメージを二ヶ月で変えた』と言われている。つまり、恐ろしいことにモサドは世界の世論をコントロールする手段を手に入れた、ということになる」

「確かに、あのときフセインはあつという間に悪魔になりましたね」

あのとき、不思議に思わなかった自分を振り返って、磯崎は頭を掻く。

「日本のマスコミがユダヤ資本にやられているという話はあまり聞かないが、あのとき、テレビでは報道管制みたいなことが起きている。複数の局で、ディレクターが、問題発言をしそうな出演者に『イラクの支持はしないでくれ、少なくともクウェート侵攻は非難してくれ』と頼み込んでいる。

大沢八郎の影、石原信雄の影に怯えたのか、あるいはほんとうに、何らかの圧力が加えられたのか。ともかく結果的には卑劣な罠をかけたアメリカを、日本は官

民一体、大合唱で支持してしまったことになる」

「何の疑いも持たずにね。脅せばどうにでもなるブッシュホンでしたからね」

「まあ、こういった情報コントロールはニューヨークを舞台に進められた。しかし、アメリカではちゃんとその後に反省期がくる。まずかった、やりすぎた、と言いだす人がいる。それなりの資料も明るみに出される。

堀之内久子はそんなアメリカの健全な一面が現れたときに、ニューヨークという舞台に降り立ったわけさ」

「そこで、CIAのレポートを送ってよこせた」

「うむ、それだけじゃない。彼女はその健全な一面にも、不健全さがあることを見逃していない。

彼女の留学の動機を覚えているかい」「たしか、アメリカのフリーランス・ジャーナリストはなぜステータスが高いのか、その謎に迫る。まあ、その話は二

年前に一時帰国したときに聞いたけどね。

アメリカのフリーランス・ジャーナリストというのは政治家や財界人などひとつの階層を形成していて、相互の流動性が非常に高い。また、フリーといっても必ず何らかの利益団体と結びついていて、その代弁をしている。日本のような報道の中立性という概念にはとらわれない。

そして何よりも驚くべきことは、この階層に限っては強力な縁故、それも血縁によって結ばれている、ということだったね。この縁故に支えられていなければ、フリージャーナリストとしてたぐさんの媒体にレポートを発表することは困難だ。アメリカが誇る機会の公平という市民社会の原理が、ここでは機能していないんだ、と、たしか、そんなことだった」「つまり、縁故こそがステータスの秘密だったわけだ。しかもこの縁故は一部の政界人脈、財界人脈とも共通している。

縁故を伝って、いつ政治家になるかもわからないわけだから、ステータスが高いのはあたりまえ、ということだ。

しかも、ニューヨークのジャーナリスト人脈のほとんどがユダヤ系人脈で、出版資本や放送資本と重なっている。さらにはユダヤ系シンクタンクやウォール街の金融アナリストや投資家なども重なっていて、ある種のシンジケートを形成している。

そのため、これと結びつくことなくフリーで活躍するチャンスはほとんどない。雇われ記者として、上役のチェックをかくぐる記事を物にするしかない、という点では、日本の状況とそう大きな違いはない。

ただし、久子が言うにはジャーナリストの就職口は相当広い、という。それが諜報機関やシンクタンクの情報収集や情報分析、情報加工の仕事なのだ、という。ニューヨークは、そして、コロンビア

大学はそうしたヘッドハンターやリクルーターたちの代表的な草刈場で、在学中からたくさんのピッチを受ける。ピッチはCIA内部の隠語だがな。つまり誘いの声がかかる。

まあ、日本でもあることだが、めぼしい学生を関係する機関のリクルーターに報告する教授も少なくない、という。まあ、普通の就職活動と、大差はない、ということだ。

もちろんCIAのリクルート活動は格段に隠密性が高く、推薦基準も高ければ、選考試験も厳しい。が、近年、その人氣が急速に低下しているので、やがては他の情報機関やシンクタンクと違いがなくなるのではないか、とも言っている」

「うん、すごいね。さすがは堀之内さんだ。よくみている」

「そうだろう。だから心配なんだ。なんで突然、情報がこなくなったのか。連絡があるだけましなんだが、何かあったには違いない。ただそれを聞いていいもの

なのかどうか、判断がつかない」

「心当たりはないんですか」

「CIAはいま、余剰人員を抱えていて、安上がりの古い手法に戻っている、といっていた。ここから察するに、郵便の開封を恐れているのかもしれない。国内郵便には手をつけないだろうが、国際郵便は危ない。」

もうひとついい忘れていたが、アメリカの不健全さのひとつに『反共法』があるという。共産党が非法だということは、思想・心情の自由が奪われていることを意味する。アメリカが自由の国だというのは大嘘だ、というわけだ。

この法律は解釈をどんどん広げて、さまざまな団体や個人を取り締まる口実になっているらしい。これを応用すれば国内郵便だって危ないのだから、国際郵便の開封などやりたい放題だ、ということになる」

「それじゃあ、ただ待つしか手がないよね。たしかに心配ですけどねえ」

「そうそう、それからもうひとつ。日本が払った90億ドル、あれはなんのカネだか知っているかい。カネに色はついていないが、同額がアメリカからイスラエルに仕払われている。イスラエルがイラク攻撃を手控える我慢料だそうだ。

久子によれば、もし日本が90億ドルを50億ドルに値切ったら、アメリカはイスラエルの我慢料を50億ドルに値切っていただろう、という。つまりこの我慢料は日本が払い、イスラエルのイスラム攻撃用兵器に化けた」

「なんということだ。それじゃあ世界が日本の貢献を評価しないのはあたりまえですね。事実を知られたらむしろ顰蹙ものだ。海部がアマコストにやられたわけでしょうが、外務省はいったい何をやっているんでしょうね。ほんとうに、アメリカに追従するだけなんですね」

巨大なスクリーンの中に、パソコンの画面がそっくり映し出されている。「A

DOBE」という画像処理ソフトの初期画面だ。その初期画面を、パフォーマーが踊りながらクリックする。スクリーンの中のコマンド・ボタンを手でタッチするわけだ。

するとスクリーンにウィンドウが開き、ウィンドウの中に、踊っているパフォーマーの姿が影絵のように映し出される。ところがウィンドウの中のパフォーマーは、現に踊っているパフォーマーの単なる映像ではなく、よくあるように時間を遅らせた映像でもない。

「わかりますか。これはパフォーマーの動きを先読みし、映像のほうが一瞬先に動いているんです」

春田の説明を聞いても、磯崎には目の前で起こっていることがすぐにはよく飲み込めない。

「いいですか、磯崎さん。ここはコンピュータ芸術の世界だけど、ベースは軍事技術にある。たとえば弾道兵器は、相手の動きを計算して、先読みしたポイン

トに砲弾を撃ち込む。向こうも弾道兵器なら、計算は単純です。けれど操縦兵器なら撃ち込むポインントは操縦法によって、刻々と変化します。しかしそれでもいくつかの計算式を超えた操縦はできません。つまり瞬間的未来は予測可能なです。

が、それはあくまでも物理的な運動法則にかなった場合にいえること。踊りのようなものはほとんど予測は不可能です。それでも、大きな誤差を覚悟すればこうした遊びができるんです」

まったく、思いがけなかったことだが、いま、磯崎は春田とともにニューヨークにいる。それも、こともあろうにコロニア大学のキャンパスの中である。

磯崎の仕事人生にとって、こうしたラッキーな偶然は珍しいことではない。北海道へ行かなければ、と思っていると、北海道の仕事が入る。小さい仕事で金沢か、とくさっていると、別ルートで富山の仕事が重なってくる。それはもう驚く

ばかりなのだ。

春田から「磯崎さん、ニューヨークへ行きませんか」と誘われたのは、堀田の話で堀之内が気になりだしてから、一月もしないときだった。

「おもしろい催しがあるんです。長野オリンピックでの合唱と通じる催しなので、きつとお役に立つと思います」

インタラクティブ・デジタル・テクノロジーの国際的な集まりだ、というので、コンピュータ雑誌からページをもらい、こうしてやってきたわけだ。もちろん、主眼は堀之内久子に会うことにあつた。

「この先読みは相当にむずかしい。だから、どれだけ正確かが瞬時にモニターされ、誤差が画像で表示されるようになってる。このアイデアはおもしろいですね」

スクリーンの片隅に、もうひとつ小さなウィンドウがあつて、誤差分を示す青い影が踊っている。なるほど、計算が追いつかなかったのだろう。パフォーマンスが

急に方向を転換したときなどには、この青い影が大きく広がるのがわかる。

しかしそれも、踊りのパターンを認識するのであろう、踊りを繰り返し、経験値が上がってくると次第に影が減っていく。

「ものすごい能力ですね」と、春田が盛んに誉めている。が、彼の頭の中は、芸術鑑賞というよりも、明らかに軍事技術評価に走っている。

テクノ系のコンピュータ音楽と、実物と予知画像、誤差画像、三重に展開される複雑な踊り。それに加えてパフォーマンスの女の怪しい姿態、コスチュームにちりばめられたスパンコール、飛び交うレーザーとミラーボールの光、四方から照射されるフラッシュ、そして、ホールいっぱいに焚きこめられた香。

いくら前衛芸術だからといって、このハイテク・パフォーマンスについていくのは、磯崎にとって相当に厳しい。もう若くはないことを思い知るほかはないので

あつた。

快適な酔いごちと、二日酔いの悪寒とが同時にやってきたようで、神経の収集がつかない。目のチカツキは目蓋を閉じても続いている。

そしてエンディング。スクリーンの彼女が、くちびるを差し出す。そのくちびるに、現実の彼女がくちびるを合わせる。ホールを埋め尽くした若い観客の拍手と歓声、そして口笛。

こうして、二時間あまりのパフォーマンスが終わったころには、磯崎はもうすっかりくたびきつていた。終始、能力分析をしていたに違いない春田も、さすがに疲れた様子で、観客に踊ってもらうデモンストラーションを見ることなく、会場を引き上げた。

「どうです。すごいショーだったでしょう。学生は無邪気に遊んでいるだけです。が、あれがまた、つぎの軍事技術を生む」「いやあ、わたしはただ純粹にびっくりしています。表現というものが、どこま

で行くのか、見当もつきません。で、実用的にはどんなことが考えられるんですか」

「トマホークのような操縦型兵器の迎撃ですか。もっとすごい運動性能を持った未来兵器にも対応できそうです。民生でいうなら、スポーツなんかの自動中継カメラですね。一台にはボールを追わせ、もう一台でスター選手を追う。先読みでカメラが動くから、自動撮影でもフレームをはずすことはありません。人は司令室でズームアップとカメラの切り替えをするだけでいい。おなじ技術で、災害救助ロボットの遠隔操縦、いや、それよりもロボコップみたいな集団によるターゲット・チェイスの遠隔指揮……、いやいや、また軍事技術みたいな話になってしまいました」

ホテルのラウンジで、春田はまだまだ話したそうにしていたが、磯崎は失礼して早々に部屋のベッドにもぐりこんだ。翌朝、磯崎は五時過ぎに目を覚ました。

頭がどこかキリキリするのだが、頭痛というわけではない。穴でもあいて、風が吹き抜けているのではないかと思うほど、冴え渡っているのだ。そのため、まだ明け方だというのに、眠気がほとんどない。

夕べはホテルに辿り着くや、ぐつたりと寝込んでしまったが、そう早寝をしたわけではない。普通ならこんなに早く目覚めるはずはないのである。とすればおそらくこれも、夕べのパフォーマンスが、神経のどこかを狂わせた結果に違いない。

コロンビア大学の構内にあるホテル（ゲストハウス）を出て、散歩を楽しむことにする。

六時少し前だろうか。記念図書館前の中央広場にも学生の影はほとんどない。片隅で体操をする学生や、ジョギングを楽しむ学生、白み始めた空の下で語らう学生もいる。広場を抜けて正門を出る。正門手前の右手が今回の国際インタラク

ティブ・テクノロジー・アジェンダの中央会場があるドッジ・ホールである。

ライト・グレーとモス・グリーンで統一されたキャンパスの建物の中にあつて、ここだけが黒い石積みの、重厚なホールである。昨日はこの一階にあるミラー・シアターで主題講演とメイン・アトラクションを見てから、フリー・エントリ企画のパフォーマンスを見物に出た。

学校からは少し離れた会場だったのだが、掘り出し物はフリー企画の方に多いというのが定説だ。これに顔を出さない手はないのである。アジェンダは五日間に渡っていて、公式の会議のほか、このようなフリー企画が山とある。

校門を出ると、門に続く鉄製の柵の上を、尻尾を膨らませ、まっすぐに振り立てた大きめのリスがすると渡っていく。こんな時間の散歩者に驚いたのか、足を止め、一瞬こちらを振り向いた。

正門の前を走るブロード・ウェイ通りの向かいには、朝食の美味しいレストラン

があるのだが、まだ早すぎて開いていない。ブロード・ウェイ通りを渡るとそのまま真っ直ぐに、ハドソン川に向かってなだらかに下っていく坂道を降りていく。

外装に手をいれ、生まれ変わった建物もあるが、大学の施設が混じる古い街区である。どつしりとしたビルのためたまたまが、朝靄と調和して、落ち着いた気分をかもし出している。

半地下への明かり採りが道路に面して掘られている家が多く、転落防止の鉄柵が囲っている。その鉄柵の、それぞれに工夫を凝らした透かし模様がしやれている。インパチェンスなどを植えこんだ吊り鉢が、黒塗りの鉄柵にアクセントを添えたりしている。

そして坂道の行く手には、櫛に似ているが、もっと細ぶりの葉を持つ木々が枝を広げ、その木間からハドソン川の水面がわずかに覗いている。とはいっても、空も水もまだ白く、朝靄の中、どこまで

が空で川面なのか、区別はともつけられない。

坂を降りきると、そこにはリバーサイド・パークが広がる。その名の通り、川に沿って数キロも続く公園だ。公園内を高速道路が一本貫いているのを除けば、広々とした静かな公園である。所々にベンチがあるぐらいで、特別なものはなにもない。が、ここでも、ジョッガーやブレードランナーたちが早朝から黙々とトレーニングに励んでいる。

そして目立つのが犬の散歩。どれもこれもが大型犬ばかりなので、散歩に連れていくのはほとんどが男たちだ。これも出勤前の健康法の一環なのだろう。

公園を北に上れば、公園内唯一のメモリアル、グラント將軍の墓地がある。が、そんなものにはまるで興味のない磯崎は、迷わず南に下る。右手にハドソン川を見ながら、ぶらりぶらりとどれほど行ったことだろう。まばらな木々が、やや密度を増す辺り、いくぶん暗い感じの

茂みの近くに、それぞれに犬を連れた男二人が立ち話をする姿が見えた。

どちらも服装こそラフではあるが、いかにも紳士然とした物腰で、遠目にもなにやら時候の挨拶をしているように見うけられた。ひとりはすらりと背の高い男で、もうひとりは東洋人ふうの背格好だが、日本人の規準でいえば長身の部類。というよりも大柄でがっしりしているの、遠目では普通の背格好としか見えないのだが、近づくとその大きさに気づかされる。いわゆるガタイがあるのである。

というより、磯崎はまず、そう考えるより先に溝口の名前を口に出していた。ただ、あまりにも思いがけなかったもので、それが声にならなかっただけのことだ。それが声にならなく前橋経済大学助教の溝口幸一である。しかしなぜ、彼が今ニューヨークなどにいて、犬の散歩なんぞをしていなければならぬのか。まったく思いあたる節はない。

犬の、それもグレイハウントという大

型犬の散歩となれば、研究旅行などという一過性の滞在などではないだろう。長期であるなら、「Qの会」に対してなにか挨拶があってもおかしくはないはず。

少なくとも彼は、水島グループのヘッドで、法制班を事実上仕切っていた。

朝靄の立ちこめる中、薄暗がりであるとはいえ、磯崎が溝口を見間違ふことなどありえない。たとえ二日酔い状態で、頭に血が巡っていないかたとしても、である。それとも、本当のそっくりさんがいるとでもいうのだろうか。

訝りながらも足は止まらない。挨拶を交わすタイミングを計りながら、距離がずんずん詰まってくる。

背の高い男がなにかを渡したようだ。物件を済ませたのか、二人は軽く会釈を交わす。背の高い男がきびすを返すのとはほぼ同時に、溝口がこちらを向き直った。「よう、溝口」と磯崎が手を挙げ、声をかけようとしたその瞬間、溝口もまたきびすを返し、植え込みを横切つてモーニ

ングサイト・ハイツの街区の中へと姿を消した。

間違はなく、その一瞬の間に、溝口も磯崎を認めた。その驚きと戸惑いの表情を、磯崎も見落としてはいない。それならばなぜ、そそくさと姿を消したのか。それが大きな謎となる。

おそらく、溝口もまたあのとき、磯崎が自分を認めていたことに気づいていたはずである。磯崎はあの瞬間、おなじチームの友人として、珍しいところで会えた喜びを、親しげな表情で表していたに違いないのだ。

「以上のように、インタラクティブな機能が最も活かせる分野は教育と医療の分野にあることは明らかであります。しかし、教育の分野にあつては、国際的には言語の障壁が、国内的にはシステムの障壁が横たわっている。つまり、日本におけるコンピュータ・エデュケーティングの可能性は、ひとえに教育過程の自由化、

開放にかかっていると云えるのであります」

この日、磯崎はミラー・シアターでの課題講演をなんとかこなした。アジェンダのメンバーである春田が無理やり突っ込んだ企画で、「インタラクティブ・テクノロジー」＝各国の課題」というコーナーで、ジャーナリストの立場から「日本」についての報告を行ったのである。

文部省の通達文書にすぎない「教育指導要領」によつて、教育内要までが細かく規制されていることに、各国の参加者は一様に驚きの声を挙げた。それが民間の知恵やアイデアを受けつけないばかりか、教師の創意工夫を奪い、教育の多様性を阻害することになる。アジェンダの参加者はみな一様に、そのことを心配した。

「そうした規制を変えようとする動きはあるのか」「規制の中で、教育ソフトの開発はどのように行われているのか」……さまざまな質問が矢継ぎ早に浴びせ

られた。

「規制への反撥は微々たるもので変える力までにはなっていない。ソフトの開発も公教育の外でささやかに行われているにすぎない。でも、インターネットの発達がこうした規制を食い破る力になるのはまちがいない」

そんな論旨で質疑がつづいた。システム障壁はなくしていくべきだし、いずれは緩和せざるを得なくなる。だが、言語障壁はそうもいかない。インターネットの発達は、世界における英語の優位を決定づけたといえるだろう。だが、翻訳ソフトの開発によって、各国語の延命も約束された。

「言語というこの障壁は残ってもいいのではないだろうか」

この日の報告ではそのことにほとんど触れることはなかったが、磯崎は基本的にそう考えていた。

国を挙げての教育ソフト開発、国境を越えての普及意欲……、その旺盛なエネルギー

ギーを目の当たりにすればするほど、太刀打ち不可能な日本が見えてくる。「教育の英語支配」「知的資源のアメリカ支配」磯崎の頭のなかには、そんな言葉が去来していた。

堀之内久子と落ち合ったのはその晩の事である。篠崎は春田とともに、地下鉄で久子が待つチャイナタウンに向かった。指定された中華レストランに入ると、チャイナドレスのウエートレスに日本語で案内された。店の隅の中華屏風で仕切られたスペースである。

磯崎が春田を紹介すると、久子はにこやかに微笑みながらも、小声できつぱりといった。

「ここでは食事だけにしましょう。話はあとよ。お願いね」

食事を済ませると、三人はイエローキャブでチャイナタウンとは目と鼻の先のソーホーの一角へ降り立った。ヨーロッパブランドのファッションショップが数件あるだけの裏道で、人通りはほと

んどない。

久子はそのようなファッションショップの一軒に二人を招き入れた。このあたりに多いガレージ風の店作りで、間口に比べて奥が深い。その行き止まりのコーナーに、なじみ客専用のカウンターバーがしつらえてあった。

「あたしね、最近、神経過敏症なのよ。堀田さん、何か言ってたでしょう。心配させちゃったかもしれないな。

あたしが勤めている出版社、スタンソンも多分に漏れずシオニスト系の工作機関なの。そんなの、このあたりにごろごろしてるわ。なにしろそういう看板さえ掲げれば資金は集まる。彼ら親イスラエル系政治組織の強さはこの集金力なんじゃないかしら。

でも、彼らにとって、日本人はどうでもいいの。あたしが雇われたのはたぶんテストよ。で、信じられないことだけど、どうやらテストに合格した。CIAからPITCHIHを受けちゃったのよ。つま

りお誘いね。

即刻お断りしたのはいいんだけど、恐ろしくて。というのも、お誘いしてきた以上、身辺調査は済ませてある。無警戒だったあたしが洗われてたってことを意味する。ぞっとしたわ。

あたし、堀田さんともそうだけど、弟とも似たようなことをずうっとメール交換してたのよ。でも、あれってCIAに筒抜けなんでしょう。なんか、メールやFAX、国際電話、みんなだめなんですってね。

NSAとタイアップして、ぜんぶ盗聴してるって聞いたわ。このあたりのお店もね、ヨーロッパの本店とのやり取りには苦労しているようよ。ファクションの先端情報には機密性があるんだって。新製品の型紙が送れない。

だからね、あたしの素性はばれてるはずなの。それなのにお誘いがきた、って変じゃない。ちよっと怖いわよね。あたし自身が監視されてるんじゃないか、っ

て、そう思ったから、もう後の祭りなんだけど、下手な情報は送らないことにしたの。

これって、けっこうマジよ。でも、大丈夫だから、心配しないように、って、堀田さんには伝えといて」

磯崎は名前こそ出さなかったが、今朝ハドソン川沿いで出くわした光景を、久子に話した。

「それはもう、典型的な接触方法ね。その大男がケース・オフィサーで、日系人がエージェントかな。まちがいないわ。場合によつてはね、ほかにウオッチャーズがいてね、接触現場にあなたのような人がいないかどうかチェックしてるのよ」

「えっ、やばい。見張られていたかどうか、確認していなかった」

「大丈夫。身内の接触にそこまでやることはないわよ」

そういわれても、磯崎には今ひとつすっきりしないものが残った。なにしろ

彼は、溝口と顔を合わせてしまっている。溝口はしまったと思っっているはずだ。

「メール、FAX、国際電話、みんなだめだつて、ほんとなんですか」

「もうそれは常識。ヨーロッパではもう二〇年も前から被害が噂されていて、一九八〇年にイギリスのジャーナリストがイギリスにあるNSAの基地が傍受をしている、と暴露したの。以後、ジャーナリストの間ではCIAのインターセプトを疑うものはいないわ」

「メールはわかるけど、電話はどうするんだらう」

磯崎の質問を引き取ったのは春田だった。

「いや、簡単なことですよ。やはり音声入力ソフトだ。これでテキストデータに変換し、怪しい内容を含むものを記録する。」

ぼくは、変換精度が悪いと無駄なものを保存しなければならず、コンピュータが対応できない、と考えたが、それはちが

う。肝心なのは荒く網をかけた後、節にかける手法だよ。これがしつかりしていれば精度は問題じゃない。

キーワードによって選別され、重要な電話はみんな記録される。国際電話はぜんぶだめですよ。ホテルから掛けずに、公衆電話で、なんて、何を寝ぼけたことを言ってるのか、と思いますよね。どんな国際電話も海底ケーブルか通信衛星を経由する、という、こんな簡単なことがわからない。それが日本のレベルなんです」

「ヨーロッパに対する傍受システムは『エシユロン』というそうよ。UKUSAという、アメリカとイギリスの通信傍受同盟があつて、これが世界を監視下に置いているそうだから、日本もきつとやられてるわよ」

「それと似た話、ぼくもどこかで聞いた覚えがあるぞ。いや、日本のテレビで見たんだ。くそ、覚えてないな。うかつだった」

「何ができるわけでもないけど、何かあつ

たらわたしのインターネットの掲示板に書き込みを入れてくれ。そうだな、『海、Love、以』がいい。日本語が使えない環境だったら『Marine Love』です。いいですね」

コロンビア大学での「国際インタラクティブ・テクノロジー・アジェンダ」は予定どおりのスケジュールをこなし、無事に閉幕を迎えた。この間、磯崎は多くの講演やパフォーマンスに参加し、勢力的にコラボレーションを観て回った。興味深かったのは五ヶ国のミュージシャンによるインターネットを使った合同演奏で、あきらかに長野の先取りだった。たとえファイバーケーブルを使つたにして地球の裏側との双方向通信ではどうしても生じざるを得ないタイムラグをいっ

たいどうやって克服しているのか、不思議なくらいに完璧なアンサンブルを見せていた。

前にも書いたが、地球の裏側で奏でられた音楽は、光は1秒で地球を1回り

半するのだから、 1.5×2 分の1秒後に到達し、これに合わせて弾いた伴奏はさらに 1.5×2 分の1秒遅れて最初の奏者の耳に達することになる。

このズレはデリケートな室内楽のような音楽には決定的なダメージである。もっとも、最初の日の晩に観たコンピュータによる「予期」という技術を考慮に入れたらどうだろう。いや、画像では可能でも、音はそうもいくまい。磯崎は混乱した。

もっとも、本来ならもっと充実していたに違いないニューヨークでの五日間だったが、なにか後味の悪い思いにつきまとわれた日々でもあった。同僚であり、チームの重要な柱である溝口が、まるで磯崎を避けるように姿を消したということ。それはどう考えてもがてんがいかなることである。

きびすを返す寸前に、一瞬、彼が見せた戸惑いの表情。それが何度も何度も脳裏に甦っては、アジェンダへの集中を削

いでしまう。

帰路の飛行機の中で、磯崎は溝口のことを春田に告げた。春田にも、これは大きなシヨックであるようだった。『防諜法案』の行方に、大きな暗雲がかかるのを見たような気がしたのである。

CIAの謀略 第10章 「地球」

一九九七年の暮れは、いつ終るのか、先の見えない長いトンネルに入ってしまった日本経済の不況が、活況を続けていたアジア経済の足を引っ張り、まだ体力不足の東アジアに深刻なダメージを与えていることがはつきりしてきたときである。

その年の一〇月には、IMFの救済を受けていたインドネシアが、IMFの再建計画さえ実施できずに、計画の組直しを求めざるを得なくなり、一二月には苦境に喘ぐ韓国に対して、IMFが二〇〇億ドルを融資。日米を含むG7諸

国も八〇億ドルの支援融資を決めた。

また、タイ「バーツ」の暴落は、中国の「元」切り下げを誘発する可能性を高め、そうなれば、アジア経済は回復困難な混乱の淵に叩き込まれるのは必至だった。アジア経済の牽引車、日本の景気回復と、内需拡大が強く期待されていたのである。

ところが、日本の混乱はさらに続いていて、とどまるところを知らなかった。第一勧銀のモフ担(大蔵省≡MOF担当)による接待ゴルフで、大蔵省金融検査部に手が入ったのを皮切りに、山一証券の商法・証券法違反事件、第一勧銀・野村証券の総会屋への利益供与事件、日興証券の損失補てん事件などが相次ぎ、一月二二日、ついには山一証券が自主再建を放棄。北海道拓銀、山一証券合わせて二兆九千億円の日銀特別融資が必要になった。

また、年を越えた九八年の一月には、東京地検特捜部が、大蔵省から道路公団

に天下った井坂武彦理事と野村証券元副社長を贈収賄で逮捕。また、あさひ銀行、第一勧銀のモフ担から接待を受けた大蔵省金融検査部の検査官室長と課長補佐を収賄で逮捕。二八日には銀行局総務課金融取引管理官が地検特捜部の事情聴取の前に自殺している。

この一連の出来事は政府の行政改革案の中間報告が出され(九七・九・三)、最終案がまとまった(九八・二・一〇)の間に起きている。つまり、省庁再編に大蔵省はほとんど力を発揮することができず、自治省の独壇場になったということである。実際、この再編で、自治省は総務庁、郵政省とともに総務省になることに決まったが、実質は自治省が総務庁、郵政省を飲み込み、巨大権力になることを意味した。

また、もうひとつの内務省である警察庁も、運輸省の海上保安庁を手に入れるなどして、勢力を拡大している。

一方、一月二〇日には民自・社文・さ

「オーストラリアだということで、あま

「そう、油断したんですよ。その背後にある国際組織にまで想像力が及ばなかったんでしょうね」

放送は元オーストラリア外交官の衝撃「結局、どこの国も合法であれ非合法であれ、盗聴をやっている、ということな

んでしょーねー

日本の政府関係通信を傍受している。これは『アングロサクソン・クラブ』といって、古くからある組織なんだ、と話しています。

大事なのは非合法である可能性の強い盗聴活動が、国家の枠を越えて行われている、という事実なんじゃないかと思うんです。

また、『日本の商社のオーストラリア事務所はかなり盗聴されている。だから、そういう覚悟のうえでオーストラリアと商売したほうがいい、ともいつてます。ぼくはこの『アングロサクソン・クラ

だって、たぶんこれは国民にも知らされていない、極秘の国家同盟ということでしょう。それも非法活動すれすれの中味だ。民主主義という点から考えたら、これはありません。

『は堀之内久子が言っていた『U K U
S A 同盟』とおなじものだと思うんです。
ぼくらはもっと、このオーストラリア情
況「たしかに春田さんの言うとおりです
ね。」

この組織をだれがコントロールするか、と考えてみると、国民不在、民衆不在なんです。民主主義の基礎、シビリアン・コントロールのシビルがどこにもいない」

「戦時を除けば、国民が国家にそのような白紙委任状を与えているとは考えられません。つまり、同盟そのものが違法なんです」

「違法というより無法でしょうね。国際社会はいまだに無法者の巣窟ということですか。いやいや、盗聴に限っているならば、国内でも国家の無法はまかり通っていますよね。」

日本、韓国、アメリカ、イギリス……どこでも労働運動や市民運動に対する盗聴事件が頻発している。これってみんな違法ですよね」

「合法化された盗聴もありますけどね」

「そうか、それだ。盗聴の合法化が必要だったんだ」

「なんです、それは」

「ほら、覚えているでしょう。以前、参議院の議員会館で集会をやったとき、神奈川県警の警察官の盗聴事件が問題になった。あのとき、指示したのはCIAかもしれない、ということになって、それならなぜ、あんな古臭い道具を使い、あんなにへたくそな盗聴をやったのか。すぐ見つかるような盗聴をやったのかが謎だった。あれですよ」

「で、なんで盗聴の合法化なんですか」

「盗聴は日本でもやられています。通信の秘密を侵すことだから基本的には非法です。しかし、日本の警察は得意のなし崩し戦法で、盗聴で手に入れた証拠を事後的に、裁判所に有効と認めさせている。」

これって、デュープロセス（公正手続き）の原則といって、欧米ではとても大事にされている民主主義のルールに反するやりかたなんです。だから、なし崩し、というのは許されない。

だからあの事件は、なし崩しで盗聴を

進めるのはやめなさいよ。必要なものはちゃんと合法化しなさいよ、というCIAの日本政府、あるいは警察庁に対する警告なんです」

「なんでそんな警告をCIAがするんですか」

「CIA自身が盗聴したいからです。いや、もちろんCIAも盗聴をしています。しかし、密かにやる以上限りがあります。」

元警察庁長官も言っていました。『友好国の政府職員である以上、CIAを監視することはできないが、親書を開封したり、盗聴していたら話は別だ』とね。つまり、逮捕しなければならなくなる。

でもね、合法的な盗聴は、軍事上必要なら安保条約上許されることになる。そうなれば表面上合法に見える盗聴を日本の官憲はチェックできなくなる。というよりも、アメリカにフリーパスを与えた日本政府が、国民から追及される恐れが少なくなる。

仮に、その解釈ができないとしても、自

衛隊や警察の盗聴成果を提供させることはできるはずだ。あるいはこれを調べてくれ、と指示し、記録をこっそりと奪っていくことが可能になる。つまりアメリカは、盗聴が合法化されれば、もっと堂々と、もっと大規模に、日本を監視することができるようになる。

そうではなく、なし崩し的に非合法的盗聴が拡大していても、その成果はアメリカの利益にはならないのです」

「そうか、そこでああいう盗聴を仕掛けたんですね。あの事件で一番困ったのは政府と警察庁ですもんね。ちゃんと盗聴の合法化をしないと、またどこかで盗聴を仕掛けるぞ、という脅迫なのですね。見え見えの盗聴の仕掛けも、それならつじつまが合いますよ。」

あの事件は、発覚して、警察庁が苦慮することを目的にしていた。日本政府がCIAのために、あるいはNSAのために盗聴の合法化を用意することを目的にしていた。とすれば、つぎは『盗聴法』の

登場ですね」

「そういうことです。アメリカはすでにG7などの場で、麻薬、テロ、国際犯罪に対する連携の必要を説き、情報の交換を呼びかけています。日本に対する盗聴の必要も、これを名目に行っているはずだ。」

だからきつと、登場する『盗聴法案』もこれを名目にするはずだ。アメリカに対して日本はペルーの日本大使館占拠事件で借りを作っていますからねえ、麻薬はともかくテロといわれたら反対しにくい事情もある」

「もう法案はできてるんでしょうね。あとはタイミング待ち。こいつも待機ですね」

一九九八年三月、「Qの会」は、これまでの班別構成を解消し、法案提出のタイミングを図るための、隔月定例会に移した。つまり、そのときどきの政治社会状況をウォッチングし、現実から遅れ

をとらないようにするための集まりである。

すでに、二月一〇日に決定を見た「中央省庁等改革基本法」の骨子には、内閣機能の強化がうたわれ、省庁改革においては自治省は大きな力を持つことが決まっている。すなわち、待機中の「内務省・石原構想」はいつ始動されてもおかしくない状況になっていた。この「構想」が実現に向けて動き始めれば、「Qの会」の「防諜法案」が日の目を見る可能性はほとんどなくなってしまうのである。

実際のウォッチングは五月末の第二回定例会から始められた。会場は内幸町の日本プレスセンター会議室、日比谷図書館の向かいの建物だ。参加者は顔合わせに近かった第一回からはぐっと減って、一人。前回は欠席だった溝口が何食わぬ顔で出席していた。

「溝口さん、去年の秋、ニューヨークにいらっしやいませんかでしたか」

磯崎が鎌をかける。

「ええ、いしましたが。とすると、あのときリバーサイド公園でお見かけしたのはあなたでしたか。いやあ、それは失礼。薄暗かったもので自信もなく、ちよつと急いでいましたものですから、お声を掛け損なつてしまいました」

「何かご研究でも」

「いえ、単なる野暮用でして。弟が暮らしておるものですから、たまに訪れてい入ります。コロンビア大学の図書館が気に入つていましてね、風にあたりに行くというんですか。妙な趣味です。ところで、磯崎さんは何か」

「わたしは大学で開かれていたインタラクティブ・アジェンダの取材です。あれはなかなか意欲的なアジェンダでしたね」

暗がりだといつても顔が見えないはずはない。犬を連れてあんなふうに踵を返すのはあまりにも不自然だ。磯崎は腹の中でそう反論してみるが、口に出してみても意味はない。

どんな言葉に対しても、すべての用意ができているのだろう。そうでなければ、何食わぬ顔をして、この集まりに出てくるはずがない。が、そうなる困るのはこちらだ。情勢分析をする会議にCIAのエージェントが同席している。

このことを知っているのは磯崎と春田、それに、帰国後に話を伝えた堀田の三人だけだ。ほかの七人の参加者にはどう伝えるべきなのだろうか。磯崎は戸惑った。

「アメリカが三度目のイラク攻撃を画策していますね。二月三日にクリントンがイギリスのブレア首相と武力行使を確認。コーエン国防長官が合意を得るため、湾岸諸国を歴訪している。

これに対してアナン国連事務総長がイラクに入つて平和解決を探った（二月二〇日）。アメリカと国連とのズレですね。ところが日本では橋本首相が二月一三日の時点でもうアメリカを支持している。アメリカにとって、世話のかから

ない日本だといえます」

「大沢はアメリカに対して、もつと国連と歩調を合わせてくれたら、日本の舵取りも楽なんだが、といったそうですが、アメリカにとって大沢よりも橋本・民自党のほうがおいしいパートナーになったわけですね」

「アメリカの証券会社メリルリンチが山一證券の社員を雇い入れ、日本に進出（二月二二日）。四月一日から改正外国為替法が施行されて、日本もいよいよ金融ビッグバンを迎えることになりました。

これでアメリカの狙いどおり、日本の金融システムの標準化が進むことになる。アメリカにとって、大蔵叩きが成果を収めたことになるわけでしょう」

「二方、自治省は順風満帆。住民基本台帳法改正案、つまり住民票ベースの背番号制の上程に成功。すっかり内務省気取りだという声が民自党の国会議員の間からも聞こえます。

法案のほうは連立与党・社文党の反対

で、本国会での審議は見送られるそうです。

また、安保条約のガイドラインを見直す関連法案などに反対して、社文党が連立を離脱することになりました（五月一日）

「金大中が大統領に当選して、金大中が北朝鮮に操られているという偽の情報をでっち上げた元KCIA（韓国中央情報部）のトップが地検の捜査を受けていますね（三月三十一日）」

「インドネシアのスハルト政権がついに倒れました。民衆の怒りをキャッチすることなく、直前にこの支援に出かけた橋本は、面目丸つぶれですが、これって、日本外交の汚点でしょう」

「インド、パキスタンの核実験。ロシア、中国の影も窺え、世界はもうろん、アメリカにとって衝撃は大きいでしょう。イラクどころかイスラム勢力の一角が核を持つことになった。ナイーボーゲルが恐れているのは文明の衝突ですからね」

特別のチューターがいない、いわゆるバズ・ストーミング、自由討論だが、各自それぞれの持ち場から、さまざまな問題が提起され、論議に切れ目がない。

磯崎は時々溝口の様子を観察するのだが、溝口は相槌は打つもののほとんど意見らしいものをさしはさまない。そして、熱心にメモを取っている。「CIAへのご進めか」と、いやな気分になれるのである。

大事な話が出なければいい、と思いつながら、それでは何の会議かということになつてしまふ。なんとか手を打つ必要があるのであつた。

「やはり、最重要法案はガイドラインの見直しに伴う周辺事態法ではないでしょうか。それに、国連平和維持活動（PKO）協法案、これですね。

とくに、わたしたちにとって大事なのは、周辺事態法の論議の中で、日米地位協定の見直し論が出されるかどうか。出される場合に、わたしたちの問題意識とどう

噛み合うのかを検討しておくことだと思ふんです」

杉井が核心を突いた発言をした。そうなのだ、その点を詰めておく必要がある。磯崎はそう思いながらもためらつた。

日米安保条約の中身を根本から変えてしまふことになる周辺事態法について立ち入った論議をすれば、われわれの個々の立場が鮮明になり、「Qの会」の抱える矛盾点や弱点が、溝口の前に晒される。そうなれば、会の結束を崩す攻撃を許してしまうことにもなりかねない。

迷つていると、堀田が話し始めた。

「検討しておく必要があるのは同感だね。ただ、この見直しは灰色部分が大きくて、事態法そのものの論議で手一杯になるに違いない。社文党も閣外協力を解消すると息巻いているし、現時点で地位協定の見直し論が登場するとは思えない。

また、こちらが見直しを仕掛ければ、それはガイドラインの見直しを後押しすることにつながり、周辺事態法に反対す

る議員の理解を得られない。それでは議員立法を成立させることはむずかしい」

堀田は戦術論を仕掛けて、内部討論に入るのを避けたようだ。そして、意外なことをしゃべり始めた。

「総じて、この間の動きは日本のアメリカに対する全面屈服の様相を呈していますな。ここまでアメリカの言いなりになる日本は、もう、目の中に入れても痛くない、けなげとでもいう存在なんじゃないですか。

経済もすっかりへたっちゃって、おかげでアジアもフラフラだ。ちよっと急いで叩きすぎたかな、意外にもろかったな、と、今ではアメリカも反省しているんじゃないだろうか。

ジャパン・バッシングからジャパン・パッシングへ、あきらかに現実が変わってしまった。日本は国家としての存在の重さそのものを失ってしまった。PKOだ、ガイドラインだ、って騒いでる場合じゃないんです。

いま、アジアで存在の重さを主張しているのは逆説的だが中国と朝鮮です。だからアメリカも、全力でこの両国に對している。最大限の注意力を持って、最大限の配慮をしている。

CIAだってそうでしょう。関心はみんな大陸に向いている。日本はまあ、警察あたりに首輪をつけておけば、後は彼らがよろしくやってくれる。番犬が主人に捕まえた獲物を尾を振り振り、自慢げに見せるように、日本の警察は喜んでアメリカの手足になる。

だから監視はコンピュータに任せましょう、NSAに預けましょう。CIAは手ごわい外交を巧みに操る中国の分析、北朝鮮の諜報に専念しましょう、ということでしょう。

いまだき日本で油を売っているCIA要員は無能の証明をしているようなものです。エージェントじゃあ対象国を変更するわけには行かないでしょうが、たいしたことも起きない日本で、諜報活動をし

やらされる、というのも気の毒なものです。対価をもらうのも恥ずかしいに違いない。みんな丸裸。これじゃあ本国のデスクで葉巻でもくゆらせながら邦字新聞に目を通していただいましょう」

強烈な皮肉。堀田による溝口に対する激しい先制パンチだった。堀田が一息つく

「確かに堀田さんの言うとおりだ。もう日本はCIAの関心外なんです。有能なアジア研究者はみんな中国を向いています。日本式経営のミラクルなメッキが剥がされてからというもの、日本には興味がなくなっただけですよ。

日本に強い有能なケースオフィサーはほとんどCIAをやめて、民間に就職していくと聞いてます。有能なオフィサーに雇われたエージェントはいつお払い箱になるのか戦々恐々としているんじゃないんですか。

ご存知ですか。アメリカの日本研究、アジア研究のメッカは『菊と刀』を書い

たルース・ベネディクト以来、ニューヨークのコロナビア大学と相場が決まっています。

第1世代にはサインデイスレッカーや、ドナルド・キーンといったGHQに協力した凄腕がいましたねえ。第2世代はジェームス・モレーとか、ハウディング。第3世代はジェラルド・カーチス、グレン・フクシマ。フクシマはスタンフォードやハーバードでも活躍していますがね。

この第3世代がジャパン・バッシングと重なりますかね。この世代でコロナビア大学とコネクションを持っている人物は怪しいですよ。CIAのエージェントか何かになって、日本相手にしゃかりきになっている手合いが多いんです。

マイク・モチヅキなんかは第3というか第4世代に近いですね。バブル崩壊以後の研究者で、もう関心ははっきりと中国・朝鮮に移っています。

そしていまは第5世代。日本は影薄く、

関心のほとんどが中国だそうです。

この流れはコロナビア大学だけではなく、アジア研究に強いスタンフォード大学やプリンストン大学もおなじだそうですよ」

堀之内久子から聞いた話の受け売りだった。だが、これもあきらかに溝口に対する当てこすりとなっていた。たしかにこのままだと、日本は「防諜法案」も必要とされない、機密を持たない、持てない国になりそうな勢いではある。ただ、それでもいくつかの先端技術に対するNSAの諜報活動は続けられるに違いない。

「皆さんに報告しておかなければならぬことがあります」

通産省の水越が発言を求めた。

「エシュロンについて、です」

磯崎と春田が思わず顔を見合わせた。

「ご存知かもしれませんが、この一月、欧州議会に科学技術に関する調査の一貫

で『政治的工作技術の評価』と題する中間報告が提出されました。

これはアメリカ、イギリスなど、アンダロサクソンの国際的な監視ネットワークについてのレポートで、電子メールや電話、ファックスなどの盗聴に悩む欧州議会が調査を求めたものです。

対象がヨーロッパ諸国の盗聴なので、日本では話題にも上りませんでした。犯人として名指されたアメリカでは調査開始のニュースが伝わりとたちまち大騒ぎになりました。

何か巨大な盗聴システムがあることに、アメリカ国民は気づいていました。それ以前からニュージラントやオーストラリア、カナダからそんな噂が流れてきていたからです。この巨大システムはアメリカ国民をもターゲットにしているに違いない、と、そう直感しての大騒ぎです。

エシュロンはこの報告書の中で明らかにされている盗聴システムの暗号コード

で、『E C H E L O N』と表記されます。偵察衛星とリーダー基地、その他の電子ネットワークによる地球全域を被うシグント（信号情報）盗聴システムで、無線短波はもちろん、メール、電話、携帯電話、ファックス、インターネットなどのあらゆる通信を傍受します。

その規模の大きさもさることながら、対象を軍事に限らず、外国の政府情報や民間情報に置いている点がエシユロンの特徴で、ヨーロッパが問題にすることになった直接の原因です」

水越はここで、もってきたパネルを出して見せた。参加各国の構成がリストになったものだ。

「エシユロンはその管理運営をアメリカのNSAが一手に引き受けます。しかし、このシステムはあくまでもアメリカとイギリスの軍事諜報同盟であるUKUSAに所属するものです。

UKUSAは戦争中、イギリスとアメリカが対独暗号解読のために協力したB

RUSA同盟を引き継いだもので、UKUSAになるとき、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドが加わりました。アメリカとイギリスが第一グループ、他の三カ国が第二グループとして扱われ、軍事情報の交換をしてきましたが、その後、ドイツ、日本、韓国、ノルウェー、トルコなどが第三グループとして参加しているようです。

日本国民にとつては寝耳に水でしょうが、防衛庁の諜報機関がどうなっているのかチェックシステムを持たない日本は、こうした秘密協定が結ばれても、黙って従うほかはありません。

たとえば日本はソ連海軍の西太平洋海域での動向についての情報をアメリカからもらっていましたし、逆に、大韓航空機事故の時には日本が傍受した交信記録をアメリカに提供しています。これもこのUKUSA協定によるものと思われる。

いずれにせよUKASAは各国の政府諜

報機関と軍諜報機関によつて成り立っており、警察活動や経済活動とは無関係であると思われる。

アメリカのNSAは国防総省に所属しており、本来は軍事諜報機関です。だから、日米安保条約で保証され、当然のごとく日本国内でも活動しており、青森県三沢の通信基地はNSAが運営する施設です。上瀬谷海軍通信所（神奈川） 楚辺海軍通信所（沖縄） トリイ陸軍通信所（沖縄） もおなじで、各基地の通信傍受施設には多くのNSAの要員が配属されていると思われる。

その数は三沢だけでも一六〇〇人以上、日本全体で二三〇〇人（軍直属の通信員がその他に一二〇〇人）にのぼるといわれ、当然のごとく、日本の思いやり予算によつて多くの費用がまかなわれています。しかし、ソ連上空を監視していたはずの三沢のリーダーが、七〇年代の半ば頃から日本国内にも向けられたようです。

CIAがいわゆるオイルマネーが日本にどう還流しているのかを監視し始めたからであります。そして、こうした監視の成功が、西側の政治経済活動を常時見張る『エシュロン』の登場を促しました。

NSAは軍の機関は表向きで、実質的にはCIAの指揮下にある。だからCIAの要求に沿って、ターゲットが代わるのは当然なのです。日本は安保条約によって、CIAが潜むNSAというトロイの木馬を招き入れることになったのです。エシュロンは通信衛星やマイクロ波、短波、インターネット、海底ケーブルなどを流れるあらゆる情報を世界中で二四時間捕捉します。

音声情報は音声認識ソフト、画像情報は工学的文字認識ソフト(OCR)でデジタル文章に変換し、『辞書』と呼ばれる参加五カ国が必要とするデータのキーワード、固有名詞や数語からなる表現をコンピュータに登録。ネットワークの篩にかかった情報を文書化して、NSAが

アメリカのフォートミードにあるNSA本部に集められ、分析されます。そして、有意データが注文主に届けられるわけですから」

「すみません、その五カ国というのもUKUSAの第一、第二グループとおなじだと解してよろしいのですか」

「はい、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドです。つまり日本のような第三グループはエシュロンに参加できないわけです」

「ぼくは昔、テレビでオーストラリアの元政府高官の、日本を監視しているという証言を見たんですが、そこでは『アングロサクソン・クラブ』といわれ、ニュージーランドは含まれておりませんでした。これはエシュロンとは別なのではないか」

「エシュロンはネットワークのコード名ですので、そのクラブとはUKUSAのことでしょう。」

ニュージーランドは一九八一年にエシュロン・ネットワークに参加したようですが、これは全世界をカバーするという米・

英側の要請だったようです。

ご存知かもしれませんがニュージーランドは一九九〇年代になってから、しばらく反核政策をとり、核を搭載した艦船の寄港を禁止したことがあります。アメリカに対しても寄港の際は核を下ろすよう求めたため、アンザス同盟(太平洋共同防衛体)オーストラリア・ニュージーランド・アメリカの軍事同盟条約)に亀裂が入りました。

その余波で、UKUSAからもエシュロン・ネットからも一時、締め出されたわけです。締め出された結果、エシュロン担当の諜報官は、祖国ニュージーランド防衛の意気を感じて諜報官になったのに、毎日アメリカ、イギリスの注文をこなすことに追われていたことに思い当たった。軍事情報と無縁な情報を傍受することへの自責の念も生まれた。

彼らの証言を集め、エシュロンの実態に迫った最初のレポートがニュージーランドのジャーナリスト、ニッキー・ヘイ

ガーが一九九六年に出版した『シークレッド・パワー』です。アメリカ、イギリスのトップシークレットが破綻し始めたのです。

そのオーストラリアの元外交官の証言もおそらく事実でしょう。日本が使っているインテルサットの傍受はアメリカのヤキマ基地の担当ですが、マイクロウェーブはオーストラリアのジェラルドン基地が担当しています。

アメリカが南北アメリカ大陸、イギリスがヨーロッパ・アフリカ、カナダが旧ソ連、オーストラリアが東・南アジア、ニュージーランドが南太平洋となっている。

われわれはこれによって、日本のかなりの政治・経済情報が盗まれたとみている。EU議会もこれを重視し、アメリカに情報公開を求めるとともに、独自調査を再会しています。

ニュージーランドに次いで、オーストラリア、カナダからも内部告発が現れ始め

ている。そしてなによりも、アメリカ、イギリスからも真実をあきらかにすべきだとの声が高まっています。

サッチャーが政敵の情報をアメリカにもらったり、アメリカの議員が政敵の調査をカナダに依頼したり、自国内では違法なことを、国をまたいで監視したことが明るみに出て、政府に近い保守的な議員の中から徹底解明の声が出ている。

一人、静かなのは、おそらくエシュロンによる経済的な最大の被害者であろうこの日本です。騒いでみたところで、具体的な対抗手段がないために、口を閉ざしている、というのがいまの通産省の立場です。

騒いだところで省内対立もクリアーしていない通産省です。外務省、防衛庁あたりから、がつんと、あるいは自治省あたりの陰險な動きにじわじわと潰される。そんなあきらめムード、澁んだ空気が充滿しているのが実情なのです」

「しかし、それは日本だけのことなのだ

ろう。ヨーロッパとは連携できないのだろうか。その欧州議会はいつ、次のレポートを受け取るのか。その際、もっと大きな国際的な反発が出てくることはないのか。もしあるなら、われわれもそれに合わせた行動が必要だろう」

J E T R O 氏の長谷川の提案であった。

「具体的な対抗手段こそ、この『防諜法案』でしょう。防衛庁のU K U S A とのかかわりも当然、政府の防諜機関である新設機構の管理下に置かれる」

「N S A 要員に対する思いやり予算のについて、N S A 要員の活動調査を通じて見直しを図る」

「そこまでやったらN S A は引き揚げますよ」

「いいじゃあないですか」

「ニュージーランドですか、日米安保はがたがたですね」

「同盟国の監視だなんて。アメリカが仕掛けたんです。そうなくてもやむをえな

い」

激しい言葉が行き交い、さながら反米集会のようになったところ、磯崎が溝口に目をやると、溝口はもういなかった。いつのまにか退席してしまったのだ。

「なんだ、任務放棄じゃないか」

磯崎は集会後、参加者全員にニューヨークでの出来事をできるだけ客観的に描写した。そして、先刻の溝口の言い訳についても感想を交えずに皆に伝えた。溝口が姿をくらましたこともあって、危機感がやや遠のいたためだろうか。「まあ、注意しよう」ということになって、「除名」という物騒な言葉はだれの口からも出てこなかった。

「どうやらエシュロンの調査グループ（STOA）は九月の半ば頃に、一月のレポートを整理し、具体的なケースを補充した改訂版を欧州議会に提出するようです」

JETROの長谷川からのヨーロッパ情報だ。

「問題になる、と予想できますか」

「具体的なケースに日本のケースが取り上げられれば、そういうこともあると思います」

「ヨーロッパのレポートで、日本のケースが取り上げられる可能性はあるんですか」

「二月のレポートでも、日本の情報が盗られている、と示唆しています。だから、取り上げられてもおかしくはありません。ぼくは報告者のSTOAは日本との共闘を望んでるんじゃないかと思っています」

「ということは、日本の世論に火がつくようなものになることもある、ということですね」

七月二五日、「Qの会」第三回定例会は、アメリカの対中接近、橋本首相の退陣と小渕新総裁の誕生に関する短いやり取りがあったほかは、長谷川のヨーロッパ情報一色になった。STOAレポートの改訂版が、エシュロンによる日本の被害の

実態を取り上げる可能性が高くなったからである。

目に見える被害が挙げられれば、これを防ごうという世論が巻き起こる。「防諜法が必要だ」との声も挙がり、法制化に手間取ることはあっても「Qの会」のプランに向けて確実に事態は進展するだろう。

が、会としてはもつと積極的に、先手を取って動き、「防諜法案・同組織法案」と「防諜事業法案」二本立てのメニューを用意し、法制化がスムーズに進むよう、最善の努力をしておこう、ということになった。

「もう二ヶ月もありません。今日から臨戦体制に入りましょう」

堀田の提案には、むろん異議を唱える者はなく、おおいに盛り上がった。が、スケジュールを考える段になると二ヶ月は相当厳しいことがわかって、参加者のだれもが冷や水を浴びせられたような気分になった。

それでも、思い直したように、率先してスケジュールを立て始めたのは中川だった。

「まずは中間の八月二〇ごろに集会を持ちましょう。ついで八月の末頃に衆議院、参議院の議員会館で院内集会を持ち、その後記者会見。九月の一〇日ごろ、再度衆議院で法案の説明会を開き、議員立法の提案議員を固めます。

また、九月の二〇日ごろにU K U S Aの抗議集会を用意し、一方で、U K U S Aと防衛庁の協力関係の真相究明を衆参両院に求めていきます。

前半は八月集会へのP Rと、協力議員の発掘で、後半は法案提出の準備ということですね。議員の発掘は、これまでどおり杉井さんに進めていただき、私、中川と、通産の水越の二人が関係議員にアタックします。

溝口さんが脱落したので、水島教授の人脈掘り起こしは帝都大の木下さんにやっていただきます。

ただし、この掘り起こしは急がなくてけっこうです。提案議員は水島人脈を使わなくても十分に集まります」

中川は大蔵省の経済政策や大きな政府論に近い水島系経済理論が、なお、強い逆風下にあることをよく理解していた。大蔵省の財政再建策を支持して退陣した橋本の後任である小渕は、これまで以上に大蔵との距離を開けると予想された。そしてまた、景気回復を名目とする公共事業を除けば、緊縮財政は避けられず、小さな政府論が幅を利かすことにもなる。

中川は、そうした流れと「防諜法案」がリンクされるのを恐れた。「防諜法案」の背後に大蔵が控えている、ということにでもなれば、自治省はなりふりかまわず、阻止に出るかもしれない。そうなれば法案成立は困難になる。

「Qの会」の隠れた目的でもある日米安保条約に伴う地位協定の見直しも不可能になる。そんな風に考えたからである。

八月集会は「CIAが日本を盗聴 U K U S A協定を知っていますか」のタイトルで二二日、神宮外苑の日本青年館ホールで開くこととし、院内集会は衆議院が九月二日、参議院が九月三日と決まった。八月中は夏休みなので、議員の出席が少ないと考えたからだ。

日数が少なかったにもかかわらず、役人・学者グループの手際のいい組織作りと、ジャーナリスト・グループの精力的な準備行動とで、八月二二日の集会は大成功を収めた。一三〇〇席の会場の一階席をほぼ埋める、九〇〇人ほどの参加者が集まったのである。

「わたしたちがCIAの盗聴で被害を受けたと考えている事件は一九九〇年に、インドネシア電話通信網の受注をめぐる、NECとA T & Tが争った事件、それに一九九五年、日米自動車協定に際して数値予測の挿入を許してしまった事件の二つです。

N E Cが被害にあった事件というのを

かいつまんでお話すると、インドネシア政府がテレコム拡張工事の国際入札をおこない、NECが落札した。ところがその落札内容をNSAが傍受。AT&Tの条件のほうが有利だということを発見した。

インドネシアとしてはアフターケアなど、総合的に勘案してNECに決めたのだが、アメリカがこれに抗議。ブッシュ大統領自らインドネシア政府に圧力をかけ、事業の半分をAT&Tに請け負わせた、というものです。

総事業費4億ドルの取引ですから、半分というのはとても大きなものになります」

この日は堀田がCIAとNSA、それにUKUSA協定の関連と、UKUSAが持つ非軍事諜報ネットワーク「エシュロン」の説明を行い、エシュロンによって盗聴されたと思われる被害ケースを松江の松永が解説した。

次いで磯崎が、被害とは言い切れない

が進められている謀略の話をし、最後に杉井が「防諜法案」の紹介をして、終了となった。

磯崎の話は九〇年代、日本経済の根幹を揺さぶるスキャンダルが次々に噴出し、失速していった背景には、CIAの陰がある、という話だった。

九一年の野村證券をはじめとする四大証券の損失補てん事件、九五年の大和銀行ニューヨーク支店の損失隠し事件、同年の大蔵官僚過剰接待事件、九七年の四大証券、対暴力団利益供与事件、同年の第一勧銀総会屋不正融資事件、九八年、大蔵省日銀接待汚職事件。

これらはみな、あつてはならない不正であり、明るみに出して糾さなければならぬ事件ではある。したがって、日本よりも先にアメリカで疑惑が生まれ、それを受けて日本の検察が動いたとしてもそのことに異議はない。それどころか逆にアメリカに感謝すべきなのかもしれない。

しかし、日本の事情がアメリカに筒抜けで、アメリカの都合に沿って問題がリークされるとすれば、これは問題であろう。日本は情報操作によって、アメリカに屈服させられてしまうことになる。

「実際、いま挙げた事件ではどれも、日本の捜査陣が動き出すよりも前に、たくさん疑惑情報がアメリカから流れ出ていた。ここには日本よりも日本に詳しいアメリカがある。つまり盗聴です。

この盗聴には、堀田さんや松永さんがお話されたエシュロン・システムももちろん関与しているはず。しかし、金融情報の盗聴にはもうひとつプロミス（PROMIS）と呼ばれる大型（1ギガバイト）の情報管理ソフトがあるといわれます。

投資・金融情報の管理にも便利なので、日本の銀行も軒並みこれを入れていますが、このソフトにはバックドアがついて、CIAが盗聴できるようになっている、というのです。

だというのに反応がよく、有能な秘書を準備の助っ人として貸してくれたのである。

CIAは当初、カリブ海のケイマン島などを使ったマフィアのマネー・ロンダリングを監視するために自ら導入したようなのですが、後に偽装会社を仕立てて、日本の金融会社、政府機関に売り込みを図りました。もちろんバックドアのことは隠したままで、です。手口はマフィアよりも悪質だといえますね。

ともあれ、こうして得た盗聴情報をCIAは都合よく警察・検察にリークすることで、日本に対する謀略活動を行っていたといっているでしょう。こんなことを許しておいてはなりません」

あくまでも推定のつなぎあわせで、確証に乏しい話なのだが、磯崎の話は参加者の喝采を浴びた。人々の怒りの目がアメリカ力に向けられ始めているのを感じ取ることができた。

杉井、中川、水越の議員立法提出議員の発掘も順調にいつている。このぶんなら次の衆参議員会館における院内集会も成功するかに見えた。議員たちは夏休み

友好的な議員秘書たちにも参加してもらい、法案の細部における最終的な詰めを行った。議員に対する法案説明文、記者会見用ブリーフ、UKUSAの資料などを用意した。

八月末までには用意万端、各党有志の参加も決まり、九月二日を待つばかりになつていたのである。

ところが八月三十一日、正午過ぎ、「Qの会」のだれ一人として予想もしていなかった出来事が起こった。朝鮮民主主義人民共和国が長距離弾道飛行物体「テポドン」を発射、その一部が日本列島を越え、三陸沖の太平洋上に落下したのである。

CIAの謀略 第11章 「緊迫」

一九九八年八月三十一日午後一二時〇七分、北朝鮮の舞水端里（ムスタンリ）基地から3段式テポドン改造型ロケットが発射された。そのとき能登半島の北西海域に待機していたイージス護衛艦「みょうこう」の高性能レーダーがこれをキャッチした。

九四年より二四時間体制で提供されていた在日米軍の早期警戒情報が横田基地司令部から自衛隊中央指揮所に届いたものほぼ同じ時間であった。「ミサイル発射、着弾予定地域は北緯四〇・五四、東経一三四・〇三、ウラジオストーク南方、日本海公海上」というものだった。

マッハ三のスピードで東へ向かったテポドンは約一分半後に1段目を切り離し。これは発射地点から東へ四〇〇キロの日本海上に落下。四分半後の一二時一分、青森県西方の日本海上空二〇〇キロで二段目を分離。発射後五分半後には二段目

が青森県上空を通過。八分後に一八〇〇キロ離れた太平洋上に落下した。

二段目が落下したと同時に刻の一二時一五分、防衛庁中央指揮所から官邸、内閣安全保障危機管理室に弾道ミサイル発射の報。同五〇分に第一報が首相に届き、情報収集を指示。一三時三〇分に防衛庁が発射の事実を発表した。

この発表はアメリカの早期警戒情報に拠った日本海着弾説だったが、一四時を過ぎるころから、太平洋着弾説が浮上する。まずは防衛庁内部から、次いでアメリカから外務省への情報の中で。そして韓国国防省幹部の記者会見の中で。

この説が額賀防衛庁長官に伝えられたのが一五時、小淵首相に伝えられたのが一五時三〇分。内閣安全保障室担当官に伝わったのはやつと二一時になってのことである。この間の十六時、韓国国防省幹部が「着弾地点は三沢沖北東五八〇キロの太平洋上」と表明した。

二〇時ごろ、日本も「太平洋着弾」の発

表を決意。方法に関して防衛庁と外務省に対立があり、公式発表は二三時一五分にずれ込んだ。河尻融防衛審議官が六本木の防衛庁で記者会見したものである。これは日本にとって寝耳に水の発射だったばかりでなく、寝ている頭をまたがれたような不快極まりない事件だった。またこれに、韓国の発表と比べてもお粗末さが際立つ日本の情報収集能力に対する激しい苛立ちが重なり、同盟国アメリカの情報に対する疑いが芽生えた。これらは永田町、霞ヶ関周辺にテポドン・シヨックとも呼ばいいような混乱を生じた。テポドンそのものは射程の長い弾道ミサイルで、日本を直接ターゲットにしたものではない。日本の脅威はすでに九五年のノドン一号の発射成功によって現実のものとなっているのである。だが、そのような冷静な判断は影を潜め、「もしロケットの推進力がなければ日本に落ちている」という甘利芳相の言葉を代表とするヒステリックな声に満ち溢れ

た。推進力がなければ日本に落ちる飛行体など、毎日何千という数で日本上空を通過しているにもかかわらず、である。そして、発射翌日の九月一日には早くも、「日本も偵察衛星を持つべきだ」という声が与野党議員から上げられた。国会周辺は一種、ナシヨナリズムの昂揚感が支配したのである。

そうした中、二日の衆議院議員会館集会、三日の参議院議員会館集会はさんざんな結果に終わった。まずは参加予定の議員たちが軒並み「それどころではない」ということで欠席し、「Qの会」内部にも北朝鮮に対する制裁を求めて、活動する者が現れたからである。

JETROの長谷川や、新たに水島人脈の議員とりまとめを担当した木下などが、テポドン・ナシヨナリズムに感染した連中である。

「北朝鮮が開き直ったそうだ。朝鮮のアジア太平洋平和委員会が、日本の政治家が我々のみを『危険だ』として早々と中

傷し、騒いだのは根深い敵視政策から出たものだ、といっている」

二日、衆議院第一議員会館の会場にやってきた長谷川は、それだけを苦々しげに言い残して、すぐにあたふたと出て行った。その晩、外務省は先の委員会談話に対して「誠意のない見解である」として嚴重抗議。翌三日には衆議院で「抗議決議」を採択した。

「なんという早手回しだ。あの昼行灯の小測でさえもが、早くも偵察衛星導入を決めたみたいだぞ」

「ほんとうなのか。日本版の偵察衛星はこれまでも何度か浮上したことがあるけれど、そのたびにアメリカの反対に遭ってきた。いわゆるハイテク情報支配の独占こそがアメリカの国防の要のひとつで、日本の参入はこれを脅かすからだ。アメリカの国防戦略からいえば、アメリカの偵察衛星情報を日本に買わせたい、というのが本音だろう。今度も反対されるぞ。小測はそれがわかっているの

か、どうも怪しいものだ」

参議院議員会館の会議室で、集会を開く当てもないままに「Qの会」の連中がたむろっている。万一、議員がやってくるかもわからないので、閉会にすることもままならないのである。そこには磯崎のほか堀田、春田、水越、杉井などがいた。「しかし、なぜだろう。なぜアメリカは正確な情報をキャッチできなかったんだろう。どうもわかりません」

春田が首をひねった。
「だって、いいですか。アメリカは発射を事前に知っていたわけでしょう。だから日本海にミサイル追跡レーダーを備えた船を出し、『コブラボール』と呼ばれるミサイル情報収集機を沖縄から飛ばしている。海上自衛隊のイージス艦『みょうこう』が能登沖に待機していたのもアメリカの情報に基づいたものでしょう。ところが最初に届いた早期警戒情報は明らかにノドンを想定したものです。だから、発射をキャッチしたDPS衛星は

着弾地を日本海と計算した。

でもね、ノドンとテポドンとは見掛けも発射台もまったく違うミサイルなんです。アメリカの偵察衛星に区別がつかないはずはないんです。

アメリカのシステムにとんでもない欠陥があつたのか、それとも何かの謀略なのか、考えられることは二つに一つです」「謀略、ですか。もしそうだとすると、どんなことが考えられるというんですか」

「それが考えられないんです。アメリカは日本に偵察衛星を持たせたくなかった。だが、TMD（戦域ミサイル防衛）構想には参加させたかった。だから北朝鮮のミサイルの脅威を煽るのはわかるんです。

しかもTMDの基礎になるのはイージス艦によるミサイルの飛行分析で、今回、これを『みょうこう』にやらせています。後はミサイル迎撃システムの共同開発、ということになる。

でも、その可能性よりも、今度のよう
に偵察衛星の導入に向かう可能性のほう
が大きいように思うんです。アメリカは
日本のそうしたナショナリズムの昂揚を
読みきれなかったんでしょか」

「TMDは莫大な開発費を必要としなが
ら、完成する保証はなく、また、完成し
ても迎撃能力が100%にはならない。
費用対効果の問題も大きなネックで、日
本はアメリカの誘いを引き伸ばしにし続
けてきたものだ。だから日本をアメリカ
が敷いたレールに乗せるため、謀略を仕
組んだ、というのは十分にありうる。

だが、おそらく偵察衛星導入構想はす
でに待機状態にあったのだろう。予想も
しない速さで形になるうとしている」

「わたしたちも偵察衛星については反対
じゃないわけでしょう」

「いえ、わたしは反対よ。わたしたちの
主張はカウンター・エスピオナージでエ
スピオナージではなかったわ。衛星によ
る偵察は、相手が特定されず、世界に疑

心暗鬼を生むことになる」

「相手が特定されない」

「ええ、そうよ。低空軌道を回るから、
一国を監視するのに四基の周回衛星を必
要とし、結果的に世界をカバーしなければ
ならないの。日本は世界を説得する外
交手腕を持ち合わせてはいないわ」

「まあ、その議論はともかくとしても、
偵察衛星を運用する機関が必要だろう。
その議論なしに導入しても宝の持ち腐れ
になる可能性は大きい。導入派の先生た
ちも、我々の院内集会に参加すべきだっ
たんだ。アメリカからの情報の自立とい
う、しっかりと視点に立たないと、打
ち上げた衛星の情報自体がごっそりアメ
リカのものになる可能性だって残ってい
る」

「そうか、アメリカは日米安保条約で日
本の機関を利用する権利を持っているわ
けだ。衛星が集めた情報を独自に分析す
る能力がなければ、この部分でアメリカ
に頼るほかはなく、アメリカの衛星を日

本が打ち上げてやるのと大差がなくなる
んだ」

「だから、アメリカが恐れるのは衛星の
保有ではなく、偵察技術などの開発で
しょう。いわゆる先端技術の開発の上で、
アメリカが日本に追い越されるわけには
いかない。それに安保の見直し、日本の
アメリカからの自立です。つまり独自防
衛論の昂まりです。アメリカはそれを潰
しにくるでしょう。だからわたしは次期
支援戦闘機FSXの二の舞になるような
気がしますね」

北朝鮮は九月四日、発射したのはミサ
イルではなく、人工衛星を搭載した多段
式ロケットである、と発表。「衛星は金
正日將軍を称える歌」を送信している、
として、同月八日、人工衛星打ち上げの
成功を祝った。

アメリカは八日、人工衛星とは確認で
きない、と発表。一日には国防省当局
が「小型の人工衛星を軌道に乗せようと
したが、失敗したとの結論を得た」とし、

NASAは「衛星を軌道に打ち上げた」とする成功説に立った。

ちなみに、DPS衛星（偵察衛星）の情報をもとに受け取る在韓米軍のデータ分析などから、韓国も一七日、発射を人工衛星打ち上げの失敗だった、と結論している。

振り上げたこぶしを揮う先を失った形の日本は一日、外務事務次官の談話で「人工衛星であることも含め各種情報を防衛庁等で分析中」とし、三〇日には防衛庁が人工衛星であることに否定的な最終報告をまとめた。

日本はアメリカの見解とは明らかに異なる、独自の結論を導き出したのである。そして、翌三十一日、政府は独自開発の「情報収集衛星」を四基、二〇〇二年度までに打ち上げることを決定した。

ところで、一〇月六日付けの『世界週報』は発射翌日の九月一日に元CIA長官、ジェームズ・ウールジのインタビュー記事を載せている。ウールジは

この中で、「今回の実験を受けて、日本と米国は、イージス艦による……戦域防衛を試みるという賢明な方向に踏み出して欲しい」と、述べている。つまりこれはTMD構想への日本の協力を呼びかけている。

磯崎たちはその後、このインタビュの早さ、タイミングのよさに注目した。それは謀略説を強く印象付けるものだった。

しかし、CIAは謀略に失敗。日本はアメリカの情報とアメリカの情報分析に不信を抱き、独自の偵察衛星開発へと突き進んだ。アメリカはこれを懸命に押さえ込みにかかったが、テポドン・ナシヨナリズムは手に負えないほど強く、アメリカの情報独占を許す空気ではなかった。やむなくアメリカはパートナー作戦に転換。日本の偵察衛星に協力する代わりに、TMD構想への協力を取り付けた。九月二〇日、日本はアメリカとTMD構想の共同技術研究実施で合意したのである。

TMD構想への参加は、中国に対する脅威から積極的に参加を決めている台湾に次ぐもので、アメリカを介してはいるものの、日本が台湾と軍事技術開発で手を結んだことを意味する。

これはあきらかに、日本の独自防衛を偵察衛星という形で準備してきた者たちの悲願が実つたのにとどまらず、日本を反共軍事力として期待する台湾ロビーの勝利である。

「日本が情報収集衛星を独自に持つことに、どれほどの意味があるのかはわかりませんが、これが日米の対等なパートナー意識を育てる一步になるならば、無駄なことはいえないでしょう。」

同様にTMDの共同研究も両国のパートナー意識を強固にします。情報収集衛星も迎撃手段を持つてこそ真に生かされるものですから、この研究にも関心を持ちたいものです」

篠山啓志が、そんな解説をしていた。

日本がテポドン騒動で大混乱になっている真つ最中の一九九八年九月十六日、EU議会に対して、世界規模の盗聴ネットワーク、エシュロン・システムについての報告書（要約改訂版）が提出された。そこには予想通り、ヨーロッパ、日本の盗聴被害が具体的に記されていた。日本に関連する部分では、八月の日本青年館集会で松永が例に挙げたとおり、NECのインドネシアのテルネット入札におけるクウエル副大統領による直接介入が取り上げられていた。報告書はこれをエシュロンによる盗聴の結果と断じていた。

この一九九〇年に起きた事件は、すでに日本のマスコミでも報じられ、『山陰新報』の松永の知るところとなった。『文芸春秋』九三年八月号、浜田和幸「CIAが分析した『沈黙の艦隊』」がそれである。

EU議会報告書に驚き、取材した毎日新聞記者に対して、NECは改めて困惑を

口にし、関係者の発言として「AT&Tの受注への疑惑は入札直後からささやかれ、このプロジェクトに絡んで『ブツシユ大統領がスハルト大統領あてに親書を送った』とするジャカルタの現地報道まであった」という話を伝えている（一九九八・九・一九）。

一方、ヨーロッパの関係では、フランスの電機メーカー、トムソンCSF社がブラジルにリーダーを売り込んだ際、この情報を盗聴。アメリカのライバル企業レイセオン社に流したため、商談をさらわれたケース。

エアバス社がサウジアラビアと進めていた旅客機売り込み交渉を盗聴され、賄賂が介在している、として商談を潰され、契約をアメリカ企業のボーイングとマクダネル・ダグラス社にさらわれたケースなど、大きな被害が報告されている。

この報告を受け、EU議会では一六日「米国の情報収集網エシュロンにより脅かされる市民を守るため、防衛手段をとる

必要がある」とし、「国際規約の制定を求める決議」を採択した。

そして、その具体的なステップとして九九年三月までに「市民の自由と電子監視網の問題点」と「経済情報への新電子監視技術悪用の危険性」という二つのレポートをまとめ、国際規約制定のたたき台にするという。

本来なら九月二〇日ごろに「UKUSA抗議集会」を開催する予定だった「Qの会」は、完全に目算が外れ、集会は中止された。そして、二九日に今後の行動を決めるため、九月の定例会を開催した。

会のメンバーの参加者は、七月例会の一人を割り込んで、わずか七人になってしまったが、この間の国会行動で出会った若手議員の秘書などが参加して、二〇人ほどの集まりになっている。

「予想通り、ヨーロッパでは大きな問題になっていきますね。ほんとうなら日本だってこんなはずではなかったんだけど、なにしろこればかりは予期しよう

がなかったもので……」

始めに通産の水越が、愚痴ともいいわけともつかないあいさつをし、いつものようなバス・ストーミングが始まった。

「欧州連合（EU）は九月一九日にこの件に関してアメリカのNSAとイギリスのGCHQ（政府通信本部）に事実確認を求めたそうですよ。同議会はこれが事実なら、NSAとGCHQはこのシステムの乱用を防止する方策を取らなければならない、といっているようです」

「当然でしょうね。しかしアメリカもイギリスも、その事実を認めないでしょう。乱用の防止、というのはいかにも柔らかな言い回しで、本当ならイギリスはEUの結束を定めたマーストリヒト条約に違反していることになる。EUへの参加資格停止を含む制裁を受けても仕方がない。」

実際そう主張する議員もいるようですよ

「緑の党なども厳しい立場だそうですね。」

アメリカの責任を追及すべし、ということとで欧州議会を突き上げている」

「欧州議会のほか、フランスやイタリアも独自調査を検討しているようです」

「アメリカでは、保守系の政治シンクタンク『自由議会財団（Free Congress Foundation）』の副代表、パトリック・プール氏が、議会共和党メンバーに提出するエシユロン報告書の準備を進めているそうですね。彼は『この問題を我が国の議員に提示する潮時だと考える』と言っています」

「変な国ですよ。必ずそういう人が現れる。アメリカのある種の健全さ、なんでしょうね」

「バランスなんじゃないですか。一方じゃあ、大統領が不倫疑惑でしょう。しかもそれをまじめに弾劾しようとしている。そうでなければバランスを失う国なんですよ」

「ところで『Mミッション』というのを知っていますか」

春田がまた何か仕入れてきたようだ。

「Mは三菱のMでして、これは三菱電機の偵察衛星プロジェクト（次期防衛衛星通信システム）の暗号名なんです。」

防衛庁が偵察衛星導入の検討を始めたのは一九九三年の一〇月のことで、九四年一月には『写真偵察衛星の概要』という報告書になっている。

九四年八月には首相の私的諮問機関『防衛問題懇談会』が偵察衛星の導入を提言。九五年一一月の『防衛計画大綱』が情報体制の確立をうたったのを受けて、九七年一月には衛星画像を分析する画像部を含む防衛庁情報本部が新設されています。また九七年度には外務省に国際情報収集衛星調査費が初めて予算化されています。

ところで『Mミッション』がスタートしたのは九三年の二月ごろで、『最終的には防衛庁に独自偵察衛星を保持させること』を目標にしています。これは防衛庁の研究開始次期とぴたり一致する。

そしてこの八月、三菱電機はTMD構想を受注することになるロッキード・マーチン社と防衛関連事業で提携を結んだようなんです。

つまり、すっかり準備万端。タイミング待ちの体制が出来上がっていたわけですね。そして、三菱ロッキードにうつてつけのテポドン・パニックがやつてきて、両者の思惑通り衛星もTMDもということで決着した、という図式になりま

す」
「なんだ、そういうことか。なんか見事にやられている、っていう感じですね。でも、偵察衛星は三菱の独壇場というわけではないんでしょう」

「当初はね、たしかにそうだった。偵察衛星の開発を目指す日本のメーカーには三菱のほか、東芝、日本電気があったんです。それがなぜか二年前に東芝が撤退しましてね、そしてなぜかこともあるうにテポドン騒ぎの四日後の九月四日に日本電気が落ちた」

「あつ、防衛庁に対する不正水増し請求事件ですか。あれで日本電気は公共機関から出入り禁止処分を喰らっていますね」

「つまり、衛星打ち上げを決めたとき、受注企業は三菱電機しかなかったのです。この件でも、東京地検に捜査情報を流したのはCIAではないか、という噂があります、どうでしょう」

「ともあれ、できすぎです。何かが臭う」
「偵察衛星の開発・運用プランは内閣官房と科学技術庁、通産省、郵政省それぞれに提出しました。画像分析は防衛庁ではなく内閣情報調査室が当たるよう、二〇三〇〇人の要員が必要だとされています。」

「防衛庁をはずしたのはアジア諸国の反発に配慮してのことと思われます。だから衛星の呼称も偵察衛星ではなく、情報収集衛星になっています」

「形式的に防衛庁をはずしたにしても、この衛星の情報は防衛庁と外務省、その

上に乗った内閣情報調査室が管理、運用することになる。とすると、独自防衛どころか、アメリカの下部機関としてNSAやCIAに協力していくことにもなりかねませんね。

これはわたしたちの『防諜法案』と対立するものですが、内務省・石原構想とも違う。テポドン・ショックは危機管理の主体を警察から軍へと、再び引き戻す力になっているのかもしれない」

「冷戦思考に逆戻り、というわけですか。となると、この間わがもの顔に振舞ってきた警察が打たれる番かもしれませんね。」

アメリカに何が起こったのかはわかりませんが、大沢や石原慎太郎的な思考がカムバックしてくるかもしれない。アメリカは日本が独自防衛に走ることに否定的ですが、軍事力の強化が必要などきはいつでも、彼らの主張を利用します。

そしてまた、大沢や石原など、独自防衛論者もまた、アメリカのこの期待にこ

たえます。大沢はもちろんのことですが石原も、実は親米派なのかもしれません。NOというがいうまいが、大沢や石原もアメリカが自己利益を追求する際の、手ごろな駒にほかならない。わたしたちも、その点を認識すべきです」

テポドンの弾頭は人工衛星だったのか、発射の真の狙いはなんだったのか、二発目の発射はあるのか……、日本ではなおテポドン・ショックから抜けきれず、北朝鮮の制裁を巡って議論が百出していたころ、アメリカでは「モニカの戦争」をめぐる問題が深刻化していた。

この年の一月に発覚した、ホワイトハウス研修生のモニカ・ルインスキーとクリントン大統領のスクャンダルは一月一日に至ってついに、スター独立検察官による大統領に対する弾劾証言へと突き進んだ。

査察を巡るイタチごっこで、中東における威信を低下させたアメリカは苛立

ち、国連（UNSCOM）の査察活動に興味を失い、イラクによる査察妨害を口実に、空爆の実施を狙っていた。

その狙いの主眼には「スクャンダル隠し」があることを、アメリカの国民も世界の人々も気づいていたから、「まさか、そんなことはできないだろう」という声も根強かった。不倫隠しのための戦争、国防総省の内部でも、この武力行使は認められないという声が強く、そこで生まれた隠語が「モニカの戦争」であった。

国連査察団UNSCOMの団長スコット・リッターはアメリカ人であったが、九八年一月、FBIによってイスラエルのスパイであるとの嫌疑をかけられた。CIAの捜査に対してリッターは「イスラエルとの共同行動はUNSCOMの活動の一環である」と証言。実際、UNSCOMはイスラエルの思惑に乗って動いていた。

八月、アメリカはオルブライト国務長官を動かし、イスラエルによるUNSCOM

Mへの技術支援を停止させ、リッターを辞任に追い込んだ。

一月、タイムिंगを計っていたクリントンは弾劾証言が始まった直後、イラクに向けて爆撃機を発進させ、巡航ミサイルの発射ボタンを押そうとした。が、このときはイラクのフセイン大統領が「査察の受け入れ」を表明したため、爆撃機はそのまま引き返した。

二月一四日、国連のアナン事務総長は、アメリカのこうしたやり方に対して、記者会見を行い、強い不満を表明した。

ところが、それにもかかわらず大統領弾劾訴追のための本会議開催を翌日に控えた一九九八年二月一六日、「砂漠の狐作戦」の火蓋が切って落とされ、アメリカ・イギリス両軍がイラクの軍事施設を巡航ミサイルなどで攻撃した。

「モニカの戦争」によって、バクダッドの中心部で民間人五人が死亡した。

「モニカの戦争」に抗議してロシアはアメリカ・イギリス両国に駐留する大使を

召還。中国、フランスも両国を非難。イスラム諸国会議、アラブ議会連盟も両国を強く非難し、空爆の即時停止、イラク制裁の解除を決議した。

空爆の翌日、ベトナム訪問中の小渕首相は早々と「行動を支持する」との声明を発表。国連安保理の中で、唯一の「モニカの戦争」支持国となった。日本はアラブ諸国にとって、危険な適性国家になったのである。

この、小渕首相の、あまりにも節操のないアメリカ追従は、中東でアメリカと国益をことにする日本が取るべき態度ではなかった。この地域で、日本がアメリカ・イギリスと一体とみなされて、プラスになるものはないのである。

しかし、テポドンという熱病から覚めやらぬままの日本は、湾岸戦争という熱病の再来に、いともあっさりと感染した。あるいはまた、アメリカの強い懸念を振り切って、衛星という独自防衛の手段を手にしたことで、反米イメージを極度に

恐れた。

TMDという巨大な支出を、国民負担を、まるでみかじめ料であるかのように、アメリカに差し出すことを決めたのも、忠実だがだらしなく、主人の後ろから吠えたてる、まるで座敷犬のような「支持声明」も、独自防衛の道を探り始めたこの国の、自己矛盾から生まれたひきつけ、癡癡なのかもしれない。

そして、この、独自防衛と安保重視という相矛盾した要請が、溶け合わぬまま交じり合い、大沢の胸のうちのようになり、白濁した靄のようになって日本の政界を覆い始めた。

一月八日、大沢批判の急先鋒であった民自党の野中官房長官が宇都宮で記者会見し、大沢を党首とする自在党との連立の可能性を示唆。禁じ手であったはずの「保保連立」政権の模索が始められた。これはあきらかに日米安保における日本の役割を拡大し、安保の適用域を拡張する新ガイドライン法案の成立を目指した

シフトであるが、この、「保保連立」シフトに乗せるべく、新たな法案が骨格を見せ始めた。それが組織的犯罪対策関連三法案である。

この三法案の中には、アメリカが強く求めているマネーロンダリングの規制や、盗聴を可能にする法案が含まれていた。新ガイドライン同様、アメリカの国際戦略に沿った法整備という側面が強い法案なのであった。

「やっぱりきましたねえ。盗聴法案ですよ」

「そうですね。まさかオウム真理教事件への破防法の団体適用却下が、こういう形になってくるとは思いませんでした」
「いや、磯崎さん、これは予想の範囲内ですよ。破防法の適用には旧内務官僚にも慎重な意見が多かった。一般法で押さえ込める、と言い放っていた警察官僚も少なくなかったんです。」

警察官僚からしてみれば、破防法が適用されると主管は法務省の公安調査庁に

なる。公安調査官の指揮のもとに組み込まれることになるんです。

法務省は出入国管理局を除けば内務省系の役所ではない。その下に組み込まれ、普段から無駄飯食いとして軽んじていた公安調査官の指示を仰ぐなどということは、警察のプライドからして考えられないことなんです。

CIAに対するFBIの対抗心、FBIに対する州警察や市警察の反発はよく知られていますが、日本だって、警察庁に対する各県警、本庁に対する出先警察署対立がある。公安調査官に対する警察官の反発はそれより遥かに大きいと思いますよ。

警察には自分たちこそ国を守っているんだという、例の牧民官意識がありますからね。まあこれが警察の職務を支える背骨ですから、縄張り意識として一概に切り捨てられるものとは思いませんけどね」

「なるほど、たしかにそうですね」

「ですがね、やっぱり縄張りは広げたいわけです。破防法は欲しくないけど、警察の権限を広げることになる法律はいくらでも欲しい。それも、できるだけ他省庁とは無関係に活動できる使い勝手のいい法律が欲しい。

あるいは、戦後一貫して左翼労働運動の取締りなどでお世話になり、今も国際犯罪などの捜査でお世話になりっぱなしのアメリカさんの要求にこたえる法律、アメリカさんに恩を売って、省庁の中の権威を支えてもらえる法律が欲しいわけですよ」

「盗聴法はその両方を満足させる法案だ、というわけですね。で、そのマネー・ロンドリングの防止というのはなんですか」

「盗聴法といっしょで、麻薬、テロ、武器取引、国際犯罪の抑止が名目で、アメリカが世界に協力を求めているものです。たとえばマフィアが麻薬を売って儲けたカネ、テロ組織に武器を売って集め

たカネ、この汚れたカネを監視することで、麻薬やテロ、武器取引やマフィアを押さえ込もうというものです。

マネー・ロンドリングというのはこの汚れたカネを洗ってきれいにすること。たとえば総会屋が怪しいカネでA銀行の不良債権を買い、破産したと見せかけて、実は別の証券に乗り換えておけば、この配当はきれいなカネです。

これを防止するには、こうした便宜を図った銀行を罰すればいい。汚い金の運用を禁止すればいい」

「つまり、そういう法案なんですか」

「まあそうですが、カルト教団が集めた資金が不正だとなると、そのカネで弁護士が雇えない。組合が団体交渉で勝ち取ったカネが、恐喝により手に入れたカネだとみなされると、そのカネを報酬として受け取っていた弁護士も有罪になりかねない」

「公正な裁判を受ける権利や、弁護権が失われる恐れがある、というわけですか。

それは危険ですね。でも、なんでそんなものをアメリカが狙うのですか」

「これは日本の警察権の拡張にほかならない。まあ、便乗です。」

アメリカが狙っているのはそんなものじゃあない。アメリカが、CIAが世界のマネー警察になろうという野望です。世界の大規模なマネー・ロンダリングはケイマン島やバハマなどのカリブ海地域で行われています。

タックス・ヘイブンといわれる利子や配当に税金が科せられない特権的な地域です。ここにペーパー・カンパニーを設立し、空契約を結んで、世界中から集まってきた大銀行と、何度か資金をやり取りすれば、マネー・ロンダリングは成功です。

これらの地域はアメリカやイギリスによつて、そのために作られた。米英の巨大財閥は、ここで何をしようとだれからも咎められませんか、何をしたのか追跡されません。追跡するシステムもなければ

ばスタッフもない。

でも、日本の財閥におなじ真似はできません。というのも、ここでの資金の流れはアメリカの商務省やCIAがPRO MISというソフトで徹底監視しているからです。大和銀行ニューヨーク支店の不正も、このシステムによつて発覚したようです。

つまり、アメリカだけが大規模なマネロンを監視し、訴追できる。大和のカネは不正だ、と、CIAが通報すれば、日本の警察は新法の規定によつて、大和の取引を停止しなければならなくなる。いつどこを叩くかは、まったくアメリカの一存で決まってしまう。マネー警察は日本経済の殺生与奪の権限を握ることになるかもしれないのです」

「各国に禁止の国内法を作らせて、データ支配を通じてアメリカが君臨する、という図式ですか。汚いですね。ここにもチェックする民衆がない」

「本来なら、国連が規制を作り、国連が

監視すべきです。が、アメリカはそれを認めない。

国連なら、麻薬を売る側ばかりではなく、買う側も厳しく取り締まるでしょう。アメリカが一方的にパナマを攻撃、売り手側を制裁する、なんてことはありえませんか。

同様に、ケイマン島の利用者を罰するなら、利用させているケイマン島のやり方をも罰するはずです。ちなみにケイマン島はイギリス領、タックス・ヘイブンを止めさせるのは簡単なはずなんです」

「利益があるからやめられない、というわけですね。アメリカ・イギリスの身勝手さには恐れ入ります。もちろんバックにいるのはその巨大財閥なんでしょうがねえ」

「とにかく、こういう法律ができてしまえば、もう取り返しがつかない。CIAを監視するどころか、CIAに監視される法案が続々と登場してきたわけだ。『防諜法案』の待機状態はやむをえないが、

これらの法案に反対していく必要があるのではないだろうか」

「たしかにそうだ。来月（九九年二月）の例会で、提案してみよう」

「このぶんだと、継続審議になっていた住民基本台帳法の改正案も動き出すかもしれないぞ」

「そうだな。その動きも監視しなくては……」

一九九九年の正月、松永が東京に出てきたので磯崎と春田が小さな宴席を用意した。その新年のめでたくあるべき会話が沈んだ。たいへんな年になりそうな予感が、三人の酒をすっぱいものにした。

堀之内久子に呼び出されたのだろうか。磯崎正太郎は自分のホームページの掲示板に、赤く点滅する文字で「海、Love、以」というメッセージが浮かんでいるのを発見した。

マンハッタンのタイムズスクウェアのど真ん中で人を待つ。ひとつ先の街路

の角で、刻々と世界の為替レートを表示しつづけるビルがある。そのビルの最上階に下りているブラインド。そのブラインドの隙間から、誰かがのぞいているような気がする。

ビルの脇に開いた地下鉄一番線の出口から、大勢の人たちが吐き出されてくる。レザーのロングコートを着込んだ男が、地上に上がると同時に襟を合わせたような気がする。そのコートの裏に、磯崎はライフルを見たように思う。

「いつまでもこんなところにいるのは危ないぞ。目抜き通りのど真ん中で、わたしは360度、すっかり敵に身を晒している」

南にあるのっぽビルの、カップヌードルの看板を見上げる。その看板が突然、頭の周りをぐるりと回って、磯崎はだれかに手をとられていた。

「なにしているの、ばかね。こっちよ」

堀之内らしいが、顔をみている余裕はない。手を引かれ、人ごみを縫うように

して、走り出す。「ライオン・キング」の大きな看板が、二階建ての観光バスを待つ行列の向こうにそそり立つ。

ブロードウェイの裏道を駆けている。舞台装置を積んだトラックが荷卸をしている後ろをすり抜けて、花束を抱えて舞台裏にたむろうファンの列を突き破る。「地上はだめよ。地下鉄でワシントン・スクウェアへ。あそこなら、上から狙われることはないわ」

どこをどう通ってきたのか。ワシントン・スクウェアは夕日でオレンジ色に染まり、中央広場の剣を飲み込むパフォーマーを取り巻いて、大群衆ができています。「なるほど、ここへもぐりこめば安全だ」

磯崎がやっと一息ついたのもつかの間、突然パフォーマーが「日本人はいませんか、日本人。アシスタントをしてもらいいます」というではないか。観衆がざわめき、あつという間に若い二人の女性がステージに引き揚げられる。

「二人ともかわいいね。これは危険だか

ら、キミたちには立会人をお願いしよう。そこで見ていて。必要なのは男性だ。日本人の男性。少々ごつくてもかまいません」

再び観衆が騒ぎ始め、周囲を見回している。

「そのひと」

パフォーマーが剣で指差す。磯崎はたちまち近くの観衆に羽交い絞めにされ、ステージに引き出されてしまった。

「あなたはよいいなことをしていますね。でも、わたしたちから逃げ出すことはできませんよ」

パフォーマーがマスクをはずすと、その顔はなんと、小浜島で見つけた記念写真に池島佳苗、篠山啓志と一緒に写っていた、あの正体不明の外国人ではないか。「ではまず手始めに、あなたに飲んでもらうことにいたしましょう」

磯崎の目の前に、長くて細い西洋剣の切っ先が迫る。ニヤニヤする男の後ろから、うれしそうに覗き込む日本人の女。

その一人はあきらかに、まだ若い、小浜島時代の池島佳苗だった。

他愛ない夢であった。後半はどこかリアルティーに欠け、子ども騙しのようなシーンに過ぎなかったが、それでもどこかに不快感が残る。磯崎はベッドに身を起こしたまま、何度か首を回した。なぜか肩が張っている。

この夢は昨日の例会で、堀田豊が話してくれた映画のせいであることは間違いなかった。堀田はその数日前までニューヨークにいて、堀之内久子に会ってきた。そのついでに、いま評判の話題作『Enemy Of The State (邦題エネミー・オブ・アメリカ)』を観てきた。そのストーリーを例会で報告したのである。

この映画はプライバシーを無視したコンピュータ社会がいかに危険かを訴えたアクション娯楽大作で、監督は『トップガン』のトニー・スコット、脚本は『続ミッション・インポッシブル』のデビッ

ド・マルコーニ。一九九八年一月二〇日、全米で封切られた。

ストーリーは、テロ防止を名目に上程された通信傍受法に反対する下院議員が、NSAの行政官（ジョン・ボイド扮するレイノルズ）と彼の工作員に暗殺されるところから始まる。この暗殺現場を野鳥監察カメラが偶然捕らえた。このビデオを取り戻すため、NSAは総力を挙げ、それと知らずに所持している弁護士（ウィル・スミス扮するディーン）を追跡。異変に気づいた弁護士・ディーンがNSAの情報網から必死の脱出を試み、通信傍受法案を阻止するというものだ。この中で駆使される、現に進むNSAの個人監視能力、行動追跡能力のすさまじさが、観客を戦慄させる。電話、カード、監視カメラ、偵察衛星……、それらのネットワークがディーンを秒単位で監視する。彼の一挙手一投足がNSAの監視ネットワークに掛かってしまうのである。

ここには「エシユロン」そっくりの盗聴システムや、エシユロンをも凌ぐ最新の追跡システムが登場する。劇中でレイノルズがうそづく。

「われわれに盗聴できないものは、まだ頭の中にあるものだけさ」

アメリカで公開されてから大きな議論になったのは、この映画に出てくるテクノロジーの、どこまでが現実で、どこまでが空想か、ということだったようである。

堀田は「それらの意見には大きな開きがある」という。ほとんど現実ではないか、という者、現実はもつと先を行っている、という者。ほとんどが誇張されている、という者。

たしかに個人を追って、衛星が位置を変える、とか、コンビニの防犯カメラがNSAに直結している、などということは、いまのところまだない。宇宙から腕時計の針が読める、というのも少し行き過ぎかも知れない。

しかし、コメンテーター全員が一致しているのは、「技術的には、何年かすればすべてが現実になる」ということだった。ターゲットの位置を特定することは可能だが、レスポンスが早すぎる、瞬時に居所をつかむことはまだできない、という意見もあった。しかし、映画ではターゲットの全身に六個のマイクロ盗聴器が仕掛けられ、携帯電話には衛星に向け、位置を知らせる発信機が埋め込まれていた。大方の意見では「これならできる」というものだった。いわゆるカーナビの原理である。

一九九六年四月二日、チェチェン共和国グロズヌイ近郊の寒村・ゲキチュにロシアのスポイニ五戦闘機が襲来。2発のレーザー誘導ミサイルを発射した。その1発が民家の屋根を貫通。潜んでいた分離独立派の旗手ドダエフ大統領の一メートル横で炸裂。大統領が即死するという事件があった。

大統領が直前にかけた衛星通信電話の信

号から、NSAが位置を割り出し、ロシアに通報した、というのが専門家の見方である。このようなピンポイントの狙撃は、ほかの方法では不可能だ、というのである。だが、NSAならできる。

映画を作るに当たって、撮影チームはNSAに取材したという。NSAはこれを拒否。無人の執務室を護衛つきで見学させることだけを許した、という。

製作総指揮に当たったアンドリュー・デビスは、そのときの印象をこう語っている。

「映画に出てきたようなシステムは、実際にNSAが使用しているテクノロジーよりも一〇年も一五年も遅れているのかもしれない」

実際、彼は、古くなって秘密にしておく必要もなく、資料室に捨て置かれていたコンピュータ・ソフトとツマ楊枝を目撃している。ソフトはタイプライターの音だけで、打っている文字を判読するもの。楊枝はその先にマイクロ・カメラが

仕込まれていた。

「ともかくも、よくできた映画で、すごいというほかはないね。NSAもすごい、こんな映画を作るアメリカという国もすごい。というよりも、ちゃんと商業ベースに乗るほどの観客がいる。盗聴法は危険だ、というメッセージが、ちゃんと伝達されている」

「その映画は日本でも公開されるんじゃないかね」

「たしか、四月には公開されると聞いています」

「必見です。ぜひ観たほうがいい」

「盗聴法を阻止する力になりますかね」

「そうしたいところですよ。盗聴法だけじゃない。総番号制もおなじです。あれも基本的には個人情報追跡ツールです。カードの携帯となればもっと恐ろしい。いつかそれは発信機つきのカードになりますよ」

「厚生省の基礎年金番号にはそういう意図はありませんでしたよ」

「スタートはそうだったかもしれませんが。でも、監視を止めれば危ない。住民番号だって、導入までは監視ツールではない、と言いつけるに違いないんです。でも、自治省の力の源泉は住民の管理ですからね。これを監視ツールに利用しないはずがない。だから阻止しなければならぬんです」

「監視に反対、というのは賛成よ。防諜法にはどこかに危なさがあるもの。防諜を理由に盗聴が、偵察がはびこるかもしれない。長谷川さんなんか、もうすっかり偵察衛星でしょう。偵察される側に対する配慮が感じられないのよ。CIAの問題も国家間の問題ではなくて、国家監視と経済活動の分離、基本的人権の問題なんだと思うわ」

この日（九九年二月二〇日）以降、「Qの会」は隔月の例会と並行して、各自がそれぞれの管理法案に反対する取り組みをしていくことになった。

堀田は新ガイドライン法案、春田は住

民基本台帳法改正案、杉井は盗聴法を含む組織的犯罪対策三法案、そして磯崎はそれぞれの横の連絡を担当する遊軍的な役回りを買って出た。

ただし、これらの法案に反対することで「Qの会」を拘束したりはしないこと。法案の行方に係わらず、「Qの会」は「防諜法案」の議員立法化を目指すこと。これらを改めて確認した。

一九九九年の三月から始まった第一四五国会は日本の将来を決するかもしれない重要な対決法案が矢継ぎ早に提出され、ことごとく成立する、という戦後の憲政史上、異例の事態になった。ある人はこれを、他の国会と明確に区分して「小渕一四五国会」と銘記せよ、と訴えていた。

最初の攻防は新ガイドライン関連法案、とりわけ周辺事態法をめぐる対決として現れた。日米安保の適用範囲を「日本有事」から「周辺事態」に拡張しようというもののだが、周辺とはどこを意味するのかが最大の論点になった。

要は、アメリカに従って、中国から台湾を防衛するかどうか、が争点であった。台湾を明示すれば、中国の「国内問題」に干渉し、中国とはのつびきならぬ対立関係に陥る。といって、定義をあいまいにすれば中東へと伸びるシーレーンまでもが日米安保の対象になってしまいか

ねない。

「台湾をどうするか。これはアメリカが持ち出した日米安保の踏絵なんだ。日本が極東での平和を日米安保によって確保しようとする限り、必ず踏まなければならない踏絵なんだ。」

これを踏む前に考えておかなければならないことが三つある。極東の平和の枠組みをどうつくるか。いざというとき、アメリカは本当に台湾を守るのか。将来もアメリカは本当に日本の味方なのか。この三点だ。

しかし、国会ではこのような議論はまったくなく、どこまでアメリカに追従するか、その線引きでもめている」

これが堀田の、国会を見る視点だった。ところが四月の末、線引き論争が突然幕を下ろした。民自、自在両党の連立に、参議員でキャスティングボードを握っている公正党が参加することになったのである。

公正党は衆議院で連立与党の強行採決を

黙認し、参議院では賛成にまわった。結局、周辺事態の定義は示されないまま、五月二四日、法案は可決成立した。

公正党の与党化は「や」党と「よ」党の間、「ゆ」党である、として、「ぬるまゆ」に浸かっていた民衆党に野党としての幟色を鮮明にさせることになる。組織的犯罪対策法三法案と住民基本台帳法改正案への党内のあいまいな態度は払拭され、国家管理の強化に反対する主張が前面に出てきた。

六月の一三、一五と、両法案は相次いで衆議院を通過。組対法では与党の数人が反対に、住基法では野党の数人が賛成にまわったが、大勢を変えることにはならなかった。そして、都知事選での敗北後、衆議院議員となった元石見市長の岩槻鉄人は野党民衆党で住基法賛成に回った一人になった。

「まあ、あいつはあいつで、一貫しているわけですね」

これには春田も苦笑いするしかなかった

た。

衆議院での攻防は、参議院での審議日程を大きく制限し、会期内成立は相当に厳しいものになっていた。杉井と春田の話を合わせると、両法案は法務委員会と地方行政委員会では並行して審議が進んでいるが、やや組対法が先行。両方の成立は望めないで、組対法一本に狙いを絞ってくるのではないか、ということだった。

ところが、突然会期延長の声が上がり、それも五七日間という戦後最大的大幅延長になることが決まった。しかも、このドサクサの中、野党の切り崩しをも狙って急遽、国旗・国歌法案が上程されたのである。

国旗と国歌を決める、というのは少なくとも国会にとって、後世に耐えうる審議を尽くすべき問題であるはずであった。決定の経緯にいたるまで、後世に伝えうる中味を持っていけるべきテーマであった。それを、まるで火事場泥棒

のように決定してしまったのである。成立は八月九日であった。

国旗・国歌法案の強行採決で九日、国会は審議ストップが予想され、一〇日の組対法強行採決は難しくなった。それを怖れた与党側はその日（九日）の夜八時五三分という異例の時間に参議院法務委員会を召集。組織的犯罪対策三法の採決が強行されようとした。この抜き打ち的なやり方に議場は騒然。議長の「採決」の声も聞こえなければ、賛否を意思表示する議員もいなかった。

そのもみくちやな様子は、そのままインターネットで世界に流され、自宅にいた磯崎や堀田にも届いた。議場からは、刻々と杉井とその仲間の、状況を伝えるメールが飛び込んだ。

委員会が成立していないこと、採決がなかったこと。いくつかのホームページが、委員会の映像をそのままページに貼り付けて、証拠ビデオつきで問題を解説していた。わずか一〇分前に国会で起き

たことが、こんな風に伝わってくる時代になっていたのである。

予想通り、翌一〇日の国会は空転。会期終了の八月一三日まで、国会は秒読みの段階に入った。一日、野党側が内閣不信任案を提出。これが否決されて、参議院はそのまま組対法三法の委員会採決の有効性をめぐる論戦に突入した。

「住基法も危ない。非常事態です。これから参議院本会議が始まる。深夜国会です。いま、杉井さんとともに参議院議員面会所にいます。本会議を傍聴しますが、磯崎さんも来ませんか。ぼくはこの日が日本の第二の敗戦の日になるんじゃないかと怖れています」

一日、夜七時過ぎ、春田からの電話だった。

「第二の敗戦の日」とは穏やかではない。しかし、春田にそこまでいわれて出掛けないわけにはいかなかった。一時間後、磯崎もまた、議員面会所で傍聴の手続きをとっていた。

「組対法をめぐって大もめにもめているのはわかってるよ。これから本会議採決をめぐって攻防戦があるんだろう」

「ええ、委員会での採決は認められないから、もう一度委員会に差し戻せ、いや戻さん、ということでもうひと波乱あるでしょう」

「戻せるのかな」

「その見込みは薄そうです。ころあいを見計らって強行採決、というのが与党側のストーリーのようです」

「住基法はどうなるんだ。もう委員会の開催は無理じゃないか。そうなれば審議未了廃案だろう」

「どうも、ストーリーはそうじゃないらしいんです。委員会審議をパスして、直接本会議で採決する奥の手がある。国会法五六条です。委員長がそれまでの審議状況を報告して、これを受けて本会議採決をする。委員会を開いている時間が無い場合などの緊急措置なんですが、二四年ぶりにこれを使うという案が浮上して

いるようなんです」

「そんなばかな。これまで背番号制の問題点を明らかにしてきたのは委員会でのことでしょう。そこをパスして本会議採決するなんて、じゃあ何のための委員会審議だったんだ、ということになってしま

う。委員会軽視は、結局のところ、国会の審議そのものを否定して、数の論理にすべてを託すのとおなじじゃないですか。これじゃあ国会の否定、議員の否定だね。そんなことをよく議員が許すよね」

「まったくです」

「でも、参議院の地方行政警察委員会は、委員長を民衆党が握っているんですよ。彼が報告を拒否すれば、代理を立てるにしても委員会を開かなければならなくなる。

でも、組対法で強行採決してしまえば国会は空転して委員会は開けない。審議未了になるじゃないですか」

「ところが、ぼくらは大事なことを見落

としていました。参議院民衆党の地方行政警察委員会議員の多くは住基法改正に反対じゃないんです。もちろん委員長もおなじです」

「どういことなんですか」

「出身母体が自治労関係者なんです。ぼくらは、彼らがかつて、厚生省の基礎年金番号に反対して自治省と共同行動をとったのを忘れていました。自治労は以前から、納税者番号には住民番号を使え、と主張してきているんです」

「でも、委員会では反対してたんじゃないんですか」

「表向きはね。でも、彼らの反対の論理というのは、もつと法を整備して、納税者番号にも使えるものにすべきだ、というものです。納税者番号に使えないような法案には反対、というものなんです」

「なんだって。それじゃあまるで自治省応援団じゃないですか」

「そういうことです。大蔵省が独自番号を導入する可能性を、事前に封じ込めよ

うとしている。委員会での審議は賛成側も反対側も自治省の意を汲んで動いている。でき芝居だったわけなんです。委員長が報告を拒否するはずはありません」「そうか、そうだったのか」と磯崎は思う。本会議はいつも出来上がったストーリーを演じて見せる、いわばパフォーマンスのステージである。そうそう過剰な期待はできない。

政治はもう動いてしまったのだ。それを止められなかったわれわれにとつて、止めるよりも困難が多い、動かしなおす道しか残されていないのだ。でも、それをやっていくほかはない。

本会議のステージでは次々に、野党の女性議員が立って、組対法に対する法務委員会採決の不当性をとうとうと述べている。歯切れのよい、筋道だった大弁論である。

与えられた役回りは時間稼ぎなのだろう。もうとつくに夜中の十二時を過ぎた。日付は八月一二日になっている。会

期は一日三日までではあるが、一日三日は事実上の移動日で、そのままお盆休みに突入する。つまり、第一四五国会終了まで、二四時間を切ったのである。

いかに大演説とはいえ、組対法の委員会差し戻し審議を二四時間続けることは不可能である。差し戻すべき委員会を開く時間がなくなっているのである。さながら、矢引き刀折れ、の表現がぴたりくる、そんな終幕だった。

国会は男の戦場といわれて久しい。しかし、この日の国会は女の戦場と呼ぶにふさわしい景観を呈した。パフォーマンスだけではすまない中味のある論戦が、あるいはこんなところから生まれてくるのかもしれない。

夜を徹してのマラソン国会になったため、ややぼんやりした頭でそんなことを考える。きつと、どこかに冴えた頭でストップウォッチとにらめっこをしながらキューを出している国会対策タイムキーパーがいるのだろう。

午後一時五八分、組織的犯罪対策三法案はついに可決成立し、遅い昼食の休憩をはさんで、参議院本会議はそのまま、住民基本台帳法改正案の地方行政警察委員会委員長の審議経過報告に移った。委員会採決を省略したのである。

そして、八月十二日、午後八時二〇分、民自、自在、公正三党の賛成多数によって住基法改正案も可決成立した。

組対法三法と改悪住基法は成立したが、この二つはいずれも、第一四五国会終盤になって、問題が明らかになってくる、という経過を辿った。マスコミの扱いも、衆議院を通過してからやつと本格的な批判がみられるようになったのである。

とりわけ、七月七日に発覚したテレビ朝日と衆議院議員・保坂展人との国会内での電話が何者かによって盗聴され、通話記録が送りつけられてくるという事件があった。

いったいだれが、何のために……、こ

の謎解きを含め、盗聴法に対するマスコミの反応や、世論の風向きも変わってきた。そのため、法案が通過してもなお、反対運動は終了することなく、継続されたのである。

これはまた、「三年以内に施行」とされ、施行までにしばらくの期間がある改悪住民基本台帳法も同様で、民衆党はそれぞれに對して、廃止法案を提出するという異例の展開を見せている。

そのため、磯崎も、「Qの会」の例会以外に顔を出さなければならぬ集会などが増えてきた。

この日も盗聴法の施行前廃止を求める市民集会が、衆議院第一議員会館の第二会議室で開かれた。磯崎も参加してみたのである。

警察が導入しようとしている盗聴用のコンピュータの容量があまりにも大きく、裁判所の許可を受けた「麻薬、銃器、殺人、集団密航」以外の通信をも、まるごと盗聴・記録する気なのではないか、と

いう疑惑が高まったからである。

この院内集会を終えるとその足で、磯崎は国会図書館に立ち寄った。このアジア資料室にいる杉井美紗に、集会の資料を届ける約束をしていたからだ。

新館二階の喫茶室で杉井を待つ間、磯崎は集会資料に目を通していたが、誰かの視線を感じて顔を上げた。が、喫茶室は閑散としていて、やや離れたところにビジネスマン風の男が二人いるだけだ。

「以前、水越くんは、外務省が日本の暗号技術にすごい自信を持っている、といつていたのよね」

「ああ、NTTに依頼してつくってもらっているものだそうだね。春田さんの調査によれば日野にある警察庁の秘密通信所にも、暗号解読と暗号生成の研究機関があるといっていたよね」

「ちょっと古いものだけど、こんな資料を見つけたの。五年ほど前のものなんだけど、NTTがクリントン政権に暗号技術の供与を依頼し、拒否されているのよ。

これって、あきらかに日本の暗号技術の遅れを示すものでしょう。外務省が絶対の自信を持っているなんて、嘘なのよ」
「待ってくださいよ、もしそうだとすると、外務省の暗号通話もぜんぶアメリカに筒抜けだということになる」

「ほら、これは今日（九九・一〇・四）の新聞よ。アメリカのドイツ大使館の電話回線とコンピュータ回線が長年にわたって盗聴されていたんだって。

ドイツはやられたけど、日本は無事だなんて、いったいだれが信じるというの。とすると、問題なのは外務省は心配ないとする政府関係者の思い込みよ。

アメリカの暗号技術は『クリッパ』と呼ばれるもので、NSAが開発。これを半導体チップに組み込んだのはIBMよ。アメリカは、これを世界の通信暗号の標準規格にしようとした。

そして『クリッパ』規格の上に独自の暗号技術を載せれば、強力な、解読困難な暗号が生成される。ただし法律で、ク

リッパの米国ユーザーは、載せた独自暗号の解読キーをCIA、NSA、FBIに預けなければならぬ、としているの。つまり、この強力な暗号もアメリカ政府に対しては裸だということよ。

外国には現在のところ、この合鍵提出の強制ができないから、NTTは断られたんじゃないかしら。アメリカは世界に、これを強制するつもりでいるそうよ」

「おそらくNTTは、合鍵提出を承知で依頼したんじゃないだろうか。こうなるともう、屈辱の土下座ですよ。NTTは国民に対してどう説明しようとしたんでしょうか」

「EU議会は今年の一月に、ヨーロッパの企業情報がエシユロンによってアメリカに筒抜けになっていることに憂慮して、独自の暗号技術を構築。域内企業に供与することを決めているの。だから、クリッパが世界標準になることなんて考えられないわ。」

これに対してアメリカは『ヨーロッパ

が暗号技術を高度化すれば、これを入手したテロリストやマフィアの通信が捕捉できない』として、中止するよう、求めているんです。もちろんEUは『それならエシユロンによる盗聴を止める』といっている」

「すごいことになっているんだね。アメリカがNTTをはねつけたのは、クリッパが欲しければ世界標準にする国際戦略に協力しろ、ということだったんですか。」

でも、こうなるともう、日本はなす術なし、ですね。とにかくひたすらアメリカに対して裸になる。これが日本の情報戦略だと思えない。この間の政府の動きはすべてがそうだ」

「そう、国旗・国歌法制化なんて、そうした現実の隠蔽なのよ。民族主義者の目をこまかす子どもだまし。一方的に強制される現実の子どもたちがかわいそうだわ」

「それにしても、このことはいかに大量

の情報を盗聴し、記録しても、高度な暗号技術を使えば意味を失う、ということですね。」

アメリカが口にする、もつとも危険なマフィアや組織されたテロリストはやすやすと盗聴なんかされない。高度な暗号など利用できないわたしたち一般人だけが、がちりと見張られる、と、そういうことですね」

「そのとおりよ。コソボでは難民が軍に解読されない暗号を欲しがっているわ。」

ところで、クリッパ規格の暗号ソフトはまだないのよ。アメリカのソフト会社は政府の呼びかけに応じていないの。政府に管理されるのはいやだということね」

「さすがはアメリカだ」

「でもね、各社が独自の暗号ソフトを輸出する場合にはやっぱり合鍵を預けなければならぬの。だから、日本もヨーロッパのソフトを使ったほうがよさそうよ」

「なんで日本ではそういうことが話題に

ならないんだろう。日本の企業はそういうことを知っていて、それぞれに対策を立てているんだろうか」

「ぜんぜん無防備なんじゃないかと思うのよ。だから、傍聴法案は後回しにしても、早急にアメリカのNACIIC（国家傍聴センター）のような相談所を設ける必要があると思うの。そうでなければ日本はとんでもないことになると思うわ」
「うん、それは前からキミの持論だったよね。人材の面からは警察庁や防衛庁の協力が必要だけれど、相談センターなら組織的には通産省だけでもできそうですよね。水越さんと検討してみたいから、杉井さんから伝えておいてよ」
「場合によっては民間でもいいじゃないか、と思うの」

「そうですね。それでもないよりはいい」
磯崎は杉井と相談センター構想を進める約束を交わして、国会図書館を後にした。永田町から赤坂見附に向かう緩やかな下り坂に差し掛かったとき、後ろから短い

クラクシオンが鳴らされ、歩道を歩く磯崎の行く手に、ワインレッドの外車がチェッカーランプを点灯させて停車した。アウディーだろうか。

運転席のウィンドーがするすると下がって、サンングラスの女が顔を出す。モノトーンのスーツのようで、シックに決めているものの、サンングラスのラインは鋭角で、やや派手目だ。ドライブ用のグラブをはめた手で、そのサンングラスをはずそうとする。

だが、磯崎にはもう、サンングラスの女がだれであるのかわかっていた。大沢八郎の秘書、池島佳苗である。

「おひさしぶりね」

「ほんとうに。しかしびっくりしたな。いつか会えるんじゃないかと思っただけだね」

「あたしもよ。まあ、話はあと。乗んなさいよ。ドライブに付き合うくらいの時間はあるでしょ」

磯崎は植え込みの切れ目を探し、ガー

ドレールを飛び越えて、アウディーの助手席にすべり込んだ。その瞬間、アウディーはもうタイヤを鳴らして発進していた。

「何から話そうかしら」

「うん、何から聞こうか。いっぱいあって、困ってしまふ。キミはいまだ大沢八郎の秘書なんだろう」

「秘書ではないわ。見張り役。煙たがられているけど、追い出せない、といったところかしら」

「ということは篠山啓志のエージェントというわけだ」

「まあ、そうね」

「で、篠山はCIAのエージェント」

「それはあたしの立場から答えられることではないわ」

「じゃあキミがCIAのエージェント」

「それもあたしから答える筋のものじゃないわ。もつと答えやすい質問にして」
「じゃあ、キミは自分の意志で小浜島に

行ったのかい」

「いいえ」

「篠山の命令か」

「いいえ」

「じゃあ、だれなんだい」

「また答えにくい質問になったわね。」

「あなたの関心はこういうこと、つまり、誰かの命令がなかったら、わたしたちの關係はまだ続いていたかもしれないということなの。それなら答えるのは簡単。あなたとずっと続いてたとは思えないけど、あの時点ではイエスよ」

「ありがとう。なんか気分がいいな」

「でも、あなたの質問は別な件よね。困ったわ」

池島はちらりと磯崎のシートベルトに目をやると、いきなりアクセルを踏み込んだ。アウディーは青山通りから赤坂離宮を回りこむと、アツという間に外苑ラップから首都高速の新宿線に乗っていた。

「やっぱりキミはただ者じゃあないな。」

どこで覚えたんだい、その運転は」

「A級ライセンスはだれでも取れるわ。」

肝心なのは走り込み。あたしのホームサーキットは筑波よ」

「それも誰かの命令かい」

「まあ、そんなようなものね。さあ、日が落ちる前に高尾山を越えるわよ」

もうすっかり赤らみ始めた西の空に向かって、ワインレッドのクルマが疾駆する。見慣れた中央高速の風景が、まるで別なもののように見えてくる。

「昔ね、この道を走ったの。まだ全線が開通してなかったわ。でも、一般道に下りてからもスピードを落とさなかった。そして、どこまでもどこまでも走ったの」

磯崎の忘れていた記憶の中から、なにかがふつふつと頭を持ち上げるものがあった。昔、週刊誌の記者をしていたとき、そんな女を追った気がする。「赤いフェアレディの女」そんな見出しが目の前に飛び込んできた。

「赤いフェアレディかい。たしか、富山

か金沢あたりで行方をくらませた」

「そうよ、あの赤いフェアレディの女はあたしの。でも、あの事件のこと、あたしはなにも知らない」

あの事件——実は磯崎もなにも知っていない。新潟方面からやってきて都内の非常線を突破した車が、緊急手配され、あちこちで疾走する赤いフェアレディが目撃された、というもの。とんでもない事件かもしれない、というので、多くの週刊誌やスポーツ紙が後を追った。

目撃者の証言は一致していて、若いとびつきの美女だというのである。週刊誌やスポーツ紙にとって話題性はそれだけで十分だった。

ところが、磯崎はデスクから「あの事件はもう終わりだ。いいから帰ってこい」と、金沢から呼び戻されたのである。社に戻って事情を聞くと、北のスパイがらみの事件で深追いは危険だ、という。

「命の一つや二つ取られてもいいから、徹底的に追ってくれ」というのが常のデ

スクが、とんでもないことをいったのである。

そして、なぜか翌日からこの事件に関する報道はスポーツ紙を含め、一切なくなった。だから、厳密に言えば事件はそもそも存在しなかったことになる。あの非常線も何のために張られたのか、ほんとうのことは闇に閉ざされたのである。

「あたしの特技はね、物事をデジタルに感じ取ることができること。A級ライセンスをとるときはそれが楽しくてしょうがない。フェアレディを金沢まで走らせてくれ、といわれたら、夢中でそれを楽しめる。」

二つの楽しみをつなぎ合わせてみたりはしないのよ。だから何も知らなくてもすむ。知らないから、安全でもあるわけだし。でもね、この年になれば何も知らないままではすまないいわね。知りすぎてしまったかもしれない。

あなたももうわかったでしょう。勘がいいものね。あたしの仕事はさしずめ目

立ち屋。あたしをマークしていると、必ず間違った結論に行き着くの」

「じゃあ北のスパイというのも……」

「そう。みんなの目は北は北でも北朝鮮に向いたわ。あたしの任務は金沢じゃなくて、敦賀だったんですけどね。クルマがいかれちゃったので、だましまし越前海岸を走って、越前岬に沈めたの。」

あなた、あたしの故郷、覚えている」

「札幌だったよね」

「覚えていてくれてありがとう。でもね、

ほんとはナホトカなの」

「そういうことか。北は北でもね。じゃあご両親のどちらかはロシア人」

「父がね」

「うん、それはたいへんだったろうなあ。ということは、もう引退か」

「そうね、リストラね。でも、これは生涯引きずることだから、だれにもいうことはできないわ」

「そうだろうな、それがいい」

二人はひとつのことに触れないよう

に、慎重に言葉を選んで話した。そっと濡れ紙をはがすように、交わす会話はどこか艶めいてもいた。が、その中心には「KGB」という地雷が埋め込まれていた。旧ソヴィエトの秘密情報機関である。「あたしもね、聞かなければならないことがいっぱいあったの。篠山がね、あなたに会ってくれ、会ってくれて、うるさかった。でも、あの人、あなたに直接会ってから、少し減ったわね。それでも、時々思い出したように言い出すわ。」

篠山に聞いたのか、大沢もね、あなたがやっていることが知りたいって、とても気にしているわ。でもね、任務で会うのは嫌だったから、とぼけ通しちゃった。おかげで、今日まで会うチャンスがなかった。今日はついてたわ」

アウディーがすべるように河口湖インターを出る。もう日はとつぷりと暮れて富士の姿はない。湖面に映る灯を味わうかのように、湖畔の道をクルーズする。

「富士宮に抜ける、それとも御殿場」

「アウデイーには似合わないかもしれないけれど、いい道があるんだ。山中湖に行ってくれないか」

「道志ね。あの道はあたしも大好き。といつても、一度ためしに通つてみただけなんだけど。また来てみたいと思つてた」

道志とは、山中湖から津久井湖に抜ける国道四一三号のことで、丹沢山塊北麓の水を集めて津久井湖に注ぐ道志川に沿つて走る、山の中の道である。

「ぼくはね、子どものころから知つてんだ。相模湖から道志に入るバス路線があつて、一度、雪かきをさせられたことがある。路面に雪が崩れ落ちて進めないんだ。慣れたものらしく、バスには何本もスコップが積んであつた。でも、乗客はみんなおばあさんでね」

「子どものあなたがやらされたのね」

「道志温泉という小さな湯治場があつて、バスはそこが終点。またそこから、ぼくだけが引き返す」

「なんでそんなことをしたの」

「わからない」

「その温泉、まだあるの」

「うん、あるはずだよ」

「ねえ、そこに寄つていかない」

「そうしよう。子どものころ、帰りのバスを待つ間、めちゃくちゃに寂しくなつて温泉の明かりが恋しかつたことがあつた。いつか泊まつてみたいと思つた」

「いつのこと」

「中学生」

「ヘンな子ね」

「ああ」

道志は山の中の道である。朝霧は深く、路面はぐつしよりと濡れそぼつている。それでも梢の先端のほうは霧の上から頭を出し、すがしく晴れ渡つた朝であることを予感させる。一〇月の道志はもう寒い。

アウデイーは青根から藤野に向かう。あの懐かしいバス路線だ。道はすっかり整備され、もう雪が行く手を阻むこともないだろう。藤野インターから中央高速

に乗る。彼女が再びサングラスをかけた。「ねえ、ひょつとしたら日本はもう、トロイの木馬を引き入れちゃったんじゃないかしら。CIAはもう必要ないのよ。アメリカ仕様のコンピュータが、何十万、何百万と、この国の隅々を見張つている。」

あたしは別に日本のファンじゃないけれど、これつて、あまりにも無防備すぎると思わない。これじゃあ日本のCIAエージェントはみんな失業だわ」

「トロイの木馬、か。だれかも言つてたな。ほんと、そのとおりだよ。おねがいだ、また、飛ばしてくれないか。新宿で夜明けのコーヒーを飲もう」

「いいわね」

「EUの『エシユロン』レポートは九年の一月以来、次々に出されているけれど、いちばんまとまつているレポートがこれ、『通信傍受能力2000』よ。ここには国際通信を傍受する手段と方法が

詳しくかかっているわ。たとえば、海底ケーブルには専用潜水艦を用い、誘導盗聴記録装置を取り付けて行っているし、インターネットにはアメリカ国内の接続ポイントに『スニッファー』という盗聴ソフトを組み込んでいます。

ところで、このレポートであたしが注目しているのはロータス・ノーツに関する報告。ロータス社（IBMの子会社）のデータ管理通信ソフトで、ビジネスマンやデータ処理を仕事にしている人には必需品といってもいいほど優れたもの。実はあたしも使っていたの。

セキュリティも見事で、ロータスから配布された暗号キーがセットされたフロッピーを挿入しないと、このソフトにはアクセスできないの。

ところが一九九七年、スウェーデン政府がこのソフトの機能障害を発見したんです。スウェーデン政府はこのソフトが暗号に変換したメールばかりでなく、別の信号をも送信していることに気づい

た。その信号も暗号でできていて、ノーツで使用している暗号を解読する、NSAだけが読むことのできる暗号キーだったのです。

スウェーデンでは安全と信じ、政府の役人や議員、一万五千人の税務職員、そして四〇〇五〇万の一般市民がノーツでメール交換をやっていた。

ノーツの暗号は高度で、個人個人でカスタマイズされている。NSAでさえ、解読に数週間を要する優れたものなのです。だけど、どうカスタマイズされているのかを、まず、送信するように仕組まれている。だからNSAには丸裸だということなんです」

「つまり、ノーツを使ったメールは盗聴されていたわけですね。スウェーデン政府はノーツを止めたわけですか」

「そうなんですが、それだけではすまなかった。先に送信される暗号解読キーを『ワーク・ファクター還元領域(WRF)』というそうなんですけど、実は同様のもの

のがマイクロソフトやネットスケープ社（現在はロータス傘下）のソフトにも組み込まれていた。

NSAがそれぞれのソフトメーカーと協定を結び、輸出用バージョンに限ってWRFを組み込ませていることがわかったんです。つまりアメリカ製のソフトはみんな危ないということです。

WRFの装着を輸出用に限ったのは、自国民に対して秘密でこんなことをやったら、違法であるばかりか裏切りになるからです。しかし、輸出用だっておなじことです。こんなことは正常な商慣行に反する。

それに何よりも、わたしたちが自前で通信料を負担し、プロバイダーに接続料を払っている。その一部が、アメリカに、それもNSA、ということはCIAに自分のコンピュータを覗かれるために使われている。こんなことが許されると思いますか」

「だれも許さないと思いますよ。対抗で

きるまともなソフトがあれば、絶対に乗り換える」

「念のため、注意しておきますが、これはメールソフトに限った話ではないんですよ。インターネット・エクスプローラやネットスケープ・ナビゲーターなどの、いわゆる『ブラウザ』と呼ばれるソフトもそうです」

「それだけです。通信ソフトはみんなやられているんじゃないですか」

「基本のOSだって危ない。何が組み込まれているのかわかったものじゃない」

「そうなんです。こうなると、アメリカのソフトはすべて信用できないと考えるしかありません。UNIXもそのひとつですが、なぜヨーロッパの人たちが必死で市民の手によるOSを作ろうとしているのか。その意味が本当にわかったような気がします」

「Qの会」は二〇〇〇年になってから杉井美紗が主張していた「相談センター構想」の実現に向けて、本格的な議論を進

めることになった。そのためか、会議の進行はにわかに彼女のペースになり、今までどちらかといえば控えめだった杉井の発言が目立ってきた。

「ところで、アメリカよりさらに問題なのが日本です。あたしはこの点をとくに強調したい。というのも、これだけエシユロンの問題点が明らかに、アメリカ政府のサイバースペースに対する対応が許しがたいものになっているにもかかわらず、何の対抗措置をも取るうとはしないからです。この態度は黙認というほかありません」

「外国の対応については私、水越のほうからご説明いたします。」

すでにご存知のように、EUの行政府に当たるEU委員会はこの二月、アメリカ・イギリスに対し、正式な質問状を送付。「不正な行為はしていない」との回答を得ましたが、イギリスのEU担当大使は書簡で「国家の経済的安定を守ることは盗聴活動の正当な理由の一つ」と述

べ、ジェームス・ウールジー元CIA長官も『ウォールストリート・ジャーナル』のインタビュに答え、『賄賂を使ったり、国連の経済制裁措置を破って取引をする企業を監視するのは当然だ』と、半ば開き直っています。

いっぽう、オーストラリアの諜報機関DSDの長官マーティン・ブレイディーは一九九九年五月、テレビのインタビューに答えて、オーストラリアがUKUSAに加盟し、エシユロンを利用していることを公式に認めています。

ドイツ、フランスにはEUによる事実解明のほか、連帯して対抗組織を作る動きがある。つまり世界規模の盗聴組織で、当初はエシユロンの足元にも及ばない規模ですが、注意を要します。

イタリア、デンマークはエシユロンが国際法に違反するのではないかということで調査を始めています。

また、UKUSAのメンバーであるニュージーランドでは、緑の党などが政

府を相手取り、訴訟を始め、政府もすでに、エシユロンの利用の事実を認めていますので、今後さまざまな情報が開示されると思われます。

イギリスではこの一月、通信傍受法が改悪され、これに反対した市民活動家などが、エシユロンの問題を国際的に問い直そうと活発に動いています。

さて、アメリカですが、九九年四月ボブ・バー下院議員（共和党、ジョージア州選出）が「私自身、かつてはCIAにいたが、国民にも秘密が必要だということとは理解できる。ところがエシユロンは、政府の基本的な政策や国民の憲法上の権利に関して、いくつかの問題点を抱えている」として「われわれは、この問題に超党派で取り組む道を探らなければならぬ」と語っています。

この超保守の大物の活動により、クリントンにはNSAがエシユロンその他の活動を行うに当たっての法的根拠を報告するように求める予算書に署名させられました。

た。

ボブ・バー下院議員はさらに、法的根拠を求めて合衆国政府を告訴しています。これはちよつと変わった市民運動の報告になります。

『エシユロン妨害デー』という取り組みがありました。

この運動はアメリカの市民団体がメールをやりとりする中で固まった構想で、インターネットで世界に協力を呼びかけたもの。この日、世界中で一斉にエシユロンに引っかけかきそうな危険な単語を含んだメールを出し、エシユロンを混乱に陥れようというもの。つまり『辞書』に登録されているようなキーワードを使おうということです。

一日に三〇億本の電話や電子メールを処理する能力を持つている、といわれるエシユロンですので、その成果はたかが知れていると思いますが、イベントを通して問題点を世界に広めたのは間違いありません。

おなじウェブサイトで、NSAをてこずらせる暗号システムの紹介もしています」

「ありがとう、水越くん」

水越と杉井は半年ほど前から同棲をしている、という。いいコンビだが、インシアチブを握っているのは杉井嬢のほうだろう、とは「Qの会」全員の一致した意見である。

「さて、あたしが言いたいのとは次のことなの。ひよつとしたら日本はフランス以上にエシユロンの被害者よ。GATTでのコメ関税化をめぐる駆け引きのほか、インドネシアのテルネットや日米自動車交渉での盗聴。最近では排気ガスゼロの自動車を設計していた自動車メーカーのデータを盗み、米ビッグスリーに流していたことさえ明らかになっている。

なのに、なぜ、日本政府は何の対応をとろうともしないのか、こんなことは異様ではないか、ということ。

そして次に、ソフトに弱い、といわれ

る日本にとって、アメリカのソフトがNSAの統制下にある、ということは絶好のビジネスチャンスのはず。なぜ、この事実をPRし、対抗ソフトを出そうとしないのか、ということ。

ひょっとしたら日本の企業までがNSAに牛耳られているんじゃないかと疑ってしまふ。それほどに、異様ではないか、ということ。

そして三つ目に、こんな異様な事実を前にしながら、国会はその説明をしようとしないうこと。これを説明せずに『IT革命』などといつても空しい限りであること。こんな政治家のありようは異様としか思えない、ということ。

そして最後に、こうした異様さの背後に警察がいるのではないか、ということ。『通信傍受二〇〇〇』にはこれまではその存在が知られていなかった、米連邦捜査局(FBI)が率いる秘密の国際組織があるといえます。この「秘密の」組織は『国際法執行通信会議』(ILETS)

と呼ばれ、衛星通信システムなど現代のあらゆる通信機器に、ひそかに盗聴機能を取りつけているといえます。

これと日本の警察、日本の盗聴法の関係はどうであるのか。日本とUKUSAとの関係はどうであるのか。この説明をしないまま、二一世紀を迎えようとするこの国の国民は異様である、ということ。以上です」

名調子に思わず会場が拍手に沸いた。すると杉井嬢がまた立ち上がった。

「つまり、あたしたちにはやるべきことがたくさんあるということです。盗聴回避、暗号生成、事実説明、外国との連携……。傍聴相談センターは、そうした活動のキーになる。

拍手はいりません。拍手はいりませんから、ぜひ、相談センターの実現のために力を貸していただきたい。いっしょにやっていきましょう」

ためらい勝ちの拍手もあったが、次第に盛り上がりつつあって、前にも増した拍

手の嵐になった。杉井には人をひきつける特別の才能があるのではないかと思わせた。

その年(二〇〇〇年)の六月、大沢たちの自在党が分裂。大沢一派は連立政権を降りた。小渕首相の突然の死去を受けて登場した森内閣は、IT革命を唯一のよすがに日本再生を掲げた。が、その言葉の軽さに、国民の信頼は繋ぎ止めようもなかった。

七月、エシュロンのEUレポートをまとめたダ

CIAの謀略 第13章 「再起」

二〇〇〇年一月、CIAはドイツのカウンター・インテリジェンス機関・連邦憲法擁護庁(BfV)との激しい攻防戦の後、ついにSTASSIと呼ばれる旧東ドイツ情報機関の機関員名簿のうちドイツ人に関するファイルを引き渡した。しかし、ドイツの要求はSTASSI

ファイルすべての返還（ドイツは東ドイツのすべての政府機関を継承したのだから、STASIも当然ドイツのものとしている）なので、ドイツの対米不信がこれで治まるはずはなかった。

それどころか、BfVはCIAの活動を監視対象にすると公言し、大幅に機構を改革。政府もドイツにあるNSAのレーダー通信基地・バートアイブリングの閉鎖・返還を要求している。

バートアイブリング基地は、ミュンヘン郊外にあつて、衛星通信を傍受し、エシユロンの情報収集の一端をになうヨーロッパ最大の基地（イギリスのメンウィスヒルを除く）であり、一〇〇〇人のNSA職員が働いているが、ドイツに対する恩恵はなにもない。

これはちょうど、日本の三沢基地の役割とそっくりで、規模でいえば三沢のほうがやや大きい。日本は巨大なスパイ基地を、アメリカを除けば、日本とは何の協定をも結んでいないUKUSA諸国の

ために必要な要員（日米地位協定）を提供し、思いやり予算までつけて、まかなっているのである。

バートアイブリング、三沢、両基地は、カナダのオタワ郊外にあるレイトリム基地同様、かつてはソ連の国内通信を傍受する最前線基地であつた。しかし、ソ連の崩壊後、バートアイドリリングはドイツを、三沢は日本を監視している可能性が最も高い。

二〇〇一年六月、このバートアイブリング基地が緑の党、グリーンピースなどを中心とするヨーロッパの市民団体によつて包囲された。また、そうした市民団体の要請を受け、EU議会も同基地の役割に対する質問状をドイツおよびアメリカ政府に送達。市民団体はさらに、EU議会による査察を要求した。

ドイツは質問状をアメリカに回送し、自らも質問者側に立つたが、アメリカは質問状を無視。八月には査察要求を拒否した。

これに対して、市民団体は一斉に反発。同基地の電話回線、インターネット回線は集中的な情報送付によつて麻痺し、一週間にわたつて、機能を停止した。そして、この経緯はインターネットによつて全世界に克明に伝えられたのである。

これをうけ、ニュージーランドに次いで、カナダ、オーストラリアでも、自国にあるエシユロン基地を個人情報保護の諸規定に違反する、として告訴。裁判が始まつた。閉鎖を求めて、予算の執行停止を訴える運動も激しさを増した。

アメリカでは消費者運動の旗手ラルフ・ネーダーを大統領選に押し立てた緑の党が、エシユロンに対する調査要求と予算開示要求を掲げて、与野党を結集。上下両院に調査委員会を設置するための話し合いに入った。

しかし、こうしたニュースは日本のマスコミではほとんど取り上げられず、インターネットの世界では注目的になっていた事件であるにもかかわらず、多く

の国民は蚊帳の外にあった。

したがって、二〇〇一年九月三日、世界の市民団体が三沢に集結。日本の若者とともに三沢基地を包囲しようとした出来事は、まさに寝耳に水、突然降つて沸いた「外国人」による騒動であつた。

「三沢が無風である限り、アメリカはバートアイブリングに居座り続ける」これが世界の市民団体が三沢に結集した理由である。「三沢を揺すれ」「日本の世論を揺すれ」というのである。

三沢包囲の動きがあることは、当然「Qの会」メンバーも早くからつかんでいた。傍聴相談センターの立ち上げ準備に、政財界の説得を連日のように続けている「Qの会」も、この運動への対応を迫られた。

「呼びかけに応じて共闘すべきよ」という杉井美紗に対して、「タイミングが悪い」と反対したのは中川伸一であつた。「日本の政財界はNGOを敵視している。それが間違いだというメッセージを伝え

るのが先決。そのためにも共闘はマイナス」というのだ。

この国際NGOの中には、地球の未来オプシオンを提示するグループも少なくなく、世界の多くの企業も可能性に対する投資を忘れていない。そのため、グループの中には中小国の国家予算を上回る年間予算を使い、世界のいくつかの国の国家方針を左右するだけの實力を持っている。

日本の政財界が排除一本槍で進むのは危険すぎるのだ。

同様のことは一九六〇年代の末に現れた世界的な学生運動にも言えたことだつた。日本だけが排除一本槍で突き進み、指揮をとつた後藤田正春の政治力を強めた。が、これによつて日本社会の閉鎖性は一気に進み、若者の政治に対するダイナミズムを奪う結果になつたのである。

共闘の件は却下されたが、彼らの主張をPRし、また、会としても三沢基地の任務に対する説明と、エシロン関連施

設の撤去を求め、容れられなければ基地の閉鎖、返還を求めていくことで一致した。

テポドン監視上、三沢が必要だ、という主張に対しては、発射は当面なく、直接日本の脅威でもない。九八年の発射時、三沢の上空を通過したにもかかわらず、情報把握ができなかつたことから、同基地はテポドンに有効とは思えない。日本のイージス艦によつても監視は可能だし、二〇〇二年には偵察衛星も加わる。以上の三点で反論する、と決定した。

八月の末から九月にかけて、欧米のNGO活動家が次々と来日した。ところが三日のイベントを直前にした一日、二日にかけて、彼らと、彼らを支援する日本の活動家が次々に逮捕された。が、そのほとんどが起訴に至らぬ微罪又は冤罪で、三日のイベント潰しを狙つたものにほかならなかつた。

問題は、逮捕に当たつて警察が行つたと思われる大規模な盗聴である。盗聴の

名目は「外国人による組織犯罪」であった。つまり、蛇頭やマフィア同然にみなされ、支援者の日本人は蛇頭やマフィアの協力者として、盗聴を受けたのであった。

また、イベント当日の三日にも、多くの逮捕者が出た。青森県警は警視庁、千葉県警の協力を得ながら、強力な布陣を敷いた。省庁再編によっていつそうの権力集中を実現した警察庁の、いわば出陣式と位置づけられ、力による弾圧を鼓舞してみせたのである。

一九九四年一〇月、スペインのマドリッドで開かれたIMF（世銀）設立五〇周年記念総会に登場し、貧富の格差拡大に抗議した国際NGOは、九九年一二月、シアトルのWTO（世界貿易機関）閣僚会議にも登場。これが暴動に発展し、グローバル・スタンダードを歌い上げようとしたクリントン大統領の思惑を完全に打ち碎いた。

この二の舞はごめんだとばかりの弾圧

は、沖縄サミットにつぐもので、日本警察の威力を世界に示したが、同時にそれは、日本警察の前近代性、民主主義や人権を脅かす危険な体質をも印象づけるものであった。

欧州各国はこの取り締まりに強い不快感を表明した。また、日本が「アングロサクソン・クラブ」入りを目指し、エシロンに深くコミットしているのではないか、との、嘲笑の混ざった疑念も強まった。

「Qの会」でも、大規模な盗聴捜査に抗議するとともに、日米間で盗聴によって得られた情報の交換が行われた可能性が強いとみて、国会で真相を究明するよう、各党への働きかけを開始した。

八月、「Qの会」が心配していたことが現実になり始めた。アメリカが日本の偵察衛星開発に対して、「協力」という名の介入を始めたからである。

「衛星の導入を通して、内閣情報調査室の拡充を図り、警察庁のシギント（信号

諜報）組織を分離吸収して、警察がFBIとCIAを兼ねたような超権力として出現するのを阻止したい」と考えていたJETROの長谷川宗之も、アメリカの介入に嫌気が差し、再び「Qの会」に戻ってきた。

長谷川は「偵察衛星の運用を内調に握らせるのを契機に、ここを防諜機関に育てるほうが、軍事情報でアメリカに依存する防衛庁や、ICPOがらみでアメリカから自立できない警察庁に国の諜報の中樞を預けるよりまし。内調もCIAの手垢がついているが、組織が小さいので、体質の变革は可能」と踏んでいたのである。

JETRO氏によれば、アメリカは「衛星の独自開発はムダ。アメリカの衛星を購入しろ」と言い出し、日本がこれを拒むと、「共同開発」を提案。これに応じると、基本設計をアメリカが独占し、成果をブラックボックスにして日本に提供する、というFSX（開発後の正式名称

はF2支援戦闘機」とまったく同様の展開を見せ始めたという。

日本はアメリカの衛星を購入するよりも四倍もの費用をかけ、開発の成果はすべてアメリカが横取りする、というものだ。

先端技術による日本再生を衛星導入に託していた人たちはこれに激しく反発。しかし、軍事産業と癒着した防衛族の多くが、これを「やむなし」として、受け入れようとしていた。要は予算が産業に落ちれば文句はないのである。衛星は防衛予算とは別枠なので、これを取ることは軍事産業にとっても格別な意味を持っていた。

その上、八月の半ばに新たな問題が浮上した。中国が偵察衛星に対する先制攻撃権を主張するとともに、日本の衛星配備に再考を求めた。これに呼応するかのように、韓国も、日本の衛星配備に反対を表明。二〇〇〇年以来強まっている南北和解の動きが、日本の軍事力強化に対

する警戒感をいっそう募らせ始めたからである。

日韓の摩擦解消に乗り出したのはまたしてもアメリカ。日韓は日本の衛星情報を韓国にも提供することで合意。提供の方法として、アメリカが早期警戒情報を日韓双方に提供しているのとおなじルートを逆流させることで決着した。

すなわち、日本の衛星運用部から在日米軍横田基地、ハワイ太平洋軍司令部、在韓米軍、韓国国防部の順である。もつとも、当初は技術者の養成を含め、衛星情報の解析を在日米軍（横田のNSA機関員）が担当し、横田基地から日本の内閣安全保障室とハワイ経由で韓国国防部に送られることになる。

これでは、この変則運用がいつまで続くのか、日本の内閣情報室がアメリカからほんとうに自立できるのかは、まったくわからないまま見切り発車されてしまうのである。

「まったく冗談じゃない。こんなことじゃ

あ独自に偵察衛星を持つ意味なんか何もない。ここまでして導入の旗を振る連中の気が知れない」

長谷川は興奮気味だが、杉井に言わせれば「そもそも何を覗くの、北の発射台なの。ものすごい予算をかけて、世界の上空を侵して、たかが発射台。そんなもの北の政府に聞けばいいじゃない。その程度の関係も築けない日本政府がだらないのよ」ということになる。

「開発を通して先端技術を確保しようというなら、偵察衛星なんて使い古しのちゃちな構想ではなくて、去年クリントンが任期最後の一般教書演説でぶち上げたような先見性が欲しいもんです。

マイクロ・データ送信機『スマートダスト』、一ミリの大きさで風に乗る、さまざまなデジタル情報を収集・送信する装置。ハチドリ型スパイ機『マイクロ空中船』、カメラやセンサーを取り付け、羽ばたいて飛ぶ一五センチの覗き屋。

そして極めつけは『分子コンピュータ』、

分子一個を半導体として利用したマイクロコンピュータで、涙一粒ほどの大きさだが、最速の演算速度を持つ。これ、みんな本気で取り組んでいることなんですよ」

というのは春田だった。

渋谷駅前にこの夏オープンしたアメリカ資本の巨大旅行代理店「ファア・イースト」は、海外通貨やクレジットカード、保険、金融、並行輸入、海外資産運用までを扱う総合国際流通業者「ワールド・タウン」の東アジア支店である。

この「ファア・イースト」が始めたこの夏のキャンペーンが「ぶらり、シー・ロード」で、東アジアの海の道を強調。台湾、フィリピン、パラウ、ボルネオ（ブルネイ）、サラワク、カリマンタン）をまるで国内であるかのような気軽さで紹介して、若い女性たちの人気を集めた。

また、島崎藤村作詞・大中寅二作曲の古い小学唱歌「椰子の実」をアップテンポ

にアレンジした「シー・ロード」がヒットして、他の旅行代理店も南の島ブームにあやかり、一斉にシー・ロード・ツアーを売り出した。

もちろん、本家「ファア・イースト」の事業展開は東アジア各国に通貨、クレジットカード、保険をあつかう代理店をネットし、現地のホテルや銀行、病院、その他のサービス機関と提携。独自のカードを発行して試験的に個人認証システムを導入し、国内と変わらぬサービスを保証していることに特長がある。

預貯金を「ワールド・タウン・バンク」に預け替えさせ、カードとパソコンを持たせて、若い人を総合的なライフプランの中でインターネット管理して、という遠大な目論見を持っていた。

この「ファア・イースト」の「ぶらり、シー・ロード」キャンペーンと歩調を合わせるかのように、マスコミや学界でも「東アジアの海の道」が取り上げられることが増えてきて、さながら「海の道ブーム」

の様相を呈した。

「椰子の実はどこからきたのか―瓜子姫伝説を追う」「日本語に潜む南方語源語」「南の民と鉢巻の習慣」「鉄砲の伝来（アユタヤ・ルソン・種子島）」……多くの特集が、「海の道ブーム」を煽ったのである。

そして、九月にはいるとシリアスなテーマが交じるようになって来た。「海の交差点・南沙諸島」「フィリピン近海の海賊問題」「台湾土着の先住民族」「琉球大航海時代」……そして「海の道共同体」

そんなある日、あの篠山啓志が街頭液晶パネルの中から呼びかけていた。

「沖繩こそ、海の道の主役です。四海の架け橋になる、という沖繩の願いを無にしてはなりません。那覇を自由貿易都市にして、日本と台湾を結ぶ新たな経済圏を作りましょう。そして、それを足掛かりに海の道共栄圏のようなものが生まれればすばらしいことだと思います」

磯崎はこれを聞いて「なるほどな」と思う。

「前段はそれとおりだ。でも、沖縄が願う四海の中には中国も含まれている。なのになぜ中国をはずして、台湾との架け橋に切り詰めてしまうのだ。」

なるほど、それがアメリカの願いか。日本に台湾を抱え込ませ、アメリカ自身はさつさと中国貿易に進出する。中国が舞い上がらないよう、日本、沖縄、台湾を文鎮代わりに利用する腹なのだ」

クリントン政権が終ると、アメリカの対日政策は静かに変化し始めた。「ナイ・イニシアチブ」は終わり、ナイ＝ボーゲル路線の転換が始まったのだ。

つまり、日本の独自防衛路線、とりわけ核武装を恐れたナイ＝ボーゲルの時代とは異なり、核不拡散条約（ＣＴＢＴ）に署名し、核軍縮への一定の国際的なイニシアチブを取り始めた日本には、一気に核大国に突き進む可能性は少ない。そう読んだ新政権は、独自防衛路線を主張す

る石原慎太郎らの動きを刺激してでも、日本の軍事貢献を求める方向にかじを切ったのである。

利用価値は激減してしまったが、大沢八郎は再び、ＣＩＡの期待を集める人物に返り咲いた。大沢の改憲論は以前にもまして過激になった。

「だが、これでは沖縄の基地もなくならない。沖縄は台湾防衛の要にされ、さらには海の道、つまりはシーレーン防衛の拠点にされてしまう。そして日本は極東の文鎮として、身動きもできぬまま沈んでいってしまうのだ。」

こんなシナリオを認めるわけには絶対にいかない。わたしはどうしても、篠山啓志と対決しなければならぬ運命にあるようだ」

磯崎はそんな決意のようなものを感じるのであった。

ところで、通産省や大蔵省、それに国内金融機関の間で、電子商取引に必要な個人認証システムを日本独自で作ろうとい

う動きは、九七年九月に「日本認証サービス社」の設立、という形になった。日立、富士通、ＮＥＣによる共同出資会社である。

認証システムとは、コンピュータで自分を相手に特定してもらう際、操作者が自分に間違いないということを第三者機関に証明してもらうシステムのこと。自分と認証機関、認証機関と相手の間の通信は高度な暗号で守られる必要がある。しかし、この「日本認証サービス社」は、独自に暗号技術を開発するのではなく、アメリカの暗号ソフトを利用することとした。つまり、この解説キーはＣＩＡも手にしているのである。

アメリカ政府はこの「キー＝リカバリー方式」を、批判の強い「クリッパー」に替えて、国際標準にしようとし、国防総省、商務省、ＣＩＡ、ＦＢＩ一体となつての国際的なプレゼンテーションを開始。解説できない暗号は「テロリスト、スパイ、麻薬組織の犯罪捜査に支障をき

たす」という、あの論理である。

アメリカはCOCOM崩壊後の新国際貿易規制協定である一九九六年七月に結ばれたワッセナー協定の中でこの論理を展開。暗号の輸出規制を締約国(33ヶ国)に義務付けることに成功。日本もこれを受け、外国為替管理法でわずか1ビットの暗号でも輸出には通産大臣の許可を必要とした。

ヨーロッパも一度、これに合意しかけた(九七年OECD)が、昨年、アメリカ政府の盗聴から域内企業を守るため、協定とは独自の歩みを始めている。また、協定に参加していないインド、イスラエルなどの高度な暗号も市場に投入されるのは時間の問題で、アメリカが狙う暗号市場の独占は不可能になりつつある。

ところが、二〇〇一年八月、警察庁が主導する「情報セキュリティ委員会」において、日本の公共事業関連では原則として「キー・リカバリー方式」を採用することを申し合わせた。また、民間に対

してもこれを推奨していく。

産業・経済・金融情報がアメリカに抜かれる怖れから、通産、大蔵が躊躇していたのだが、警察庁が押し切った形だ。通産、大蔵は警察庁の後ろにアメリカの影を感じていた。

しかし、大蔵省は認証システムが普及しパーソナルなものになれば、税務事務にも応用できるかもしれない、と期待した。自治省版住民カードを無用にする、新たなカードシステムが生み出せるかもしれないと考えた。大蔵が抵抗を止めたのはそのためであった。

警察庁は法務省とともに申し合わせの翌月にはもう日本のソフトメーカーに「キー・リカバリー」を義務付ける法案の準備に入るとともに、早くも昨年施行された通信傍受法の改正が狙上にのぼった。

国際的な重大犯罪に関する捜査データ(盗聴資料)のICPOへの提供、インターネットの接続点(ノード)への「ス

ニッファー(ネット用盗聴装置)」の組み込み、を目的とした改正である。これらがアメリカの要求であることは明らかだった。

もつとも、外為法による暗号規制の廃止を前提に考えられた「キー・リカバリー法案」は暗号のデータ容量をめぐって、早くも暗礁に乗り上げた。

アメリカは一字に対して一ビットの暗号でもだめとしていたワッセナー協定を勝手に破り、四〇ビットにかき上げ。九七年には五六ビットとし、九八年一月にはワッセナー協定そのものを五六ビットに変えてしまった。

すべてはアメリカの国内事情(暗号開発力)に左右されているのだ。が、アメリカに追従するばかりで開発意欲を殺がれてしまっている日本にはこれほど高度な暗号をつくる技術がない。といって、協定に合わせてみても、技術は日進月歩で、アメリカがいつこの数字を引き上げるかわかったものではないのだ。

たとえば九七年まで、アメリカの規制は四〇ビットだったが「こんな暗号ではだめだ」という暗号ソフト会社が五万ドルの賞金をかけ、インターネットで暗号破りを募集した。そして、これに応募したカリフォルニア大学バークレー分校の大学院生グループが、わずか三時間半で解読してしまった。

この結果、規制が五六ビットに緩和されたのだが、五六ビットの「RC5」という暗号ソフトも、世界中の大学連合によって二〇九日目に解読された。問題はコンピュータの演算スピードで、この九七年当時のコンピュータと現在のコンピュータではそのスピードに雲泥の差がある。

つまり、またいつアメリカが規制を緩和するのか知れないし、そのたびにアメリカを追って法改正するわけにもいかない。取り残された日本に、こんな法律はそもそも必要ないものであったのだ。

「なんでこんなに遅れをとってしまった

んでしょうね」

そういう中川に対して、春田が断言する。

「教育ですよ、教育。ひらめきが必要な多様性の時代に、画一的な小国民を作ろうとしているんですからね。教育指導要領をどうにかしませんとね。ニューヨークでやった磯崎さんの講演はよかったですよ。一度聴いてみるといい」

二〇〇一年一月一日、三沢基地への一斉抗議メール行動が行われた。エシロンに反対する世界中の人たちが、抗議のメール攻撃を仕掛けたのである。大量のメールは基地が使っているISDNをクラッシュさせ、周辺の関連施設をも巻き込むこととなった。

また、抗議の別働隊が、三沢基地のエシロンに対する協力の証拠を押さえようと、三沢のコンピュータシステムに侵入。データの一部を奪うと同時に、「エシロン反対」のメッセージを残していった。が、この事実公表されなかった。

磯崎英司のメールに、奇妙な暗号文が送られてきたのは二〇〇二年の一月のことだ。英司はすでに高校三年生になっていた。

「とおさん、今日、おれ、変なメールをもらったんだ。子ども騙しの暗号文だね、つまらないお遊びだろうと思うんだけど、いちおう解読してみたんだ。狸文字というやつだね」

磯崎が帰宅するのを待つてましたとばかりに、英司が飛んできた。最近の英司は以前よりも遥かに「親づきあい」がいい。母親ともうまくいつているようだ。「狸文字か、懐かしいな。そんな遊びをしたことがあるのを、英司は覚えているか」

「ずっと昔のことじゃあないか。そんなことはどうでもいいんだけどね、どうしても意味のわからないところがある」「わからない、ってどういうことだ」

「これだよ、これ。この解読文章に間違

いはないと思うんだけど、この中にある『海ラブ……』というのがわからない」

英司は漢字かなまじり文に打ち直した、解読文章を父に見せた。

「われ、知りたり。故に、危うし。海、らぶ、い、に、消さる。避けるには、広めるにしかず。添付を、あまたに送れり。開かずも、構いなし。願わくば、秘匿せよ。時、自ずと、来たれり――

「わからないのはこの『海、らぶ、い、に』の部分なんだ。『テンプ』も迷ったけど、このメールにはまだ開いていないけど添付ファイルがついている。だから『添付』と読んでみた」

「なんだって、『海、Love、以』だって。ほんとだ。確かに『海、Love、以』だ。メールの差出人はだれなんだ」

「ちよつと待って、いま見てくる」

英司は自分の部屋に駆け込むと、すぐに引き返してきた。

「これだよ、これ」

英司が渡してくれたメモには「you-

hori@max.ne.jp」あった。「you-hori」とはだれだ。「you」は名前か。とする
と「hori」は堀、堀川、堀之内。堀之内久子。「you」は久子の弟か。磯崎は愕然とした。

「ちよつと待ってくれ、思い当たることがある。いま、父さんのホームページを開いてみるからな」

磯崎のホームページには、自分の発表した記事に書ききれなかったサイド情報や、出版した本の改訂情報などが載っている。読者へのサービスにもなれば、自分の覚えにもなる。もちろん出版社とリンクしていて注文もできる。そんなサイトなのである。

そして、読者の意見や質問を受け付ける、書き込み用の掲示板が用意してある。磯崎はすぐさまこの掲示板を開いた。

「海、Love、以」

それは以前、夢に見たのとそっくりだった。掲示板の最上段に、点滅こそしていなが、大きく赤い文字がくつきり

と刻まれていたのである。

「深き海のLoveを以て、卑弥呼は国を慈しみたまふ。卑弥呼は王を愛しみたまふ」

赤い「海、Love、以」の下には、普通の文字で、そうあった。「海の愛をもつて」という、この言い回しは「海、Love、以」の本来の意味のように見える。つまり、「海、Love、以」に深い意味はない、別に暗号なんかじゃない、と見せかけている。そうすることで、このメッセージの受信者である磯崎自身に追跡の手が及ぶことを避けたのだろう。

「行き届いた気配り、それに、こういう頓知のほうが下手な暗号よりも優れているのかもしれない」

磯崎は考える。卑弥呼は邪馬台国の女王である。とすると、王とは何か。おそらく將軍である弟ではないか。当時の日本は姉弟政治であった、ということをとどこかで読んだ覚えがある。

だから堀之内久子是这样いっている。

「神（海）に誓って、わたしは日本を捨てる気はない。弟が心配だ。よろしく頼む」

磯崎は英司にことの概略を話すと、使わなくなった古いノート・パソコンを納戸の奥から引っ張り出した。そして英司に、カードなしでテスト加入ができるインターネットのプロバイダーを探してもらった。

どこからも足のつかない匿名の存在として、コンピュータを操りたかったからである。

「まずはその、『you-horie@max.ne.jp』にメールを送ってみよう。まちがえて送った、売りたい買いたしのメッセージでいい。『ファイナルファンタジーIX』高く買います、でもいいから送ってみてよ。いや、待て。公衆電話を使おう。さあ、クルマに乗って」

「ちよつと待つて。それならぜんぶ掃除しなければだめさ。以前、入力したデー

タが読み取られる。ハードディスクを初期化して、必要なソフトを入れ直さなきゃ」

英司は鮮やかな手際でコンピュータを操作する。難しい作業があつという間に終了して、二人は車に乗り込んだ。

しかし、心配していたことが起こった。このメール・アドレスはすでに閉鎖されていて、送れないのである。

さつそくその電話で堀田と連絡を取る。堀田にも、別な形の緊急情報が久子から入っているという。堀田はいま、明日にでもニューヨークへ飛ぶための手はずを整えているところだという。

堀田によれば久子の弟の名前は洋介、実家はたしか所沢だという。弟については磯崎が当たってみることにした。

「よし、英司、添付ファイルを開いてみるぞ」

「危険じゃないか。危ないよ」

「フロッピーに収まれば大丈夫だ。まず大きさを調べよう」

「六四〇キロバイト」

「それなら大丈夫だ。フロッピーにコピーして、この古いパソコンで開いてみよう」
「そうか、そいつなら壊れても構わないからね」

何が出てくるのか、緊張の一瞬だった。古いパソコンなので速度が遅い。カリカリいう音がいつそう緊張感をつのらせる。

開いた。英文のテキストデータがずうつと続く。何か大変なことが書いてあるようだ。まずはどんどんスクロールしてみる。文書のコピーが何枚が続く。そしてアメリカの偵察衛星の写真が一枚、それに何のものかわからない図面が二枚。

文書はあきらかにCIAの内部文書だった。あるものには「TOP SECRET」の印字が、またあるものには「CONFIDENTIAL」のスタンプが押されている、いずれも極秘文書といわれるものであった。

データは東アジア各国に関する分析と、それを受けての大まかな戦略、戦略を進めるに当たって必要とされる資料や注意事項によって成り立っている。といっても半分以上が日本に関するもので、他の国に関する部分は、ついでに紛れ込んだもののように見える。

「ジャパン・テクノロジー」のトップに記載されていたのは「燃料電池」に関する日本の自動車メーカーの開発状況レポートであった。

燃料電池とは水素を燃料として電気を発生させ、モーターで走る無公害の近未来車で、技術的にはほぼ完成をみている。問題は水素で、直接水素を利用するものと、メタノールやガソリンなどを改質して水素をとりだすものがあり、それが国際標準になるのか、激しい争いが予想されているものである。

無公害、という面で見ると水素を直接搭載するほうがいいが、安全性や、補給スタンドの確保という面からはメタ

ノールやガソリンのほうが扱いやすい。ガソリンならスタンドは現在のままでいい。

アメリカは日本のこの開発状況を完全に把握していた。そして、アメリカのGM（ジェネラル・モーターズ）が進めている方式を国際標準にするよう、国を挙げての周到な戦略が練られている。

そして、その中心になるのがCIAのヒューミント、すなわち各国要人へのアプローチであった。そして、アプローチの道具立てとして、NSAがつかんだ極秘情報が利用される。

技術のことについては詳しくない磯崎ではあったが、レポートに目を通すうち、戦慄が走った。

「これはやられる。NSAはダイアナ元妃が死の直前、パパラッチに追われながら、自動車電話で話していた会話までキャッチしている。こうした情報をCIAが駆使するとすれば、それは恐ろしいことになる」

「ミリタリー」のトップに記載されていたのは偵察衛星の開発状況である。

独自開発を一度は断念した日本ではあるが、情報解析までアメリカに頼ることに反発。再び独自開発路線に戻っている、という。通産省の音頭で、三菱電機に東芝やNECのこれまでの成果を集中し、衛星の地上撮影機能そのものは優れたものになっているが、その運用に問題を抱えているという。つまり、情報を地上に送る際、他国の傍受を避ける手段などが見つからない。

こうしたことから日本が再び共同開発に戻る可能性が高く、アジアの軍事バランスからいってもそれが望ましい。また、そのためには地上実験などで、開発が遅れたり、行き詰まることはいちばん確実な道である、とする。

つまり、独自開発を遅らせることができれば、日本は再びアメリカとの共同開発の道に舞い戻るほかはない、というのだ。そして、開発を遅らせるためには、姿勢

制御やエネルギーの配分調整に日本が利用しているアメリカ製のソフトに侵入し、気づかれないような工作をする方法がある、とも示唆している。

「これだ、これがトロイの木馬だ。日本はもう、こいつを大量に引き入れてしまった」

磯崎は思わず立ち上がって、声を上げていた。

「カルチャー」の項には、あの「シー・ロード・キャンペーン」のことが出ていた。歌のヒットまで含めて、やはりあればCIAの工作の一環だったのだ。

そして、このジャパン・レポートの最後には、締めくくりとしてこんなことが書かれていた。

「ここで報告したような戦略を実行していけば、われわれは二〇一〇年には日本を無視できる。日本は世界にとって、さして重要な国ではなくなる」

「アメリカは本気だ、本気で戦争をしている。どことだ、日本とか。いやちがう。」

アメリカの敵は短期的には日本、長期的には中国といわれているが、そうではない。最大の敵は衰えていく自身の力だ。迫りくる次の覇者の見えない足音に怯える自身の姿だ。恐怖、それがなりふり構わぬ行動になっている」

磯崎は考える。

かつてイギリスがそうだった。その沈もうとする大船に乗って、栄華を享受していたアルゼンチンは、少しでも長く浮いていたというイギリスに振り落とされて沈んでいった。アルゼンチンはそれ以来、世界にとってさして重要な国ではなくなつた。

下りなければならぬ。どこかでこの船から下りなければならぬ。だが、そのためにはまだやっておかなければならぬことが山ほどある。

「わたしたちの、そして『Qの会』の戦いはこれからだ。とりあえず明日は、CIAのコンピュータに入り込んでみせた、日本の若い頭脳を救出に行こう。す

べてはそこから始まる」

磯崎は急に親密になった英司の肩に手を置いた。

その年の二月、アメリカから新任の大使が着任した。ジェフリー・オブライエン。間違いなく池島佳苗の隣で白い歯を見せていた、あの写真の男である。磯崎はまだ、あの写真を持ち歩いてた。

アメリカの野望はこれからが本番であつた（本編は全面的に書きかえられなければならない）

操られる日本

